

第Ⅲ部 2016-2017年度における各教員の活動

01 言語学

教授 林 徹 HAYASI, Tooru

1. 略歴

1977年3月	東京大学文学部言語学科卒業（文学士）
1979年3月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程（言語学専攻）修了（文学修士）
1984年3月	東京大学大学院人文科学研究科博士課程（言語学専攻）単位取得退学
1984年4月	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手
1989年7月	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授
1997年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授 併任
1998年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2001年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授
2018年3月	定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

言語学、チュルク語学

b 研究課題

(1) ユーラシア周辺部チュルク諸語の記述研究

中国新疆ウイグル自治区南部のエイヌ語、中国甘粛省のサリグ・ヨグル語、そして、トルコやドイツで話されるトルコ語の諸変種を主な対象とし、現地調査によって収集したデータによりながら、言語接触によって生じた特徴も含め、言語構造と言語使用を明らかにする。

(2) トルコ語の指示詞に関する研究

トルコ語の3系列の指示詞に関して、話者の内省、アンケート、実験から得られたデータを用いながら、それぞれが使用される語用論的条件を明らかにする。

c 概要と自己評価

(1) のテーマに関しては、論文を1本を発表し、招待講演1件を行った。さらに、2016年度中の完成を目指してエイヌ語のモノグラフを執筆中。(2) については、論文を2本（うち1本は共著）を発表した。ただし、依然として未分析のデータが大量に残っている状況である。

d 主要業績

(1) 著書

鳥飼玖美子、大津由紀雄、斎藤兆史との共著、「座談会：ことばのおもしろさに気づかせたい」、鳥飼玖美子、大津由紀雄、江利川春雄、斎藤兆史（著）『英語だけの外国語教育は失敗する』, pp.93-129. 東京：ひつじ書房 [2017.5.11]

(2) 論文

Tooru Hayasi, Variability in linguistic judgment: An analysis of questionnaire survey data from Istanbul and Berlin on the usage of Turkish demonstratives. *Turkic Languages* vol.20 no.1, pp.60-73. [2016]

林徹、「初等中等教育における英語教育の課題と可能性」、『学術の動向』22巻11号, p.67. [2017.11.1]

(3) 学会発表

国内、林徹、「夢ではトルコ語を話します：ベルリンに住むトルコ系の若者たちがアンケートを通して教えてくれる多言語使用」東京言語研究所開設50周年記念公開講座、東京言語研究所（西新宿三井ビル13階）[2016.10.15]

国際、Tooru Hayasi、Language in dreams: A tentative analysis of questionnaire surveys about language choice. 18th International Conference on Turkish Linguistics, Çukurova University, Adana. [2017.2.25]

国内、林徹、「『選択』する話者という難問」シンポジウム「語り尽くそう、『英語という選択』」、明海大学複言語・複文化教育センター、明海大学浦安キャンパス講義棟2102番教室 [2017.3.4]

国内、林徹、「トルコ語の指示詞についてわかったこと、どうしてもわからないこと」「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」研究発表会、国立国語研究所 [2017.6.11]

1. 略歴

1984年3月	東京大学文学部英語英文学専修課程卒業
1984年4月	東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻修士課程入学
1987年3月	東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻修士課程修了
1987年4月	東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻博士課程進学
1989年3月	東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻博士課程退学
1989年4月	実践女子大学文学部英文学科専任講師
1992年4月	東京大学教養学部助教授
1993年4月	東京大学大学院総合文化研究科専攻助教授
2004年4月	東京大学人文社会系研究科助教授 併任
2004年9月	東京大学人文社会系研究科助教授
2007年4月	東京大学人文社会系研究科准教授
2012年4月	東京大学人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

言語学、意味論、認知文法

b 研究課題

文法の意味的基盤

認知文法の観点からさまざまな文法現象の意味的な基盤を明らかにすることを目標として研究を進めてきた。これまでに分析の対象にしてきた主な現象は、日英語の使役構文、項構造の交替、文法関係などである。近年は認知言語学の分野でその遍在性、重要性が新たに注目されている換喩 (metonymy) の本質を解明し、それに基づいて従来別々に扱われてきた多くの文法現象を統一的に把握し直すことを目指している。

c 概要と自己評価

2010年から言語に関心をもつ哲学者と議論を重ね、文法の意味的基盤について考察を深めることができた。その成果を昨年以下の共著書およびいくつかの学会で発表することができた。

d 主要業績

(1) 著書

藤田耕司、西村義樹 (編者)、『文法と語彙への統合的アプローチ』、開拓社、2016.5

(2) 論文

西村義樹、長谷川明香、「語彙、文法、好まれる言い回し——認知文法の視点——」、藤田耕司、西村義樹 (編) 『文法と語彙への統合的アプローチ』 (開拓社)、pp. 282-307、2016.5

西村義樹、長谷川明香、「生成文法と認知言語学との対話は可能か? ——長谷川論文へのコメント——」、藤田耕司、西村義樹 (編) 『文法と語彙への統合的アプローチ』 (開拓社)、pp. 27-33、2016.5

西村義樹、藤田耕司、「「シンタクスの自律性」と「文法性」——田窪論文への脚註として——」、藤田耕司、西村義樹 (編) 『文法と語彙への統合的アプローチ』 (開拓社)、pp. 48-54、2016.5

西村義樹、「語法文法とは何か——認知言語学の視点」、『英語教育 (大修館書店)』、Vol. 65 No. 9、2016.10

(3) 解説

西村義樹、長谷川明香、「解題 III 認知言語学におけるメンタル・コーパス革命」、John R. Taylor 著 The Mental Corpus の訳書『メンタル・コーパス』、2017.7

西村義樹、「辞書の項目執筆」、『広辞苑』第7版 (岩波書店)、2018.1

(4) 学会発表

国内、西村義樹、「認知言語学 I 文法と意味」、東京言語研究所春期講座、2016.5.8

国内、西村義樹、「文法と意味：認知言語学の視点」、言語処理学会第23回年次大会、筑波大学、2017.3.13

国内、西村義樹、「文法と意味：認知文法の視点」、言語と情報研究プロジェクト 第64回公開セミナー、広島大学、2017.6.3

国内、西村義樹、「認知言語学の立場から」、関西言語学会第 42 回大会シンポジウム 日本語の「使役性」をめぐって、京都大学、2017.6.10

国内、西村義樹、「趣旨説明とコメント」、日本言語学会第 154 回大会ワークショップ「所有の言語学: To Have, or Not to Have?」、首都大学東京、2017.6.25

国内、西村義樹、「文法と意味：認知文法の視点」、斎藤英学塾、2017.7.22

国内、西村義樹、「認知文法とは何か」、東京言語研究所夏季集中講義、2017.8.11

国内、西村義樹、「認知言語学の立場から」、公開シンポジウム「認知言語学と語用論」、成蹊大学、2017.8.29

国内、西村義樹、「日本語の受動構文をめぐって」、成蹊大学アジア太平洋研究センター共同研究プロジェクト「認知言語学の新領域開拓研究」2017 年度第 3 回研究会、成蹊大学、2017.9.11

国内、西村義樹、「好まれる言い廻し再考：メンタル・コーパスとは何か」、日本エドワード・サピア協会第 32 回研究発表会、成蹊大学、2017.10.21

国内、西村義樹、「メンタル・コーパスとは何か (The Mental Corpus: Beyond the DICTIONARY PLUS GRAMMAR BOOK Model)」、日本英語学会第 35 回大会シンポジウム、2017.11.19

国内、西村義樹、「メンタルコーパスとは何か——英語らしさ、日本語らしさへの認知文法的アプローチ——」、「言語と人間」研究会 第 43 回春期セミナー、桜美林大学 (千駄ヶ谷キャンパス)、2018.3.4

(5) 予稿・会議録

国内会議、西村義樹、「認知言語学と日本語研究」、2016

『日本語の研究』、第 11 巻 2 号、pp. 164-165、2015.4

国内会議、西村義樹、「メンタル・コーパスとは何か」、日本英語学会第 35 回大会シンポジウム、東北大学、2017.11.19
『日本英語学会第 35 回大会 Conference Handbook』、281-286 頁、2017.11

(6) 翻訳

共訳および編訳、John R. Taylor, "The Mental Corpus: How Language is Represented in the Mind"、西村義樹、平沢慎也、長谷川明香、大堀壽夫、古賀裕章、小早川暁、友澤宏隆、湯本久美子、『メンタル・コーパス: 母語話者の頭の中には何があるのか』、くろしお出版、2017.7

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、東京外国語大学 (集中講義)、「認知言語学」、2017.1~2017.2

非常勤講師、京都大学 (集中講義)、「文法と意味：認知文法の視点」、2017.9

特別講演、東京都立青山高等学校、「文法に意味はあるのか?」、2017.11

准教授 **小林 正人** KOBAYASHI, Masato

1. 略歴

1992 年 3 月 京都大学文学部文学科卒業 (文学士)
1992 年 4 月 京都大学大学院文学研究科修士課程梵語学梵文学専攻入学
1994 年 3 月 京都大学大学院文学研究科修士課程梵語学梵文学専攻修了 (文学修士)
1994 年 4 月 京都大学大学院文学研究科博士後期課程梵語学梵文学専攻進学
2000 年 3 月 京都大学大学院文学研究科梵語学梵文学専攻博士後期課程中途退学
1996 年 9 月 ペンシルバニア大学文理大学院言語学科 Ph.D.課程入学
2000 年 12 月 ペンシルバニア大学文理大学院言語学科 Ph.D.課程卒業 (Ph.D)
2000 年 4 月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 COE 非常勤研究員 (2001 年 3 月まで)
2001 年 4 月 白鷗大学経営学部専任講師 (2005 年 3 月まで)
2005 年 4 月 白鷗大学経営学部助教授 (2007 年 3 月まで)
2007 年 4 月 白鷗大学教育学部准教授 (2010 年 3 月まで)
2010 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授 (現在に至る)

2. 主な研究活動

a 専門分野

歴史言語学、音韻論、インド・アーリア語、ドラヴィダ語、オーストロアジア（ムンダ）語

b 研究課題

インド・アーリア語、とくにサンスクリット文献学と、ドラヴィダ語族、オーストロアジア語族少数民族言語のフィールドワーク

c 概要と自己評価

インド・アーリア語についてはサンスクリットを中心として他の印欧語族言語と比較し、音韻上の特性を記述した著書を出版し、現在は伝統文法の研究を行っている。ドラヴィダ語族では、北部の2つの少数民族言語について、現地調査を重ねて文法記述を完成させた。オーストロアジア語族では、未記述の言語エルンガ・コルワ語の調査を進めている。

d 主要業績

(1) 著書

共編著、Bablu Tirkey、『Khatrkā Ropnas gahi Tuṅgul』、Bendora: Manas Publications Bendora、2017.3

共編著、Bablu Tirkey、『Savā Rupiā Khatri』、Bendora: Manas Publications Bendora、2017.3

共著、Masato Kobayashi and Bablu Tirkey、『The Kurux Language: Grammar, Texts and Lexicon』、Leiden: Brill、2017.9

(2) 論文

Masato Kobayashi、The adnominal locative in Indo-Aryan、Tavet Tat Satyam: Studies in Honor of Jared S. Klein on the Occasion of His Seventieth Birthday、Ann Arbor: Beech Stave、168-178、2016

Masato Kobayashi、Patanjali on borderline cases of compound classification、Vyakaranapariprccha: Proceedings of the Vyakarana Section of the 16th World Sanskrit Conference、Delhi: DK Publishers、175-194、2016

(3) 学会発表

国際、Masato Kobayashi、「The past suffixes of Hill Korwa」、International Seminar on Munda Linguistics、Deccan College、Pune、2017.3.16

国内、小林正人、「クルフ語の自発使役構文」、日本言語学会 155 回大会、立命館大学、2017.11.25

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本言語学会、常任委員、2012.4～2018.3、編集委員、2018.4～

海外、Dravidian Linguistic Association、Advisory Board、2017～

(2) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

教育機関、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、運営委員会委員、2013～、研修専門委員会委員、2016～

02 考古学

教授 **大貫 静夫** ONUKI, Shizuo

1. 略歴

1971年3月	千葉県県立千葉高等学校卒業
1971年4月	東京大学文科3類入学
1975年3月	東京大学文学部考古学専修課程卒業
1978年3月	東京大学大学院人文科学研究科考古学専門課程修士課程修了
1984年6月	東京大学大学院人文科学研究科考古学専門課程博士課程退学
1984年7月	東京大学文学助手（東京大学遺跡調査室）
1986年5月	東京大学文学部附属北海文化研究常呂実習施設に配置換え
1994年4月	東京大学文学部助教授（考古学）
1995年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授（考古学）
2004年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授（考古学）
2018年3月	定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

東北アジア考古学

b 研究課題

日本列島を含む環日本海の定着的食料採集社会の成り立ち、およびその変容過程の考古学的研究

c 概要と自己評価

「成り立ち」を明らかにするために、大貫を代表者として「北アジアの新石器化についての研究」という研究課題に対して三菱財団より助成金を得て、17、18の両年度にロシア・バイカル湖の東岸、西岸地域において資料調査及び分析を行った。東北アジアと北アジア両地域での新石器化のプロセスの違いを解明することを目的としたものである。

「変容過程」では、東北アジアにおいて食料採集社会がどのように農業を受容して変容していくかの解明につとめた。何れも大きな課題であり、すぐには結論は出ていないが、着実に解明に向けて研究を進めていると考えている。

d 主要業績

(1) 論文

大貫静夫、「弥生開始年代論」、『季刊考古学』138、30-32頁、2017

(2) 予稿・会議録

福田正宏・グリシェンコ、V・大貫静夫他、「サハリン新石器時代前期スラブナヤ5遺跡の発掘調査報告」、『東京大学考古学研究室紀要』29号、121-146頁、2015.3

大貫静、「新石器時代と農業」、『SEEDS CONTACT』4、4頁、2017

大貫静夫・佐藤宏之・國木田大・夏木大吾、「北アジアにおける新石器化についての研究—2016年度—ザバイカルにおける更新世・完新世の移行期の研究—」、『第18回北アジア調査研究報告会』57-58頁、2017

大貫静夫・佐藤宏之・國木田大・夏木大吾、「北アジアにおける新石器化についての研究—2017年度—沿バイカルにおける更新世・完新世の移行期の研究—」、『第19回北アジア調査研究報告会』9-11頁、2018

3. 主な社会活動

(1) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

その他、高梨学術奨励基金、理事、2013.4～2017.3

1. 略歴

- 1982年3月 東京大学文学部考古学専修課程卒業
1982年4月 財団法人東京都埋蔵文化財センター調査員
1988年4月 法政大学大学院人文科学研究科日本史学専攻修士課程入学
1991年3月 法政大学大学院人文科学研究科日本史学専攻修士課程修了
1991年4月 法政大学大学院人文科学研究科日本史学専攻博士後期課程入学
1994年3月 法政大学大学院人文科学研究科日本史学専攻博士後期課程修了、博士(文学)取得
1994年4月 財団法人東京都埋蔵文化財センター副主任調査研究員
1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
1997年5月 東京大学文学部附属北海文化研究常呂実習施設助教授
1999年4月 東京大学大学院新領域創成科学研究科助教授
2003年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
(新領域創成科学研究科助教授併任、2004年3月まで)
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

先史考古学、民族考古学、人類環境史

b 研究課題

- (1)日本列島および東アジアの旧石器時代における石器技術論、行動論、遺跡形成論、石材論的研究。
(2)生業・居住形態等に関する民族考古学的研究。
(3)民俗知の環境論的研究。

c 概要と自己評価

上記の研究課題(1)に基づき実施した、科研費基盤研究(A)「黒曜石の流通と消費からみた環日本海北部地域における更新世人類社会の形成と変容」(09～13年度)の成果をまとめた『晩氷期の人類社会: 北方狩猟採集民の適応行動と居住形態』(16.5刊行、六一書房)を刊行した。さらに15年度からは、科研費基盤研究(B)「現生人類の出現と拡散に果たしたアジア南周ルート上の意義に関する考古学的研究」(15～18年度)プロジェクトを開始した。関連して、『科学』17年5月号に、「特集: よみがえる先史沖縄の人びと: 世界最大級の更新世人骨出土遺跡の発掘」を編み、石垣島白保竿根田原洞穴遺跡の調査成果をまとめた。さらに科研費挑戦的萌芽研究「浜北旧石器人骨出土血の再調査」プロジェクト(16～17年度)の研究分担者として、浜北根堅遺跡の調査に携わった。また研究課題(2)(3)については、東北芸術工科大学と共同研究を実施した。いずれも当初の研究計画をおおむね遂行できたと考えている。

上記研究課題とは別に、科研費基盤研究(B)(海外学術)「先住民族考古遺産の管理・保管・所有権に関する国際比較研究」プロジェクト(17～19年度)に研究分担者として参加し、オーストラリアにおける現状調査を行った。

d 主要業績

(1) 著書

編著、佐藤宏之・山田哲・出穂雅実共編著、『晩氷期の人類社会: 北方狩猟採集民の適応行動と居住形態』、六一書房、2016.5

編著、佐藤宏之編、「特集: よみがえる先史沖縄の人びと～世界最大級の更新世人骨出土遺跡の発掘(『科学』6月号)」、岩波書店、2017.5

(2) 論文

佐藤宏之、「総論: 晩氷期の人類社会-北方狩猟採集民の適応行動と居住形態」、佐藤宏之・山田哲・出穂雅実編『晩氷期の人類社会: 北方先史狩猟採集民の適応行動と居住形態』、3-22頁、六一書房、2016.5

佐藤宏之、「更新世の日本列島における自然・資源環境の変動と人類行動の応答」『田中良之先生追悼論文集 考古学は科学か』、199-214頁、同刊行会、2016.5

岩瀬彬・夏木大吾・山田哲・佐藤宏之、「北見市吉井沢遺跡の忍路子型細石刃核を伴う石器群の使用痕分析(2): ブロック3を対象とした分析」『旧石器研究』12号、83-98頁、日本旧石器学会、2016.5

- Sato, H., Pleistocene to Holocene archaeology in the Japanese Archipelago: an overview. In M. Kornfeld, M.L. Larson, Y. Lee, J. Woo and M. Cory (eds.) *Proceedings of the 21th Suyanggae and Her Neighbors International Symposium Suyanggae and Hell Gap*. pp. 170-181. 2016.7
- Iwase, A., H. Sato, Yamada, S. and D. Natsuki, A use-wear analysis of the Late Glacial Microblade assemblage from Hokkaido, Northern Japan: A case study based on the Yoshiizawa site. *Journal of Japanese Archaeology*, 4(1): 3-28, 2016.9
- Sato, H., Recent advances of the Japanese Lower and Middle Paleolithic research. In *Proceedings of the International Symposium on the Paleolithic of Vietnam in a regional context*. pp. 29-45, The Institute of Archaeology, Vietnam Academy of Social Sciences, Institute of Archaeology and People of Committee of Gia Lai Province, Department of Culture, Sports and Tourism, Vietnam. 2016.10
- 佐藤宏之、「現生人類アジア拡散研究の最前線」大沼克彦・久米正吾編『キルギスとその周辺地域における遊牧社会の形成』2016年度科学研究費基盤研究(B)海外学術調査「ユーラシア古代遊牧社会形成の比較考古学(課題番号: 25300040) 論文集」21-28頁、同研究班、2017.1
- 佐藤宏之、「過去の人類活動の確かな証拠をあつかう考古学」『科学』87巻2号、181-183頁、岩波書店、2017.2
- 佐藤宏之、「日本列島の中期/後期旧石器時代移行期に関する再検討」『ラーフィダーン』38号、55-60頁、東京、2017.3
- 佐藤宏之、「列島の中の八戸—先史時代、なぜムラができ消えたか?—」『環境動態を視点とした地域社会と集落形成に関する総合的研究』平成24~28年度文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業研究成果報告書、93-98頁、東北芸術工科大学東北文化研究センター、2017.3
- 佐藤宏之、「旧石器時代の埋葬: 白保竿根田原洞窟遺跡の埋葬行為を考える」『白保竿根田原遺跡確認調査報告書2 総括編』182-185頁、沖縄県立埋蔵文化財センター、2017.3
- 佐藤宏之、「白保竿根田原洞窟遺跡の考古学的成果」『科学』87巻6号、565-569頁、岩波書店、2017.5
- Sato, H. & D. Natsuki Human behavioral responses to environmental condition and the emergence of the world's oldest pottery in East and Northeast Asia: an overview. *Quaternary International*, 441: 12-28. 2017.5
- Kunikita, D., Wang, L., Onuki, S., Sato, H. & Matsuzaki, H. Radiocarbon dating and dietary reconstruction of the Early Neolithic Houtaomuga and Shuangta sites in the Song-Nen Plain, Northeast China. *Quaternary International*, 441: 62-68. 2017.5
- 佐藤宏之、「赫哲の居住と生業—北方猟漁民の民族考古学—」安斎正人編『理論考古学の実践』同成社、421-450頁、2017.6
- 佐藤宏之、「アジアの後期旧石器時代開始期研究の現状と課題: スヤング遺跡第6地点第3・4文化層石器群を考える」『韓国旧石器学報』35号、5-20頁、韓国旧石器学会、2017.6
- 佐藤宏之、「北方猟漁民が使っていた舟: 北東アジア・台湾・北アメリカの例」『科学』87巻9号、870-874頁、岩波書店、2017.9
- Izuho, M., Ferguson, J.R., Vasilevski, A., Grishchenko, V., Yamada, S., Oda, N., Sato, H. Obsidian sourcing analysis by X-ray fluorescence (XRF) for the Neolithic sites of Slavnaya 4 and 5, Sakhalin Islands (Russia). *Archaeological Research in Asia*, dx.doi.org/10.1016/j.ara.09.002, Elsevier. 2017.10
- Грищенко, В. А., Фукуда, М., Василевский, А. А., Онуки, Ш., Саго, Х., Куникита, Д., Кумаки, Т., Можаяев, А. В., Перегудов, А. С., Пашенцев, П. А., Учидо, К., Морисаки, К., Якушиге, М., Натсуки, Д., Ямашита, Ю. Новые исследования Поселения Адо-Тымово 2 (результаты работ совместной российско-японской экспедиции 2014–2015 гг.). *Археология Circum-Pacific: Памяти Игоря Яковлевича Шевкомуда*. Тихоокеанское издательство Рубеж, Владивосток. 2017
- Morisaki, K., Izuho, M. and Sato, H. Human adaptive responses to environmental change during the Pleistocene-Holocene transition in the Japanese Archipelago. In E. Robinson and F.S. Sellet (eds.) *Lithic Technological Organization and Paleoenvironmental Change: Global and Diachronic Perspective*, pp. 91-122, Springer. 2018.1
- 佐藤宏之、「ロシア極東・中国東北部における民族考古学」『考古学ジャーナル』708号、25-28頁、ニュー・サイエンス社、2018.2
- Morisaki, K., Kunikita, D. and H. Sato Holocene climatic fluctuation and lithic technological change in northeastern Hokkaido (Japan). *Journal of Archaeological Science: reports* 17: 1018-1024. 2018.3
- 尾田識好・森先一貴・岩瀬彬・山崎健・佐藤宏之、「旧石器・縄文時代移行期研究における前田耕地遺跡の意義」『研究論集』XXXII集、57-71頁、東京都埋蔵文化財センター、2018.3
- (3) 書評
- 佐藤宏之、関根達人著『モノから見たアイヌ文化史』、『季刊考古学』138号、90頁、2017.2

(4) 学会発表

- 国内、佐藤宏之、「趣旨説明」、第 82 回日本考古学協会総会セッション: 博物館法をはじめとする関連法等の改正後の博物館・美術館のありかた(企画: 佐藤宏之)、東京学芸大学、2016.5.29
- 国内、佐藤宏之、「討論・司会」、第 82 回日本考古学協会総会セッション: 東日本大震災対策特別委員会の 5 年間の活動—復興調査支援の取り組みと調査成果の還元および残された課題、東京学芸大学、2016.5.29
- 国際、Sato, H. “Obsidian procurement and circulation in Upper Paleolithic Hokkaido, northern Japan” Interantional Symposuim: The Archaeology of obsidian and flint, Thetford, England, 2016.7.15
- 国際、Sato, H. “Pleistocene to Holocene archaeology in the Japanese Archipelago” 21th International Symposium: Suyanggae and Her Neighbors, Laramie, Wyoming, USA, University of Wyoming, 2016.7.29
- 国際、Noguch, A., Sato, H., Nagasaki, J., & Korisettar, R., “The origin of beads making of South Asia: technological reassessment of beads from Jwalapuram 9, Andhra Pradesh, South India” 第 8 回世界考古学会議京都大会、同志社大学、2016.8.28
- 国際、Sato, H. “Recent advances of the Japanese Lower and Middle Paleolithic research. International Workshop, Paleolithic of Vietnam in a regional context, Gia Lai, Vietnam, 2016, Pleiku city, Gia Lai Province, Vietnam、2016.10.31
- 国内、佐藤宏之、「現生人類拡散南周りルートに関する研究の現状と課題」基盤研究 B「現生人類文化の出現と拡散に果たしたアジア南回りルートの意義に関する考古学的研究」研究集会、東京大学、2017.2.17
- 国内、夏木大吾・山田哲・中村雄紀・廣松晃一・吉留晃平・太田圭・増子義彬・佐藤宏之・熊木俊朗、「北海道北見市吉井沢遺跡第 10 次発掘調査」、第 18 回北アジア調査研究報告会、札幌学院大学、2017.2.8
- 国内、佐藤宏之、「現生人類アジア拡散研究の現状:IUP・細石刃技術・礫器剥片石器群」、第 18 回北アジア調査研究報告会、札幌学院大学、2017.2.8
- 国内、大貫静夫・佐藤宏之・國木田大・夏木大吾、「北アジアにおける新石器化についての研究—2016 年度—ザバイカルにおける更新世・完新世移行期の研究」第 18 回北アジア調査研究報告会、札幌学院大学、2017.2.8
- 国内、佐藤宏之・夏木大吾、「東・北東アジアにおける土器出現期研究の現状」、2016 年度北海道旧石器文化研究会、北海道大学、2017.3.19
- 国内、夏木大吾・太田圭・増子義彬・青木要佑・熊木俊朗・佐藤宏之・國木田大・本吉春雄、「2016 年度遠軽町タチカルシュナイ M-1 地点の調査成果と展望」2016 年度北海道旧石器文化研究会、北海道大学、2017.3.19
- 国内、稲田孝司・佐藤宏之、「白保竿根田原洞穴遺跡の考古学的検討」、第 83 回日本考古学協会総会研究発表セッション: 白保竿根田原洞穴遺跡の調査と研究、大正大学、2017.5.28
- 国内、佐藤宏之、「日本列島の中期/後期旧石器時代移行期」、公開シンポジウム『日本列島と西アジア』、JP タワー学術総合ミュージアム・インターメディアテク、2017.6.17
- 国内、海部陽介・佐藤宏之・後藤 明・池谷信之、「旧石器時代の航海—その謎にどう迫るか?」、第 15 回日本旧石器学会総会・研究発表、慶應義塾大学、2017.7.1
- 国内、下岡順直・佐藤宏之・Ravi Korisettar・野口淳・長崎潤一・高屋敷飛鳥・舟木太郎、「インド、ジュワラプラーム遺跡群における光ルミネッセンス年代測定の試み」第 15 回日本旧石器学会総会・研究発表、慶應義塾大学、2017.7.1
- 国内、夏木大吾・國木田大・佐藤宏之・青木要佑・太田圭・増子義彬・熊木俊朗・本吉春雄、「北海道遠軽町タチカルシュナイ遺跡 M-1 地点出土の縄文時代草創期石器群」、第 15 回日本旧石器学会総会・研究発表、慶應義塾大学、2017.7.1
- 国内、佐藤宏之、「旧石器時代人骨が出土する世界の遺跡とその評価」、沖縄考古学会・沖縄県立埋蔵文化財センター共催シンポジウム『白保竿根田原洞穴遺跡を考える』、沖縄県立埋蔵文化財センター、2018.2.18
- 国内、大貫静夫・佐藤宏之・國木田大・夏木大吾、「北アジアにおける新石器化についての研究—2017 年度— 沿バイカルにおける更新世・完新世移行期の研究—」、第 19 回北アジア調査研究報告会、東京大学、2018.3.10
- 国内、夏木大吾・太田圭・池山史華・舟木太郎・佐藤宏之・國木田大・熊木俊朗・廣松晃一・山田哲・中村雄紀、「北海道北見市吉井沢遺跡の調査成果(第 11 次)」、第 19 回北アジア調査研究報告会、東京大学、2018.3.10
- 国内、佐藤宏之・夏木大吾・Kyaw Khaing、「ミャンマーにおける Anyathian」、第 19 回北アジア調査研究報告会、東京大学、2018.3.10

3. 主な社会活動

(1) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

- 国内、考古調査士資格認定機構、資格審査委員長、2016.4～
- 国内、東京都文化財保護審議会、委員、2010.12～

国内、神奈川県文化財保護審議会、会長、2016.4～
国内、小平市、鈴木遺跡発掘調査総括報告作成委員会、座長、2013.7～
国内、沖縄県立埋蔵文化財センター、白保竿根田原洞穴遺跡調査指導委員会、委員、2014.4～2018.3
国内、山形県高島町、日向洞窟遺跡範囲確認調査検討委員会、委員長、2016.9～
国内、九州大学大学院人文科学研究院、外部評価委員、2017.9～2018.3

(2) 他機関での講義等

その他、放送大学、「考古学」、2016～
特別講演、国立科学博物館、「日本の独特な後期旧石器文化」ラスコー展記念講演会、2016.11.23
招待講演、“Pleistocene to Holocene Archaeology in the Japanese Archipelago”、Bryat State University(ブリヤート共和国ウラン・ウデ市)、2016.12.27
特別講演、川崎市民ミュージアム、「神奈川の歴史の始まり：考古学から見た日本列島における現代人の出現」「かがわの遺跡」展講演会、2017.1.7
特別講演、国立科学博物館、「北方狩猟民の舟：民族考古学的調査から」第5回「3万年前の航海 徹底再現プロジェクト」研究会、2017.1.29
その他、朝日カルチャーセンター新宿教室、「日本列島の後期旧石器時代研究の最前線」2017.7.14
その他、朝日カルチャーセンター新宿教室、「旧石器時代の人骨出土遺跡を掘る—白保竿根田原洞穴遺跡の調査とその成果」2017.7.28
特別講演、東京大学文学部、「日本列島の人類文化の起源を探る」オープンキャンパス、2017.8.3
特別講演、国立科学博物館、「津軽海峡」第6回「3万年前の航海 徹底再現プロジェクト」研究会、2017.9.1
その他、朝日カルチャーセンター新宿教室、「現生人類のアジア拡散」、2018.1.26
その他、朝日カルチャーセンター新宿教室、「日本列島の旧石器時代」、2018.2.23
その他、朝日カルチャーセンター新宿教室、「氷期の終了と縄文文化の始まり」、2018.3.16

(3) 学会

国内、日本第四紀学会、名誉会員候補者選考委員会委員、2016.1～2016.7
国内、日本旧石器学会、会長、2014.6～2018.7
国内、日本考古学協会、理事、2014.5～2018.5
国際、Asia Palaeolithic Association、副会長、2012.7～
国内、法政史学会、評議員、2008.6～
国内、日本第四紀学会、評議員、2007.8～2017.7

1. 略歴

1974年3月	群馬県立前橋高等学校卒業
1974年4月	静岡大学人文学部人文学科入学
1978年3月	静岡大学人文学部人文学科卒業
1978年4月	静岡大学人文学部人文学科研究生
1979年3月	静岡大学人文学部人文学科研究生修了
1979年4月	筑波大学大学院歴史人類学研究科文化人類学専攻博士課程入学
1986年3月	筑波大学大学院歴史人類学研究科文化人類学専攻単位取得退学
1986年4月	筑波大学大学院歴史人類学研究科文化人類学専攻研究生
1987年12月	筑波大学大学院歴史人類学研究科文化人類学専攻研究生修了
1988年1月	国立歴史民俗博物館考古研究部助手
1996年4月	国立歴史民俗博物館考古研究部助教授
2004年4月	駒澤大学文学部歴史学科助教授
2006年12月	博士（文学）取得（筑波大学）
2007年4月	駒澤大学文学部歴史学科教授
2010年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本考古学

b 研究課題

- (1) 縄文時代から弥生時代への移行問題の研究
- (2) 縄文・弥生時代の葬墓制の研究
- (3) 縄文・弥生時代の通過儀礼の研究

c 概要と自己評価

上記の(1)に関して、2016年度より科学研究費基盤研究A「東日本における食糧生産の開始と展開の研究—レプリカ法を中心として—」のテーマで、植物種子圧痕の研究を基軸に、東日本を中心とした農耕文化複合の形成の特質を東アジア的な視野から分析することを目指した研究をスタートさせた。(2)に関して、愛知県田原市保美貝塚の発掘調査を行い、盤状集骨という特異な埋葬を検出し、調査し縄文晩期の葬墓制の特質を明らかにする手掛かりを得たが、その結果をまとめつつある。(3)に関して、科学研究費基盤研究(C)「人物造形品の集成と分析にもとづく弥生時代の儀礼と社会組織に対する基礎的研究」の研究報告を刊行した。

d 主要業績

(1) 著書

- 編著、設楽博己・工藤雄一郎・松田睦彦、『柳田國男と考古学—なぜ柳田は考古資料を収集したのか—』、新泉社、2016.5
- 編著、設楽博己、『季刊考古学第138号』、雄山閣、2017.2
- 単著、設楽博己、『弥生文化形成論』、塙書房、2017.2
- 編著、設楽博己・工藤雄一郎編、『柳田國男収集考古資料の研究』国立歴史民俗博物館研究報告第202集、国立歴史民俗博物館、2017.3
- 共著、設楽博己・石川岳彦著、『弥生時代人物造形品の研究』同成社、2017.3

(2) 論文

- 設楽博己・林正之・守屋亮・山下優介・周嘉寧、「2015年度のレプリカ法による種子圧痕の調査」、『SEEDS CONTACT』、第3号、2-4頁、2016.3
- 藁科哲男・周東一也・渡部明美・設楽博己、「福島県金山町宮崎遺跡再葬墓出土弥生時代玉類の産地分析」、『福島県立博物館紀要』、第30号、29-61頁、2016.3
- 設楽博己、「古代史学者喜田貞吉の日本民族論と柳田國男との関係」、『柳田國男と考古学—なぜ柳田は考古資料を収集したのか—』、新泉社、96-98頁、2016.3

設楽博己、「コラム 今西龍と固有日本人論」、『柳田國男と考古学—なぜ柳田は考古資料を収集したのか—』、新泉社、102-103 頁、2016.3

設楽博己、「柳田國男はなぜ考古学を批判し、考古学と決別したのか」、『柳田國男と考古学—なぜ柳田は考古資料を収集したのか—』、新泉社、111-113 頁、2016.3

設楽博己、「自然科学と文学—松本彦七郎・山内清男と柳田國男」、『柳田國男と考古学—なぜ柳田は考古資料を収集したのか—』、新泉社、116-119 頁、2016.3

工藤雄一郎・設楽博己、「柳田國男旧蔵考古資料とは? —収集の経緯」、『柳田國男と考古学—なぜ柳田は考古資料を収集したのか—』、新泉社、21-23 頁、2016.5

設楽博己、「コラム アイヌ・コロポックル論争の考古学的な資料」、『柳田國男と考古学—なぜ柳田は考古資料を収集したのか—』、新泉社、86-87 頁、2016.5

設楽博己、「縄文人のこころと祈り」、『縄文の奇跡! 東名遺跡 歴史をぬりかえた縄文のタイムカプセル』、雄山閣、172-179 頁、2017.1

設楽博己、「総括—弥生文化から縄文文化を考える」、『歴博フォーラム 縄文時代 その枠組・文化・社会をどう捉えるか?』、吉川弘文館、214-223 頁、2017

設楽博己、「弥生文化研究の深化と新展開」、『季刊考古学』、第 138 号、14-17 頁、2017.2

設楽博己、「日本先史時代の人々は、死者をどのように扱ったのか」、『死者はどこへいくのか—死をめぐる人類 5000 年の歴史 河出ブックス 102』、河出書房新社、155-186 頁、2017.2

設楽博己、「再葬墓集団のくらし」、『公開シンポジウム 東国弥生文化の謎を解き明かす〜佐倉市岩名天神前遺跡と再葬墓の時代〜予稿集』、佐倉市岩名天神前遺跡公開シンポジウム実行委員会、20-25 頁、2017.2

設楽博己、「柳田國男の山人論と考古学」、『柳田國男収集考古資料の研究』国立歴史民俗博物館研究報告、第 202 集、157-180 頁、2017.3

工藤雄一郎・設楽博己・高瀬克範・熊木俊朗・福田正宏・山田康弘・大澤正吾、「柳田國男旧蔵考古資料の概要」、『柳田國男収集考古資料の研究』国立歴史民俗博物館研究報告、第 202 集、27-99 頁、2017.3

(3) 書評

山田康弘、『つくられた縄文時代 日本文化の原像を探る』、新潮社、『季刊考古学』、第 135 号、104 頁、2016.5

(4) 解説

設楽博己、「関東地方の弥生土器」、『知の回廊—UMUT Hall of Inspiration 東京大学総合研究博物館展示図録』、東京大学総合博物館、228-229 頁、2016.3

設楽博己、「関東地方の縄文土器」、『知の回廊—UMUT Hall of Inspiration 東京大学総合研究博物館展示図録』、東京大学総合博物館、224-227 頁、2016.5

(5) 予稿・会議録

国内会議、設楽博己、「東北地方における遠賀川系土器の出現」、レプリカ法を中心とした研究成果報告会 日本列島北部の穀物栽培、東京大学文学部法文 1 号館 113 号室、2017.3.5

国内会議、設楽博己、「西日本の大洞系土器」、沖縄考古学会 6 月定例会、沖縄県立埋蔵文化財センター研修室、2017.6.16

(6) 監修

設楽博己、『日本の歴史 1 日本のあけぼの 旧石器・縄文・弥生・古墳時代』集英社版学習まんが、集英社、2016.10

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、北九州市立生涯学習総合センター、「城野遺跡(北九州小倉南区) 石棺墓の謎を解く—節分豆まき際の起源」、2016.3

特別講演、東京大学総合研究博物館、「縄文土器編年にはたした東大の役割 東京大学総合研究博物館開館記念講演会」、2016.5

特別講演、駒澤大学深沢キャンパス 120 周年アカデミーホール、「日本先史時代の人々の死生観 平成 28 年度駒澤大学春季公開講座 講座Ⅱ 死者はどこへいくのか—他界観と死生観にみる思想と文化—」、2016.6

特別講演、中央大学、「つくられた弥生時代 中央史学会第 41 回大会公開講演」、2016.7

特別講演、愛知県陶磁美術館本館講堂、「朝日遺跡の盛衰と弥生時代 企画展「弥生への旅 朝日遺跡」関連事業 講演会・シンポジウム 1 「倭国への歷程」」、2016.7

特別講演、岩手県滝沢市埋蔵文化財センター、「北の弥生文化とは?—縄文系弥生文化の構想と転換— 平成 28 年度埋蔵文化財講座 弥生文化再考—湯舟沢Ⅲ遺跡弥生土器瓦痕レプリカ法調査の成果」、2016.11

特別講演、北海道立埋蔵文化財センター、「弥生文化と縄文文化 考古学を知る・学ぶ5」、2016.11
特別講演、西都原考古博物館、「顔の考古学」『考古博講座IV』、2017.2
特別講演、佐倉市民音楽ホール、「再葬墓集団のくらし」『公開シンポジウム 東国弥生文化の謎を解き明かす～佐倉市岩名天神前遺跡と再葬墓の時代～』、2017.2
特別講演、前橋市総社歴史資料館、「群大附属中の地下に眠る縄文晩期 西新井遺跡」『赤城・榛名山麓の考古学』平成29年度考古学講座、2017.10
特別講演、みどり市岩宿博物館、「日本の考古学」『広い視野から考古学を学ぶ』平成29年岩宿大学、2017.11
その他、朝日カルチャーセンター横浜、「最新研究 縄文社会と弥生社会」、2016.1
その他、千葉市生涯学習センター、千葉縄文フェスタ2016 シンポジウム「縄文を世界から見る」、2016.2
その他、朝日カルチャーセンター新宿、「干支になった申の考古学」、2016.3
その他、朝日カルチャーセンター新宿、「縄文と弥生の最新研究—6つの疑問に答える—」、2016.4～2016.6
その他、国立歴史民俗博物館第4展示室、「柳田國男はなぜ考古遺物を収集したのか」、2016.5
その他、朝日カルチャーセンター新宿、「縄文農耕論争 論争の考古学」、2016.10
その他、朝日カルチャーセンター新宿、「顔の民俗考古学」、2016.10～2016.12
その他、朝日カルチャーセンター新宿、「三国志からみた弥生時代」、2017.2～2017.3
非常勤講師、國學院大學大学院、「考古学特殊講義」、2016.4～2018.3
非常勤講師、駒澤大学大学院、「考古学特殊講義」、2016.4～2017.3
非常勤講師、放送大学、「放送授業科目」、2017.10

03 美術史学

教授 佐藤 康宏 SATO, Yasuhiro

1. 略歴

- 1978年3月 東京大学文学部美術史学専修課程卒業
- 1978年4月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（美術史学専攻）入学
- 1980年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（美術史学専攻）修了
- 1980年4月 東京国立博物館学芸部資料課に勤務（文部技官）
- 1981年4月 文化庁文化財保護部美術工芸課に出向
- 1989年10月 同上 絵画部門文化財調査官
- 1994年10月 東京大学文学部に出向（助教授）
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（美術史学）
- 2000年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（美術史学）

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本美術史を専攻する。主たる分野は江戸時代の絵画・版画の歴史。

b 研究課題

室町時代末期から江戸時代初期にかけての風俗画、江戸中期の若冲・蕭白と浮世絵、中後期の南画を主な研究領域としている。近年は平安・鎌倉時代の絵巻や近代の洋画も論文の主題にするなど、論及の対象は拡大し、日本美術史全体を概観するようになった。本来は記号論、社会史、精神分析などの観点を日本絵画の解釈に生かすとともに、作品と文献史料の双方で絵画史研究のための基礎資料を整備することに努めている。

c 概要と自己評価

著書は1993年刊行の旧版を文庫本に改めたものだが、その後の自身の研究の進展を反映して、一部を増補改訂もした。伊藤若冲研究に基づくワシントンでのシンポジウム発表（2012年）、岩佐又兵衛「伊勢物語 梓弓図」（文化庁）を主題としたベルリンでのシンポジウム発表（2013年）の英文報告書は、いずれも刊行される気配がなかった（前者は2018年5月に出版）、発表内容を増補した日本語の論文を紀要に掲載した。ふたりの画家に関する研究の最前線といえる内容であろうと思う。以下に特記していない仕事としては、Tsuji Nobuo, *History of Art in Japan* (Translated by Nicole Coolidge Rousmaniere, University of Tokyo Press, 2018) の校訂作業がある。631ページの書物となる前の英文原稿すべてを読み、専門の立場から校正を行なった。また、2018年4月から5月にかけて東京国立博物館で開催された特別展「名作誕生——つながる日本美術」のために、『國華』編集委員を代表して最初の企画を立案するとともに、実現のための会議をこの間重ねた。展覧会のための広報活動も以下の業績には含まれる。

美術史学会常任委員に選出され、編集委員、例会委員、『美術史』論文賞選考委員（委員長）を務めた。

d 主要業績

(1) 著書

単著、佐藤康宏、『湯女図 視線のドラマ』、筑摩書房、2017.2

(2) 論文

佐藤康宏、「放送大学試験問題文削除事件」、『法学セミナー』、741号、50-54頁、2016.10

佐藤康宏、「江戸の浮世絵認識」、『美術フォーラム21』、34号、42-47頁、2016.11

佐藤康宏、「物語絵の伝統を切断する——岩佐又兵衛「梓弓」」、『美術史論叢』、33号、47-61頁、2017.3

佐藤康宏、「伊藤若冲——市場の画家」、『美術史論叢』、33号、63-82頁、2017.3

(3) 解説

佐藤康宏、「岡田米山人筆楓林停車図」、『國華』、1457号、38-42頁、2017.3

佐藤康宏、「初代鳥居清信筆初代市川団十郎の竹抜き五郎」、『國華』、1465号、52-54頁、2017.11

佐藤康宏、「岸田劉生筆「道路と土手と堀（切通之写生）」、『一個人』、211号、94頁、2018.3

佐藤康宏、「土偶」（宮城県大崎市蕪栗恵比須田遺跡出土）、『國華』、1469号、56-57頁、2018.3

(4) 啓蒙

- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 84 幻再びか」、『UP』、522号、54-55頁、2016.4
佐藤康宏、「日本美術史不案内 85 東大教師が新入生にすすめる日本美術史以外の本 その七」、『UP』、523号、52-53頁、2016.5
佐藤康宏、「日本美術史不案内 86 ある誤報」、『UP』、524号、50-51頁、2016.6
佐藤康宏、「日本美術史不案内 87 宗達新論」、『UP』、525号、72-73頁、2016.7
佐藤康宏、「日本美術史不案内 88 物の味方」、『UP』、526号、52-53頁、2016.8
佐藤康宏、「日本美術史不案内 89 洞の中の魍魎」、『UP』、527号、68-69頁、2016.9
佐藤康宏、「日本美術史不案内 90 散華」、『UP』、528号、54-55頁、2016.10
佐藤康宏、「日本美術史不案内 91 さゆみちゃん」、『UP』、529号、66-67頁、2016.11
佐藤康宏、「日本美術史不案内 92 われアルカディアにもありき」、『UP』、530号、44-45頁、2016.12
佐藤康宏、「日本美術史不案内 93 よみがえる亡霊」、『UP』、531号、56-57頁、2017.1
佐藤康宏、「日本美術史不案内 94 夜色楼台雪万家」、『UP』、532号、54-55頁、2017.2
佐藤康宏、「日本美術史不案内 95 文化工学の夢」、『UP』、533号、44-45頁、2017.3
佐藤康宏、「本誌連載陣が新入生にすすめる本」、『UP』、534号、30-32頁、2017.4
佐藤康宏、「日本美術史不案内 96 東大教師が新入生にすすめない本」、『UP』、535号、66-67頁、2017.5
佐藤康宏、「日本美術史不案内 97 学んで時にこれを習う」、『UP』、536号、60-61頁、2017.6
佐藤康宏、「日本美術史不案内 98 官邸の共謀」、『UP』、537号、58-59頁、2017.7
佐藤康宏、「日本美術史不案内 99 ラストエンペラー」、『UP』、538号、42-43頁、2017.8
佐藤康宏、「日本美術史不案内 100 人形作家」、『UP』、539号、60-61頁、2017.9
佐藤康宏、「日本美術史不案内 101 パスを出す」、『UP』、540号、60-61頁、2017.10
佐藤康宏、「日本美術史不案内 102 時が刻むもの」、『UP』、541号、46-47頁、2017.11
佐藤康宏、「日本美術史不案内 103 ネオ江戸便り」、『UP』、542号、50-51頁、2017.12
佐藤康宏、「日本美術史不案内 104 憂世の画家」、『UP』、543号、60-61頁、2018.1
佐藤康宏、「日本美術史不案内 105 国宝の空隙」、『UP』、544号、46-47頁、2018.2
佐藤康宏、「日本美術史不案内 106 ミソジニー」、『UP』、545号、24-25頁、2018.3

(5) マスコミ

- 「「見返り美人図」はつくられた美!?!」、『週刊朝日』、朝日新聞社、2018.3.16
「脈打つ美の系図 体感」、『朝日新聞（朝刊）』、朝日新聞社、2018.3.27

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 非常勤講師、朝日カルチャーセンター・新宿、「伊藤若冲 その生涯と作品」、2016.4
非常勤講師、朝日カルチャーセンター・横浜、「若冲の「動植綵絵」」、2016.4
委嘱教授、放送大学、「日本美術史（14）」、2016.4～2016.9
非常勤講師、早稲田大学エクステンションセンター、「岩佐又兵衛の絵画」、2016.6
非常勤講師、京都造形芸術大学、「若冲が写す／若冲を写す」、2016.7
特別講演、福井県立美術館、「だれも描かなかつたものを彼は描いた——岩佐又兵衛の絵画」、2016.8
非常勤講師、朝日カルチャーセンター・新宿、「蕪村の絵画」、2016.9
非常勤講師、早稲田大学エクステンションセンター、「若冲とその時代」、2016.9～2016.10
非常勤講師、朝日カルチャーセンター・横浜、「黒の若冲——水墨画と版画」、2016.10
非常勤講師、朝日カルチャーセンター・新宿、「若冲がまねる、若冲をまねる」、2016.11～2016.12
特別講演、東京美術倶楽部、「南画案内1——初期南画と大雅・蕪村」、2017.2
特別講演、東京美術倶楽部、「南画案内2——浦上玉堂から渡邊華山まで」、2017.3
その他、ギャラリーK、「潑墨山水画の宇宙と自然」、2017.4
特別講演、浦上家史編纂委員会・東京大学東洋文化研究所東洋学研究情報センター、「山中読書、野橋曳杖——浦上玉堂における隠逸の表象」、2017.6
特別講演、京都国立博物館、「遊楽図の始まりと終り——「高雄観楓図」と「彦根屏風」」、2017.7
特別講演、福島県立博物館、「国宝とは何か——文化財保護・博物館・美術工芸品」、2018.1
非常勤講師、早稲田大学エクステンションセンター、「快盗日本美術史!」、2018.3

- (2) 行政
文化庁、文化審議会専門委員（文化財分科会）、2016.3～
練馬区、練馬区立美術館運営協議会委員、2016.4～2017.3
文化庁、登録美術品調査研究協力者、2016.5～
鎌倉市、鎌倉市美術工芸品等収集選定委員会委員、2016.3～
- (3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員
任意団体、國華編輯委員会、編輯委員、2016.4～2018.3
- (4) 学会
国内、美術史学会、常任委員、2017.6～

教授 秋山 聰 AKIYAMA, Akira

1. 略歴

1986年3月	東京大学文学部美術史学専修課程卒業（文学士）
1989年3月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（文学修士）
1997年2月	フライブルク大学哲学部 Ph.D
1997年4月	電気通信大学電気通信学部助教授（～1999年3月）
1999年4月	東京学芸大学教育学部助教授（～2006年3月）
2006年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年4月	同上准教授
2011年3月	同上教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋美術史

b 研究課題

デューラーを中心とした中近世ドイツ美術、聖遺物と美術との相関性、イメージ（像）の生動性、比較宗教美術史

c 概要と自己評価

主として西洋中近世における教会宝物や宮廷宝物についての研究を、美術と宝物との相関性および宮廷における宗教文化を意識しつつ展開した。また宝物および宮廷に重点をおきつつ、比較宗教美術史的考察をも展開した。

2016年度には、宮廷と美術についての比較美術史的観点からの検討を目指し、諸地域の宮廷美術について調査研究を行ないつつ、これまでの成果の発信に努めた。5月および9月にオーストリア、チェコでの宮廷美術および宝物関連の調査研究を行なった上で、比較美術史的研究の成果を1月にフィレンツェにおいて発表し、欧米の研究者と意見交換をする機会を得た。また2月にはハイデルベルク大学のD・アイヒベルガー教授を招聘し、16世紀末バイエルン宮廷における結婚式についての講演をさせていただくとともに、徳川家における結婚式との比較を行なった。なお、前年度から着手したレガリアについての比較研究は、さらに進捗をみ、その成果は29年度にベルギーの出版社から刊行される論文集に掲載された。2017年度には、国内の宗教美術史、修験道建築史の専門家との意見交換を行ない、比較宗教美術史を展開させる上で有効なトピックの選定を進めた。また、熊野の新宮市を拠点に、大峰奥駈道や熊野古道小雲鳥越等を複数回実地踏査し、宗教的造形物と周辺環境との関連性について様々な知見を得ることができた。併せて次年度4月の海外研究者による同市での比較宗教美術史に関わる研究会および6月の地中海学会大会中での比較宗教美術史に関わる催しについての打ち合わせも進めた。海外調査としては、フランクフルト、ベルリン、ドレスデン等において、宗教改革記念展等を実見し、宗教者と造形との関係についての比較美術史的研究の可能性も検討した。なかでもザクセン地方デーベルンにおいては、十字架降下儀礼に用いられた可動腕付き磔刑像の実見調査を行うことができ、造形を用いた儀礼についての比較研究にとっての新知見を得ることができた。国際学士院連合の総会を記念しての講演会のために来日された西洋中世美術研究の碩学M.キャヴィネス教授と親しく議論を交わす機会を得、比較

宗教美術史研究の将来性について、様々な観点から確認することができた。氏とは実際に東京国立博物館の運慶展や根津美術館の仏画展を見学しつつ、比較に資する観点の抽出を行なった。また独協大学の宗教改革 500 周年を記念しての国際ワークショップでの A-M.ボネ教授との交流も有益であった。

なお、立ち上げから関わってきた全学の教育プログラム、体験活動プログラムおよび初年度長期休学制度 (FLY プログラム) には引き続き協力を続けてきたが、2017 年度より新宮市および国際熊野学会の協力の下に、熊野における体験活動プロジェクトを開始するに至り、濱田前総長の参加、石井理事の視察を得た。また、2015 年から引き続き日本学会協議の連携会員として美術館・博物館委員会に所属し幹事を務め、学芸員の科研費取得資格の拡大に向けて作業を重ねている。

d 主要業績

(1) 著書

共著、秋山聰ほか、『物質性の人類学』、同成社、2017 年 3 月、pp.105-192 (「動く像—キリスト教中世における像の生動性について」)

共著、秋山聰ほか、『西洋美術の歴史 5 : ルネサンスII 北方の覚醒、自意識と自然表現』、中央公論新社、2017 年、p.39-112

単著、秋山聰、『天才と凡才の時代—ルネサンス芸術家奇譚』、芸術新聞社、2018 年 1 月、272pp.

(2) 論文

秋山聰、The Sacred Footprints, examined from Comparative Perspectives, in: M.Faietti/G/Wolf(eds.), Power of the Line, Munich 2017, pp.96-105

秋山聰、「妻のカー初期近世ドイツにおける共同事業者としての画家夫妻について」、『西洋美術研究』19, pp.163-174、2017 年 10 月

秋山聰、Relic or Icon?, The Place and Function of Imperial Regalia, in: Ch.Goettler/M.M.Mochizuki (eds.), *Nomadic Object: The Challenge of World for Early Modern Religious Art*, Leiden 2018, pp.430-447

(3) 学会発表等

秋山聰、「比較宗教美術史の試み：聖なるものの東西」、環境問題研究会：聖なるものの表現をめぐる—美術史と建築史の視点から—、新宮市、和歌山県、2016 年 5 月 21 日

秋山聰、Sanshu no jingi and Reicheskleinodien: A Comparative Study on Imperial Regalia, KHI セミナー、マックス・プランク学術協会在フィレンツェ美術史研究所、2017 年 1 月 25 日

秋山聰、松崎照明、「熊野への誘い—建築史家と美術史家が聖地で見出したことども」、地中海学会研究会、首都大学秋葉原サテライト・キャンパス、2017 年 4 月 15 日

秋山聰、Comparing Engraved Portraits of Cardinal Albrecht von Brandenburg: On Differences between Durer and Cranach、獨協大学ワークショップ「ドイツ・ルネサンス芸術の研究—ドイツ・ルネサンス美術における革新性(イノベーション)とは何か」(招待講演)、2017 年 11 月 10 日

秋山聰、「宮廷画家とは—クラーナハの場合」、美術史学会東支部大会、国立西洋美術館、2017 年 12 月 17 日

(4) 翻訳

秋山聰／太田泉フランス共訳、マデリン・キャヴィネス、「ザクセンシュピーゲル彩飾写本における女性とマイノリティ」『日本学士院紀要』、72 巻特別号、7-48 頁、2018 年 3 月

(5) 研究テーマ

科学研究費補助金、基盤研究 (B) 秋山聰、研究代表者、「宮廷と美術に関する比較美術史学的研究」、2014~2016
科学研究費補助金、挑戦的萌芽研究、秋山聰、研究代表者、「比較美術史学研究の国際的ネットワーク構築に向けた基礎的研究」、2016~2017

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、青山学院大学、「西洋の宗教と芸術／芸術史特講 (2)」、2016.4~

非常勤講師、國學院大學大学院、「西洋美術史」、2016.4~

(2) 学会等

美術史学会、常任委員、東支部編集事務局担当、2014.4~2016.5

地中海学会、常任委員、大会準備委員会委員長、2016.4~

国際美術史学会 (CIHA) 日本委員会、事務局長、2016.4~

同上、東京コロキウム 2019 事務局長、2016.4~

日本学会議、連携会員、博物館・美術館委員会幹事、2016.4～
Art in Translation 誌 (英国)、Advisory Board、2016.4～
Iconographica 誌 (イタリア)、Advisory Board 2016.4～

准教授 **高岸 輝** TAKAGISHI, Akira

1. 略歴

1990年4月 東京藝術大学美術学部芸術学科入学
1994年3月 東京藝術大学美術学部芸術学科卒業
1994年4月 東京藝術大学大学院美術研究科日本・東洋美術史専攻修士課程入学
1996年3月 東京藝術大学大学院美術研究科日本・東洋美術史専攻修士課程修了
1996年4月 東京藝術大学大学院美術研究科美術専攻博士後期課程入学
2000年3月 東京藝術大学大学院美術研究科美術専攻博士後期課程修了、博士(美術)の学位取得
2000年4月 日本学術振興会特別研究員(PD)(2003年3月まで)
2004年4月 財団法人大和文華館学芸部部員(2005年9月まで)
2005年10月 東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻助教授(2007年3月まで)
2007年4月 同 准教授
2012年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本美術史、主として中世絵画史

b 研究課題

中世やまと絵の研究、絵巻の研究

c 概要と自己評価

日本における権力と造形の関係を通史的に考察する『天皇の美術史』(全6巻、吉川弘文館、2017～18年)の企画と編集に携わり、担当巻において中世絵巻と天皇の関係について総合的分析を行った。並行して、「絵巻マニア列伝」展(サントリー美術館)、「道成寺と日高川」展(和歌山県立博物館)の展覧会企画に参加することで、絵巻の作品研究および一般への啓蒙を果たすことができた。これら研究を総括し、中世絵画史に関する著書としてまとめる予定である。そのほか、コロンビア大学における日本美術史の講義や、日本美術史に関する国際大学院生会議(JAWS)の開催を通じて、国内外の若手研究者育成も進めている。

d 主要業績

(1) 著書

共著、高岸輝、『東大教師が新入生にすすめる本 2009-2015』、東京大学出版会、2016.3
共著、高岸輝、『尼崎市制100周年記念 新「尼崎市史」 たどる調べる 尼崎の歴史 下巻』、尼崎市、2016.10
共著、高岸輝、『絵巻マニア列伝』、サントリー美術館、2017.3
共著、高岸輝、『天皇の美術史 第3巻 乱世の王権と美術戦略』、吉川弘文館、2017.5
共著、高岸輝、『病草紙』、中央公論美術出版、2017.5
共著、高岸輝、『道成寺と日高川—道成寺縁起と流域の宗教文化—』、和歌山県立博物館、2017.10
共著、高岸輝、『日本文学の展望を拓く 第2巻 絵画・イメージの回廊』、笠間書院、2017.11

(2) 論文

高岸輝、「室町土佐派と縁起絵巻の再生」、『聚美』、19号、9-31頁、2016.4

(3) 書評

- 高橋伸幸、『戦国武将と念持仏』、『日本歴史』、816、118 頁、2016.5
安松みゆき、『ナチス・ドイツと〈帝国〉日本美術』、吉川弘文館、『日本歴史』、818、119 頁、2016.7
塩澤寛樹、『仏師たちの南都復興』、吉川弘文館、『日本歴史』、820、119 頁、2016.9
林進、『宗達絵画の解釈学』、『日本歴史』、822、119 頁、2016.11
玉蟲敏子、『日本美術のことばと絵』、KADOAKWA、『日本歴史』、824、153 頁、2017.1
高島幸次、『奇想天外だから史実』、大阪大学出版会、『日本歴史』、826、120 頁、2017.3
大久保純一、『北斎 HOKUSAI』、KADOKAWA、『日本歴史』、828、117 頁、2017.5
酒井忠康、『芸術の海をゆく人』、みすず書房、『日本歴史』、830、120 頁、2017.7
豊永聡美、『天皇の音楽史』、吉川弘文館、『日本歴史』、832、119 頁、2017.9
恋田知子、『異界へいざなう女』、平凡社、『日本歴史』、834、120 頁、2017.11

(4) 解説

- 高岸輝、「土佐雅楽助国綱兄弟筆 涅槃図」、『国華』、1458、54-56 頁、2017.4

(5) 学会発表

- 国際、高岸輝、「モンゴルの衝撃—花園天皇と十四世紀の日本絵画」、蒙元與中亞、東亞之藝術交流學術工作坊、台湾・中央研究院歴史語言研究所、2016.12.9
国内、高岸輝、「日本美術史における国際化とその更新」、東方学会創立 70 周年記念大会シンポジウム「東方からの東方学—その多様性と可能性—」、東京大学山上会館大会議室、2017.6.17
国内、高岸輝、「「後三年合戦絵巻」の変貌—古代から近代まで—」、東京大学駒場博物館所蔵第一高等学校絵画資料修復記念「知られざる明治期日本画と「一高」の倫理・歴史教育」展 記念シンポジウム、東京大学駒場博物館、2017.12.2

(6) 啓蒙

- 高岸輝、五十嵐公一、橋本麻里、「美術史の魅力と愉しみ（鼎談）」、『本郷』、127、2-11 頁、2017.1

(7) 予稿・会議録

- 国内会議、鈴木親彦、高岸輝、北本朝展、「IIIF Curation Viewer が美術史にもたらす「細部」と「再現性」—絵入り本・絵巻の作品比較を事例に」、人文科学とコンピュータシンポジウム、大阪市立大学、2017.12.8
157-164 頁、2017.12

(8) 会議主催(チェア他)

- 国際、「International Workshop on Japanese Art History for Graduate Students」、実行委員、2017.3.9~2017.3.16

(9) マスコミ

- 「天皇と美術の関係を探る—見えてくる新たな時代観と美術史像」、『週刊読書人 3177 号』、2017.2.17
「帰洛を夢見た流浪の将軍—足利義昭と「道成寺縁起」」、『産経新聞 朝刊 文化面』、産経新聞社、2017.12.5

(10) 展示

- 「絵巻マニア列伝」、高岸輝、2017.3.29~2017.5.14
「道成寺と日高川—道成寺縁起と流域の宗教文化—」、高岸輝、2017.10.14~2017.11.26

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 客員教授、Columbia University, Emperors (Tennō) in Medieval Japanese Art History, 2017.2~2017.4
特別講演、Columbia University, Japanese Narrative Handscrolls (Emaki): Emperors, Shoguns, and Landscapes, 2017.4
非常勤講師、大阪大学大学院文学研究科・文学部、「日本美術史特殊講義（日本美術史講義）」、2017.9
特別講演、和歌山県立博物館、「日本無双の縁起、「道成寺縁起絵巻」の謎をさぐる—絵師、成立年代から、最後の将軍・足利義昭の鑑賞まで—」、2017.11

(2) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

- 美術史学会、常任委員、2013.6~2017.5
国際美術史学会 (CIHA)、国内委員会、委員、2014.6~
国文学研究資料館、運営会議 委員、2016.4~

04 哲学

教授 一ノ瀬 正樹 ICHINOSE, Masaki

1. 略歴

1981年3月	東京大学文学部第一類哲学専修課程卒業
1984年3月	東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士課程修了
1988年3月	東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻博士課程単位取得満期退学
1988年4月	東京理科大学理工学部非常勤講師（～1991年3月）
1991年4月	東洋大学文学部専任講師
1994年4月	東洋大学文学部助教授
1995年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
1997年11月	東京大学より博士（文学）の学位を取得
2002年7月	英国オックスフォード大学客員研究員（～2003年7月）
2007年1月	東京大学大学院人文社会系研究科教授
2011年1月	英国オックスフォード大学 Honorary Fellow（現在に至る）

2. 主な研究活動

a 専門分野

因果論、人格概念の研究、確率の哲学、死刑論、意思決定理論、動物倫理、自由と責任、音楽化された認識論、イギリス経験論

b 研究課題

原因概念と責任概念の連携をめぐる認識論における規範性の役割の研究など

c 概要と自己評価

古典イギリス経験論や現代英米哲学における知識と行為の問題を手掛かりにしつつ、因果性や人格概念についてテーマ研究を進めている。総じて、知識がそのつどいわば即興的に生成してくる場面に注目し、そこで「人格」による知識の所有が生じている次第を解明しつつ、こうした「人格」をこそ知識成立の「原因」と捉える、ただしそうした「人格」の他律的あり方も同時に射程に入れていく、という方向で議論を展開している。また、そのように即興的に生成してくる知識を「音楽」としても押さえ返すことで、新しい認識論の可能性も探っている。近年は、そのような新しい認識論構築の道程として、「意思決定理論」における因果概念と確率概念の絡み合いについて研究を進めている。そして、そうした研究の文脈に沿って、グローバルCOE「死生学の展開と組織化」拠点リーダーとしての活動と絡めて、医療的意思決定の問題にも研究領域を拡張してきた。さらには、死刑論や安楽死論にも議論を及ぼし、死を差し出す、自分の死を決定できる、という想念に巣くう「死の所有」の観念を指摘し、その構造の解明を試みている。その成果は、2011年刊行の単著『死の所有—死刑・殺人・動物利用に向きあう哲学—』にまとめられている。

この二年間については、まず、2016年6月に東京大学本郷キャンパスにおいて開催されたUHamburg-UTokyo Workshop: *Language and Reality* にて"Counterfactuals, Causation, and Absence" と題した口頭発表を行った。これは、「不在因果」に関する研究のいわば発端となる発表であった。この発表を下敷きに、さらに展開した内容を、韓国ソウル大学にて2016年8月に開催された *The 3rd Conference on Contemporary Philosophy in East Asia* でのA Plenary Lectureとして、"A Degree-Theoretic Approach to Causation by Absence" と題して発表した。この二年間は、こうした「不在因果」研究に主たるテーマを置き続け、その研究は、2017年8月にドイツ・ミュンヘンの Ludwig-Maximilians-Universität, Munich において開催された *9th European Congress of Analytic Philosophy* にて行った"Causation, Deviation, and Absence" と題した口頭発表にて、おおよその構想がまとまった。その成果は、まず日本語において、『英米哲学入門—「である」と「べき」の交差する世界—』（ちくま新書、2018年4月）という形で公表した。新書の入門書という形式だが、後半部分では、2017年に国際雑誌 *Synthese* に掲載された"Normativity, probability, and meta-vagueness"の内容に触れるとともに、近年の「不在因果」についての自身の研究成果を取り入れて記述している。今後、この主題の成果について、英語による論文出版などを模索していきたい。また、この二年間の研究の流れとしては、先の二年間に引き続いて、やはり福島原発事故以来の福島問題に関する研究も継続して進めていった。津波震災・原発事故から5年・6年と経過しても、依然として、放射線被

曝についての著しくデータに反した、場合によっては政治的イシューとの混同をきたした言説、その意味で研究者の立場からは是認しがたいような言説が一部残存し、社会的な被害を生んでいるという認識のもと、2018年1月に『しあわせになるための「福島差別」論』（かもがわ出版）に加わり、また、2018年2月には、早野龍五・中川恵一氏との共編著『福島はあなた自身—災害と復興を見つめて—』（福島民報社）を刊行した。そこでは、福島問題について、データや事実に反した言説をすることはもはや発言者の倫理的なステータスに悪影響を及ぼすような時期になっているという指摘や、被災動物の問題を動物倫理一般の射程から捉え返してみることを試みた。その他、オックスフォード大学の国際誌 *Journal of Practical Ethics* に"The Death Penalty Debate: Four Problems and New Philosophical Perspectives"と題した論文が受理され、2017年6月に発表されたことも大きな成果であった。

2018年3月をもって東京大学を早期退職したが、在職最後の二年間の研究成果を受けて、引き続きその議論展開や内容を彫琢していきたい。

d 主要業績

(1) 著書

共著、一ノ瀬正樹・早野龍五・中川恵一共編『福島はあなた自身—災害と復興を見つめて—』、福島民報社出版部、2018.2

共著、児玉一八・清水修二・野口邦和・開沼博・池田香代子編著、一ノ瀬正樹著、『しあわせになるための「福島差別」論』、かもがわ出版、2018.1

単著、一ノ瀬正樹『英米哲学入門—「である」と「べき」の交差する世界—』、ちくま新書、2018.4

単著、一ノ瀬正樹『英米哲学史講義』、ちくま学芸文庫、2016.7

(2) 論文

Masaki Ichinose, "The Death Penalty Debate: Four Problems and New Philosophical Perspectives", *Journal of Practical Ethics*, Vol 5, Issue 1, June 2017, pp. 53-80

Masaki Ichinose, "Normativity, probability, and meta-vagueness", *Synthese*, vol.194, No.10, 2017, pp. 3879-3900

一ノ瀬正樹, 「合理性のほころび—リスクの哲学に向けて(1)—」, 『論集』35号, 2017, pp. 1-19

一ノ瀬正樹, "An Essay towards an Epistemology of Responsibility: A Probabilistic Approach", 『論集』34号, 2016, pp. 1-32

一ノ瀬正樹, 「断章—いのちは切なし—人と動物のはざま—」, 『哲学雑誌』130巻802号, 2015, pp. 46-74

(3) 学会発表

国内、一ノ瀬正樹, "On Metaphysics of Death", 一ノ瀬正樹最終講義、東京大学文学部一番大教室（東京都文京区）, 2018年3月20日

国内、一ノ瀬正樹, 「犬、そして動物倫理」, 太陽ホールディングス講演会、埼玉県比企郡嵐山町太陽ホールディングス嵐山事業所, 2018年2月28日

国内、一ノ瀬正樹, 「福島はあなた自身—哲学からのメッセージ—」, 第272回原子力システム研究懇話会、日本原子力産業協会, 2018年

国内、一ノ瀬正樹, "Actual Causation and Responsibility", 因果・動物・所有—一ノ瀬哲学をめぐる対話—, 東京大学文学部二番大教室（東京都文京区）, 2017年12月23日

国際、Masaki Ichinose, "Causation, Deviation, and Absence", *9th European Congress of Analytic Philosophy*, Ludwig-Maximilians-Universität, Munich, Germany, 22 August 2017

国内、一ノ瀬正樹, 「新科目「公共」における倫理的テーマの背景」, 北海道高等学校「倫理」「現代社会」研究会第52回大会、札幌市かかでの2.7, 2017年8月7日

国内、一ノ瀬正樹, 「安楽死と「死ぬ権利」」, 石岡市山王台病院「第13回幕内会全体研修会」特別講演、石岡市山王台病院うきうきマイスター, 2017年4月23日

国内、一ノ瀬正樹, 「被災動物、そして動物倫理の暗闇」, 科研費「災害復興のための哲学構築」シンポジウム「あのとこの、あれからの福島」, 東京大学本郷キャンパス（東京都文京区）, 2017年3月18日

国内、一ノ瀬正樹, 「導入：現状、そして理解の混乱」, 科研費「災害復興のための哲学構築」シンポジウム「あのとこの、あれからの福島」, 東京大学本郷キャンパス（東京都文京区）, 2017年3月18日

国内、一ノ瀬正樹, 「震災関連死の原因について」, 「3.11以後のディスカール」研究会、ホテル・ニュー水戸屋（宮城県仙台市）, 2017年3月12日

国際、一ノ瀬正樹, "Causation, Prevention, and Precaution", *The 6th International Symposium and Seminar on Global Nuclear Human Resource Development for Safety, Security and Safeguards*, 東京工業大学（東京都目黒区）, 2017年3月1日

国内、一ノ瀬正樹, "Is the Death Penalty Possible?: From a Lockean Point of View", *John Locke Conference at Gakushuin*, 学習院大学（東京都豊島区）, 2016年12月10日

国際、一ノ瀬正樹, "A Degree-Theoretic Approach to Causation by Absence", A Plenary Lecture at *The 3rd Conference on Contemporary Philosophy in East Asia*, Seoul National University, Seoul, South Korea, 2016年8月19日

国際、一ノ瀬正樹, "Counterfactuals, Causation, and Absence", *UHamburg-UTokyo Workshop: Language and Reality*, 東京大学本郷キャンパス (東京都文京区), 2016年6月25日

国際、一ノ瀬正樹, "Two Conditional Thinking on Rational Decision-Making", *International Conference on Ethno-Epistemology: Culture, Language, and Methodology*, IT Business Plaza Musahi, Kanazawa Ishikawa, 2016年6月3日

3. 主な社会活動

(1) 文部科学省業務

- ・中央教育審議会・初等中等教育分科会・教育課程部会・社会・地理歴史・公民ワーキンググループ委員(2015～)
- ・中央教育審議会・初等中等教育分科会・教育課程部会・高等学校の地歴・公民科科目の在り方に関する特別チーム委員(2015～)
- ・中央教育審議会・初等中等教育分科会・教育課程部会・考える道徳への転換に向けたワーキンググループ主査(2016～)

教授 **神原 哲也** SAKAKIBARA, Tetsuya

1. 略歴

- 1983年3月 東京大学文学部第1類哲学専修課程卒業
- 1986年3月 東京大学大学院人文科学研究科哲学専門課程修士課程修了
- 1988年3月 東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻博士課程退学
- 1988年4月 東京大学文学部助手
- 1992年4月 立命館大学文学部助教授
- 2001年4月 立命館大学文学部教授
- 2003年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
- 2009年9月 東京大学より博士(文学)の学位を取得
- 2010年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

ドイツ現代哲学、ケアの哲学

b 研究課題

ドイツ現代哲学のなかでも、とりわけフッサール、デールタイ、ハイデガー等によって展開された現象学・解釈学に関する歴史的・体系的研究を行っている。またこれらの文献的研究と並行して、哲学と社会的実践とを繋ぎ、結ぶ試みとして、看護を中心とするケアの具体的営みから、「ケアの現象学」「医療現象学」として、現象学の精神に基づく「ケアの哲学」を立ち上げる研究を行っている。この研究は、看護・医療に現象学という哲学の立場から寄与することを目指すとともに、臨床の具体的実践から学んで「事象そのものの方から」現象学を新たに立ち上げることを目指すものである。この試みによって現象学という哲学に新たな光を当て、既存の学説を見直すことも可能になるのではないかと期待している。

c 概要と自己評価

フッサールを中心とする現象学の歴史的・体系的研究に関しては、フッサール現象学、およびそれと西田哲学との関係について、さらにフッサールとハイデガーとの思想的関係について、ドイツ語、英語、日本語の論文ないし口頭発表にて研究成果を公にした。また、「ケアの現象学」「医療現象学」として「ケアの哲学」を立ち上げる試みに関しては、フッサールとハイデガーの現象学に基づきつつ、ケアの営みの哲学的解明を行ったドイツ語論文を公にすると

もに、看護研究者との共著で具体的な看護実践の構造をフッサールの「志向性」概念を手がかりに現象学的に説明する論文を公にすることもでき、この論文を含むケアの実践への現象学的アプローチの諸論文を集めた共編著『ケアの実践とは何か——現象学からの質的研究アプローチ』を刊行することもできた。こうした研究活動のなかで、看護と哲学、看護実践と現象学とが相互に学び合う関係にあることも明らかとなり、この点については日本語の論文にまとめた。学会での発表や講演は、哲学系、看護・医療系の双方で行ったが、哲学系の学会では、ケアの現象学的研究が哲学としての現象学に新たな光をもたらすことに、また看護系・医療系の学会では、現象学が看護・医療に寄与しうること重点を置いて、日本語ないし英語で研究成果を公にした。このうち看護・医療系学会等での発表や講演は、研究成果を社会に還元する活動となったが、とりわけ、臨床実践の現場と現象学という哲学とを繋ぎ、結ぶ目的で設立された「臨床実践の現象学会」の第3回大会を2017年8月に大会長として開催したことは、自身にとって大きな意味をもつ経験となった。これらの研究・教育活動は総じて、相当程度の成果をあげることができたと判断される。

d 主要業績

(1) 著書

編著、西村ユミ／榊原哲也（共編）、『ケアの実践とは何か：現象学からの質的研究アプローチ』、ナカニシヤ出版、2017.9

(2) 論文

榊原哲也、「現象学はあなたにもきっとおもしろい！ 教務主任養成講習会を通して」、『看護教育』、第57巻第4号、250-257頁、2016.4

榊原哲也、「フッサール——発生と解体」、秋富克哉・安部浩・古荘真敬・森一郎編『続・ハイデガー読本』、法政大学出版局、149-156頁、2016.5

Tetsuya Sakakibara, „Caring bei Husserl und Heidegger“ *Phänomenologische Forschungen, Jahrgang 2015, Lebenswelt und Lebensform*, herausgegeben von Christian Bermes und Annika Hand, Jahrgang 2015, S. 119-133, 2016.5

榊原哲也、「看護と哲学——看護と現象学の相互関係についての一考察」、『看護研究』、第49巻4号、258-266頁、2016.7

榊原哲也、「新たな「ケアの現象学」」、『神戸看護学会誌』、第1巻第1号、11-23頁、2017.3

榊原哲也、「記述するとはどういうことか——現象学の立場から」、『臨床精神病理』、第38巻第1号、57-64頁、2017.4

Tetsuya Sakakibara, „Kitarō Nishida“, in: Sebastian Luft / Maren Wehrle (Hg.), *Husserl-Handbuch. Leben – Werk – Wirkung*, J. B. Metzler, Stuttgart, 244-246, 2017

榊原哲也、「死生のケアの現象学」、清水哲郎／会田薫子編『医療・介護のための死生学入門』、113-140頁、2017.8

榊原哲也、「現象学と現象学的研究」、西村ユミ・榊原哲也編『ケアの実践とは何か：現象学からの質的研究アプローチ』、1-21頁、2017.9

西村ユミ／榊原哲也、「看護実践の構造：フッサールの志向性概念との対話」、西村ユミ・榊原哲也編『ケアの実践とは何か：現象学からの質的研究アプローチ』、204-266頁、2017.9

(3) 学会発表

国内、榊原哲也、「現象学的視点から見た透析患者への指導」、第61回日本透析医学会学術集会・総会 ワークショップ15「サステイナブルな患者指導を考える」、大阪府立国際会議場、大阪市、2016.6.12

国内、榊原哲也、「記述するとはどういうことか——現象学の立場から」、第39回日本精神病理学会 シンポジウム I 「臨床記述の復権」、アクトシティ浜松コンgresセンター、静岡県浜松市、2016.10.7

国内、榊原哲也、「新たな「ケアの現象学」」、神戸看護学会第1回学術集会記念講演会、神戸市看護大学、神戸市、2016.10.30

国際、Tetsuya Sakakibara, “Phenomenology in East and West: Husserl and Nishida in the 1930’s,” International Transverse Philosophy Conference 2017 East & West. Philosophical Perspectives on Pluralism, organized by The Philosophical Education Project towards Transverse Thinking BK21PLUS, Chonnam National University, Gwangju, Korea, 2017.2.22

国内、榊原哲也、「現象学だからできること」、臨床実践の現象学会第3回大会、東京大学本郷キャンパス（東京都文京区）、2017.8.6

国際、Tetsuya Sakakibara, “Un Unforgettable Patient: A Phenomenological Approach to Dialysis Nursing Care”, International Conference on “Emmanuel Levinas and East Asia”, National Sun Yat-sen University, Kaohsiung, Taiwan, 2017.9.22

国内、榊原哲也、「患者をトータルに見るとはどういうことか——精神科看護への現象学からのアプローチ」、日本精神科看護協会東京都支部 第9回東京精神科看護学術集会、武蔵野大学武蔵野キャンパス（東京都西東京市）、2017.11.18

国内、榊原哲也、「あらためて心と身体の関係を考える—現象学の視点から—」、第61回日本心身医学会近畿地方会・第48回近畿地区講習会、関西大学梅田キャンパス（大阪市）、2018.1.20
国際、Tetsuya Sakakibara, “Phenomenological Research of Nursing and Its Method”, International Conference on “Phenomenology Pure and Applied”, Seoul National University, Seoul, Korea, 2018.2.24
国際、榊原哲也、「日本における現象学の—動向—ケアと医療の現象学：〈向き合うこと〉と〈寄り添うこと〉」、心性現象学講壇第16期、中山大学哲学系（中華人民共和国・広州市）、2018.3.12

(4) 会議主催(チェア他)

国内、臨床実践の現象学会第3回大会、大会長、東京大学本郷キャンパス（東京都文京区）、2017.8.6
国内、「日本現象学・社会科学会第34回大会」、実行委員長、シンポジウム「当事者の声を聴くことから研究へ」、2017.11.25

(5) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究（B）、榊原哲也、研究代表者、「医療現象学の新たな構築」、2016～2018

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

太田総合病院合同看護部研修会、講義「看護に活かす現象学」、太田看護専門学校、福島県郡山市、2016.9
医療・介護従事者のための死生学 2016年度夏季セミナー、講義「ケアすることとケアされること—現象学の視点から」、東京大学、2016.7
NHK文化センター町田教室、講義「死生のケアの現象学」、2016.10～2017.1
日本看護学校協議会 平成28年度第2回教育研修会、講演「現象学的人間観と看護教育」、東京都千代田区、2016.12
平成28年度愛知県立大学大学院看護学研究科特別講演「看護ケアと現象学、そして看護研究」、2017.2
平成29年度日本看護学校協議会 教務主任養成講習会、特別講義「現象学と現象学的看護理論—現象学を看護教育にどう活かすか—」、公益社団法人大阪府看護協会桃谷センター、大阪市、2017.6
NHK文化センター町田教室、講義「一日でわかるフッサール」、2017.7
静岡県自治体立看護学校協議会 教務担当者研修会、「講義「現象学的人間観を看護教育に」とグループワーク」、静岡県静岡市、2017.8
平成29年度 愛知県看護教育研究会 第1回夏期研修会、「講義「現象学の視点から学生を理解する—現象学を看護教育にどう活かすか—」とグループワーク」、愛知県名古屋、2017.8
医療・介護従事者のための死生学 2017年度夏季セミナー、講義「今でも忘れられない患者さん—いのちに向き合うケアの現象学」、東京大学、2017.9
第2回生活習慣病患者の心と健康の支え方を考える会、特別講演「慢性腎臓病医療に活かす現象学」、稲城市立病院、東京都稲城市、2017.9
平成29年度愛知県立大学看護学部FD企画、講演「現象学的視点からベナーを読み解く」、愛知県立大学守山キャンパス、愛知県名古屋市、2017.11

(2) 他機関の外部委員

首都大学東京荒川キャンパス研究安全倫理委員会 外部委員（2016～2017年度）
日本赤十字看護大学研究倫理委員会 外部委員（2016～2017年度）
九州大学大学院人文科学研究院 外部評価委員（2017年度）

1. 略歴

1987年3月	東京大学文学部第1類哲学専修課程卒業
1990年3月	東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士課程修了
1990年4月	同 博士課程進学 (1994年9月 退学)
1991年10月	ケンブリッジ大学大学院古典学部 Ph.D. コース入学
1995年10月	同大にて Ph.D. 取得
1996年10月	九州大学文学部講師 (哲学・哲学史)
1998年4月	九州大学文学部、大学院人文科学研究科助教授 (哲学・哲学史)
2002年4月	慶應義塾大学文学部助教授 (哲学)
2006年3月	オランダ・ユトレヒト大学訪問研究員 (慶應義塾大学塾派遣留学 : 2007年9月まで)
2007年4月	慶應義塾大学文学部准教授 (哲学)
2008年4月	慶應義塾大学文学部教授 (哲学)
2016年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋古代哲学、西洋古典学

b 研究課題

西洋における哲学の成立を、古代ギリシア哲学の初期から後期にかけて、哲学史と古典文献学の手法を用いながら多角的に検討することを課題とする。主なテーマとして、(1) 紀元前5~4世紀の古典期アテナイの知的状況、具体的には、ソフィスト思潮、ソクラテス、ソクラテス文学、プラトン、イソクラテスら、(2) 初期のイオニアとイタリアの知的状況、および、(3) ヘレニズム期から古代後期にかけての継承と展開、を扱っている。それらの分析をつうじて、現代における「哲学」のあり方を根源から見直し、新たな視野を得ることを目的としている。

また、古代ギリシア哲学が、19世紀以降の日本や東アジアにどのように導入され、翻訳や研究をつうじて社会や思想に影響を与えてきたかという受容史、もテーマにしている。

c 概要と自己評価

2016年度より以前には、(1)の古典期アテナイ哲学を研究の中心に据えて、複数の研究書など成果をまとめてきた。2016~17年度にはさらにその研究を継続し、プラトン『ポリテイア』を中心とする「イデア論」の解明をより詳細に進めた。他方で、研究の重点を(2)により移し、ギリシア哲学史の枠組みを作るべく、その方法論を確保した上で、まずは初期イオニアの哲学、および、イタリアの哲学に研究の焦点をあててその範囲で研究をまとめつつある。これらの作業をつうじて、ギリシアで哲学が誕生した前6世紀初めからヘレニズムに入る以前の前4世紀後半までのもっとも重要な3世紀ほどを全体として視野に入れつつ、それを「ギリシア哲学史」としてまとめる作業を進めている。この成果は2年後(2020年度)に単行本としてまとめる予定でいる。

日本やアジアへのギリシア哲学の受容史は、国内では関連する日本哲学者(大西祝、西田幾多郎、井筒俊彦、田中美知太郎、井上忠ら)の業績を反省することからはじめ、それらの検討を継続して進めている。この主題は海外でもおおく注目されており、グローバル古典学の学会や、プラトン受容に関する国際学会で発表する機会を得て、その成果に対して意見を聞くことができた。こういったテーマでの国際的な研究発表はまだ貴重なものであり、高い評価を得ている。

専門分野の学術研究のほかには、読売新聞での読書委員を2年間つとめてさまざまな新刊書籍の書評で一般への学問紹介、啓蒙活動を行ってきた。自然科学者との対談や各地での学術講演会などにも数多く参加し、古代ギリシア哲学を広く紹介する役割も果たしている。

全体として、古代ギリシア哲学の専門研究と一般的な教育・普及の仕事とを、バランスよく行って成果を出したと考える。

d 主要業績

(1) 著書

単著、納富信留、『哲学の誕生 ―ソクラテスとは何者か―』、ちくま学芸文庫、2017.4

(2) 論文

- Noburu Notomi, "Phaedrus and the Sophistic Competition of Beautiful Speech in Plato's *Symposium*", *Plato in Symposium*, Academia Verlag, 124-130 頁、2016.6
- 納富信留、「裁判員は何を被ったのか?—プラトン『ソクラテスの弁明』冒頭のメッセージ」、『フィロロギカ—古典文献学のために』11、古典文献学研究会、57-61 頁、2016.7
- 納富信留、「精神と肉体 オリンピックの哲学」、橋場弦・村田奈々子編『学問としてのオリンピック』、山川出版社、57-104 頁、2016.7
- 納富信留、「出で遭いへの言葉—井上忠との哲学」、『根拠・言語・存在』、哲学会編哲学雑誌 131/803、有斐閣、34-52 頁、2016.10
- 納富信留、「西田幾多郎と田中美知太郎—日本哲学とギリシャ哲学の協働のために—」、『日本哲学史研究』13 号、京都大学大学院文学研究科日本哲学史研究室紀要、1-32 頁、2016.12
- Noburu Notomi, "Reconsidering the Relations between the Statesman, the Philosopher, and the Sophist", *Plato's Statesman: Dialectic, Myth, and Politics*, John Sallis ed., SUNY Press, pp. 183-195, 2017.1
- Noburu Notomi, "Plato's *Sophist*", Oxford Bibliographies in "Classics", Ed. Dee L. Clayman, New York: Oxford University Press, 2017.3(URL:<http://www.oxfordbibliographies.com/view/document/obo-9780195389661/obo-9780195389661-0247.xml?rsk=26czk0&result=155> DOI: 10.1093/OBO/9780195389661-0247)
- 納富信留、「ギリシア哲学史の可能性—複眼的哲学史を書く試み—」、東京大学文学部次世代人文開発センター研究紀要『文化交流研究』第 30 号、東京大学文学部次世代人文開発センター、1-14 頁、2017.3
- Noburu Notomi, "Freedom and the State in Plato's *Politeia (Republic)*: Reconsidering the concept of '*politeia*'", *JASCA (Japan Studies in Classical Antiquity)* 3, The Classical Society of Japan, pp. 57-68, 2017.3
- 納富信留、「始まりを問う哲学史—複眼的ギリシア哲学史の試み—」、日本哲学会編『哲学』第 68 号、45-62 頁、2017.4
- 納富信留、「プラトン『ポリテイア』I.334d-e のポレマルコス論駁」、『フィロロギカ—古典文献学のために』12、古典文献学研究会、53-62 頁、2017.6
- 納富信留、「プラトン「太陽」の比喩」、山内志朗編『光の形而上学—知ることの根源を辿って—』、慶應義塾大学言語文化研究所、慶應義塾大学出版会、5-25 頁、2018.2
- 納富信留、「日本人はギリシア哲学をどう読んできたか—大西祝、西田幾多郎、田中美知太郎」、『点から線へ』第 67 号、西田幾多郎記念哲学館、38-81 頁、2018.3
- 納富信留、「伝プラトン著『第七書簡』の再検討—前四世紀の書簡文学から—」、日本西洋古典学会『西洋古典学研究』LXVI、2018 年 3 月 23 日、23-34 頁、2018.3

(3) 書評

- 納富信留、「過熱報道の原点に遡る」、浜田幸絵著『日本におけるメディア・オリンピックの誕生』、『読売新聞』2016 年 4 月 3 日号、2016.4
- 納富信留、「密教の奥義を迫体験」、高木神元著『空海の座標』、『読売新聞』2016 年 4 月 17 日号、2016.4
- 納富信留、「「逸脱」に可能性見る」、田口卓臣著『怪物的思考 近代思想の転覆者ディオドロ』、『読売新聞』2016 年 4 月 24 日号、2016.4
- 納富信留、「低評価一新する評伝」、トリストラム・ハント著『エンゲルス マルクスに将軍と呼ばれた男』、『読売新聞』2016 年 5 月 8 日号、2016.5
- 納富信留、加藤尚武著『死を迎える心構え』、『読売新聞』2016 年 5 月 29 日号、2016.5
- 納富信留、「今も重い 終末への警告」、ギュンター・アンダース著『核の脅威 原子力時代についての徹底的考察』、『読売新聞』2016 年 6 月 5 日号、2016.5
- 納富信留、「生と死から人間見る」、村上靖彦著『仙人と妄想デートする 看護の現象学と自由の哲学』、『読売新聞』2016 年 6 月 19 日号、2016.6
- 納富信留、「混迷の時代 本質を見極める：花盛り 哲学入門書を読む」(田中さおり『哲学者に会いにゆこう』、三好由紀彦『哲学のメガネ』、藤田大雪『ソクラテスに聞いてみた』、平原卓『読まずに死ねない 哲学名著 50 冊』、畠山創『大論争! 哲学バトル』)、『読売新聞』2016 年 7 月 3 日号、2016.7
- 納富信留、「蠱惑的な文化論」、ジャン=マルク・ドローアン著『昆虫の哲学』、『読売新聞』2016 年 7 月 31 日号、2016.7
- 納富信留、「夏休みの 1 冊」(トーマス・マン著『ヴェネツィアに死す』)、『読売新聞』2016 年 8 月 14 日号、2016.8

納富信留、「知的遊戯の迷宮へ」、八木沢敬著『『不思議の国のアリス』の分析哲学』、『読売新聞』2016年8月21日号、2016.8

納富信留、「裏方の苦楽生き生きと」、橘宗吾著『学術書の編集者』、『読売新聞』2016年9月4日号、2016.9

納富信留、「広く深い哲学からはるかな現実を見る 過酷な現実から理論の深みへ降りてくる」、Journalism ジャーナリズム、316号、朝日新聞社、54-59頁、2016.9

納富信留、「「有罪」「無罪」二つの筋」、フェルディナント・フォン・シーラッハ著『テロ』、『読売新聞』2016年9月11日号、2016.9

納富信留、「欧州型から米国型へ」、天野郁夫著『新制大学の誕生 上・下』、『読売新聞』2016年10月2日号、2016.10

納富信留、大黒岳彦著『情報社会の＜哲学＞』、『読売新聞』2016年10月9日号、2016.10

納富信留、「読者と一緒に考える」、青山拓央著『幸福はなぜ哲学の問題になるのか』、『読売新聞』2016年10月23日号、2016.10

納富信留、「情念を動かす哲学を」、エルネスト・グラッソ著『形象の力 合理的言語の無力』、『読売新聞』2016年11月13日号、2016.11

納富信留、「12人が意義を問い直す」、逸身喜一郎ほか編『古典について、冷静に考えてみました』、『読売新聞』2016年11月20日号、2016.11

納富信留、「生と死を迫体験する旅」、山折哲雄著『「ひとり」の哲学』、『読売新聞』2016年12月4日号、2016.12

納富信留、「庄巻の『リア王』解釈」、スタンリー・カヴェル著『悲劇の構造 シェイクスピアと懐疑の哲学』、『読売新聞』2016年12月11日号、2016.12

納富信留、「2016年の3冊」(河野哲也『いつかはみんな野生にもどる 環境の現象学』、野矢茂樹『心という難問 空間・身体・意味』、山本巍訳・解説『プラトン饗宴 訳と註解』)、「読書委員この一年」、『読売新聞』2016年12月25日号、2016.12

納富信留、佐藤透著『美と実在 日本の美意識の解明に向けて』、『読売新聞』2017年1月15日号、2017.1

納富信留、「文学を愛した人々の生涯」、川西政明著『大岡昇平 文学の軌跡』、『読売新聞』2017年1月22日号、2017.1

納富信留、鈴木球子著『サドのエクリチュールと哲学、そして身体』、『読売新聞』2017年2月12日号、2017.2

納富信留、「哲学の喜びへ導く箴言」、フリードリヒ・ニーチェ著、森一郎訳『愉しい学問』、『読売新聞』2017年3月12日号、2017.3

納富信留、「相手方から新たな光」、W. カスパー著、高柳俊一訳『マルティン・ルター エキュメニズムの視点から』、『読売新聞』2017年3月26日号、2017.3

納富信留、「もっとも大きな謎」、網谷祐一著『理性の起源』、『読売新聞』2017年4月9日号、2017.4

納富信留、高秉權著『哲学者と下女』、『読売新聞』2017年4月23日号、2017.4

納富信留、「新たな思考の可能性」、國分功一郎著『中動態の世界 意志と責任の考古学』、『読売新聞』2017年5月7日号、2017.5

納富信留、「教育と「道理」の哲学者」、貝塚茂樹著『天野貞祐』、『読売新聞』2017年5月14日号、2017.5

納富信留、「英国社会の模索と課題」、藤原聖子著『ポスト多文化主義教育が描く宗教』、『読売新聞』2017年5月28日号、2017.5

納富信留、「理論と実践と宗教と」、相馬伸一著『ヨハネス・コメニウス』、『読売新聞』2017年6月11日号、2017.6

納富信留、「分析的実存哲学に挑む」、L. A. ボール著『今夜ヴァンパイアになる前に』、『読売新聞』2017年6月25日号、2017.6

納富信留、山内廣隆著『昭和天皇をポツダム宣言受諾に導いた哲学者』、『読売新聞』2017年7月9日号、2017.7

納富信留、「学問の雄大なうねり」、J.H. エリオット著『歴史ができるまで』、『読売新聞』2017年7月23日号、2017.7

納富信留、「フランス現代思想を読み直す：彼らの問い、贅沢に味わう」(川田順造『レヴィ＝ストロース論集成』、ミシェル・フーコー『処罰社会』、ジャック・デリダ『死刑 I』)、『読売新聞』2017年7月30日号、2017.7

納富信留、「夏休みの1冊」(ヘンリー・ジェイムズ著『ねじの回転』)、『読売新聞』2017年8月13日号、2017.8

納富信留、「憂える改革、大学の危機」、コンラート・パウル・リースマン著『反教養の理論』、『読売新聞』2017年8月20日号、2017.8

納富信留、「哲学に特権性はないか」、植原亮著『自然主義入門』、『読売新聞』2017年9月3日号、2017.9

納富信留、轟孝夫著『ハイデガー『存在と時間』入門』、『読売新聞』2017年9月17日号、2017.9

納富信留、「西洋近代思想への警鐘」、佐藤和夫著『＜政治＞の危機とアーレント』、『読売新聞』2017年10月8日号、2017.10

納富信留、「持続可能な「農」を模索」、ポール・B・トンプソン著『<土>という精神 アメリカの環境倫理と農業』、『読売新聞』2017年10月15日号、2017.10

納富信留、「社会との関わり明らか」、島田裕巳著『日本の新宗教』、『読売新聞』2017年10月29日号、2017.10

納富信留、「書物の大河が訴える力」、添谷育志著『背教者の肖像』、『読売新聞』2017年11月5日号、2017.11

納富信留、「マイケル・ベンソン著『世界<宇宙誌>大図鑑』、『読売新聞』2017年11月19日号、2017.11

納富信留、「博搜的思索の到達点」、神崎繁著『内乱の政治哲学 忘却と制王』、『読売新聞』2017年11月26日号、2017.11

納富信留、「本当に悪者なのか?」、ジャン＝ノエル・ミサ、パスカル・ヌーヴェル編『ドーピングの哲学』、『読売新聞』2017年12月3日号、2017.12

納富信留、「不変の問いと向き合う」、飯田隆著『新哲学対話』、『読売新聞』2017年12月17日号、2017.12

納富信留、「2017年の3冊」(星野太『崇高の修辞学』、フランソワ・アルトール『オデュッセウスの記憶』、小島毅『儒教の歴史』)、「読書委員この一年」、『読売新聞』2016年12月25日号、2017.12

(4) 学会発表

国際、Noburu Notomi, “Imagination for philosophical exercise: the story of Gyges’ ring and the simile of the Sun”, New Perspectives on Plato’s Philosophy (Novas Perspectivas na Filosofia de Platão), UF ABC, São Bernardo do Campo, São Paulo, Brasil, 2016.6.30

国際、Noburu Notomi, “The soul and Forms in Plato’s *Phaedo*”, XI Symposium Platonicum, International Plato Society, Universidade de Brasília, Brasil, 2016.7.6

国際、Noburu Notomi, “The role of Plato in modern Japanese Philosophy”, The 3rd Conference on Contemporary Philosophy in East Asia (CCPEA 2016), Seoul National University, Seoul, Korea, 2016.8.20

国際、Noburu Notomi, “Imagination for Philosophical Exercise in Plato’s *Republic*: The Story of Gyges’ ring and the Simile of the Sun”, Ancient Worlds Research Cluster Meeting at Yale-NUS, Yale-NUS, Singapore, 2016.10.26

国内、納富信留、「始まりを問う哲学史—複眼的ギリシア哲学史への試み」、日本哲学会第76回大会、シンポジウム「哲学史研究の哲学的意義とはなにか?」、一橋大学国立キャンパス、2017.5.20

国内、納富信留、「伝プラトン著『第七書簡』の再検討—前四世紀の書簡文学から—」、日本西洋古典学会第68回大会、千葉商科大学、2017.6.4

国内、納富信留、「哲学とは何か」、哲学会第56回研究発表大会、東京大学本郷キャンパス、2017.10.28

国内、納富信留、「「ソロンよ、ソロンよ、君たちギリシア人はいつまでたっても子供だ」—古典期ギリシアから見たエジプト—」、第七回東京大学東洋文化研究所・復旦大学文史研究院・プリンストン大学東アジア学部共催国際学術会議「古代における「古代」」、東京大学本郷キャンパス東洋文化研究所、2017.12.16

国際、Noburu Notomi, “Mouvance?: An open tradition of Protagoras’ *On Gods*”, The International Protagoras Network Workshop, Université d’Aix-Marseille, Aix-En-Provence, France, 2018.3.19

(5) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究(B)、納富信留、Noburu Notomi、研究代表者、「古代ギリシア文明における超越と人間の価値—欧文総合研究—」、2016～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

納富信留、コメンテータ、日仏哲学会ワークショップ「ベルクソンの二元論を再考する」、持地秀紀「ベルクソン『創造的進化』における一と多」へのコメント、学習院大学目白キャンパス、2016.9.9

納富信留、講演、平成28年度第9回西田幾多郎哲学講座「ギリシアにおける哲学者の誕生」、西田幾多郎記念哲学館、石川県かほく市、2016.10.22

納富信留、講演、平成28年度第10回西田幾多郎哲学講座「日本人はギリシア哲学をどう読んできたのか」、西田幾多郎記念哲学館、石川県かほく市、2016.10.23

納富信留、講演「古代ギリシア哲学から問う起源(アルケー)」、第2回東京工業大学地球生命研究所(ELSI)・東京大学カブリ数理連携宇宙研究機構(Kavli IPMU)合同一般講演会「起源への問い」、東京大学本郷キャンパス伊藤謝恩ホール、2017.1.22

納富信留、模擬講義「プラトンの問いかけ」、東京大学オープンキャンパス2017、東京大学文学部、2017.8.3

納富信留、講演「伝プラトン『第七書簡』「脱線部」を読む」、第173回PHILETHセミナー、北海道大学文学研究科・文学部、哲学倫理学研究室、北海道大学古川講堂、2017.9.1

納富信留、講演「ギリシア哲学史の可能性」、第27回 新潟哲学思想セミナー (NiiPhiS)、新潟大学五十嵐キャンパス、2017.9.14

納富信留、講演「ギリシア哲学と宇宙」、アストロノミー・パブ、三鷹ネットワーク大学、2017.11.18

納富信留、講演「「善く生きる」を考える哲学」、シンポジウム2017「がんになっても安心して暮らすために～緩和ケアを理解しましょう」、NPO 法人 Spes Nova 主催、横浜市開港記念館講堂、2017.12.9

納富信留、模擬講義「ギリシア哲学への誘い」、模擬授業「学問の面白さを学ぶ」、東京都立小山台高等学校、2017.12.22

納富信留、研究会報告「タレスはなぜ哲学の創始者とされたのか？—イオニア自然学の起源をめぐって—」、慶應義塾大学言語文化研究所、公募研究プロジェクト「自然世界と人間」研究報告会、三田キャンパス東館、2018.2.24

(2) 学会

International Plato Society, Advisory Board, 2013.7-

日本学術会議・連携会員、2014.10-

日本西洋古典学会・委員 (2001.6-)、常任委員 (2016.6-)、編集委員 (2010.12-2016.12)

日本哲学会・評議員 (2011.6-) ; 理事 (2015.5-) ; 欧文誌編集委員長 (2016.5-2018.5)

新プラトン主義協会・理事 (2012.9-2016.9)

西日本哲学会・評議員 (2012.11-2016.11)

フィロロギカ [古典文献学研究会]・編集委員 (2005.10-)

ギリシア哲学セミナー・運営委員 (2005.9-)、幹事 (2015.9-)

The Korean Society of Greco-Roman Studies, Editorial Board (2008.8-)

Korean Philosophical Association, Editorial Board (2013.3-)

准教授 **鈴木 泉** SUZUKI, Izumi

1. 略歴

1986年3月 東京大学文学部哲学専修課程学士・文学士
1989年3月 東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士・文学修士
1990年10月 東京大学教養学部助手 (～1993年3月)
1993年4月 神戸大学文学部助教授 (～2006年3月)
2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

哲学、特に西欧近世哲学と現代フランス哲学

b 研究課題

<内在性の哲学>の体系化の作業として次の三つが現在の研究課題である。

1/西洋形而上学の形成史の探求とそれを背景とした<存在の一義性>の哲学の系譜学の作業。

2/現代フランスにおける差異哲学の検討。

3/非人間主義 (inhumanisme) の哲学の展開。

c 概要と自己評価

上記三つの研究課題をより具体的には次のように遂行している。

1/ドゥンス・スコトゥスからスピノザに至る中世後期から近世にかけての<存在の一義性>の系譜学の意義を、とりわけスピノザ哲学に焦点をあてて解明すること。

2/現代における<内在性の哲学>の範型=差異哲学としてのドゥルーズ哲学を解凍し、その意義を現代分析的形而上学や日本語の哲学と突き合わせながら展開すること。

3/限定された存在としての人間とは異なる他のありようへと変容していくことの可能性を肯定する思考としての非人間主義の哲学を、具体的な主題において展開すること。

この二年間においては、1に関して、とりわけスピノザ哲学の特異な位置づけを、ライプニッツ哲学との関連、ならびにその受容史をもとに解明する作業を行い、単著『スピノザ/ライプニッツ問題』として刊行する準備を集中的に進めてきた。ごく近い時期の脱稿を目指している。さらに、岩波書店から刊行予定の『スピノザ全集』編集委員として、全集刊行の準備を進め、幾つかの著作の翻訳を終え、2020年度の刊行に向けて、全体の最終的な調整を行っている段階である。また、2に関しドゥルーズとドゥルーズ&ガタリの思索に関する単著を刊行する準備を進めてきた。こちらに関しても2020年に公刊予定である。さらに、3に関しても単著『非人間主義の哲学』の刊行に向けての執筆を進めてきた。脱稿が遅れていることには不満が残るが、これまでの研究の集大成となる大部の著作の刊行を期したい。

d 主要業績

(1) 学会発表

国内、鈴木泉、「近世スコラ哲学の見取り図——スピノザ『形而上学的思想』を虚焦点として——」、スピノザ協会総会講演、東京大学、2017年7月15日

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、東京芸術大学、「哲学」、2016.4～2017.3

非常勤講師、学習院大学、「哲学演習」、2016.4～2017.3

(2) 学会

哲学会、理事長、2016.4～

日本哲学会、評議員、2017.5～

日仏哲学会、理事、2016.4～

スピノザ協会、運営委員、2016.4～

日本ライプニッツ協会、理事、2016.4～2018.3

05 倫理学

教授 熊野 純彦 KUMANO, Sumihiko

1. 略歴

1981年3月	東京大学文学部第1類（文化学類・倫理学専修）卒業（文学士）
1983年3月	東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻修士課程終了（文学修士）
1983年4月	東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻博士課程進学
1986年3月	東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻博士課程単位取得退学
1986年4月	跡見学園女子大学文学部非常勤講師 ～1989年3月
1987年4月	日本学術振興会特別研究員 ～1989年3月
1989年4月	専修大学文学部非常勤講師 ～1990年3月
1990年4月	北海道大学文学部哲学科倫理学講座助教授
1995年4月	北海道大学文学部人文科学科倫理学講座助教授（学部改組による）
1996年10月	東北大学文学部哲学科倫理学講座助教授
1997年4月	東北大学文学部人文社会学科哲学講座助教授（学部改組による）
2000年4月	東北大学大学院文学研究科哲学講座助教授（大学院重点化による）
2000年10月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年10月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

倫理学原理論、近現代西欧倫理思想

b 研究課題

倫理学的諸概念の哲学的考察

c 概要と自己評価

主たる研究は、一方ではドイツ観念論から現代の現象学的・解釈学的哲学をはじめとする思想史的研究をふまえながら、倫理学的諸問題を「人のあいだ」に根ざし、「人のあいだ」にかかわる問題群として思考することである。この数年は、現在の共同的な生を枠づけている資本制の問題にあらためて関心をいだき、かつて発表した『マルクス 資本論の思考』に引きつづき、考察を継続している。

d 主要業績

(1) 著書

単著、熊野純彦、『カント 美と倫理とのほざまで』、講談社、2017.1

単著、熊野純彦、『マルクス 資本論の哲学』、岩波書店、2018.1

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本倫理学会、評議員、2016.4～2019.3

(2) 行政

国内、東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長・東京大学評議員、2016.3～2017.3

1. 略歴

1984年3月	お茶の水女子大学文教育学部哲学科 卒業（倫理学専攻）
1984年4月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程入学（倫理学専門課程）
1986年3月	同 修了
1986年4月	東京大学大学院人文科学研究科博士課程進学（倫理学専門課程）
1991年3月	同 単位取得退学
1991年4月	山口大学人文学部日本思想史学講座専任講師
1994年3月	東京大学大学院人文科学研究科において博士号（文学）を取得
1995年7月	山口大学人文学部日本思想史学助教授
1996年4月	お茶の水女子大学文教育学部哲学助教授（倫理学専攻）
2007年4月	お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科准教授（比較社会文化学専攻思想文化学コース） （改組に伴う配置換え）
2011年1月	同 教授
2013年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

倫理学原理論・日本倫理思想史・比較思想

b 研究課題

日本思想の倫理的考察

c 概要と自己評価

倫理学の中心問題である「何をなすべきか」という行為に対する問いを、その基盤となる「人は何であるのか」「世界は何であるのか」という存在の問いにまで遡って考えることを目指す。研究方法としては、日本語で書かれたテキストの思想構造を解明することを通じて、その世界観、人間観を検討するとともに、背後にあるコンテキストも探る。具体的には、道元、法然、親鸞、日蓮、盤珪、白隠などの日本仏教の思想を中心として、日本思想を幅広く扱っている。特に、和辻哲郎の倫理学、倫理思想史の方法について検討し、「間柄の倫理学」には収まらない超越との関係という側面から、新たな日本倫理思想史の構築を目指す。なお、和辻倫理学の対抗軸として、現在、日本民俗学の諸思想家（柳田國男、折口信夫など）を検討中である。これまでの研究は、個別思想家についてを中心としてきたが、今後は、それらを踏まえて新たな日本倫理思想史の構築に関する研究の比重を増やす予定である。

d 主要業績

(1) 著書

単著、頼住光子、『さとりと日本人』、ふねうま舎、2017.2

共著、頼住光子、末木文美土、大谷栄一、『日本仏教を捉え直す』、放送大学教育振興会、2018.3

(2) 論文

Mitsuko YORIZUMI, “Some Aspects of Watsuji Tetsurō’s Ethics of Aidagara (Betweenness): On the Formation of His Ethics from the Viewpoint of His Ideas on Form and the Flow of Life”, 『倫理学紀要』、第23輯、pp.1-14、2016.3

頼住光子、「比較思想の方法論に関する一考察」、『比較思想研究』、第42号、pp.68-73、2016.3

頼住光子、「和について」、『東アジアの共通善 一和・通・仁の現代的再創造をめざして―』、pp.65-78、2017.3

頼住光子、「日本思想における「和」―「和を以て貴しとなす」と「敬静寂」をてがかりにして」、『東アジアの共通善 一和・通・仁の現代的再創造をめざして―』、pp.79-93、2017.3

頼住光子、「日本における仏教と儒教との関係についての一考察」、『倫理学紀要』、第24輯、pp.176-225、2017.3

頼住光子、「和辻哲郎の思想根基：「型態」與「流動」」、『日本倫理観與儒家傳統』東亜儒學研究叢書25、pp.205-233、2017.4

頼住光子、「道元における「さとり」の世界とその表現 『正法眼藏』「梅華」巻註解の試み」、『倫理学紀要』、第25輯、pp.134-183、2018.3

(3) 書評

伊東俊太郎、「インドにおける「精神革命」——ゴータマ・ブッダを中心として」、『比較思想研究』、第42号、pp.146-147、2016.3

藤田正勝、『思想間の対話 東アジアにおける哲学受容と展開』、『比較思想研究』、第42号、pp.149-150、2016.3

河波昌、『真茶——茶道における人間形成』、『比較思想研究』、第42号、pp.156-157、2016.3

(4) 学会発表

国内、頼住光子、『『正法眼蔵』「摩訶般若波羅蜜」巻について』、曹洞宗遊行会、2016.2.19

国際、頼住光子、「日本的儒教與佛教關係」（日本における儒教と仏教の關係について）、灣大學人文社會高等研究院 東亞視域中的儒佛論證與會通 國際學術研討會、2016.4.27

国内、頼住光子、「鈴木大拙の人と思想～禅と浄土」、道心会、善光寺大本願、2016.6.25

国内、頼住光子、「道元の仏性思想」、曹洞宗遊行会第27回布教研修会、長泉寺、2016.8.29

国内、頼住光子、『『正法眼蔵』「現成公案」巻の思想』、曹洞宗福岡宗務所研修会、曹洞宗福岡宗務所、2017.3.1

国内、頼住光子、「日本思想における「和」について」、天台宗埼玉教区・布教師会主催研修会、喜多院齋靈殿、2017.3.14

国内、頼住光子、『『正法眼蔵』「現成公案」巻の思想』、京都大学「道元の思想圏」研究会、京都大学、2017.3.27

国内、頼住光子、「「和」の思想について」、道心会、善光寺大本願、2017.6.24

国内、頼住光子、「真理を求めた女性たち——仏教と女性」、企画展開連イベント、女性研究者対談『研究者としてのキャリア』、石川県西田幾多郎記念哲学館、2017.7.2

国際、頼住光子、「日本における比較の方法について」、「全球化下的日本哲学：從東亞到世界」國際學術研討會、臺灣師範大學、2017.7.29

国内、頼住光子、『『正法眼蔵』現成公案の思想』、北信越管区教化センター布教研修会、大本山総持寺祖院、2017.9.27

国内、頼住光子、『『正法眼蔵』における修証の思想』、北信越管区教化センター布教研修会、大本山総持寺祖院、2017.9.27

国内、頼住光子、『『正法眼蔵』の世界——『正法眼蔵』「梅華」巻を読む——』、川崎市市民アカデミー、2017.11.13

(5) 会議主催(チェア他)

国内、「日本倫理学会共通課題シンポジウム」、チェア、早稲田大学、2016.10.2

国内、「倫理想史研究会」、主催、東京大学文学部、2017.3.30

国際、「日本神話における主体性」(科研費基盤研究B 家族・経済・超越)研究会、主催、東京大学文学部、2017.10.22

(6) 教科書

『改訂版 現代の倫理』、頼住光子、編集委員、山川出版社、2017

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、朝日カルチャーセンター新宿教室、「聖徳太子の仏教思想」、2016.7

特別講演、足立区生涯学習センター放送大学連携講座、「日本文化と仏教」、2017.1

特別講演、朝日カルチャーセンター新宿教室、「宮澤賢治と仏教思想」、2017.2

非常勤講師、上智大学、「仏教思想」、2017.4～

非常勤講師、慶応大学、「日本思想1, 2」、2017.4～

セミナー、次世代経営リーダー研修、「道元から見る日本の思想」、2017.8

特別講演、朝日カルチャーセンター新宿教室、「運慶と鎌倉仏教」、2017.11

(2) 学会

国内、日本倫理学会、評議員、2016.4～2019.3、常任評議員、2017.4～2019.3

国内、日本思想史学会、総務委員、2016.4～2018.3

国内、比較思想学会、理事、総務委員、学術雑誌編集委員長代理、2016.4～2017.3、会長、2017.4～2018.3

国内、日本仏教総合研究学会、評議員、2016.4～2017.3、理事、2017.4～2018.3

国内、実存思想協会、編集委員、理事、2016.4～2018.3

(3) 行政

文部科学省、教育政策、科学官、2016.4～2020.3

(4) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

教育機関、九州大学、外部評価委員、2017.10～2018.3

06 宗教学宗教史学

教授 鶴岡 賀雄 TSURUOKA, Yoshio

1. 略歴

- 1976年3月 東京大学文学部宗教学・宗教史学科卒業
- 1979年3月 東京大学大学院人文科学研究科宗教学・宗教史学専門課程修士課程修了
- 1980年10月 パリ第IV大学歴史学部留学（フランス政府給費留学生）（～1981年9月）
- 1982年3月 東京大学大学院人文科学研究科宗教学・宗教史学専門課程博士課程単位取得退学
- 1982年4月 日本学術振興会奨励研究員（～1983年3月）
- 1984年4月 東京大学文学部助手
- 1985年4月 工学院大学工学部専任講師
- 1987年4月 工学院大学工学部助教授
- 1996年4月 工学院大学工学部教授
- 1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 2001年10月 東京大学より博士（文学）の学位取得
- 2002年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授
- 2018年3月 定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

宗教学、西洋宗教思想

b 研究課題

- (1) 近世西欧（とくにスペインとフランス）における神秘思想の研究。中世後期から現代にいたる西欧の宗教思想の展開という文脈の中で、「神秘家」とされる人々の宗教思想の内実と意義を解明する。
- (2) 「神秘思想・神秘主義」概念の形成史、とりわけ近現代（19世紀末～20世紀の西欧と日本）における左記概念の形成過程およびその意義についての研究。
- (3) 19～20世紀に誕生した「宗教学」の学問論的性格、宗教史思想上の意義、および現代的可能性についての研究。

c 概要と自己評価

- (1) 16～17世紀のスペイン神秘主義についての従来の研究をまとめた総合的研究書を完成させたいが、著作としての具体的かたちを与える作業がなお停滞している。最も詳細に研究してきたアビラのテレジアや、十字架のヨハネの宗教思想にかんしては、その現代的意義を探る論考群を執筆すべく、さらに論述を深める必要がある。
- (2) 「神秘主義」概念について、古代から現代にいたるその概念史、および現代的可能性についての総合的著述を企図しており、大凡の見通しは得られたものの、今後、とりわけ近世スペイン神秘主義がこの概念形成に際して果たした役割について、精査する必要がある。
- (3) 「宗教学」という学問的場の性格については、一定の見解を得るにいたった。そうした「宗教学」を経由した上で、「神」「超越」「神秘」といった宗教哲学的語彙について新たな語り方を産み出すことが今後の課題である。

d 主要業績

(1) 著書

編著、鶴岡賀雄、『清水正之・桑原直己・釘宮明美』、オリエンツ宗教研究所、2017.7

(2) 論文

鶴岡賀雄、「呪術の魅力——「永遠のオルタナティブ」の来歴と可能性についての試論——」、江川純一・久保田浩編『「呪術」の呪縛 下』、『リトン』、9-39頁、2017.3

鶴岡賀雄、「「霊的苦しみ」の問題から「悪」の問いへ——「霊的暴力」論のために」、『身心変容技法研究』、7号、40-45頁、2017.3

鶴岡賀雄、「「神秘主義」概念の歴史と現状」、『東京大学史学年報』、37号、2017.3

鶴岡賀雄、「西方神秘思想史における十字架のヨハネの位置と意義」、『中世思想研究』、59号、2017.9

鶴岡賀雄、「スペイン神秘主義における神化思想——十字架のヨハネとアビラのテレサ——」、田島照久・阿部善彦編『テオーシス』、『教友社』、498-524 頁、2018.2

鶴岡賀雄、「近代日本の大学における宗教研究の特徴——制度論的観点から——」、『宗教研究』、91 巻別冊、19-25 頁、2018.3

鶴岡賀雄、「キリスト教神秘主義の身心変容」、鎌田東二編『身心変容のワザ～技法と伝承（身心変容技法シリーズ②）』、『サンガ』、51-100 頁、2018.3

(3) 学会発表

国内、鶴岡賀雄、「西方神秘思想史における十字架のヨハネの位置と意義」、中世哲学会、早稲田大学、2016.9.11

(4) 翻訳

共訳（改訳）、Evelyn Underhill, "Mysticism"、鶴岡賀雄・門脇由紀子・今野喜和人・村井文夫、『神秘主義』、ナチュラスピリット、2016.9

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、立教大学、「キリスト教入門」、2017.9～2018.3

教授 市川 裕 ICHIKAWA, Hiroshi

1. 略歴

1976年3月 東京大学法学部卒業（法学士）
1978年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（宗教学・宗教史学）
1982年7月 ヘブライ大学（エルサレム）人文学部タルムード学科特別生等（1985.7.）
1986年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学
1986年5月 筑波大学哲学・思想系文部技官（～1990.8.）同講師（～1991.3.）
1991年4月 東京大学文学部助教授
2004年4月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授 現在に至る
1998年10月～11月 ボストン大学人文学部客員研究員

2. 主な研究活動

a 専門分野

宗教史学・ユダヤ教

b 研究課題

継続して以下の3つの主要な課題に取り組み、成果は講義、講演、論文において主として反映させているが、とりわけ、2016年にイスラエルの発掘調査で、日本隊がイエス時代のシナゴグ遺構を発見したことにより、1番と2番に関係する課題が2017年に科学研究費の課題として採択されて、研究に弾みがついた。

- (1) 宗教的想像力の比較宗教学の構想：聖書とタルムードの宗教を基盤とするユダヤ教の宗教思想の特徴を、自由の精神の意義に重点を置いて宗教と法の基礎理論を構築し、これをモデルにして、他の古典的宗教との比較考察を行う。
- (2) イエス時代のユダヤ人社会に関する宗教史的研究：「旧約時代・中間時代・新約時代」という歴史分割をせずに、ヘレニズム・ローマの影響下における古代地中海世界の宗教として、ユダヤ宗教文化の特徴を把握する試みを行う。
- (3) 宗教学の観点から近現代を見直す作業：近代に遭遇したユダヤ教の葛藤と変容を研究の出発点として、近代の人間観、世界観を形成した啓蒙主義とロマン主義の今日的意義を考察し、現代世界の喫緊の課題の淵源とその解決のための枠組みを提示し、もって日本の近代の理念を再検討する。

c 概要と自己評価

- (1) 2015 (平成 27) 年 8 月に世界宗教史学会 (於エアフルト大学) で行ったパネル発表の主題「Change of Religious Consciousness under the Roman Empire: Animal Sacrifice and its Substitution」は、引き続き、重要な課題として研究を続けている。その主題は、古代末期のユダヤ教が周囲のギリシア・ローマ文化の影響の中で、どのようにして独自の宗教文化を構築していったかということ、宗教学的宗教史的に考察することである。この 2 年間では、主としてマイモニデスの著作を重点的に扱ってきたが、それは、ユダヤ教の宗教法体制が中世イスラム時代に確立を見る際に、古代のタルムード時代に関係を断ったギリシア思想がアラビア語に翻訳されてユダヤ社会に浸透するという事態に、ユダヤのラビたちがどういう知的環境に置かれて、どのように自らを構築したかを探究するためであった。そのために、2016 (平成 28) 年 12 月から 2017 年 1 月にかけて、カイロゲニザ文書の専門研究者 A・アシュル氏(Dr. Amir Ashur)を再度イスラエルから招聘し、この度は、正規の講義として開講できたことで、若手の研究者、院生、学部生に刺激を与えることができた。もちろん、一番刺激を受けたのは当の私であった。ゲニザ文書には、マイモニデスの自筆の資料さえ見出すことができるため、思想面ではなく、実生活における法判断の分野でのマイモニデスの姿が鮮明に浮き上がってくるのを感じている。
- (2) 平成 25 年度から 4 年間にわたる海外調査の為、科学研究費基盤研究 A「ユダヤ・イスラーム宗教共同体の起源と特性に関する文明史的研究」に基づいて調査を行った結果、最終年度の 2016 (平成 28) 年の 8 月に、ガリラヤ地方のテル・レヘシュで、西暦 1 世紀のシナゴーク遺構が発掘された。この発見に力を得て、翌年から、新たに科学研究費基盤研究 A「イスラエル国ガリラヤ地方の新出土シナゴーク資料に基づく一神教の宗教史再構築」を申請し、幸運にも採択されて、研究を継続した。本シナゴークの意義については、国内では、2017 年度の日本宗教学会、および、年度末の科研成果報告シンポジウムにおいて、詳細を発表することができた。本研究は引き続き、2018 年 7 月のヨーロッパ・ユダヤ学会クラクフ大会において研究発表を行うことが既に大会本部から承認されている。
- 市川科研 HP URL <http://www.lu-tokyo.ac.jp/ichikawakaken/index.html>
- (3) 近年、近代東欧のユダヤ教正統主義の思想について、私の中で関心が高まっており、特にユダヤ神秘主義カバラーと正統主義の関係を課題として取り組んでいる。これを後押ししてくれるのが、天理大学澤井義次教授の科研基盤研究 (B) と京都大学勝又直也准教授の科研基盤研究 (A) である。前者は井筒俊彦の東洋思想研究のプロジェクトで、後者は、現代的視点からユダヤ教文献の原典の意義を再考するプロジェクトであるが、様々な文化の中堅と若手の研究者との交流で大いに刺激を受けている。本研究課題においては、引き続き、イスラエルの専門研究者、ベングリオン大学教授の J・メイール (Prof. Jonatan Meir) 氏との研究交流で大いに啓発されている。2015 年度に招聘した際に、手ほどきを受けたヴォロジンのラビ・ハイムムの著作の講義は、その後、執筆中の論文で大いに生かされている。

d 主要業績

(1) 論文

Hiroshi Ichikawa, 「Prospects of Japanese Translation of the Babylonian Talmud」、『ParDeS 23, JewBus, Jewish Hindus & Other Jewish Encounters with East Asian Religions (Universitätsverlag Potsdam 2017)』, no. 23, 183-198 頁, 2017

Hiroshi Ichikawa, 「Talmudic Discussion in Japanese: On the Possibility of Cultural Innovation」、『Judaism and Japanese Culture: Studies in Honor of Joel Hoffmann, The 9th CISMOR Annual Conference on Jewish Studies, November 27,28 ,2016,』, 162-173 頁, 2017

市川裕, 「ユダヤ人」, 『學燈 特集 「捨てる」を巡って』, 丸善 Vol.114, no.3, 6-9 頁, 2017

市川裕, 「ユダヤ教の経済観念—正しい道理の富—」, 『宗教研究』, 389 号, 27-51 頁, 2017.9

市川裕, 「ユダヤ教徒は十戒をどう読んだか」, 『月刊 福音宣教 2017.12』, オリエンズ宗教研究所, 24-30 頁, 2017.12

市川裕, 「イスラエル、ガリラヤ地方の新出土シナゴークの宗教史的意義」, 『宗教研究』, 2018.3

(2) 書評

G・シュテンベルガー, 『ユダヤ教—歴史・信仰・文化—』, 教文館, 『ユダヤ・イスラエル研究 (日本ユダヤ学会)』, 第 30 号, 78-80 頁, 2016

勝又悦子・勝又直也, 『生きるユダヤ教』, 教文館, 『ユダヤ・イスラエル研究 (日本ユダヤ学会)』, 第 31 号, 2017

(3) 学会発表

国内、市川裕, パネルタイトル「唯一神教の世界宗教史再考」、自分の発表テーマ「唯一神教の二つの流れとその源流」、第 75 回日本宗教学会学術大会、早稲田大学、2016.9.11

国際、Hiroshi Ichikawa, 「Talmudic Discussion in Japanese: On the Possibility of Cultural Innovation」、Judaism and Japanese Culture: Studies in Honor of Joel Hoffmann, The 9th CISMOR Annual Conference on Jewish Studies, November 27,28 ,2016, Doshisha University, Kyoto, Japan, 2016.11.28

- 国内、市川裕、「アメリカ合衆国における東欧ユダヤ教の伝統」、日本ソール・ペロー協会、学術大会公開講演会、関西外国語大学、2017.9.9
- 国内、市川裕、「イスラエル、ガリラヤ地方の新出土シナゴグの宗教史的意義」、第76回日本宗教学会学術大会、東京大学、2017.9.16
- 国内、市川裕、「ユダヤ教の法と伝承—タルムードはなにを議論しているのか」、日本オリエント学会、学術大会公開講演会、東京大学文学部1番大教室、2017.11.28

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 非常勤講師、聖心女子大学、「キリスト教学特講IV」、2016.4～2018.3
- 非常勤講師、東京藝術大学、「宗教学」、2016.7～9、2017.7～12
- 兼任講師、立教大学大学院、「古代イスラエル史」、2016.1～3、2016.9～2017.3、2017.9～12
- 非常勤講師、京都大学、「宗教学」、2017.9～

(2) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

- 三菱財団、人文科学部門評価委員、2016.1～2018.9
- ラボ国際交流センター、評議員、2016.1～2017.12
- 日本宗教学会、常務理事 2016.1～2017.12
- 日本聖書学研究所、役員 2016.1～2017.12
- 日本ユダヤ学会、理事長 2016.1～2017.12
- 京都ユダヤ思想学会、日本オリエント学会、日本法哲学会 2016.1～2017.12 会員

教授 **池澤 優** IKEZAWA, Masaru

1. 略歴

- 1982年3月 東京大学文学部I類宗教学宗教学史学専門課程卒業
- 1982年4月 東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教学史学専攻修士課程入学
- 1984年3月 東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教学史学専攻修士課程修了
- 1984年4月 東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教学史学専攻博士課程進学
- 1987年9月 プリティッシュ・コロンビア大学アジア学科大学院博士課程(カナダ・ヴァンクーバー)入学
- 1990年8月 東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教学史学専攻博士課程退学
- 1990年8月 筑波大学地域研究研究科文部技官、哲学思想学系準研究員就任
- 1993年4月 筑波大学地域研究研究科(哲学思想学系)助手昇進
- 1994年5月 プリティッシュ・コロンビア大学アジア学科大学院博士課程修了
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系大学院宗教学宗教学史学研究室助教授転任
- 2007年4月 同准教授(名称変更)
- 2009年4月 同教授
- 2011年4月 東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター長(兼任)

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国古代宗教研究、祖先崇拜研究、死生学研究、生命倫理研究、応用倫理研究

死者にかかわる思想、表象、儀礼を比較文化的視点から考察することを中心的な目的とし、その目的の下に具体的な研究テーマを以下のように設定する。(A)「死者性」という概念(我々が死者をどのような存在として認識しているのか、また我々が死者とどのような関係を持っているのか、死者に対するイメージと記憶)をキーワードとし

て、宗教・世俗の枠を越えた死生学を構築することを目指した上で、具体的研究対象として、(B)古代中国における死ならびに死者に対する観念と儀礼の背後にある宗教的宇宙観と救済論、歴史を明らかにすること、(C)現代の生命倫理をめぐる言説の中に、死と死者に関わる考え方がどのように反映しているかを明らかにすること、という二つを設定し、その上で(D)伝統的な宗教的な価値観や感覚が、宗教という形態をとらずに現代社会に浸透している様を考えることを目指している。

b 研究課題

具体的な研究課題は以下のように区分できる。

まず、「死者性」概念に基づく死生学研究（上記(A)）にかかわる分野として

- (1) 死生学の研究史とその理論構築、および死生学の比較文化論的研究。
- (2) 祖先崇拜の理論研究ならびに比較文化的研究。

次に、中国古代における死ならびに死者に関する研究（上記(B)）にかかわる分野として

- (3) 殷・周・春秋時代の出土文字資料（甲骨・金文）を用いた中国古代宗教研究。
- (4) 戦国・秦・漢時代の出土文字資料（簡牘・帛書）を用いた中国古代宗教研究。
- (5) 戦国・秦・漢時代の儒家の「孝」文献に関する研究。
- (6) 戦国・秦・漢時代の儒家文献を用いた葬送儀礼、祖先祭祀研究。
- (7) 漢代の墓葬文書（告地策・鎮墓文・画像石・墓碑）に関する研究。
- (8) 殷周～隋唐時代における「死者性」の変化をあとづける宗教史学的研究。

現代の生命倫理に関する研究（上記(C)）として

- (9) 生命倫理言説の文化性に関する研究。
- (10) 現代中国における生命倫理・医療倫理言説に関する研究。
- (11) 伝統的中国医学（漢方）の医療倫理に関する研究。

伝統的価値観の現代における浸透の研究（上記(D)）として

- (12) 応用倫理という領域に宗教が与えている影響に関する研究。

c 概要と自己評価

この内、(2)(3)(5)は2001年度発刊の著書の中で系統的に見解を述べることができた。(1)(4)(6)(7)(8)(9)(10)についても、既に相当程度、体系的に研究を発表してきている。現在では(1)(9)(10)(12)が最も関心を持っている分野になっている。一方、(11)は未だに萌芽的な研究にとどまっており、なかなか進展していない。中国の生命倫理、医療倫理に関する専門家は日本には殆どいないのが現状であり、その研究の意味は大きいと考えるので、その分野の研究に積極的に取り組んでいきたい。

d 主要業績

(1) 論文

「井筒『東洋哲学』の現代的意義—兼ねて郭店『老子』と『太一生水』を論ず」、澤井義次・鎌田繁編『井筒俊彦の東洋哲学』、慶應義塾大学出版会、2018年9月15日、259-290頁

「中国文化における生命倫理」、『東洋学術研究』第57巻第1号、2018年5月29日、88-116頁

「日本の死生学と台湾・中国の生死学—宗教との関係を中心に」、『死生学・応用倫理研究』第23号、2018年3月15日、41-70頁

「北京大学藏秦牘「秦原有死者」考釋」、谷中信一編『中国出土資料の多角的研究』、研文書院、2018年3月16日、281-309頁

「死生学とは何か—過去に学び、現在に向き合い、未来を展望する」、清水哲郎・会田薫子編『医療・介護のための死生学入門』、東京大学出版会、2017年8月25日、1-30頁

池澤優、「儒教のお葬式」、『仏教文化』第54号、2016年3月20日、東京大学仏教青年会、45-66頁

池澤優、「文化的差異の視点から死生学を考える」、『死生学・応用倫理研究』第21号、東京大学大学院人文社会系研究科、2016年3月15日、84-100頁

(2) 教科書

東京大学生命科学教科書編纂委員会『現代生命科学』、羊土社、2015年3月15日。(担当：第11章「生命倫理はどこに向かいつつあるのか」、155-166頁)

(3) 書評

書評「K. E. Brashier, Ancestral Memory in Early China (古代中国における祖先の記憶)」、Public Memory in Early China (古代中国における公共の記憶)」、『中国出土資料研究』第20号、2016年7月2日、176-196頁

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

國學院大學非常勤講師、2004.4～

(2) 学会

日本生命倫理学会、評議員。日本宗教学会、理事。中國出土資料學會、理事。東方学会、評議員。

(3) 行政

東京大学医学部付属病院治験審査委員会委員。東京大学医学部臨床試験審査委員会委員。

東京大学医学部付属病院法的脳死判定委員会委員。東京大学生命科学ネットワーク運営委員会、幹事会委員。

教授 藤原 聖子 FUJIWARA, Satoko

1. 略歴

1986年3月 東京大学文学部宗教学宗教史学専門課程 卒業
1986年4月 東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻修士課程 入学
1988年3月 東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻修士課程 修了
1988年4月 東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻博士課程 進学
1991年9月 シカゴ大学大学院ディヴィニティ・スクール宗教史専攻留学 (至1994年6月)
1995年12月 東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻博士課程単位取得退学
1996年1月 日本学術振興会特別研究員 (至1998年12月)
2001年4月 大正大学文学部国際文化学科助教授
2006年4月 大正大学文学部表現文化学科教授
2010年4月 大正大学文学部人文学科教授
2011年4月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野准教授
2017年4月 同教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

宗教学 (理論研究・比較研究)、宗教と教育の関係、アメリカの宗教

宗教学の基礎でありながら、20世紀後半以降、方法として成立し難くなった「比較」に注目し、その観点から、理論研究を行うとともに、ケーススタディとして宗教と教育の関係や欧米の諸宗教を分析している。

b 研究課題

宗教比較の方法、宗教史の記述について、学界ならびに一般社会に見られる問題とその背景・原因を洗い出し、具体的対案を提示することを課題とする。個々の課題設定は以下の通りである。

- (1) 比較理論の検討として、①欧米宗教学の変遷、②宗教分類概念の問題、③宗教に対する代替概念の問題をとりあげる。
- ①「比較宗教学 comparative religion」から出発した欧米の宗教学とその基礎前提が、その後通時的・実証的研究を重視することによってどのように変化してきたかを調べる。人文的宗教学と社会科学的宗教学の制度的位置関係についても、その歴史的変遷過程を明らかにする。
- ②「世界宗教」「民族宗教」の対概念をはじめ、宗教学で伝統的に用いられてきた宗教分類概念の妥当性を、昨今の批判理論に照らして検討する。
- ③2000年代以降の宗教現象を分析するために、ポスト・セキュラー論・概念がしばしば用いられるようになったが、それは日本の現状をとらえるのにどこまで有効かを検討する。
- (2) 近現代社会の公教育において宗教がどう扱われてきたかに関する歴史的研究を行う。

ある国の公教育では宗教が排除される、他の国では宗教が取り込まれるという現象を、単に「宗教教育の有無」や「政教分離の有無」として見るのではなく、排除・吸収どちらの場合でもその前提として公権力により「宗教」が定義されているということに注目し、各国の教育制度と法令・教科書の中にその表れを探る。一般概念としての「宗教」のみならず、キリスト教、仏教といった各宗教に関する記述と、教育方法・思想や当該国の宗教・社会情勢の関係を調べる。対象国はイギリスとアメリカを中心とする。

- (3) (2)の研究成果を踏まえ、国内の公教育における宗教の描き方・教え方に関する問題点を指摘し、改善のための具体的方策を示す。対象は中等教育から高等教育、社会人教育を含む。

c 概要と自己評価

上記の(1)(2)(3)の課題にはほぼ同時進行で取り組み、全てに関して書籍ないし論文によりまとめた成果を発表した(d参照)。(1)の①②については論文集と国際ジャーナルに2本の英語論文を寄稿した。また、20世紀の比較宗教研究の代名詞であった、宗教現象学の受容と変容について10カ国の研究者の協力を得て調査を進めた。③についてはゲストエディターとして国際ジャーナルで特集号を編集した。続けて、21世紀の宗教情勢を俯瞰するシリーズ(4巻)の編集に携わった。(2)の宗教と公教育のテーマについては国際学会での口頭発表の他、イギリスの歴史と現状に関して単著を刊行した。その過程で、このテーマを信教の自由史に対する近年の学際的・国際的研究動向に結びつけ、意義を高めることができた。(3)については自らの実践を踏まえた英語論文を発表するほか、国際学会で口頭発表を行った。この間、国際宗教学宗教史学会(IAHR)、国際哲学人文学会議(CIPSH/WHC)、日本学術会議の役職に就いたが、そこでの経験は、以上の研究課題に取り組む上で視野を広げることに繋がった。

d 主要業績

(1) 著書

単著、藤原聖子、『ポスト多文化主義教育が描く宗教—イギリス〈共同体の結束〉政策の功罪—』、岩波書店、2017.3

(2) 論文

Satoko Fujiwara, “‘Geertz vs Asad’ in RE Textbooks: A Comparison between England’s and Indonesia’s Textbooks,” *Religious Education in a Global-Local World*, ed. by Jenny Berglund, Yafa Shanneik and Brian Bocking, pp. 205-222, 2016.7

Satoko Fujiwara, “Introduction: Secularity and Post-Secularity in Japan: Japanese Scholars’ Responses,” *Journal of Religion in Japan*, vol. 5, pp. 1-18, 2016.10

Satoko Fujiwara, “The Reception of Otto and *Das Heilige* in Japan: in and outside the Phenomenology of Religion,” *Religion*, 47/4, pp.591-615, 2017.7

Satoko Fujiwara, “This Is not a Religion!: ‘The Treachery of the Images’ of Aum, Yasukuni and Al-Qaeda in Japanese Textbooks,” *Textbook Violence*, ed. by Bengt-Ove Andreassen, James R. Lewis and Suzanne Anett Thobro, pp.27-52, 2017.8

藤原聖子、「ユダヤ教」、アメリカ学会編『アメリカ文化事典』、246-247頁、2018.1

藤原聖子、「ニューエイジ・スピリチュアル」、アメリカ学会編『アメリカ文化事典』、226-227頁、2018.1

(3) 書評

リチャード・ガードナー／村上辰雄共編著、『宗教と宗教学のあいだ—新しい共同体への展望』、『宗教研究』、91/1、164-170頁、2017

(4) 学会発表

国内、藤原聖子、「「信教の自由」研究動向—普遍性・規範性への疑義—」、日本宗教学会、早稲田大学、2016.9.11

国際、Satoko Fujiwara, “‘Islamicized Buddhism’ in RE textbooks in England: How the Call for Community Cohesion Has Affected RE” *American Academy of Religion*, San Antonio, 2016.11.19

国際、Satoko Fujiwara, “Study-of-Religion-Based Religion Education Worldwide” *South and South East Asian Association for the Study of Culture and Religion*, Vietnam Buddhist Research Institute, Ho Chi Minh City, 2017.7.10

国際、Satoko Fujiwara, “How Religion Is Taught Differently in Different Countries” *World Humanities Conference*, Liege, Belgium, 2017.8.8

国内、藤原聖子、「歴史のなかの大学と宗教研究」、司会、日本宗教学会、東京大学、2017.9.15

国内、藤原聖子、「Reconsidering Religious Studies in Modern Japan in Light of the Institutionalization of Universities」、司会、日本宗教学会、東京大学、2017.9.16

(5) 会議主催(チェア他)

国際、World Humanities Conference、実行委員、Liege, Belgium、2017.8.6~2017.8.12

国内、「Round table discussion II: “The impact of the Social Sciences and the Humanities”」、司会、The Impact of the Humanities and Social Sciences. Discussing Germany and Japan、Deutsche Forschungsgemeinschaft (DFG)、東京ドイツ文化会館、2017.11.14

(6) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 B、藤原聖子、研究代表者、「宗教現象学の歴史的変遷と地域性に関する包括的研究」、2016.4～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、大正大学、2011.9～2017.8

(2) 学会

国内、日本宗教学会、理事

日本宗教学研究諸学会連合、幹事、2014.12～

国際、World Humanities Conference (CIPSH/UNESCO)、Core Group Member、2016.1～2017.8

国際、International Association for the History of Religions、Publications Officer、2015.8～、Acting Secretary General、2017.7～

国際、American Academy of Religion、steering committee member of the program unit, Religion and Public Schools:

International Perspective Group、2015.11～

学術誌編集委員

British Journal of Religious Education (2006～)

Numen (2010～)

Religion and Education (2011～)

Journal of Religion in Japan (2012～)

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

独立行政法人、サイエンスアゴラ (科学技術振興機構)、審査委員、2017.4～

日本学術会議、第一部会員、2014.10～、第一部幹事、2016.10～、第一部副部長、2017.10～

准教授 西村 明 NISHIMURA, Akira

1. 略歴

1997年3月 東京大学文学部思想文化学科宗教学宗教史学専修課程 卒業
1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野修士課程 入学
1999年3月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野修士課程 修了
1999年4月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野博士課程 進学
2001年4月 日本学術振興会特別研究員 DC2 (東京大学、至2003年3月)
2002年3月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野博士課程
単位取得退学
2003年4月 日本学術振興会特別研究員 PD (九州大学、至2004年3月)
2004年4月 鹿児島大学法文学部人文学科助教授
2007年4月 鹿児島大学法文学部人文学科准教授
2012年9月 ハワイ大学マノア校歴史学科客員研究員・米国国務省東西センター太平洋諸島開発プログラム
客員研究員 (フルブライト奨学金研究員プログラム、至2013年2月)
2013年4月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

宗教史学・宗教人類学・宗教民俗学・慰霊・死者儀礼の継承、日本と太平洋域の宗教文化
主な研究活動は大きく以下の3つのテーマ群についてである。

(A)戦争や災害による犠牲者に対する態度、(B)現代の地域社会における宗教生活と日常生活の関係性、(C)島嶼と半島におけるダイナミックな人的交流と宗教接触

b 研究課題

具体的な研究課題は以下のとおりである。

(1) 「(A) 戦争や災害による犠牲者に対する態度」に関わる研究

遺骨収集・戦地慰霊において、遺族や戦友といった戦死者を取り巻く直接的関係者ばかりではなく、宗教者・旅行者・行政といった第三者がどのように関与するかをめぐる問題と、次世代へどのように継承されようとしているかをめぐる問題について調査・考察を行っている。その際、日本人による遺骨収集や戦地慰霊の状況と米豪や太平洋諸島の状況との国際比較、次世代継承に関する宗教体験の伝承や宗教組織の継承などとの比較、戦地慰霊に関する聖地巡礼との比較を行っている。

(2) 「(B)近現代の地域社会における宗教生活と日常生活の関係性」に関わる研究

九州をおもなフィールドとして、近現代の地域社会のなかで人びとがどのような信仰実践や宗教的行為を行ったかについて、そうした実践を支える日常生活とともに調査・考察している。とりわけ、民俗社会を基盤とした地域が、戦争や公害、自然災害などの歴史的経験からのレジリエンス（回復力）をどのように発揮しているかということについて、博士論文で取り上げた長崎の原爆慰霊を視野に入れながら考察しようとしている。

(3) 「(C) 島嶼と半島におけるダイナミックな人的交流と宗教接触」に関わる研究

奄美群島とマイクロネシア地域を主な対象としながら、大航海時代以降のヨーロッパ人のグローバルな移動に端を発する人的な交流の活発化のなかで宗教的接触状況が地域の宗教性のあり方にどのような影響を及ぼしているのかについて比較宗教的な理解を目指している。

c 概要と自己評価

(1)は博士論文の研究課題の延長上にあるものだが、対象地域の拡大と継承という宗教学的テーマへの深化を図りつつある状況である。2010～12年度に代表を務めた科研費基盤研究と、2012年度に滞在したハワイ大学での研究によって研究内容も研究ネットワークもさらなる展望が開けつつある。2018年度中に単著としてまとめる予定である。

(2)(3)はさまざまな研究プロジェクトへの関わりから徐々に輪郭が浮かびつつある、ポスト博士論文の研究テーマであるが、現状としては単発のモノグラフや翻訳の作業にとどまっている。しかし将来的には九州を窓口としてアジア・太平洋域を視野に入れた日本宗教史の構想につながる研究であるという認識で進めている。

d 主要業績

(1) 論文

財部めぐみ・西村明、「奄美の宗教について—島の精神的動態」、高宮広土・河合溪・桑原季雄編『鹿児島島の島々—文化と社会・産業・自然』、南方新社、31-41頁、2016

Akira Nishimura, “Are Public Commemorations in Contemporary Japan Post-secular?,” *Journal of Religion in Japan*, vol.5, pp.136-152, 2016

西村明、「呪術としてのキリスト教受容—マイクロネシア・ポンペイ島を中心に」、江川純一・久保田浩編『宗教史学論叢 20 「呪術」の呪縛』リトン、379-401頁、2017

西村明、「シズメとフルイのアップデート」、『戦争社会学研究』1、65-72頁、2017

西村明、「空襲の記憶とポスト戦後」、『戦争社会学研究』1、149-157頁、2017

(2) 書評

赤澤史朗、『靖国神社—「殉国」と「平和」をめぐる戦後史』、岩波書店、解説「分断と二分法を超える想像力」担当、355-367頁、2017.7

(3) 学会発表

国内、西村明、「神代在住Oターン郷土誌家をめざして」、「パブリック・ヒストリー構築のための歴史実践に関する基礎的研究」第4回研究会、雲仙市神代小路まちなみ交流館、2017.7.8

国内、西村明、「近現代における追悼と政教分離」、政教分離の会学習会、日本キリスト教団深川教会、2017.11.11

国内、西村明、基調講演「いま、東アジアで戦争と宗教を考えるということ」、第2回東アジア宗教研究フォーラム 関西大学千里山キャンパス、2018.2.24

海外、Akira Nishimura, “The Two Sources of the Postwar Commemorations for the War Dead in Japan” Exploring War, Memory and Religion: The Cases of Hiroshima and Nagasaki, シカゴ大学神学部（米国）2018.3.13

(4) 翻訳

共訳、キース・L・カマチョ『戦禍を記念する—グアム・サイパンの歴史と記憶』、西村明・町泰樹、岩波書店、320頁、2016.9

(5) 共同研究(産学連携除く)

国内、参画、京都大学人文科学研究所、「日本宗教史像の再構築」、2014～2017

国内、参画、国立民族学博物館、「宗教人類学の再創造—滲出する宗教性と現代社会」、2013～2016

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、駒澤大学、「宗教学研究」、2014.4～

招待講義、Akira Nishimura, “Non-denominational Deities for the Lasting Peace?: Reconsidering the Religious Representations in the Public War Commemoration in Postwar Japan,” オークランド大学 (ニュージーランド)、2017.3.13

招待講義、Akira Nishimura, “Residual Religiosity in Public Cenotaphs: Reconsidering the Separation of Church and State in Postwar Japan,” 南カリフォルニア大学 (米国)、2017.3.27

(2) 学会

国内、日本宗教学会、評議員、2013.9～、編集委員、2013.9～、理事、2016.9～、男女共同参画・若手支援ワーキンググループ委員長、2017.7～、庶務委員、2017.10～

国内、戦争社会学研究会、運営委員、2014.3～、編集委員長、2016.4～2018.4、会長、2018.4～

国内、現代民俗学会、一般会員、2014.7～

国内、「宗教と社会」学会、常任委員、2009.6～2011.6、2013.6～2015.6、会長、2015.6～2017.6

国内、西日本宗教学会、運営委員、2010.7～、編集委員、2012.3～2015.3

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

公益財団法人国際宗教研究所、国際宗教研究所ニューズレター編集委員、2015～、評議員、2017～
宗教文化教育推進センター、運営委員、2017～

07 美学芸術学

教授 渡辺 裕 WATANABE, Hiroshi

1. 略歴

1972年3月	千葉県立千葉高校卒業
1977年3月	東京大学文学部第1類（美学芸術学専修課程）卒業
1980年3月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程（美学芸術学）修了
1983年7月	東京大学大学院人文科学研究科博士課程（美学芸術学）単位取得退学
1983年7月	東京大学文学部助手（美学芸術学）
1986年4月	玉川大学文学部専任講師（芸術学科）
1991年4月	玉川大学文学部助教授
1992年4月	大阪大学文学部助教授（音楽学）
1996年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授（美学芸術学）
2001年7月	博士（文学）学位取得（東京大学）
2002年1月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

聴覚文化論、音楽社会史

b 研究課題

1. 音の文化の伝承、受容、流用にかかわるプロセスとメカニズムの歴史研究による解明。これまで、音楽を「文化」として捉えるという観点から、西洋芸術音楽の「近代化」とテクノロジー、西洋芸術音楽における演奏伝統の形成とその伝承メカニズム、日本近代の音楽文化におけるメディアや言説といったテーマでの研究を進めてきたが、最近では「音楽」という枠をこえて、「音楽」以外の音も含めた様々な音が形作る「音の文化」の研究を軸に、「感性文化」という観点から、人々の形作ってきた歴史を描き直す試みを行っている。
2. 「聴覚文化」という観点からの日本戦後史の再検討。上記の問題意識をふまえた一種の応用問題として、現在は「1968年」を中心とした日本戦後史を「感性文化」の変化の歴史として捉え直す研究に取り組んでいる。「1968年」は近年、戦後史の転換点となった年として注目されているが、この前後の時期は、政治的な意味での転換点にとどまらず、人々の感性のあり方や志向が大きく変化した時期でもあったのではないだろうか。そのような問題意識をふまえつつ、同時代のドキュメンタリー音源、ドキュメンタリー映像やそれに関わる様々な言説などを主要な題材として、その変化についての分析を進めている。
3. 場所の表象、記憶の生成・変容のメカニズムやそれに関わる多様な文化的コンテクストの相互作用の解明および芸術作品や感性的体験がその過程で果たす役割の考察。作品体験と現実の都市の表象とを媒介する場としての文学散歩、映画のロケ地巡りといった営みの考察、廃墟趣味や路上観察の見直し等の試みを起点に、主に写真や映像による表象の分析を通して、様々な立場や観点がぶつかり合い、また離合集散しつつ変容してゆく場としての文化のありようを捉えることを目指している。

c 概要と自己評価

上記研究課題の2にあたる日本戦後史研究の成果を、2017年4月に『感性文化論—〈終わり〉と〈はじまり〉の戦後昭和史』として上梓することができた。2013年度から2016年度まで行ってきた共同研究（科学研究費基盤研究(B)（「聴覚文化・視覚文化の歴史からみた『1968年』：日本戦後史再考」、課題番号25284036、研究代表者：渡辺裕）の中で私自身が進めてきた仕事を中心に、新たな知見として提示し得たことで、とりあえずほっとしている。今回まとめたものを出発点に、感性文化論的な枠組みで文化史全体を見直すというより大きなプロジェクトとして、今後さらに本格的に展開してゆくことが必要だと考えている。現在は上記の3に関するこれまでの研究を単行本にまとめ、2019年初頭に刊行すべく、準備を進めている。2019年3月をもって定年退職する予定であるが、本学在職時の研究の主要なものについては、これで一通り活字化を終えることができる見通しである。

d 主要業績

(1) 著書

『感性文化論—〈終わり〉と〈はじまり〉の戦後昭和史』, 春秋社, 2017.4, 352p.

(2) 論文

「『文学散歩』と都市の記憶—本郷・無縁坂をめぐる言説史研究」, 『美学芸術学研究』第35号, 東京大学美学芸術学研究室, 2017.3, pp.125-156

(3) 小論

「『グローバル化』以前の国際化—1964年東京オリンピック再論」, 『アステイオン』第84号, CCCメディアハウス, 2016.5, pp.148-151

「変容する感性のなかで—首都高速道路の景観をめぐる言説史」, 『土木学会誌』101巻10号, 土木学会, 2016.10, pp.12-15

「『はじまりの歴史』と『終わりの歴史』」, 『アステイオン』第85号, CCCメディアハウス, 2016.11, pp.220-223

「偽物の効用—『震災遺構』保存問題の周辺から」, 『アステイオン』第86号, CCCメディアハウス, 2017.5, pp.188-191

「『聴覚文化』の光と影」, 『アステイオン』第87号, CCCメディアハウス, 2017.11, pp.154-157

(4) 書評・解説等

「校歌に刻み込まれた歴史と伝統」, 『史料室だより』第86号, 東洋英和女学院史料室委員会, pp.7-8

「文化資源学の『キモ』」(特集:文化資源学と私), 『文化資源学』第15号, 文化資源学会, 2017.6, pp.116-117

「おお友よ, この言葉ではなく……—第九と日本語」, ベートーヴェン「第九」演奏会プログラム, NHK交響楽団, 2017.12

「ジョナサン・スターン(中川克志他訳)『聞こえる過去—音響再生産の文化的起源』, 谷口文和他著『音響メディア史』」(書評), 『音楽学』第63巻2号, 日本音楽学会, 2018.3, pp.145-149

(5) 学会発表・講演等

“Music Copyright as a Cultural Fiction: Reconsidering “Contrafacta” of Western Melodies in Pre-war Japan,” The 20th Congress of the International Musicological Society (IMS2017), 2017年3月23日, 東京藝術大学

「文化問題としての『著作権』—『発車メロディ問題』の事例からの問題提起」, シンポジウム「いま, 著作権問題を考える」, 日本音楽学会第68回全国大会, 2017年10月29日, 大阪教育大学

3. 主な社会活動

(1) 非常勤講師

お茶の水女子大学生生活科学部, 2016年4月~2017年3月

山口大学文学部, 2016年4月~2017年3月

(2) 学会

日本音楽学会, 会長, 2016年4月~

美学会, 委員, 2016年4月~

文化資源学会, 会員, 2016年4月~

(3) 学外組織(学協会, 省庁を除く)委員・役員

サントリー文化財団, サントリー学芸賞選考委員, 2016年4月~

第20回国際音楽学会東京大会(IMS2017)組織委員会, 委員長, 2016年4月~

明治学院大学図書館付属遠山一行記念日本近代音楽館, 収書委員, 2016年4月~

1. 略歴

- 1977年3月 東京教育大学附属高等学校卒業
1977年4月 東京大学教養学部文科3類入学
1981年3月 東京大学文学部第一類（美学芸術学専修課程）卒業
1981年4月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）修士課程入学
1984年3月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）修士課程修了
1984年4月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）博士課程進学
1988年9月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）博士課程単位取得退学
（その間 1987年10月～1988年9月 DAAD（ドイツ学術交流会）奨学生としてハンブルク大学に留学）
1992年10月 東京大学大学院人文科学研究科において博士（文学）取得
1988年10月 神戸大学助教授，文学部（哲学科芸術学専攻課程）
（その間 1990年10月～1991年8月 ハンブルク大学で研究）
1993年10月～ 神戸大学大学院文化学（博士課程）兼任
1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科（美学芸術学専門課程）助教授
2007年4月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）教授
（その間 2008年10月～2009年9月 ドイツ連邦政府の招聘によりドイツにて研究）

2. 主な研究活動

a 専門分野

美学・芸術学の基本概念の研究、「感性の学」としての美学の歴史的再構成、18世紀から19世紀にかけてのドイツ語圏を中心とする美学理論の研究、20世紀前半におけるドイツと日本の美学交渉史の研究、および間文化的視点からの美学理論の構築

b 研究課題

第一に、2001年に公刊した『芸術の逆説——近代美学の成立』以来の研究の一環として、美学・芸術学の基本概念の研究に従事している。その一端は2009年に公刊した『西洋美学史』（東京大学出版会）において示した。この書物は、学説史研究の持ちうる現代的な意味を問う試みでもあり、この研究をその後も継続して行っている。

第二に、「感性の学」としての美学を歴史的に再構成し、現代の美学を刷新する作業に携わっている。これは数年後に『西洋美学史』第二巻として結実するはずのものである。この2年間はとりわけカントとヘルダーに即してこの主題を検討した。

第一、第二の研究課題とも関連するが、第三に、近代美学を基礎づけた書物と一般に見なされているカント『判断力批判』への新たな接近の試みに基づく美学の教科書の公刊に向けて、準備を進めた。これは2、3年以内に完成させたいと考えている。

第四に、昨今の「間文化性」への関心の増大に応じつつ、19世紀末から20世紀前半における日本の西洋美学の受容を「間文化性」の問題として扱う可能性を探る作業を継続している。

c 概要と自己評価

上記四つの課題に関して、この2年間はとりわけ第三の課題に多くの時間を割いた。本来ならばこの作業により集中すべきとも思ったが、国内外からいくつかの共同研究の誘いを引き受けたため、第三の課題に関しては前半部をどうにか完成させるにとどまった。だが、共同研究の誘いは研究上の視野を広げる意味もあるため、今後も可能な限り引き受けたいと考えている。

d 主要業績

(1) 論文

小田部胤久、「「われわれは一つの思考する／永続的な共通感覚器官である」——ヘルダーの命題をめぐるカッシーラーとメルロ＝ポンティ——」、『美学芸術学研究』、33/34、181-200頁、2016.3

小田部胤久、「「生の技術」としての芸術——晩年のヘルダーの美学的思考の帰趨——」、『思想』、2016年5月号、36-54頁、2016.5

小田部胤久、『判断力批判』において ästhetisch とは何を意味するのか——ästhetisch に意識すること、ästhetisch な量評価、ästhetisch な理念をめぐる——、『カント研究』、17、37-46頁、2016.7

小田部胤久、「『美的生活』論争の射程」、『日本の哲学』、17、52-67 頁、2016.12

小田部胤久、「カント『判断力批判』における〈範例性〉をめぐって—paradigma/exemplar を巡る小史」、『美学芸術学研究』、35、157-205 頁、2017.3

Tanehisa Otabe、「Schoene Kunst als "Kunst zu leben". Zum aesthetischen Denken des spaeten Herder.」、『JTLA』、40/41、61-74 頁、2017.3

Tanehisa Otabe、「Intercultural decontextualization and recontextualization in the globalized era: with a special focus on the idea of the "Aesthetic Life" in modern Japan」、『Proceeding of ICA 2016』、2017.5

(2) 学会発表

国内、小田部胤久、「パリのイロクオイ人と孤島のロビンソン——カント美学と文明化の過程」、美学会東部会、2016.5.28

国際、Tanehisa Otabe、「The "Debate on the Aesthetic Life" in Late Meiji Japan: Intercultural Decontextualization and Recontextualization」、International Congress of Aesthetics、Seoul National University、2016.7.27

国際、Tanehisa Otabe、「An Iroquois in Paris and a Crusoe on a Desert Island: Kant's Aesthetics and the Process of Civilization」、ISECS、フィレンツェ大学、2016.8.26

国際、Tanehisa Otabe、「An Iroquois in Paris and a Crusoe on a Desert Island: Kant's Aesthetics and the Process of Civilization」、中華美学会、杭州大学、2016.10.19

国際、Tanehisa Otabe、「An Iroquois in Paris and a Crusoe on a Desert Island: Kant's Aesthetics and the Process of Civilization」、Culture Within Dialogue East-West - International Conference on Cross-Cultural Philosophy、2016.11.11

国際、Tanehisa Otabe、「Three Aspects of Being Aesthetic in Kant's CPJ: Becoming Aesthetically Conscious, Aesthetic Estimation of Magnitude, and Aesthetic Ideas」、Colloquium, Seoul National University、2017.5.18

国内、小田部胤久、「『判断力批判』における範例性をめぐって——範例的必然性と範例的独創性——」、新プラトン主義教会、2017.9.24

(3) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、小田部胤久、研究代表者、「『共通感覚』の美学（史的再定義）、2016～

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、美学会、会長、2016.4～2016.10

国内、日本シェリング協会、会長、2016.6～2018.3

国内、日本18世紀学会、代表幹事、2017.7～2018.3

国際、Culture and Dialogue、編集委員、2016.4～2018.3

国際、Allgemeine Zeitschrift fuer Philosophie、編集委員、2016.4～2016.9

国際、国際美学連盟、副事務局長、2016.7～2018.3

国際、国際18世紀学会、派遣委員、2016.4～2017.7

国際、国際シェリング協会、委員、2016.4～2018.3

国際、美學藝術學研究（韓国）、編集委員、2018.2～

(2) 学外組織 委員・役員

日本学術振興会特別研究員等審査会委員・専門委員、2016.4～2017.3

日本学術会議連携会員・哲学委員会幹事、2017.10～

NPO アートセラピー研究所 DAM 役員、2016.5～2018.3

1. 略歴

1983年3月	東京大学文学部美学芸術学専修課程卒業
1983年4月	同大学院総合文化研究科比較文学比較文化専門課程修士課程入学
1985年3月	同修士課程修了
1985年4月	同博士課程進学
1989年3月	同博士課程単位取得退学
1989年4月	和洋女子大学文家政学部英文学科専任講師
1994年4月	和洋女子大学文家政学部英文学科助教授
1998年4月	和洋女子大学人文学部国際社会学科助教授
2003年4月	和洋女子大学人文学部国際社会学科教授
2008年4月	和洋女子大学人文学群日本文学・文化学類教授
2015年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

分析哲学、美学

b 研究課題

フィクションの存在論の研究から出発し、虚構文の論理構造の解明から論理学の「可能世界」概念の応用へ、そして「可能世界」概念そのものの論理の研究へと進んだ。その過程で、自然科学の「多世界」「多宇宙」の概念と「可能世界」との関係の考察を迫られ、それらの概念に立脚した「人間原理」を方法的基盤とした諸議論の中で哲学問題を再構成する仕事を進めた。現在は、芸術の現状に対して人間原理的（進化論的）な説明を与え、見かけの法則性を観測選択効果へ還元する論理を追求している。

c 概要と自己評価

哲学問題を人間原理の観点から考察し直す仕事については、心の哲学、ロボット科学、人文死生学といった分野の研究者と研究会を重ねる中で、着実に思索が進みつつある。人間原理の観測選択効果の論理構造を多くの領域に見出す作業とともに、長年の研究テーマであるフィクション論の人間原理的再構成を進めつつある。それでも、いくつかの下位カテゴリについては試論的な論考を発表できており、現在、サブカルチャーにおける例外的な実験芸術的試み（具体的には、アニメにおけるコンセプチュアルアートの実験）の事例を分析することから、人間原理的フィクション論の端緒を掴みつつあるところである。

新しい研究課題として、分析哲学的美学の中で中心問題となっている「芸術の定義」を、広くカテゴリ論の中で捉えなおす仕事に着手した。そのケーススタディとして、上記アニメの実験的事例の中から、人間原理を直接扱ったアニメ作品『涼宮ハルヒの憂鬱』の特異な演出を、カテゴリ変換のもとで再解釈する仕事を上梓した。その延長上において、「カテゴリ違和」という概念装置を提唱し、コンセプチュアルアート（非芸術から芸術への越境）、死生学（生から死への越境）、トランスジェンダリズム（性別の越境）を成立させる必要十分条件の構造的対応を探る試みを進めている。2018年度中の予定としては、10月の美学会第69回全国大会、11月の質的心理学会第15回大会、および『哲学雑誌』第132巻第804号／第133巻第805号合冊の三箇所において、それぞれカテゴリ違和研究の暫定的成果を発表する。また、涼宮ハルヒ研究の続報を春秋社ウェブマガジンにて連載で発表してゆく形で、研究の恒常的な更新を図る。

なお、専門研究と並行してクリティカルシンキングの単行書を啓蒙目的で発信してきたが、2019年1月頃に、『心理パラドクス』（二見書房、2004年刊）の改訂版を文庫本（二見文庫）で出版する予定である。

d 主要業績

(1) 著書

単著、『論理パラドクス 論証力を磨く99問』二見文庫、246p、2016.9

外国語訳、『天才児のための論理思考入門』台湾版（中国語繁体字版）『如何教出有邏輯力的孩子』（人類智庫數位科技股份有限公司）余亮閻訳、169p、2017.1

単著、『改訂版 可能世界の哲学 「存在」と「自己」を考える』二見文庫、302p、2017.4

単著、『論理パラドクス・勝ち残り編 議論力を鍛える88問』二見文庫、254p、2017.11

共編著、渡辺恒夫、三浦俊彦、新山喜嗣 編『人文死生学宣言——私の死の謎』春秋社、(執筆箇所:「第7章 一人称の死——渡辺、重久、新山への批判」pp.189-219、「論理記号と条件付確率の式(ベイズの定理)について」pp.220-223)、2017.11

単著、『エンドレスエイトの驚愕——ハルヒ@人間原理を考える』春秋社、424p、2018.1

(2) 論文

三浦俊彦、「物語的理想化の諸相——数学と文学」『美学芸術学研究』、第33/34号、pp.201-49、2017.1

Toshihiko Miura, “The Narrative Fallacy of Probability” JTLA (Journal of the Faculty of Letters, The University of Tokyo, Aesthetics), Vol.40/41 (2015/16) pp.49-59、2017.4

三浦俊彦、「芸術の統一理論に向けた「再帰的定義」の可能性——C. L. スティーブンスンのモデルから」『美学芸術学研究』第35号、pp.207-22、2017.7

(3) 学会発表、講演記録

国内、三浦俊彦、「芸術の統一理論に向けた「再帰的定義」の可能性——C. L. スティーブンスンのモデルから——」第67回美学学会全国大会、同志社大学、2016.10.8

国内、三浦俊彦、「フィクションとシミュレーション」第124回(平成28年秋季)東京大学公開講座 東京大学本郷キャンパス、安田講堂、2016.10.29

国内、三浦俊彦、「文系の反論理・理系の非論理」第90回五月祭 公開講座、東京大学本郷キャンパス、2017.5.21

国際、Shoji Nagataki, Masayoshi Shibata, Tatsuya Kashiwabata, Takashi Hashimoto, Takeshi Konno, Hideki Ohira, Toshihiko Miura, Shinichi Kubota “Robot as Moral Agent: A Philosophical and Empirical Approach” 39th Annual Meeting of the Cognitive Science Society, Poster Session 3, Space 126, London、2017.7.29

国内、三浦俊彦、「偶然の論理学：可能世界と主観確率」朝日講座「〈偶然〉という回路」第3回 東京大学本郷キャンパス、2017.10.11

国内、三浦俊彦、「コンセプトチュアルアート視のための諸条件——「エンドレスエイト」の場合」(「作品の美学」哲学会第56回研究発表大会 倉田剛、貫成人と 東京大学本郷キャンパス)、2017.10.29

(4) その他

「偏態パズル」連載『総合文学ウェブ情報誌 文学金魚』、2016.4~2017.2 <http://gold-fish-press.com/archives/46299>

「文学金魚大学校セミナー ジャンルの越境」対談・遠藤徹と、日仏芸術文化協会 2016.6.18 (第1回 文学金魚大学校セミナー ①『わたしたちの小説作法』三浦俊彦&遠藤徹) <http://gold-fish-press.com/archives/40976> 2016.7.12

「個性と共生の哲学：ロボットと人間の共生社会へ向けて」哲学ディスカッションカフェ、橋本敬、久保田進一、柏端達也、大平英樹、柴田正良、小松孝徳、長滝祥司と MatchingHUBKANAZAWA、ANA クラウンプラザホテル 金沢、2016.11.1

「今年の執筆予定」『出版ニュース』2017年1月上・中旬号p.56、2017.1、2018年1月上・中旬号、p.44、2018.1

「神視界の人間の彩色 ベイズの定理」『現代思想』2017年3月臨時増刊号「総特集=知のトップランナー50人の美しいセオリー」pp.196-9、2017.2

「反戦という文化の営みかた」[巻頭言]『比較文学研究』第102号 pp.1-5、2017.2

「加藤流全体論——自分の駒も相手の駒もない」『ユリイカ』7月号 pp.136-145、2017.6

「思想は宇宙を目指せるか」(対談・稲葉振一郎と)『現代思想』7月号 pp.64-79、2017.6

『うんこ漢字ドリル』で考える悲しき“うんこ的”ミソジニー『サイゾー』9月号 pp.78-81、2017.8

「ループする時間」とアニメ作品の悲哀(鹿目凛と)『サイゾー』10月号 pp.120-7、2017.9

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本科学哲学会『科学哲学』、編集委員、2016.4~

国内、美学会、委員、2016.10 ~

国内、科学基礎論学会、応用哲学会、東大比較文学会、会員、2016.4~

08 心理学

教授 横澤 一彦 YOKOSAWA, Kazuhiko

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~yokosawa/index-j.html>

1. 略歴

- 1979年3月 東京工業大学工学部情報工学科卒
- 1981年3月 東京工業大学大学院総合理工学研究科電子システム専攻修士課程了
- 1981年4月 日本電信電話公社（現NTT）入社
- 1986年9月～1990年2月 ATR 視聴覚機構研究所（出向）
- 1990年9月 東京工業大学より工学博士号授与
- 1991年11月～1992年12月 東京大学生産技術研究所 客員助教授
- 1995年6月～1996年6月 南カリフォルニア大学 客員研究員
- 1998年10月 東京大学大学院人文社会系研究科 助教授
- 2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 教授
- 2009年12月～2010年3月 カリフォルニア大学バークレイ校 客員研究員
- 2010年4月～2011年3月 東京大学文学部 行動文化学科長
- 2013年4月～2014年3月 東京大学大学院人文社会系研究科 基礎文化研究専攻長
- 2014年4月～2015年3月 東京大学文学部 行動文化学科長
- 2017年4月～2018年3月 東京大学文学部 行動文化学科長

2. 主な研究活動

a 専門分野

統合的認知の心理学

b 研究課題

統合的認知について、認知心理学的研究を行っている。統合的認知とは、知覚された特徴がどのように記憶や言語や概念と関わりあって、認知に至るのかを解明しようとする広範囲の研究を指している。特に、視覚的注意やオブジェクト認知の問題を中心に研究している。さらに、感覚融合認知や共感覚に関する研究にも取り組んでおり、研究分野は視覚だけに限らず、扱っている研究課題は多岐に渡っている。

c 概要と自己評価

統合的認知に関する、多岐に渡る研究を行い、注意、オブジェクト認知、感覚融合認知の研究成果を学術国際誌に学術論文として発表することができた。特に、色嗜好に関する日米比較研究、色字共感覚に関する5カ国の比較研究は、国際共同研究の成果である。また岩波科学ライブラリーの1冊として、「つじつまを合わせたがる脳」を単著で出版した他、心理学以外の臨床神経科学、情報処理などの学会誌に依頼され、注意やラバーハンド錯覚などの最近の統合的認知研究の成果を中心に、概説を含めた論文を発表した。また、ドイツのチュービンゲン（2017年9月）や中国の北京（2017年12月）で開催された国際会議で招待講演を行い、幅広い注目を集めた。

d 主要業績

(1) 著書

単著、横澤一彦、『つじつまを合わせたがる脳』、岩波書店、2017.1

(2) 論文

K. Yokosawa, K. B. Schloss, M. Asano, & S. E. Palmer, 「Ecological Effects in Cross-Cultural Differences between US and Japanese Color Preferences」, 『Cognitive Science』, 40, 7, 1590-1616 頁, 2016

C. Ishiguro, K. Yokosawa, & T. Okada, 「Eye movements during art appreciation by students taking a photo creation course」, 『Frontiers in Psychology』, 7:1074, 2016

R. Nakashima, Y. Komori, E. Maeda, T. Yoshikawa, & K. Yokosawa, 「Temporal Characteristics of Radiologists' and Novices' Lesion Detection in Viewing Medical Images Presented Rapidly and Sequentially」, 『Frontiers in Psychology』, 7:1553, 2016

K. Nonose, R. Niimi, & K. Yokosawa, 「On the three-quarter view advantage of familiar object recognition」, 『Psychological Research』, 80, 6, 1030-1048 頁, 2016

- J. Nagai, K. Yokosawa, & M. Asano, 「Biases and regularities of grapheme-color associations in Japanese non-synesthetic population」, 『Quarterly Journal of Experimental Psychology』, 69, 1, 11-23 頁, 2016
- 横澤一彦, 「手と指の身体所有感とラバーハンド錯覚」, 『Clinical Neuroscience』, 35, 2, 186-188 頁, 2017
- 横澤一彦, 「注意とは何か」, 『Clinical Neuroscience』, 35, 8, 918-921 頁, 2017.
- 横澤一彦, 河原純一郎, 「気づきを生み出す人の注意—その基本図式—」, 『情報処理』, 58, 4, 282-286 頁, 2017
- R. Niimi, H. Shimada, & K. Yokosawa, 「Inhibition of Return Decays Rapidly When Familiar Objects Are Used」, 『Japanese Psychological Research』, 59, 2, 167-177 頁, 2017
- R. Nakashima & K. Yokosawa, 「To see dynamic change: Continuous focused attention facilitates change detection, but the effect persists briefly」, 『Visual Cognition』, 26, 1, 37-47 頁, 2018
- N. B. Root, R. Rouw, M. Asano, C.-Y. Kim, H. Melero, K. Yokosawa, & V. S. Ramachandran, 「Why is the synesthete's "A" red? Using a five-language dataset to disentangle the effects of shape, sound, semantics, and ordinality on inducer-concurrent relationships in grapheme-color synesthesia」, 『Cortex』, 99, 375-389 頁, 2018

(3) 受賞

国内、横澤一彦、日本認知科学会フェロー、日本認知科学会、2017.9.13

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本認知科学会、常任運営委員、2013.1～

(2) 行政

日本学術振興会「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業」事業委員会、委員、2017.6～

教授 **今水 寛** IMAMIZU, Hiroshi

1. 略歴

- | | |
|----------|--------------------------------------|
| 1987年3月 | 東京大学文学部第四類心理学専修課程 卒業 |
| 1987年4月 | 東京大学大学院人文科学研究科心理学修士課程 進学 |
| 1989年3月 | 東京大学大学院人文科学研究科心理学修士課程 修了 |
| 1989年4月 | 東京大学大学院人文科学研究科心理学博士課程 進学 |
| 1992年3月 | 東京大学大学院人文社会系研究科心理学博士課程 単位取得退学 |
| 1992年4月 | 国際電気通信基礎技術研究所 (ATR) 奨励研究員 |
| 1995年2月 | 東京大学大学院人文社会系研究科心理学博士課程 博士 (心理学) 取得 |
| 1996年10月 | 科学技術振興事業団・川人学習動態脳プロジェクト 計算心理グループリーダー |
| 2001年10月 | ATR 人間情報科学研究所 主任研究員 |
| 2002年4月 | 大阪大学大学院生命機能研究科 客員准教授 |
| 2003年5月 | ATR 脳情報研究所・認知神経科学研究室 室長 |
| 2008年8月 | 情報通信研究機構 バイオICT グループリーダー |
| 2010年4月 | ATR 認知機構研究所 所長 |
| 2011年4月 | 情報通信研究機構 脳情報通信融合研究室 副室長 |
| 2011年4月 | 大阪大学大学院生命機能研究科 客員教授 |
| 2015年9月 | 東京大学大学院人文社会系研究科 教授 |

2. 主な研究活動

a 専門分野

運動の学習と制御, 認知機能を支える脳のネットワーク解析

b 研究課題

人間は新たな生活環境に置かれたとき, さまざまなことを学習し, 行動パターンを変え, 環境に適応する. 自分の脳や身体もケガ・病気・加齢などで変化することがあり, そのような場合にも新たな学習・適応を迫られる. このような学習と適応のメカニズムを調べ, それに関わる脳の仕組みを解明するとともに, 学習や適応を支援する技術の開発を行う.

c 概要と自己評価

運動の学習と制御に関して, 運動前の脳活動から反応の速さを予測することに成功した. 具体的には, 人間の脳活動をミリ秒単位で計測できる脳磁図を用いて, すばやくスタートが切れる運動か, スタートが遅れてしまう運動かを, 運動前の脳活動からその都度ごとに予測できることを示した (Scientific Reports 誌に論文掲載). この研究は, 反応の遅れによる事故の防止や, 効率的なスポーツトレーニングの開発につながることを期待される. また, 人間は運動目標の幅の広さ(自由度)に応じて, 適切な運動制御方略を選択することを実験で明らかにし, 長年見過ごされて来た, 目標の自由度と制御方略の関係に光を当てた (Scientific Reports 誌に論文掲載).

言語・思考・意思決定などの認知機能は, 脳という巨大な情報ネットワークに支えられている. 脳のネットワークを読み解き, その機能を適切に維持することは, 認知機能を理解するために重要であるだけでなく, 加齢や脳疾患による認知機能の低下を防ぐことに役立つ. 脳のネットワークを読み解くことに関して, 自閉症を脳の回路から見分ける技術の開発に携わった (Nature Communications 誌に論文掲載). また, ネットワークを適切に維持することに関して, これまで開発してきた「結合ニューロフィードバック」という手法を進化させ, ネットワーク内の特定の結合を増加/減少させることに成功, これによって認知機能に変化することを示した (Cerebral Cortex 誌に論文掲載).

以上のように, 運動の制御と学習, 脳のネットワークという2つのテーマに関して, 基礎(脳の仕組みの解明)と応用(学習機能の支援)を織り交ぜながら研究を展開した. 民間企業との共同研究も積極的に進めた. 新学術領域「身体性システム」の計画研究として, 運動を基礎とする自己意識の解明に従事し, 学会・招待講演などで精力的に成果を発表・議論した. 東京大学の広報サイト UTokyo Research, 新学術領域の公開シンポジウム, リハビリテーション関係者向けの講習会を中心に, 研究成果を広く一般に伝えるアウトリーチ活動に努めた.

d 主要業績

(1) 著書

辞書・辞典・事典、今水寛、バイオメカニズム学会（編）「手の百科事典」II 機能編 第10章「運動学習・適応」
pp. 144-150、朝倉書店、2017.6

(2) 論文

Yahata, N., Morimoto, J., Hashimoto, R., Lisi, G., Shibata, K., Kawakubo, Y., Kuwabara, H., Kuroda, M., Yamada, T., Megumi, F., Imamizu, H., Nãñez, J.E. Sr., Takahashi, H., Okamoto, Y., Kasai, K., Kato, N., Sasaki, Y., Watanabe, T., and Kawato, M., 「A small number of abnormal brain connections predicts adult autism spectrum disorder」、『Nature Communications』、Vol. 7、e11254、2016.4

Ohata, R., Ogawa, K., and Imamizu, H., 「Single-trial prediction of reaction time variability from MEG brain activity」、『Scientific Reports』、Vol. 6、e27416、2016.6

Togo, S. and Imamizu, H., 「Anticipatory synergy adjustments reflect individual performance of feedforward force control」、Neuroscience Letters、Vol. 632、pp. 192-198、2016.10

Togo, S., Yoshioka, T. and Imamizu, H., 「Control strategy of hand movement depends on target redundancy」、『Scientific Reports』、Vol. 7、e45722、2017.3

Yamashita, A., Hayasaka, S., Kawato, M., and Imamizu, H., 「Connectivity neurofeedback training can differentially change functional connectivity and cognitive performance」、『Cerebral Cortex』、Vol. 27, No. 10、pp. 4960-4970、2017.8

Togo, S. and Imamizu, H., 「Empirical evaluation of voluntarily activatable muscle synergies」、『Frontiers in Computational Neuroscience』、11、e82、2017.9

(3) 学会発表

国内、今水寛、「記憶力トレーニングの結果を予測する：ゲームで認知機能は改善するか?」、東京大学大学院人文社会系研究科・文化交流茶話会、東京大学本郷キャンパス（文京区本郷）、2016.6.9

国内、今水寛、「認知・運動学習と脳のネットワーク」、第2回身体運動制御学とニューロリハビリテーション研究会、畿央大学（北葛城郡広陵町）、2016.7.30

- 国内、今水寛、「認知と運動の学習を支える脳のネットワーク」、第21回情動・社会行動と精神医学研究会、京都大学医学部芝蘭会館別館（京都市左京区吉田）、2016.12.16
- 国内、今水寛、「認知機能と脳のネットワーク」、北陸先端科学技術大学院大学情報科学系セミナー(第4回)、北陸先端科学技術大学院大学（石川県能美市旭台）、2017.1.27
- 国内、東郷俊太、今水寛、「個人のフィードフォワード制御能力を反映する多指間協調運動の先行調整」、第29回自律分散システム・シンポジウム、調布クレストンホテル（調布市小島町）、2017.1.30
- 国内、今水寛、「運動学習に関わる脳の仕組み」、Biomechanics and Neuroscience Integrative Perspective Conference 2017、長野赤十字病院（長野市若里）、2017.3.4
- 国内、東郷俊太、板橋貴史、橋本龍一郎、金井智恵子、加藤進昌、今水寛、「指先合力生成時における自閉症スペクトラム障害患者の特異的薬指依存」、第11回 Motor Control 研究会、中京大学名古屋キャンパス（名古屋市昭和区八事本町）、2017.8.24
- 国内、今水寛、「脳と人工物:適応と不安の脳内メカニズム」、人工物工学研究センター 第31回人工物工学コロキウム、東京大学柏の葉キャンパス駅前サテライト（千葉県柏市）、2018.1.6
- 国内、今泉修、今水寛、「行為と結果の連続における Intentional binding」、日本認知科学会・知覚と行動モデリング(P&P)研究会、筑波大学東京キャンパス（東京都文京区大塚）、2018.3.5

(4) 予稿・会議録

- 国内会議、東郷俊太、吉岡利福、今水寛、「タスクの冗長性に依存した手先運動の制御方策」、電子情報通信学会・ニューロコンピューティング研究会、玉川大学（東京都町田市）、2016.3.22
- 『信学技報』、vol. 115, no. 514, NC2015-94、143-148 頁、2016.3
- 国際会議、Ohata, R., Asai, T., Kadota, H., Shigemasa, H., Ogawa, K., and Imamizu, H., 「Decoding agency grounded within the sensorimotor system: self-other action representation in the sensorimotor and the parietal cortices」、The 1st International Symposium on Embodied-Brain Systems Science (EmboSS 2016)、Ito International Research Center, The University of Tokyo, Tokyo, Japan、2016.5.8
- 『Poster Proceedings』、3 頁、2016.5
- 国内会議、山下真寛、吉原雄二郎、橋本龍一郎、八幡憲明、市川奈穂、酒井雄希、松河理子、山田貴志、岡田剛、田中沙織、笠井清登、加藤進昌、岡本泰昌、ベン・シーモア、高橋英彦、川人光男、今水寛、「健常者と複数の精神疾患患者に共通する作業記憶の内在性機能的ネットワーク」、第39回日本神経科学大会、パシフィコ横浜（横浜市西区みなとみらい）、2016.7.20
- 『オンライン演題検索システム』、O2-G-44 頁、2016.7
- 国内会議、大畑龍、浅井智久、門田宏、繁榎博昭、小川健二、今水寛、「感覚運動システムに組み込まれた運動主体感のデコーディング」、第39回日本神経科学大会、パシフィコ横浜（横浜市西区みなとみらい）、2016.7.20
- 『オンライン演題検索システム』、P3-172、2016.7
- 国内会議、八幡憲明、リジ・ジュゼッペ、橋本龍一郎、森本淳、柴田和久、川久保友紀、桑原斉、黒田美保、山田貴志、福田めぐみ、今水寛、高橋英彦、岡本泰昌、笠井清登、加藤進昌、佐々木由香、渡邊武郎、川人光男、「安静時脳機能磁気共鳴画像を用いた複数精神疾患間のスペクトラム構造の探索研究」、第39回日本神経科学大会、パシフィコ横浜（横浜市西区みなとみらい）、2016.7.20
- 『オンライン演題検索システム』、P3-273、2016.7
- 国内会議、今水寛、「運動制御と身体意識」、第31回日本大脳基底核研究会・教育シンポジウム、秋田温泉さとみ（秋田市添川）、2016.7.24
- 『第31回日本大脳基底核研究会・抄録』、p. 22、2016.7
- 国際会議、Imamizu, H., 「Cerebellar internal models for dexterous use of tools」、The 31st International Congress of Psychology (ICP2016): Invited Symposium “The cognitive and neural bases of human tool use”、Pacifico Yokohama, Yokohama, Japan、2016.7.24
- 『The 31st International Congress of Psychology (ICP2016) Online Abstract』、S28-02-3、2016.7
- 国際会議、Imamizu, H., 「Temporal recalibration of motor and visual potentials in lag adaptation」、ATR Mini Symposium on Sensorimotor Control and Robotics、Keihanna Science City, Kyoto, Japan、2016.8.8
- 『Abstract for ATR Mini Symposium on Sensorimotor Control and Robotics』、p. 3、2016.8
- 国際会議、Imamizu, H., 「Change in brain activity during motor learning」、The 38th Annual International Conference of the IEEE Engineering in Medicine and Biology Society: Workshop “Embodied-Brain Systems Science and Neurorehabilitation”、Disney’s Contemporary Resort, Florida, U.S.A., 2016.8.16

- 国内会議、東郷俊太、今水寛、「随意的に独立活性可能な筋シナジーの実験による評価」、第10回 Motor Control 研究会、慶應義塾大学日吉キャンパス（横浜市港北区）、2016.9.1
『研究会プログラム』、93頁、2016.9
- 国際会議、Imamizu, H., 「Neural mechanisms underlying sense of agency」、4th mini-symposium on Cognition, Decision making and Social function、RIKEN Brain Science Institute (BSI), Wako-shi, Saitama, Japan、2016.10.25
『Symposium Program』、p. 4、2016.10
- 国内会議、今水寛、「運動学習と身体意識：脳活動計測からのアプローチ」、脳と情報シンポジウム2016、高知工科大学脳コミュニケーション研究センター（高知県香美市土佐山田町宮）、2016.11.2
『脳と情報シンポジウム2016プログラム』、p. 2、2016.11
- 国際会議、Yahata, N., Morimoto, J., Hashimoto, R., Lisi, G., Shibata, K., Kawakubo, Y., Kuwabara, H., Kuroda, M., Yamada, T., Megumi, F., Imamizu, H., Nández, J.E. Sr., Takahashi, H., Okamoto, Y., Kasai, K., Kato, N., Sasaki, Y., Watanabe, T., and Kawato, M., 「A small number of abnormal functional connections in the brain predicts adult autism spectrum disorder」、Society for Neuroscience 46th Annual Meeting (Neuroscience 2016)、San Diego、2016.11.12
『Program No. 120.22/D5 2016 Abstract Viewer/Itinerary Planner』、2016.11
- 国際会議、Yamashita, M., Yoshihara, Y., Hashimoto, R., Yahata, N., Ichikawa, N., Sakai, Y., Yamada, T., Matsuoka, N., Okada, G., Tanaka, S.C., Kasai, K., Kato, N., Okamoto, Y., Seymour, B., Takahashi, H., Kawato, M., and Imamizu, H., 「Transdiagnostic mapping from intrinsic functional network onto working memory ability」、Society for Neuroscience 46th Annual Meeting (Neuroscience 2016)、San Diego、2016.11.12
『Program No. 844.07/LLL18 2016 Abstract Viewer/Itinerary Planner』、2016.11
- 国際会議、Takai, A., Noda, T., Lisi, G., Teramae, T., Imamizu, H. and Morimoto, J., 「Learning arm movements instructed by a robotic system during motor imagery」、Society for Neuroscience 46th Annual Meeting (Neuroscience 2016)、San Diego、2016.11.12
『Program No. 157.12/QQ10 2016 Abstract Viewer/Itinerary Planner』、2016.11
- 国内会議、今水寛、「認知機能と脳のネットワーク」、日本心理学会「注意と認知」研究会・第15回合宿研究会・特別講演、ホテルサンルートプラザ名古屋（名古屋市中村区名駅）、2017.3.6
『Technical Report on Attention and Cognition』、No. 25、pp. 49-51、2017.2
- 国内会議、山下真寛、吉原雄二郎、橋本龍一郎、八幡憲明、市川奈穂、酒井雄希、山田貴志、松河理子、岡田剛、田中沙織、笠井清人、加藤進昌、岡本泰昌、Ben Seymour、高橋英彦、川人光男、今水寛、「複数精神疾患に渡って汎化する全脳結合作業記憶研究モデル」、第19回日本ヒト脳機能マッピング学会、京都大学百周年時計台記念館（京都市左京区吉田本町）、2017.3.9
『プログラム・講演抄録集』、p. 49、2017.3
- 国内会議、東郷俊太、今水寛、「随意活性可能な個々の筋シナジーの実験による評価」、電子情報通信学会・ニューロコンピューティング研究会、機械振興会館（港区芝公園）、2017.3.13
『信学技報』、vol. 116, no. 521、pp. 79-84、2017.3
- 国際会議、Ohata, R., Asai, T., Kadota, H., Shigemasa, H., Ogawa, K., and Imamizu, H., 「Decoding self-other action attribution in the sensorimotor and the parietal cortices」、Organization for Human Brain Mapping 2017 Annual Meeting (OHBM 2017)、Vancouver (Canada)、2017.6.25
『Abstract』、p. 1964、2017.6
- 国際会議、Imamizu, H., Cai, C., Asai, T., and Ohata, R., 「Brain mechanisms underlying self-other action attribution」、The 44th Naito Conference on Decision Making in the Brain --- Motivation, Prediction, and Learning、シャトレーゼ・ガトーキングダム・サッポロ（北海道札幌市北区）、2017.10.5
『Program Abstract for the 44th Naito Conference on Decision Making in the Brain』、p. 6、2017.10
- 国内会議、今水寛、「身体意識の解明と応用」、第2回身体性システム公開シンポジウム「モデルベースト・リハビリテーションの構築に向けて」、慶應義塾大学三田キャンパス・南校舎ホール（東京都港区三田）、2017.10.14
『第2回身体性システム公開シンポジウム抄録集』、p. 6、2017.10
- 国内会議、小林環、松本理器、下竹昭寛、十河正弥、高橋由紀、稲田拓、山尾幸広、菊池隆幸、荒川芳輝、吉田和道、池田昭夫、前田貴記、今水寛、宮本享、「運動主体感における島皮質の役割：島皮質切除症例での縦断的神経心理学的検討」、日本脳神経外科学会第76回学術総会、名古屋国際会議場（名古屋市熱田区熱田西町）、2017.10.14
『オンライン抄録集』、3P-P089-9、2017.10

- 国際会議、Yamashita, A., Yamada, T., Ichikawa, N., Takamura, M., Yoshihara, Y., Itahashi, T., Okada, G., Mano, H., Sakai, Y., Morimoto, J., Yahata, N., Hashimoto, R., Takahashi, H., Okamoto, Y., Kawato, M., and Imamizu, H., 「The site bias estimated from traveling-subject-data can improve a resting-state connectivity-based prediction model」、Society for Neuroscience 47th Annual Meeting (Neuroscience 2017)、Washington DC, U.S.A., 2017.11.11
『Abstract Viewer/Itinerary Planner』、Program No. 89.11/TT62、2017.11
- 国際会議、Yoshihara, Y., Asai, T., Yamashita, M., Yamada, T., Imamizu, H., Takahashi, H., and Kawato M., 「Functional connectivity-based neurofeedback for impaired working memory in schizophrenia」、Real-time Functional Imaging and Neurofeedback Conference (rtFIN2017)、Nara Kasugano International Forum “IRAKA”, Japan, 2017.11.29
『rtFIN2017 Poster Abstract』、p. 3、2017.11
- 国際会議、Asai, T. and Imamizu, H., 「Normal aging in resting-state brain networks: Toward a connectivity-neurofeedback for the declined metacognition in elderly people」、Real-time Functional Imaging and Neurofeedback Conference (rtFIN2017)、Nara Kasugano International Forum “IRAKA”, Japan, 2017.11.29
『rtFIN2017 Poster Abstract』、p. 8、2017.11
- 国際会議、Yahata, N., Morimoto, J., Hashimoto, R., Lisi, G., Shibata, K., Kawakubo, Y., Kuwabara, H., Kuroda, M., Yamada, T., Megumi, F., Imamizu, H., Nez Sr, J. E., Takahashi H., Okamoto, Y., Kasai, K., Kato, N., Sasaki, Y., Watanabe, T., and Kawato, M., 「A small number of abnormal functional connections in the brain predicts adult autism spectrum disorder」、Real-time Functional Imaging and Neurofeedback Conference (rtFIN2017)、Nara Kasugano International Forum “IRAKA”, Japan, 2017.11.29
『rtFIN2017 Poster Abstract』、p. 24、2017.11
- 国際会議、Yamashita, M., Kawato, M., and Imamizu, H., 「A prediction model of working memory based on whole-brain resting-state functional connectivity」、Real-time Functional Imaging and Neurofeedback Conference (rtFIN2017)、Nara Kasugano International Forum “IRAKA”, Japan, 2017.11.29
『rtFIN2017 Poster Abstract』、p. 32、2017.11
- 国際会議、Ohata, R., Asai, T., Kadota, H., Shigemasa, H., Ogawa, K., and Imamizu, H., 「Decoding self-other action attribution in the sensorimotor and the parietal cortices」、Real-time Functional Imaging and Neurofeedback Conference (rtFIN2017)、Nara Kasugano International Forum “IRAKA”, Japan, 2017.11.29
『rtFIN2017 Poster Abstract』、p. 64、2017.11
- 国際会議、Yamashita, A., Lisi, G., Ichikawa, N., Takamura, M., Yoshihara, Y., Itahashi, T., Yamada, T., Okada, G., Mano, H., Sakai, Y., Yamashita, O., Morimoto, J., Yahata, N., Hashimoto, R., Takahashi, H., Okamoto, Y., Kawato, M., and Imamizu, H., 「Quantitative comparing the magnitude of measurement bias and sampling bias on multi-site resting-state fMRI connectivity with the magnitude of the effects of psychiatric disorders by using traveling subject design」、Real-time Functional Imaging and Neurofeedback Conference (rtFIN2017)、Nara Kasugano International Forum “IRAKA”, Japan, 2017.11.29
『rtFIN2017 Poster Abstract』、p. 108、2017.11
- 国際会議、Takai, A., Noda, T., Lisi, G., Teramae, T., Imamizu, H., and Morimoto, J., 「The differences in motor performances between sensorimotor area activities of pre- and during passive guidance」、Real-time Functional Imaging and Neurofeedback Conference (rtFIN2017)、Nara Kasugano International Forum “IRAKA”, Japan, 2017.11.29
『rtFIN2017 Poster Abstract p. 126』、2017.11
- 国際会議、Chiyohara, S., Furukawa, J., Morimoto, J., and Imamizu, H., 「Proprioceptive Gain Affects Motor Learning」、Real-time Functional Imaging and Neurofeedback Conference (rtFIN2017)、Nara Kasugano International Forum “IRAKA”, Japan, 2017.11.29
『rtFIN2017 Poster Abstract』、p. 122、2017.11
- 国際会議、Tanaka, M., Asai, T., Imamizu, H., and Ohata, R., 「Sense of agency altered by cognitive intervention affects motor control」、Real-time Functional Imaging and Neurofeedback Conference (rtFIN2017)、Nara Kasugano International Forum “IRAKA”, Japan, 2017.11.29
『rtFIN2017 Poster Abstract』、p. 141、2017.11
- 国内会議、今水寛、「運動主体感の神経基盤を探る」、日本視覚学会 2018 年冬季大会・大会企画シンポジウム「身体意識の理解に向けて」、工学院大学新宿キャンパス（東京都新宿区）、2018.1.17
『VISION』、30 巻 1 号、p. 29、2018.1
- (5) 総説・総合報告
今水寛、「感覚—運動記憶のメカニズム: 脳機能画像からのアプローチ」、『計測と制御』、Vo. 56, No. 3、2017.3

3. 主な社会活動

(1) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

民間企業、NTT コミュニケーション科学基礎研究所、研究倫理委員会委員、2016.10～

(2) 学会

国内、日本心理学会、国際賞選考委員会委員、2015.11～2017.10

国内、日本脳科学関連学会連合、脳科学将来構想委員会委員、2016.10～

(3) 行政

省庁、日本学術会議、科学技術政策、連携会員、2017.10～

准教授 **村上 郁也**

MURAKAMI, Ikuya

1. 略歴

1991年3月	東京大学文学部第四類心理学専修課程 卒業
1991年4月	東京大学大学院人文科学研究科心理学修士課程 進学
1993年3月	東京大学大学院人文科学研究科心理学修士課程 修了
1993年4月	東京大学大学院人文科学研究科心理学博士課程 進学
1996年3月	東京大学大学院人文社会系研究科心理学博士課程 修了 博士(心理学)取得
1996年4月	岡崎国立共同研究機構生理学研究所 研究員(COEポスドク)
1997年4月	岡崎国立共同研究機構生理学研究所 研究員(日本学術振興会特別研究員PD)
1997年9月	米国ハーバード大学心理学部視覚科学研究所 研究員(日本学術振興会特別研究員PD)
1999年4月	NTT コミュニケーション科学基礎研究所 社員
2000年4月	NTT コミュニケーション科学基礎研究所 研究主任
2004年4月	NTT コミュニケーション科学基礎研究所 主任研究員
2005年4月	東京大学大学院総合文化研究科 助教授
2007年4月	東京大学大学院総合文化研究科 准教授
2013年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

知覚心理学、認知神経科学

b 研究課題

こころの時間長・同期・クロックを作り出す認知メカニズムの解明。視空間的な注意機能と認知発達、錯視の多面的研究—実験心理学・脳機能画像・数理解析・生物学的手法を用いて—。

c 概要と自己評価

知覚世界のどんなオブジェクトが他の何と比べていつ・どこにあるように思えるのか、という中での「いつ」に対応する、非常に基本的な視覚体験であるにもかかわらず、対象の「主観的現在」の心的・脳内表現や処理過程については未解明である。そこで、「こころの時間」の神経基盤解明の目標として、数秒以内の範囲をもつ「主観的現在」の心的表象と神経機構に関し、ヒトを対象とした知覚実験と非侵襲脳計測・刺激法で、視覚系を軸に置いた「主観的現在」の心的持続時間がどこでどうやって決まっているのか、感覚モダリティ内外で決まる知覚的時刻・時間軸同期はどのようになされるのか、心的時間を刻むクロックはどのような心的プロセスと相互影響し合うか、の原理を解明する。認知発達の研究では、心の理論、実行機能、見かけと実際の区別、記憶のされ方など、広範囲の認知能力が問題とされる。そこで、注意の範囲や向け方が視空間的課題遂行時にどのように変化するかを調べるため、成人を対象に検討する。近年錯視研究は急速な進歩を遂げており、錯視は珍しい現象というわけではなくなりつつある。それどころか、錯視のいくつかは恒常性、運動視、色覚、立体知覚など機能的なメカニズムそのものであったり、その不可避的な誤動作であ

ることが明らかになり、錯視は「普通の視覚のメカニズム」を明らかにする重要なツールとなりつつある。そこで、これまで得られた豊富な成果を基礎としてさらに錯視研究を発展・深化させることによって、錯視研究の成果が視覚のメカニズムの解明に直結する時代を先取りすることを目的とする。時間知覚研究、注意研究、錯視研究のいずれに関しても、高インパクトの国際専門誌への掲載などをはじめ順調な研究成果の出力をしており、おおむね順調に進展している。

d 主要業績

(1) 著書

共著、村上郁也、「VR/AR技術の開発動向と最新応用事例」第2章「ヒトの知覚特性とVRへの応用技術」第1節「錯覚からわかるヒト視覚情報処理メカニズム」、技術情報協会、2018.2

共著、村上郁也、「公認心理師の基礎と実践 2 心理学概論」第3章「感覚・知覚」、遠見書房、2018.3

(2) 論文

Osugi, T., Hayashi, D., & Murakami, I., 「Selection of new objects by onset capture and visual marking」、『Vision Research』、122、21-33 頁、2016.5

Murai, Y. & Murakami, I., 「The flash-lag effect and the flash-drag effect in the same display」、『Journal of Vision』、16(11):31、1-14 頁、2016.9

Hisakata, R., Hayashi, D., & Murakami, I., 「Motion-induced position shift in stereoscopic and dichoptic viewing」、『Journal of Vision』、16(13):3、1-13 頁、2016.10

Aoki, S., Kawano, A., Terao, M., & Murakami, I., 「Time dilation in a perceptually jittering dot pattern」、『Journal of Vision』、16(14):2、1-12 頁、2016.11

Osugi, T., Takeda, Y., & Murakami, I., 「Inhibition of return shortens perceived duration of a brief visual event」、『Vision Research』、128、39-44 頁、2016.11

Yamauchi, K., Osugi, T., & Murakami, I., 「Attentional capture to a singleton distractor degrades visual marking in visual search」、『Frontiers in Psychology: Perception Science』、8(801)、1-8 頁、2017.5

Honma, M., Murai, Y., Shima, S., Yotsumoto, Y., Kuroda, T., Futamura, A., Shiromaru, A., Murakami, I., & Kawamura, M., 「Spatial distortion related to time compression during spatiotemporal production in Parkinson's disease」、『Neuropsychologia』、102、61-69 頁、2017.6

Osugi, T., & Murakami, I., 「A drastic change in background degrades preview benefit」、『Frontiers in Psychology: Perception Science』、8(1252)、1-15 頁、2017.6

村上郁也、「主観的現在における知覚的持続時間の諸現象」、『BRAIN and NERVE』、69(11)、1187-1193 頁、2017.11

(3) 学会発表

国内、村上郁也、「固視微動・視野安定・視覚検出感度のメカニズム」、第2回視覚生理学基礎セミナー、相模原、2017.3.12

国内、村上郁也、「眼に入力された情報を動きに生かす～適切な時空間文脈による視覚機能の向上～」、第28回東京大学科学技術交流フォーラム、東京、2017.11.21

(4) 予稿・会議録

国際会議、Osugi, T., Takeda, Y., & Murakami, I., 「Brief visual events look briefer at locations suffering inhibition of return」、Vision Sciences Society, St. Petersburg, Florida, USA, 2016.5.16

国際会議、Murakami, I., Aoki, S., Kawano, A., & Terao, M., 「Time dilation in a jittering motion perceived in a stationary stimulus」、Vision Sciences Society, St. Petersburg, Florida, USA, 2016.5.17

国際会議、Osugi, T. & Murakami, I., 「Preview benefit survives 3D rotation if the configuration of old items remains constant」、International Congress of Psychology, Yokohama, 2016.7.26

国際会議、Inoue, T., Itoi, S., & Murakami, I., 「Perceptual rhythm changes in seeing continuous random dot patterns」、International Congress of Psychology, Yokohama, 2016.7.29

国際会議、Murakami, I., & Terao, M., & Osugi, T., 「Utility of prior exposure for perceivers, for searchers, and for researchers」、International Congress of Psychology, Yokohama, 2016.7.29

国内会議、村上郁也・青木竣祐・川野晟聖・寺尾将彦、「ジッター錯視観察時および固視微動様の揺れ刺激の観察時における時間過大視」、日本視覚学会、新潟、2016.8.17

国内会議、本間元康・村井祐基・島周平・四本裕子・黒田岳志・二村明德・四郎丸あずさ・村上郁也・河村満、「老化とパーキンソン病がリアルタイムな時空間処理に与える影響」、日本神経心理学会、熊本、2016.9.16

- 国際会議、Terao, M. & Murakami, I., 「Rapid visual feature integration over space and time in peripheral vision」、Time in Tokyo、Tokyo、2016.10.11
- 国際会議、Osugi, T., Takeda, Y. & Murakami, I., 「Inhibition of return shortens the perceived duration of a brief visual event」、Time in Tokyo、Tokyo、2016.10.11
- 国内会議、林大輔・大杉尚之・岩澤広樹・村上郁也、「運動刺激色への注意が持続時間の知覚に及ぼす影響」、日本視覚学会、東京、2017.1.18
- 国内会議、井上照沙・糸井章悟・村上郁也、「運動刺激のコヒーレンスガリズム知覚と持続時間知覚に与える影響」、日本視覚学会、東京、2017.1.19
- 国際会議、Hayashi, D., Iwasawa, H., Osugi, T., & Murakami, I., 「A superposition of moving and static stimuli appears to dilate in time when the moving stimulus is attended to」、Vision Sciences Society、St. Petersburg, Florida, USA、2017.5.20
- 国際会議、Inoue, T., & Murakami, I., 「Apparent motion of a coherent and continuously moving random-dot pattern appears slower in update rate」、Vision Sciences Society、St. Petersburg, Florida, USA、2017.5.22
- 国際会議、Saito, M., Miyamoto, K., Uchiyama, Y., & Murakami, I., 「Brightness reduction in parafoveal stimuli in the simultaneous presence of light inside the natural blind spot」、Vision Sciences Society、St. Petersburg, Florida, USA、2017.5.22
- 国内会議、齋藤真里菜・宮本健太郎・村上郁也、「Light inside the natural blind spot enhances pupillary light reflex and reduces the brightness of a stimulus outside the blind spot」、日本神経科学大会、横浜、2017.7.20
- 国際会議、Kaneko, S., Murakami, I., Kuriki, I., & Peterzell, D., 「Individual differences in simultaneous contrast for color and brightness: preliminary small-sample factor analyses reveal separate processes for short and long flashes, different hues and luminance polarities」、European Conference on Visual Perception、Berlin, Germany、2017.8.30
- 国際会議、Lavrenteva, S., & Murakami, I., 「Ebbinghaus illusion in stimuli defined by second-order information」、International Society for Psychophysics、Fukuoka, Japan、2017.10.23
- 国際会議、Nakada, H., Hayashi, D., & Murakami, I., 「Perceptual organization from visual positions distorted by motion signals in drifting Gabor patches」、International Society for Psychophysics、Fukuoka, Japan、2017.10.26
- 国内会議、金子沙永・村上郁也・栗木一郎・Peterzell, D., 「明るさ・色同時対比における個人データの相関パターンに基づく因子分析」、日本基礎心理学会、大阪、2017.12.3
- 国内会議、林隆介・村上郁也、「方位弁別と顔弁別における情報統合の時間差一タスク難易度の影響の検討」、日本視覚学会、新宿、2018.1.17
- 国内会議、Lavrenteva, S.・村上郁也、「コントラストと方位で定義された刺激におけるエビングハウス錯視」、日本視覚学会、新宿、2018.1.18
- 国内会議、仲田穂子・村上郁也、「運動方向の切り替えが視覚探索の探索効率に及ぼす効果」、日本視覚学会、新宿、2018.1.18
- (5) 会議主催(チェア他)
- 国際、「International Congress of Psychology」、その他、Yokohama、2016.7.24~2016.7.29
- 国内、「日本視覚学会」、チェア、2017.1.18~2017.1.20

3. 主な社会活動

- (1) 他機関での講義等
非常勤講師、東京女子大学、「知覚心理学B」、2016.9~2017.3
- (2) 学会
国内、日本視覚学会、幹事、2016.4~2018.3
国内、日本心理学会、代議員、2016.4~2018.3
国内、日本基礎心理学会、常務理事、2016.4~2018.3
国際、Frontiers in Psychology: Perception Science、Review Editor、2016.4~2018.3
- (3) 行政
省庁、日本学術会議、科学技術政策、連携会員、2016.4~2018.3

1. 略歴

2001年3月	東京大学教養学部生命・認知科学科 卒業
2001年4月	東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻修士課程 入学
2003年3月	東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻修士課程 修了
2003年4月	東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻博士課程 進学
2006年3月	東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻博士課程 修了 博士（学術）取得
2006年4月	東京大学大学院総合文化研究科 日本学術振興会特別研究員（PD）
2007年4月	東京大学総括プロジェクト機構ジェロントロジー寄付研究部門 日本学術振興会特別研究員（PD）
2006年9月	イリノイ大学アーバナ-シャンペーン校ベックマン研究所 客員研究員
2009年4月	名古屋大学大学院環境学研究科 講師
2012年10月	名古屋大学大学院環境学研究科 准教授
2017年4月	名古屋大学大学院情報学研究科 准教授
2017年9月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

実験心理学、認知心理学

b 研究課題

社会的認知とエイジングを主な研究課題としている。社会的認知とは人間の社会行動を支える心の働きの総称であり、他者の感情・思考や性格の推測、自己の行為のコストベネフィット評価や道徳性の判断、相手を信頼して協力するか否かの意思決定など、多様な心理過程が含まれる。一方、エイジングはagingのカタカナ表記で、「年をとること」である。「近頃、年のせいで…」というぼやきもあれば、「年の功」という言葉もあるように、心の働きには年齢とともに低下する側面も向上する側面もある。中でも社会的認知のエイジングについて検討することで、世代間の交流・理解を促進するヒントが得られないかと考えて研究を進めている。

c 概要と自己評価

人間が他者の信頼性について判断をする際には、その人物の顔、評判、実際の交流経験など、種々の情報源を活用する。そうした様々な情報源にもとづく他者の信頼性判断を検討する一連の実験を遂行し、人間の信頼性判断がどのような特徴をもち、その背後にどのようなメカニズムがあるかを明らかにすることを目指して研究を進めている。

最近、信頼性判断に影響する要因として、新たに“信念”に着目した研究をおこなっている。具体的には、信頼性に限らず顔からあらゆる特性を判断できるという全般的な信念（人相学的信念）が存在すると考え、この信念と顔にもとづく信頼性判断との関連を検討している。研究の結果、人相学的信念の存在が実証され、また、この信念が強い人ほど顔から極端な信頼性判断をおこなうことが明らかになった。本成果は既に国内外の学会で発表され、国際誌に論文も掲載されており、研究は順調に進んでいる。

d 主要業績

(1) 論文

鈴木敦命、「感情認知の心理・神経基盤：現在の理論および臨床的示唆」、『高次脳機能研究』、36(2)、271-275頁、2016

Suzuki, A., Ito, Y., Kiyama, S., Kunimi, M., Ohira, H., Kawaguchi, J., Tanabe, H.C., & Nakai, T., 「Involvement of the ventrolateral prefrontal cortex in learning others' bad reputations and indelible distrust」、『Frontiers in Human Neuroscience』、10、Article 28、2016.2

Suzuki, A., Tsukamoto, S., & Takahashi, Y., 「Faces tell everything in a just and biologically determined world」、『Social Psychological and Personality Science』、OnlineFirst、2017.10

(2) 学会発表

国内、鈴木敦命、「集団は個人の魅力を高めるか：顔集合の階層的符号化（シンポジウム SS-012 「アンサンブル知覚研究の最前線）」」、日本心理学会第81回大会、2017.9

国内、鈴木敦命、塚本早織、高橋雄介、「人相学的信念の背後にある素朴理論」、日本心理学会第81回大会、2017.9

- 国内、服部友里, 渡邊伸行, 鈴木敦命、「評定者と刺激の性別がチアリーダー効果に与える影響」、日本心理学会第81回大会、2017.9
- 国際、Hattori, Y., Watanabe, N., & Suzuki, A.、「Hierarchical encoding of faces may be accentuated for opposite-sex peers」、58th Annual Meeting of the Psychonomic Society、2017.11
- 国際、Suzuki, A., Ueno, M., Ishikawa, K., Kobayashi, A., Okubo, M., & Nakai, T.、「Brain activity in response to feedback on face-based trait inferences in older and younger adults」、The 23rd Annual Meeting of the Organization for Human Brain Mapping、2017.6
- 国際、Suzuki, A., Tsukamoto, S., & Takahashi, Y.、「Faces tell everything because people are biologically determined and live in a just world」、The 18th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology、2017.1
- 国際、Hattori, Y., Matsuo, A., & Suzuki, A.、「Males perceive females as more attractive when in a group rather than alone」、57th Annual Meeting of the Psychonomic Society、2016.5
- 国際、Suzuki, A., Tsukamoto, S., & Takahashi, Y.、「Comparison of physiognomic beliefs in Japan and the United States」、The 23rd Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology、2016.8
- 国際、Kiyama, S., Suzuki, A., Chen, S.-H. A., & Nakai, T.、「Training effect of speech articulation on older speakers as revealed by fMRI」、The 22nd Annual Meeting of Organization for Human Brain Mapping、2016.6
- 国際、Suzuki, A.、「Persistent face bias in older adults judging trustworthiness」、International Meeting of the Psychonomic Society 2016、2016.5
- 国際、Kiyama, S., Suzuki, A., Chen, S.-H. A., & Nakai, T.、「Plastic-adaptive changes after articulatory training in the elderly: An fMRI study」、The 24th Annual Meeting and Exhibition of the International Society for Magnetic Resonance in Medicine、2016.5

3. 主な社会活動

(1) 学会

- 国内、日本基礎心理学会、理事、2017.12～、『基礎心理学研究』編集委員、2015.3～、優秀論文選考委員、2017.4～2017.7
- 国内、日本感情心理学会、理事、2016.6～、『感情心理学研究』副編集委員長、2016.6～

09a 日本語日本文学（国語学）

教授 月本 雅幸 TSUKIMOTO, Masayuki

1. 略歴

- 1977年3月 東京大学文学部国語学専修課程卒業
- 1980年3月 東京大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
- 1981年3月 東京大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程退学
- 1981年4月 茨城大学人文学部専任講師（～1985年3月）
- 1985年4月 白百合女子大学文学部専任講師（～1987年3月）
- 1987年4月 白百合女子大学文学部助教授（～1992年3月）
- 1992年4月 東京大学文学部助教授（～1995年3月）
- 1995年3月 ドイツ連邦共和国ルール大学ボッフム交換助教授（～1996年1月）
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 2006年1月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（現在に至る）

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本語史

b 研究課題

漢文に日本語としての読みを記入した訓点資料の研究を課題としている。関心の中心は平安時代から鎌倉時代にかけての訓点にあり、学界未紹介の資料を公表し、また既に知られている資料も含め、その資料的性格を再検討して言語の特質や年代性を吟味することにより、国語史料としての訓点資料の新たな利用の方法を模索している。

c 概要と自己評価

この2年間、引き続き平安時代の古訓点資料のうち、真言宗関係のものを中心に考察を行った。特に「大日経疏」（大毘盧遮那成佛経疏）の古訓点に注目し、主要な伝本の調査と訓読文作成を実施した。これはこの書が真言宗において最も重要な訓点資料であるとの認識に基づくものである。まだ本格的な考察を開始したばかりであるが、今後これに関する研究成果を公表して行きたいと考えている。

d 主要業績

(1) 論文

「唐大和上東征伝・続本朝往生伝・陽勝上人伝・高野山勸発信心集・秘蔵宝鑰抄・秘密隠語集解題」（『大東急記念文庫善本叢刊中古中世篇第十四巻 伝記・願文・語学等』、汲古書院、pp.3-10、20-26、35-36、2016.9

「日本の仏典訓点資料の最先端」（韓国語）（『口訣研究』38、韓国・口訣学会）、pp.27-38、2017.2

「高山寺蔵本大毘盧遮那成佛経疏巻第十五康和点訳文稿（十三）」（『平成二十八年度高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集』）、pp.119-122、2017.3

「高山寺蔵本大毘盧遮那成佛経疏巻第十五康和点訳文稿（十四）」（『平成二十九年度高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集』）、pp.91-94、2018.3

(2) 解説

「人物でたどる日本語学史 空海」、『日本語学』35巻4号、pp.4-7、2016.4

(3) 研究発表

「日本の仏典訓点資料研究の最先端」、韓国・口訣学会国際大会、ソウル国立大、2016.10.7

「西大寺本金光明最勝王経古点の訳文再考」、（東京大学）国語研究室会、東京大学山上会館、2017.7.16

「訓点資料訳読文コーパスに関する一問題—訓点の複線性をめぐって—」、「通時コーパス」シンポジウム 2018、国立国語研究所、2018.3.10

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本語学会、評議員、2016.4～2018.3

国内、訓点語学会、会長、2016.4～2018.3

(2) 行政

文化審議会専門委員（文化財分科会）、2016.4～2018.3

教授 **井島 正博** IJIMA, Masahiro

1. 略歴

1982年 3月 東京大学文学部国語学専修課程卒業
1984年 3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
1984年 4月 東京大学大学院人文科学研究科研究生
1985年 10月 防衛大学校人文科学研究室助手
1989年 4月 山梨大学教育学部専任講師
1991年 4月 山梨大学教育学部助教授
1992年 4月 成蹊大学文学部日本文学科助教授
1998年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（日本語・日本文学）
2007年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授（日本語・日本文学）
2012年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（日本語・日本文学）

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本語学 日本語文法・日本語文法学史および言語理論

b 研究課題

現代語・古典語の日本語文法あるいは日本語文法学史および言語理論の研究をテーマとしている。なかでも現代語日本語文法に関する研究を一貫して続けており、これまでに、格構造（受身文、使役文、可能文、授受動詞構文）、テンス・アスペクト構造、言語行為構造（推量文、疑問文）、談話構造、中でも情報構造・視点構造（テンス、授受動詞構文）・期待構造（否定文、数量詞、限定表現、条件文）など、日本語文法をできる限りグローバルにとらえられる枠組を求めて考察を進めてきた。

さらに現代語の成果を古典語に適用して、古典語文法に新たな方向からアプローチをするとともに、従来の文法研究を歴史的にとらえることによって、各時代の文法理論を相対化することも試みている。言語理論に関しては、コミュニケーション行為構造の分析に力点を置きつつ、近年の有力な言語理論の批判的検討を通して、理論的全体像を模索している。

c 概要と自己評価

最近10年あまり特に力を入れて進めてきたことは、古典語のテンス・アスペクトに関して、これまでの研究史を概観し、その上に立ってこれまでの研究成果を包括的に説明できる理論的枠組を構築することであり、それは博士論文としてまとめた上で、それに推敲を重ね、『中古語過去・完了表現の研究』として出版することができた。現在では、テンス・アスペクトに続き、古典語の推量表現について研究を進めている。

またそれと平行して、現代語に関しては、ノダ・ワケダ・モノダ・コトダなどの形式名詞述語文、あるいは最近はとりたてて詞と呼ばれることの多い副助詞、また否定文に関して研究を進めており、近い将来それぞれ単著としてまとめるつもりである。

さらにこれまであまり解明が進んでいない近世・近代の文法研究についても、数百点に及ぶ文献を収集し、それをもとに文法的な認識のあり方の変遷という観点から、分析を始めた。それぞれの時代の研究者が、どのような認識的な枠組のなかで研究をしてきたのか、そしてその枠組がどのようなきっかけで大きく方向を変えたのかなどを、実証的にたどっていきたい。

言語理論に関しても、特にグライスに端を発する研究の流れと広がりについて、批判的な究明を進めており、これもある程度全体像が見えてきた段階で、単著としてまとめたい。

d 主要業績

(1) 論文

- 井島正博、「動詞基本形をめぐる問題」、『日本語文法』、第14巻第2号、pp.34-49、2014.10
井島正博、「トコロ文の構造と機能」、『日本語学論集』、第11号、pp.97-136、2015.3
井島正博、「過去・完了の助動詞」、『品詞別 学校文法講座 第6巻 助動詞』、pp.120~152、2016.1
井島正博、「モノダ文の周辺」、『日本語学論集』、第12号、pp.18~52、2016.3

(2) 学会発表

- 国内、井島正博、「上代・中古語の推量表現に関する一考察—特にベシをめぐる—」、早稲田大学日本語学会、早稲田大学、2014.12.6
国内、井島正博、「ソーシャルと日本語研究」、日本言語学会第151回大会公開シンポジウム「ソーシャルと日本語研究」、名古屋大学、2015.11.29

(3) 事典項目

- 井島正博、「否定文」「文の成分」「代名詞」「提示語」「並列語」「注釈語」、『日本語文法事典』、大修館書店、2014.8
井島正博、「助詞史」「名詞」「名詞文」「終助詞」「間投助詞」、『日本語大事典』、朝倉書店、2014.11

3. 主な社会活動

(1) 学会

- 国内、日本語文法学会、大会委員長、2013.4~2016.3

准教授 **肥爪 周二** HIZUME, Shuji

1. 略歴

- 1989年3月 東京大学文学部国語学専修課程卒業
1991年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専攻修士課程修了
1993年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専攻博士課程中退
1993年4月 明海大学外国語学部日本語学科専任講師（～1996年3月）
1996年4月 茨城大学人文学部人文学科専任講師（～1997年9月）
1997年10月 茨城大学人文学部人文学科助教授（～2003年3月）
2003年4月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部助教授
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部准教授（～現在に至る）

2. 主な研究活動

a 専門分野

国語学

b 研究課題

日本語音韻史・日本漢字音史・日本韻学史を、主な専門領域とする。古代日本における外国語研究の二本の柱、すなわち漢字音韻学（中国語学）・悉曇学（梵語学）の学史的な研究を、主要な研究領域とする。先人の残したさまざまな記録を元に、江戸時代以前の日本における、音声観察・音声分類の発達および変遷を解明することを目指す。これらの研究成果と連動させつつ、漢字音の日本化の問題、拗音分布の偏在性についての歴史的解釈、濁音の起源（連濁現象の起源）についての考察など、音韻史分野にも研究対象を拡張し、着実に成果を上げている。近年の課題としては、国語音・漢字音（呉音系字音、漢音系字音、唐音系字音）・梵語音を総合する、日本語音節バリエーションの歴史を明らかにすることを目指している。

c 概要と自己評価

論文「『ひいやり』『ふうわり』から『ひんやり』『ふんわり』へ—撥音史からの検討—」においては、「A□Bリ」型のリ延長強勢オノマトペ（促音挿入形・撥音挿入形だけではなく、二重母音形・長母音形をも含める）の歴史の変遷を考察した。古くはBの子音を延長するタイプのもののみが存在したため、Bが接近音の場合には、「ひいやり」「ふうわり」「ぼいやり」「やうわり」の類のみであった。平安時代において想定される二種の撥音、すなわちm音便の撥音・量的撥音便の撥音の統合、連声規則の盛衰との関係を検討し、「ひんやり」「ふんわり」の類が登場する経緯や、Bがラ行音の場合にこの型のオノマトペが許容されない理由等を考察した。

論文「撥音史から見た漢字音の三種の鼻音韻尾」においては、借用語音韻論の観点から、まず日本語の撥音の体系およびその変遷についての立場を確定した上で、そこに漢字音（中国語）の三種の鼻音韻尾が、どのように受容されたのかを、具体的な平安時代の資料（訓点資料や平仮名散作文献）の混沌とした実態に対する、再解釈を行った。

発表「サ行拗音—開拗音と合拗音のあわい—」（論文は印刷中）においては、開拗音の中でも特異なふるまいをするサ行（ザ行）開拗音と、早々に日本語の音韻体系から弾き出されてしまったカ行（ガ行）合拗音とが、平安時代には、以外に通じ合う性質を持っていることを指摘した。それが、カ行合拗音が〈あきま〉に取り込む形で、当初から一単位で受容されたのに対し、サ行開拗音は、古代日本語のサ行子音の音価の特異性から、他の開拗音と同様に分割した二単位での受容と平行して、（現代語のような）一単位での受容も行われていたため、その一単位性が、共通のふるまいのベースとなったとする仮説を提唱した。

文献資料の調査と理論的な考察の双方を、バランスよく進めてゆくことを目指す方針が、今期も成功したと考える。今期で、日本語の音節構造の歴史について一通りの私見の提出を終えた。これをまとめた成果を、2018年度中に単行本として刊行する予定である。

今後、研究の焦点は、院政期から鎌倉時代・南北朝時代へと移行してゆくことになる。

d 主要業績

(1) 著書

共著、肥爪周二、『漢語』、2017.10

(2) 論文

肥爪周二、「橋本進吉」、『日本語学』第35巻4号、2016.4

Hizume, Shuji “Some Questions concerning Japanese Phonology: A Historical Approach” 『ACTA ASIATICA』111、東方学会、2016.8

肥爪周二、「日本漢字音史から見た法華経」、浅田徹編『日本化する法華経』アジア遊学202、2016.9

肥爪周二、解説『反音作法』『伊呂葉字平它』、大東急記念文庫善本叢刊中古中世篇14『伝記・願文・語学等』、2016.9

肥爪周二、「『ひいやり』『ふうわり』から『ひんやり』『ふんわり』へ—撥音史からの検討—」、『近代語研究』第19集、近代語学会、2016.9

肥爪周二、「音韻史 拗音をめぐる2つのストーリー」、大木一夫・多門靖容編『日本語史叙述の方法』、2016.10

肥爪周二、「音節構造史から見た江戸語の連母音音訛」、『近代語研究』、2018.3

肥爪周二、「撥音史から見た漢字音の三種の鼻音韻尾」、『訓点語と訓点資料』、2018.3

(3) 学会発表

国内、肥爪周二、「撥音史から見た漢字音の三種の鼻音韻尾」、訓点語学会、2017.5.21

国際、肥爪周二、「サ行拗音—開拗音と合拗音のあわい—」、口訣学会、2017.8.16

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、國學院大學、「日本語音韻史」、2016.4～2018.3

(2) 学会

国内、訓点語学会、運営委員、2016.4～2018.3

国内、日本語学会、常任査読委員、2016.4～2018.3

09b 日本語日本文学（国文学）

教授 **長島 弘明** NAGASHIMA, Hiroaki

1. 略歴

1976年3月	東京大学文学部国語国文学専修課程卒業
1979年3月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
1979年4月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程進学
1980年4月	実践女子大学文学部専任講師
1985年4月	名古屋大学文学部専任講師
1986年12月	名古屋大学文学部助教授
1993年4月	東京大学文学部助教授（1993年4月～1994年3月、名古屋大学助教授併任）
1995年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
1999年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授（～現在に至る）
2000年9月	博士（文学）（東京大学）

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近世文学

b 研究課題

近世中期の上田秋成・建部綾足・与謝蕪村らの文人の文学を、伝記・作品論・思想論等の様々な面から考察する。新しい文学理念を掲げ、それまでになかった文学ジャンル・学問・絵画を生み出した文人の活動を、一人一人の個性・特殊性と、個人を越えた共通性との両面から明らかにすることを研究の目標とする。

c 概要と自己評価

上田秋成については、詳細な伝記研究を進める一方、2016年には、生涯と作品を概観する『上田秋成の文学』を書いて多面的な文人としての秋成像を描いた。作家論を包含するような新しい伝記研究に向けての一つの試行と、自分では考えている。建部綾足については、和文読本を中心とした作品論を、また蕪村については、発句と連句の評釈を書き進めている。

d 主要業績

(1) 著書

共著、松田浩・上原作和・佐谷眞木人・佐伯孝弘編、『古典文学の常識を疑う』、勉誠出版、2017.5
単著、長島弘明、『雨月物語』（岩波文庫）、岩波書店、2018.2

(2) 論文

長島弘明・洪晟準・金美眞、「観音教寺所蔵俳諧資料目録」、『東京大学国文学論集』第12号、2017.3
長島弘明、『春雨物語』の書写と出版、『国語と国文学』第94巻第11号、2017.9
長島弘明、「「迦具都遅能阿良毗(かぐつちのあらひ)」考—上田秋成が見た天明京都大火—」、『日本學研究』（檀国大学日本研究所）、2018.1
長島弘明、「渋谷和邦氏蔵上田秋成資料」、『東京大学国文学論集』第13号、2018.3

(3) 学会発表

国際、長島弘明、「翻案・モデル・歴史、そして作者・戯号—上田秋成の小説を例にして—」、国際ワークショップ「東アジアとヨーロッパにおける作者性の再考」、於コロンビア大学、2017.3.11
国際、長島弘明、「戯作者の考証学—黄金期・元禄への憧憬—」、日仏会館・日仏会館フランス事務所主催国際シンポジウム「民俗学／民族学のエクリチュール」、於日仏会館、2017.4.21
国際、長島弘明、「上田秋成が記した浅間山噴火と京都大火—「浅間の煙」と「迦具都遅能阿良毗」—」、「韓・日古典文学における非日常体験の形象と日常性回復のメタフォー（飢饉と災害、天災地変）」コロキウム、於檀国大学（韓国）、2017.6.24

(4) 啓蒙

長島弘明、「「日本語の歴史的典籍データベースと研究の未来」の特集の趣旨」、『学術の動向』、2016.6

長島弘明、「文化資源学」って何?、『文化資源学』第15号、2017.6

(5) 予稿・会議録

国際会議、長島弘明、「上田秋成が記した浅間山噴火と京都大火—「浅間の煙」と「迦具都遅能阿良毗」—」、『韓・日古典文学における非日常体験の形象と日常性回復のメタファー（飢饉と災害、天災地変）』コロキウム予稿集、檀国大学校日本研究所、2017.6.24

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

放送大学客員教授、2016・2017年度

(2) 学会

東京大学国語国文学会、評議員、2016・2017年度

日本近世文学会、常任委員、2016・2017年度

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

日本学術会議会員、2011.10～2017.9

国文学研究資料館運営会議委員、2016年度

教授 藤原 克己 FUJIWARA, Katsumi

1. 略歴

1976年3月	東京大学文学部国文学専修課程卒業
1979年3月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
1980年3月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程退学
1980年4月	岡山大学教養部講師
1984年4月	岡山大学教養部助教授
1989年4月	神戸大学文学部助教授
1998年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2001年5月	博士(文学) (東京大学)
2004年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授
2018年3月	定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

平安朝文学

b 研究課題

新しい日本古典文学研究のあり方を求めて

c 概要と自己評価

戦後、日本文学研究は飛躍的に深化し充実してきたが、1970年代頃から一種の飽和状態に陥り、伝統的な研究の細分化が進む一方で、文化人類学や社会学的アプローチなどによる研究の拡散化も進展した。また海外における日本文学研究には、私たちが学ぶべきものも多い一方で、文学に対する関心のあり方の違いなどから、議論のかみ合わないような面もけっして小さくない。現在私が庶幾しているのは、海外の日本古典文学研究者や国内外の比較文学の研究者とも実りある議論を交換できるような共通の関心の基盤を作ることである。そのためには、こんにちの細分化した日本古典文学研究の枠組の中での「新見」を探るのではなく、先学の貴重な研究成果を批判的に継承しつつ、日本文学の「古典」を世界文学の「古典」として再定位しなければならない。下記の業績一覧に挙げたものは、すべてそのような試みである。

d 主要業績

(1) 論文

藤原克己、「古典といかに向き合うか—秋山虔の思索の軌跡—」、『国語と国文学』、第93巻第9号、40-50頁、2016.9

藤原克己、「中唐の恋愛・性愛文学—平安朝宮廷貴族文芸との比較のために—」、『むらさき』、第53輯、88-97頁、2016.12

藤原克己、「『ありのすさび』—詩のさかえぬ国の歌ことば』、『和歌文学研究』、第114号、1-6頁、2017.6

藤原克己、「能作者の観た空蟬と落葉の宮」、『能と狂言（能楽学会編）』、15、26-35頁、2017.7

(2) 解説

藤原克己、「解説」、『河出書房新社・日本文学全集04 角田光代訳『源氏物語』上』、2017.9

(3) 学会発表

国内、藤原克己、「国風文化の形成と成熟」、京都日本史研究会例会、京都大学、2017.12.23

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

その他、大正大学、「国文学特殊研究」、2016.9～2017.2、2017.4～2018.2

特別講演、かわさき市民アカデミー、「『方丈記』を読む—鴨長明のシンプルライフ」、2016.11

非常勤講師、慶応義塾大学、「詩学」、2017.4～2018.2

特別講演、山口誓子学術振興基金公開講演会（神戸大学）、「『源氏物語』野分巻の鑑賞—風と花と恋にあこがれる心—」、2017.10

(2) 学会

国内、紫式部学会、会長、2017.6～

国内、東方学会、評議員、2017.7～

教授 **渡部 泰明** WATANABE, Yasuaki

1. 略歴

1981年3月	東京大学文学部国文学専修課程卒業
1984年3月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
1984年4月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程退学
1986年4月	東京大学文学部助手
1988年4月	フェリス女学院大学文学部専任講師
1991年4月	フェリス女学院大学文学部助教授
1993年4月	上智大学文学部助教授
1999年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
1999年4月	博士（文学）（東京大学）
2006年10月	東京大学大学院人文社会系研究科教授（現在に至る）

2. 主な研究活動

a 専門分野

中世文学、和歌文学

b 研究課題

和歌文学については、マクロ的には和歌史を構想し記述すること、ミクロ的には新古今集前後を中心とした中世和歌作品の方法を解明することを課題としている。前者は専門化し、細分化された研究の現状に対して、和歌を長い射程のもとに捉え、この文芸のもつ意義と独自性を総体的に把握することを目指している。後者は、作品を完成したものとして結果論的に捉えるだけでなく、より作者自身の方法に即した、内在的な理解を目標としている。

中世文学については、徒然草や方丈記など、とくに和歌的素養を基盤とした作品について、とくにその文体と方法を解明することを目標としている。

c 概要と自己評価

これまでの中世和歌史に関わる論文を改訂の上で集大成し、研究書『中世和歌史論 様式と方法』を刊行した。平安時代後期から中世後期までの和歌史を、和歌はなぜ続いたか、和歌における文芸的達成とはどう見計らうべきか、という課題の解明に主眼をおきつつ、様式意識の視点から史的に展望した著書である。その他、『源氏物語』と和歌、万葉集、西行の恋歌（2本）、新古今集と立原道造の論文を発表した。高大接続を意図した古典教育の論文も1本公刊した。専門的な研究にとどまらず、古典研究の現代的意義についてできるだけ積極的に発言するよう努めた。

d 主要業績

(1) 著書

単著、渡部泰明、『中世和歌史論 様式と方法』、岩波書店、2017.3

(2) 論文

渡部泰明、「和歌史における『源氏物語』、『新時代への源氏学 8 〈物語史〉形成の力学』、竹林舎、2016.5

渡部泰明、「和歌をつくる」、『和歌文学研究』、第112号、和歌文学会、2016.6

渡部泰明、「西行の恋の題詠歌」、『西行学』、第7号、西行学会、2016.8

渡部泰明、「始まりの出会い——立原道造と和歌的世界——」、『孤帆』、第39号、孤帆の会、2016.11

渡部泰明、「西行の恋の題詠歌・続」、『説林』、65、愛知県立大学国文学会、2017.3

渡部泰明、「万葉集における「縁語」」、『上代文学』、第118号、上代文学会、2017.4

(3) 学会発表

国内、渡部泰明、「万葉集における「縁語」」、上代文学会シンポジウム、東京大学、2016.11.26

国内、渡部泰明、「正徹の幽玄」、日本文学協会大会シンポジウム、相模女子大学、2017.11.19

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

放送大学客員教授、2016・2017年度

(2) 学会

和歌文学会、常任委員、2016・2017年度

中世文学会、常任委員、2016・2017年度

西行学会、常任委員、2016・2017年度

中古文学会、委員、2017年度

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

日本学術会議、連携会員、2016年度

日本学術会議、会員、2017年度

日本学術振興会学術システム研究センター、専門研究員、2016・2017年度

1. 略歴

- 1982年3月 東京大学文学部国文学専修課程卒業
- 1985年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
- 1987年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程中退
- 1987年4月 東京大学文学部助手
- 1990年4月 上智大学文学部専任講師
- 1995年4月 上智大学文学部助教授
- 1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
- 2010年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近代文学

b 研究課題

太宰治の文学の自意識過剰の饒舌体と呼ばれる文体に注目するところから出発、そのような文体が育まれてゆく必然性を近代文学史の展開に即して考察して行く中で、「私小説」というわが国独自の表現形式の生み出されていく過程を表現史的に解明する方向へと進んだ。作家論の一環として太宰治の文学の特質を解明して行く方向と、小説を中心とする日本近代文学の表現機構の研究とを、並行的しておしすすめて行くことを研究課題としている。

c 概要と自己評価

「表現機構」という観点から、小説が小説として認知される暗黙の要件を分析し、近代日本における変遷の様相を、『近代小説の表現機構』（岩波書店、2012年）にまとめ、それをさらに一般書の形で『日本近代小説史』（中公選書、2015年）と『私』をつくる『近代小説の試み』（岩波新書、2015年）にまとめた。これら近代小説研究に関する成果を踏まえ、蓄積してきた太宰治研究を再検討し、集成することが現在の課題になっている。

d 主要業績

(1) 編著

安藤宏、関口隆一、中村良衛、山根龍一、山本良共編『日本近代思想エッセンス ちくま近代評論選』筑摩書房、2017.10

(2) 論文

安藤宏、「『晩年』試論 執筆順位を中心に」、『太宰治研究』24、2016.6

(3) 編集（編集責任者）

安藤宏、『太宰治文庫目録 増補版』、日本近代文学館、2017.4

安藤宏、『日本近代文学館開館 50 周年記念 漱石・芥川・太宰から現代作家まで 近代文学、再発見！』、日本近代文学館、2017.9

(4) 小論・解説

安藤宏、「『太宰治文庫』追加寄贈資料の概要」、『日本近代文学館年誌 資料探索』、12、2017.3

安藤宏、「進化、する『太宰治文庫』」、『日本近代文学館』、277号、2017.5

安藤宏、「編集後記」、『太宰治研究』、25、2017.6

安藤宏、「『間隔論』の実践」、『定本漱石全集第十四巻』月報、岩波書店、2017.11

安藤宏、「小説は生きている」、『日本近代文学館』、280号、2017.11

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本近代文学館理事（2016、2017年度）、昭和文学会幹事（2016、2017年度）

(2) その他

筑摩書房教科書編集委員（2016、2017年度）、読売新聞読書委員（2016.1～2017.12）

1. 略歴

1983年3月	東京大学文学部国文学専修課程卒業
1983年4月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程入学
1986年3月	同 修了
1986年4月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程進学
1990年3月	同 単位取得退学
1990年4月	帝塚山学院大学文学部専任講師
1994年4月	帝塚山学院大学文学部助教授
1995年4月	東京女子大学文理学部助教授
2003年4月	東京女子大学文理学部教授
2007年12月	東京大学大学院人文科学研究科 国語国文学専門課程 博士（文学）学位取得
2009年4月	東京女子大学現代教養学部教授（改組による学部名変更）
2013年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本上代文学・和歌文学

b 研究課題

上代（奈良時代以前）日本文学を、韻文中心に研究している。特に『万葉集』の歌人、柿本人麻呂や、大伴家持の作品について、その読み直しを課題としている。『万葉集』の和歌は、中国の先進文明に正面から向き合って成立した日本という国家における草創期の文芸であり、漢詩文の表現に対して、学びつつ対抗するという両義的な関係を結んでいる。それゆえ、当時伝来していた六朝・初唐の漢詩文との比較・対照を主たる研究方法として、和歌独自の表現を明らかにしつつ、その価値を見出すことを論文執筆の際の、目標としている。更に『万葉集』は、7世紀前半から、8世紀中ごろまでの和歌の歴史を語る書物であると考えられ、歌人たちの積み重ねた作品群がいかなる軌跡を描くか、すなわち『万葉集』の和歌史を明らかにすることを、研究全体の目標とする。

c 概要と自己評価

この一、二年の業績も、それ以前から引き続いて、大伴家持の作品、特に『万葉集』巻十七以降の「歌日誌」の歌において、古代政治史上の事象がいかに関連しているかを俎上に乗せている。特に「天人相関思想」にかかわって、「歌日誌」に韜晦されている家持の立場や意思を明らかにする論が多い。今後は、『万葉集』全体の中で、「歌日誌」の持つ意味を体系的に明らかにする仕事に取り組みたいと考えている。

d 主要業績

(1) 論文

- 鉄野昌弘、「安積皇子挽歌論—家持作歌の政治性—」、『萬葉』、219、2015.4
- 鉄野昌弘、「大伴家持「予作歌」の性格と位置」、『芸文研究』、109-1、2015.12
- 鉄野昌弘、「諸兄と家持—巻二十を中心に—」、『萬葉』、222、2016.5
- 鉄野昌弘、「明日香皇女挽歌第二反歌試解」、『国語と国文学』、93巻1号、2016.11
- 鉄野昌弘、「「大宰帥大伴卿讃酒歌十三首」試論」、『萬葉集研究』、第36集、2016.12
- 鉄野昌弘、「結節点としての「亡妾悲傷歌」」、『萬葉』224号、2017.8

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 東京女子大学非常勤講師 2013.4～現在
- 御茶ノ水女子大学非常勤講師 2017.4～現在
- 慶應義塾大学非常勤講師 2016.4～2018.3

(2) 学会

- 萬葉学会 編輯委員
- 上代文学会 常任理事

(3) 学外組織

大学改革支援・学位授与機構 国語・国文学部会専門委員

教授 高木 和子 TAKAGI, Kazuko

1. 略歴

1988年3月 東京大学文学部国文学専修課程卒業
1988年4月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学修士課程入学
1991年3月 同 修了
1991年4月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学博士課程進学
1996年3月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学
専門分野博士課程単位取得退学
1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学
専門分野研究生（～1997年3月）
1998年4月 博士（文学）学位取得（東京大学）
東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野博士課程修了
1998年4月 関西学院大学文学部専任講師
2002年4月 関西学院大学文学部助教授（2007年4月より准教授）
2008年4月 関西学院大学文学部教授
2013年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2017年4月 同 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

平安文学、源氏物語

b 研究課題

源氏物語は、平安前期に成立した長編物語・歌物語・和歌の発想を基盤とし、日記文学・漢詩文・史実等を貪婪に吸収して成立したと思われる。そこに到りつくまでの文学史的な動態、及び、源氏物語それ自体の構造や表現の分析を主な研究課題としており、初期の成果は『源氏物語の思考』（風間書房、2002年、第五回紫式部学術賞受賞）にまとめた。また平安時代の人々の思考や発想の形式にも関心を寄せており、和歌の贈答の分析を通じた意思伝達の呼吸などについて、『女から詠む歌 源氏物語の贈答歌』（青簡舎、2008年）に提案、これまでの成果は『源氏物語再考 長編化の方法と物語の深化』（岩波書店、2017年）にまとめた。そのほか、研究成果を一般の人々に分かりやすく伝える仕事として、瀬戸内寂聴訳源氏物語の注釈等の執筆のほか『男読み 源氏物語』（朝日新書、2008年）、『コレクション日本歌人選 和泉式部』（笠間書院、2011年）、『平安文学でわかる恋の法則』（ちくまプリマー新書、2011年）等の一般書も手掛けている。

c 概要と自己評価

昨今の源氏物語研究がともすると作品の周辺の歴史的事実や享受史的な事実などの解明に偏りがちである現状を憂慮し、物語そのものを論じるために、これまでの方法論的成果をより発展的に次世代へと継承することが喫緊の課題であると考えている。今期は作品分析の方法論的な関心や思考形式についてのいくつかの論考を核として、論文集『源氏物語再考 長編化の方法と物語の深化』をまとめた。現在は、三角洋一氏が遺した『風葉和歌集』（和歌文学大系、明治書院、2019年刊行予定）の注釈や解説の補完に尽力する一方、個別の研究課題を開拓しつつある。同時に、若い院生たちが今後の平安文学研究を領導できるように、彼らとともに学会活動を展開している。

d 主要業績

(1) 著書

高木和子、『源氏物語再考 長編化の方法と物語の深化』岩波書店、2017.7、440頁

(2) 論文

高木和子、「「～顔なり」の表現について 『源氏物語』の例を中心に」、『日本語学』、36-1、p.44-51、2017.1

(3) 書評

高木和子、角田光代、『源氏物語 上』、河出書房新社、『群像』、72-12、264-265 頁、2017.12

(4) 解説

高木和子、「青海波を舞う光源氏」、『国立劇場 第八回雅楽公演 管絃 青海波を聴く』、8-9 頁、2017.11

(5) 啓蒙

熊野純彦、野崎敏、菊池達也、勝田俊輔、高木和子、佐藤健二、「文（テキスト）の学とは何か」、『東京大学ホーム
カミングデイ 文学部企画』、2017.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、源氏物語アカデミー（於、福井県越前市）、「紫式部日記」と「紫式部集」、2017.10

(2) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

中古文学会、常任委員・編集委員、2015.6～

紫式部学会、理事、2015.7～

紫式部顕彰会紫式部学術賞審査委員、2016.6～

10 日本史学

教授 佐藤 信 SATO, Makoto

1. 略歴

1976年3月 東京大学文学部国史学専修課程卒業
1978年3月 東京大学大学院人文科学研究科(国史学) 修士課程修了(文学修士)
1978年12月 東京大学大学院人文科学研究科(国史学) 博士課程中退
1979年1月 奈良国立文化財研究所(平城宮跡発掘調査部) 研究員
1985年4月 文化庁文化財保護部(記念物課)
1987年7月 文化庁文化財調査官
1989年4月 聖心女子大学文学部助教授
1992年4月 東京大学文学部助教授(国史学)
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授(日本史学)
1996年7月 東京大学大学院人文社会系研究科教授(日本史学)
1997年7月 博士(文学)取得(東京大学)
2018年3月 定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本古代史

b 研究課題

古代都市、出土文字資料(木簡学)、古代国家財政、文化財学。

c 概要と自己評価

研究面では、日本古代の地方官衙や地域間交流、そして古代史料の新たな校訂・訓読と史料学的研究などを進めた。教育面では、大学院・学部での日常の教育のほか、研究会での共同研究成果や教養課程の教科書などの出版を進めた。2014・15年度は公益財団法人史学会の理事長として学会運営に尽力し、社会的活動面でも、文化審議会はじめ文化財・史跡などの保存・活用をめぐる諸会議で積極的に活動した。相変わらず、研究のための時間的余裕の逼迫が大きな課題となっていると考える。

d 主要業績

(1) 著書

編著、佐藤信編『古代の人物2 奈良の都』、清文堂出版、2016.4
共編著、加藤謙吉・佐藤信・倉本一宏編『日本古代の地域と交流』、臨川書店、2016.5
共編著、佐藤信・近藤成一編『日本の古代中世』、放送大学教育振興会、2017.3
共編著、榮原永遠男・佐藤信・吉川真司編『東大寺の新研究2 歴史のなかの東大寺』、法蔵館、2017.3
共編著、佐藤信ほか編『詳説日本史 改訂版』、山川出版社、2017.3
編著、佐藤信編『古代東国の地方官衙と寺院』、山川出版社、2017.8
共編著、佐藤信・五味文彦・高埜利彦・鳥海靖編『詳説日本史研究』、山川出版社、2017.8
編著、佐藤信編『古代史講義—邪馬台国から平安時代まで』(ちくま新書)、筑摩書房、2018.1
編著、佐藤信編『律令制と古代社会』、吉川弘文館、2018.3
編著、佐藤信編『史料・史跡と古代社会』吉川弘文館、2018.3

(2) 論文

佐藤信、「二〇一五年の歴史学界—回顧と展望— 総説」『史学雑誌』125-5、2016.5、1-5頁
佐藤信監修・朝野群載研究会、「『朝野群載』巻二十六 校訂と註釈(一)」『東京大学日本史学研究室紀要』21、2017.3、111-168頁
佐藤信、「1 古代・中世史への招待」「2 日本列島の原始から古代へ」「3 律令国家への道」「4 律令国家と天平文化」
佐藤信・近藤成一編『日本の古代中世』放送大学教育振興会、2017.3
佐藤信、「古代東国の地方官衙と寺院をめぐる課題」佐藤信編『古代東国の地方官衙と寺院』山川出版社、2017.8

佐藤信、「1300 年間高麗人と倭人が仲良くしてきたことに意味がある」『高麗郡建郡 1300 年記念誌 渡来から未来へ』一般社団法人高麗 1300、2017.10.19、145 頁

佐藤信「地方官衙と地方豪族」佐藤信編『古代史講義—邪馬台国から平安時代まで』(ちくま新書) 筑摩書房、2018.1

(3) 小論

佐藤信 (パネルディスカッション、コーディネーター)『鞠智城東京シンポジウム二〇一六成果報告書 鞠智城の終焉と平安社会—古代山城の退場—』熊本県教育委員会、2016.3.31

佐藤信・近藤成一、「日本の古代中世(17)」(2017 年度学部開設科目紹介)『放送大学通信 オン・エア』125 号、放送大学、2017、21 頁

佐藤信、「風景 2018 史跡」(インタビュー記事)『読賣新聞』(夕刊)、2018.1.13、9 頁

佐藤信、「沖ノ島祭祀遺跡の歴史的意義」『月刊考古学ジャーナル』特集沖ノ島祭祀 遺跡とその周辺、707 号、今月の言葉、ニューサイエンス社、2018.1

(4) 学会発表

国内、佐藤信、「日中韓専門家による上野三碑を考える集い」(コーディネーター・司会)、国際シンポジウム、上野三碑世界記憶遺産登録推進協議会主催、エテルナ高崎、2016.5.7

国内、佐藤信、「神宿る宗像・沖ノ島と関連遺産群の歴史的意義」、山幸政経塾平成二十八年五月定例会、ホテルオークラ福岡、2016.5.20

国内、佐藤信、「『古事記』・『日本書紀』と出雲神話」、古事記・日本書紀編さん一三〇〇年記念関連公開講座、宮崎産業経営大学法学部主催、宮崎県立美術館、2016.10.15

国内、佐藤信、「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群の歴史的価値」(記念講演)、平成二十八年度公営電気事業経営者会議管理者・局長会議、ウィズ・ザ・スタイル福岡、2016.10.18

国内、佐藤信、「水中遺跡の歴史学」(コーディネーター・趣旨説明)、史学会第一一四回大会公開シンポジウム「水中遺跡の歴史学」、史学会主催東京大学、2016.11.12

国内、佐藤信、「『常陸国風土記』と東国社会」(特別講演)、東国古代遺跡研究会第七回研究大会『『常陸国風土記』の世界 古代社会の形成』、鹿島神宮、2016.12.3

国内、佐藤信、「古代史研究の新動向と教科書」(講演)東京都歴史教育研究会、三鷹中等学校、2016.12.17

国内、佐藤信、「平城京調査研究の成果と課題—発掘調査の意義—」(学術講演)、奈良女子大学古代学学術研究センター学術講演会、奈良女子大学、2017.2.2

国内、佐藤信、「ふたつの飛鳥の古代史」(講演)、平成二十八年度大阪府立近つ飛鳥博物館シンポジウム「近つ飛鳥と遠つ飛鳥—ふたつの飛鳥の古代史—」、近つ飛鳥の歴史遺産事業実行委員会主催、リックはびきの、2017.2.5

国内、佐藤信、「『出雲国風土記』と『古事記』『日本書紀』の神話」(基調講演)、奈良県立万葉文化館・三重県立斎宮歴史博物館・島根県立古代出雲歴史博物館三館連携シンポジウム「語り継がれる神話、読み継がれる風土記」、大社文化プレイスうらら館(出雲市)、2017.4.23

国内、佐藤信、「古代出雲の神話からみた交流と諏訪」(講演)、第二十二回縄文文化講座(茅野市教育委員会・NPO 縄文文化輝く会・蓼科文庫主催)、茅野市マリオローヤル会館、2017.8.27

国内、佐藤信、「鴻臚館の歴史的意義—発掘 30 年から鴻臚館学へ—」(特別講演)、市民講座「鴻臚館学」入門特別講演会(福岡市主催)、福岡市博物館、2017.9.16

国内、佐藤信、「古代東北太平洋岸の交通と遠距離交流」(趣旨説明)、科研費「東北太平洋沿岸地域の歴史学・考古学的総合研究」研究集会「古代東北太平洋岸の交通と遠距離交流」、東北学院大学、2017.9.23

国内、佐藤信、「久留倍官衙遺跡と古代の地方官衙」(基調講演)、平成二十九年度久留倍官衙遺跡シンポジウム「古代史のロマン『久留倍官衙遺跡』—壬申の乱・聖武天皇の東国行幸に関連して—」(久留倍遺跡まつり実行委員会主催)、四日市市文化会館、2017.11.3

国内、佐藤信、「地域と交流の古代史—史料学・史跡学・文化財学から—」、第二二九回文化交流研究懇談会(東京大学大学院人文社会系研究科主催)、東京大学、2017.11.16

国内、佐藤信、「古代日本と宗像・沖ノ島」(講演)、「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群世界遺産登録記念シンポジウム「宗像・沖ノ島と日本の古代文化遺産」(宗像・沖ノ島と関連遺産群世界遺産推進会議主催)、龍谷大学響都ホール、2017.11.18

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

客員教授、放送大学、2016.4～2018.3
非常勤講師、國學院大學大学院文学研究科、2016.4～2018.3
非常勤講師、法政大学大学院人文科学研究科、2016.4～2018.3

(2) 学会

国内、日本歴史学会、評議員、2012.4～
国内、史学研究会、評議員、2013～
国内、木簡学会、委員、2012.4～
国内、条里制・古代都市研究会、評議員、2012.4～

(3) 行政

文化庁、教育政策、文化審議会文化財分科会世界文化遺産特別委員会委員、2013年度以前より継続中
文化庁、教育政策、古墳壁画の保存活用に関する検討会委員、2012～
文化庁、教育政策、水中遺跡調査検討委員会委員、2013.4～
宮内庁、陵墓管理委員、2013年度以前より継続中

(4) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

独立行政法人、国立歴史民俗博物館、運営会議委員、2012～
独立行政法人、国立文化財機構、外部評価委員会委員、2013年度以前より継続中
教育機関、文京区、文化財保護審議会委員、2013年度以前より継続中
教育機関、松江市、松江市史編集委員、2013年度以前より継続中
教育機関、葛飾区、葛飾区史編集委員会委員長、2013～
その他、日本公園緑地協会、研究顧問、2013～
その他、高梨学術奨励基金、選考委員、2013～
その他、群馬県埋蔵文化財調査事業団、特別顧問、2013年度以前より継続中
その他、公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団、評議員、2014～
教育機関、岩手県二戸市教育委員会、史跡九戸城跡整備指導委員会委員、2013年度以前より継続中
教育機関、岩手県教育委員会、平泉遺跡群調査整備指導委員会委員、2013年度以前より継続中
教育機関、岩手県矢巾町教育委員会、史跡徳丹城跡調査指導委員会委員、2013年度以前より継続中
教育機関、陸前高田市教育委員会、陸前高田市文化財等保存活用計画策定委員会、2013～2014
教育機関、宮城県教育委員会、多賀城跡調査研究委員会委員、2013年度以前より継続中
教育機関、宮城県多賀城市教育委員会、多賀城南門等復元整備検討委員会委員、2013～
教育機関、茨城県鹿嶋市教育委員会、史跡鹿島神宮境内附郡家跡史跡整備検討委員会委員、～2015
教育機関、栃木県下野市教育委員会、史跡下野薬師寺跡保存整備委員会委員、2013年度以前より継続中
教育機関、栃木県宇都宮市・上三川町教育委員会、上神主・茂原官衙遺跡保存整備委員会委員、2013年度以前より継続中
教育機関、群馬県教育委員会、史跡上野国分寺跡調査整備検討委員会委員、2012～
教育機関、群馬県太田市教育委員会、史跡上野国新田郡片跡調査・整備専門委員会委員、2013年度以前より継続中
教育機関、群馬県伊勢崎市教育委員会、三軒屋遺跡調査検討委員会委員、2013年度以前より継続中
教育機関、群馬県高崎市教育委員会、多胡碑周辺遺跡調査検討委員会委員、2013～
教育機関、埼玉県立史跡の博物館、史跡埼玉古墳群保存整備協議会委員、2013年度以前より継続中
教育機関、神奈川県川崎市教育委員会、橘樹郡衙調査指導委員会委員、2013～
教育機関、山梨県笛吹市教育委員会、甲斐国分寺跡・国分尼寺跡保存整備専門委員会委員、2013年度以前より継続中
教育機関、東京都国分寺市教育委員会、武蔵国分寺跡保存整備委員会委員、2013年度以前より継続中
教育機関、東京都府中市教育委員会、史跡武蔵国分寺跡保存整備活用検討協議会委員、2012～
教育機関、斎宮歴史博物館、斎宮歴史博物館運営専門委員会委員、2013年度以前より継続中
その他、国土交通省国営飛鳥歴史公園管理事務所、平城宮第一次大極殿院建造物復原検討委員会委員、2013年度以前より継続中
教育機関、島根県教育委員会、島根県古代文化センター企画運営委員会委員、2013年度以前より継続中
教育機関、島根県教育委員会、出雲国分跡発掘調査指導委員会委員、2013年度以前より継続中
教育機関、福岡県教育委員会、大宰府史跡調査研究指導委員会委員、2013年度以前より継続中

教育機関、福岡市教育委員会、鴻臚館跡整備検討委員会委員、2013～
その他、宗像・沖ノ島と関連遺産群世界遺産推進協議会、宗像・沖ノ島と関連遺産群世界遺産推進協議会専門委員会委員、2013年度以前より継続中
教育機関、熊本県教育委員会、鞠智城跡保存整備検討委員会委員、2012年度以前より継続中

教授 **加藤 陽子** (戸籍名は野島陽子) KATO, Yoko

1. 略歴

1983年3月 東京大学文学部国史学専修課程卒業(文学士)
1985年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了(国史学)
1989年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学(国史学)
1989年4月 山梨大学教育学部専任講師(日本史学)
1991年4月 山梨大学教育学部助教授(日本史学)
1992年12月 文部省在外研究員として、スタンフォード大学東アジアコレクション、ハーバード大学ライシャワーセンター研究員
1994年4月 東京大学文学部助教授(日本史学)
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授(日本史学)
1997年2月 博士(文学)取得
2009年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授(日本史学)

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近代史

b 研究課題

1930年代の日本の政治と外交

c 概要と自己評価

専攻は日本近現代史で、1930年代の外交と軍事を専門としている。近代において起こされた戦争が当該期の政治や社会に持った意味、あるいは、日清・日露・第一次世界大戦など、10年ごとになされた観のある戦争の記憶が総体として国民や国家に対してもたらした影響等について研究してきた。近年は、2011年の公文書管理法施行により利用しやすくなった宮内公文書館や国立公文書館の史料を用い、大正・昭和戦前期の詔書作成過程を研究している。また、昭和戦前期の政治史を専門とする歴史研究者として、日中関係史、日米関係史についても目配りしてきた。史料公開の先進性で知られるアメリカはもとより、近年では中国、台湾等でも史資料の公開が活発になってきたこともあり、内外の研究者との交流に努めている。

d 主要業績

(1) 著書

単著、加藤陽子、『従満州事変到日中戦争』、香港中和出版、2016.6
単著、加藤陽子、『それでも日本人は「戦争」を選んだ』、新潮社、2016.7
単著、加藤陽子、『戦争まで 歴史を決めた交渉と日本の失敗』、朝日出版社、2016.8
単著、加藤陽子、『日本人為何選択了戦争』、商務印書館 香港、広場出版 台湾、2016.12
共著、Sven Saaler, Kudo Akira, Ajima Nobuo, *Mutual Perceptions and Images in Japanese-German Relations, 1860-2010*, Brill, 2017
単著、加藤陽子、『とめられなかった戦争』、文藝春秋、2017.2
共著、加藤陽子、長谷部恭男ほか『憲法サバイバル』、筑摩書房、2017.4
共著、加藤陽子、黒沢文貴、季武嘉也編『日記で読む近現代日本政治史』、ミネルヴェ書房、2017.4
共著、内海愛子、加藤陽子、『歴史を学び、今を考える——戦争そして戦後』、梨の木舎、2017.6
共著、加藤陽子、『もの言えぬ時代 戦争・アメリカ・共謀罪』、朝日新聞社、2017.10
共著、Sven Saalar and Christopher W.A. Szpilman, *Routledge Handbook Modern Japanese History*, Routledge, 2018

(2) 論文

- 加藤陽子、「南原繁と太平洋戦争 終戦のかたちと天皇の地位を中心に」、南原繁研究会編『南原繁と戦争 歴史からの教訓』、3-33 頁、2016.7
- 加藤陽子、「公文書管理について歴史研究者はどうみているのか」、『歴史学研究』、954、7-14p、2017.2
- 加藤陽子、「昭和戦前期の岐路と日本の選択」、『史叢』、96、1-17 頁、2017.3

(3) 書評

- 山本七平、『小林秀雄の流儀』、『毎日新聞』、2016
- 吉野作造講義研究会編、『吉野作造政治史講義』、『毎日新聞』、2016.3
- 南塚信吾ほか編、『新しく学ぶ 西洋の歴史 アジアから考える』、『毎日新聞』、2016.5
- アンドリュー・クレピネヴィッチ、バリー・ワッツ、北川知子訳、『帝国の参謀』、『毎日新聞』、2016.7
- 小口日出彦、『情報参謀』、『毎日新聞』、2016.9
- 林洋子監修、加藤時男校訂、『藤田嗣治 妻とみへの手紙』、『毎日新聞』、2016.11
- 山本貴光、『「百学連環」を読む』、『毎日新聞』、2017.1
- 五百旗頭真、下斗米伸夫、トルクノフ、ストレリツォフ編、『日ロ関係史』、東京大学出版会、『UP』、541、40-45 頁、2017
- マーガレット・メール、『歴史と国家』、大学、『毎日新聞』、2017
- 山田朗、『昭和天皇の戦争』、『毎日新聞』、2017.2
- 柳原正治・篠原初枝編、『安達峰一郎』、『毎日新聞』、2017.4
- 五百旗頭真、下斗米伸夫、トルクノフ、ストレリツォフ編、『日ロ関係史』、東京大学出版会、『UP』、535、60-65 頁、2017.5
- ジョン・ル・カレ、『地下道の鳩 ジョン・ル・カレ回想録』、『毎日新聞』、2017.5
- 澤地久枝・ドウス昌代、『海をわたる手紙』、岩波書店、『毎日新聞』、2017.5
- 田嶋信雄、『日本陸軍の対ソ謀略』、吉川弘文館、『毎日新聞』、2017.7
- 宮澤俊義、高見勝利解説、『転回期の政治』、『毎日新聞』、2017.8
- 笠原十九司、『日中戦争全史』、高文研、『毎日新聞』、2017.8
- 西村京太郎、『十五歳の戦争 陸軍幼年学校「最後の生徒」』、集英社、『毎日新聞』、2017.9
- 西川祐子、『古都の占領』、平凡社、『毎日新聞』、2017.10
- 五百旗頭真、下斗米伸夫、トルクノフ、ストレリツォフ編、『日ロ関係史』、東京大学出版会、『UP』、544 号、38-45 頁、2018.2

(4) 解説

- 加藤陽子、「史料・文献紹介 『昭和天皇実録』について」、『歴史と地理 日本史の研究』、712、27-33 頁、2018.3

(5) 啓蒙

- 加藤陽子、「私の三冊」、『図書』、2017 年臨時増刊、820 号、22 頁、2017.5
- モリナガ・ヨウ 加藤陽子 対談、「対談」、『迷宮歴史倶楽部』、75-78 頁、2017.8
- 加藤陽子、「歴史史料から読み解く後藤新平」、『後藤新平の会 会報』、17、30-37pp、2017.11

(6) マスコミ

- 「問う 共謀罪 怒りの抗議 重なるリットン調査団」、『朝日新聞』、2017.6.6
- 「国家が国民の私的領域を侵そうとしている」、『朝日新聞』、2017.10.6

(7) 受賞

- 国内、加藤陽子、紀伊國屋じんぶん大賞、株式会社 紀伊國屋書店、2017.3.23

(8) 史料

- 加藤陽子ほか、東大大学院近代政治史ゼミ、『森本州平日記 (八)』、『東京大学日本史学研究室紀要』20 号、2016.3
- 加藤陽子ほか、東大大学院近代政治史ゼミ、『森本州平日記 (九)』、『東京大学日本史学研究室紀要』21 号、2017.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- その他、後藤新平の会、「後藤新平の世界認識と現代」、2017.7
- 特別講演、徳島県高等学校教育研究大会 地歴学会、「近代の戦争を国民の立場から考える」、2017.8
- その他、呉市海事歴史科学館（大和ミュージアム）、「呉市潜水調査シンポジウム 近代史の視点から戦艦「大和」の社会背景を考える」、2017.9

特別講演、北海道北見市常呂高校、「近代の戦争を国民の立場から考える」、2017.10

その他、東京大学、「東大の歴史 日本の歴史」、2017.10

特別講演、東京大学朝日講座、「日本近代史における「偶然」」、2017.11

(2) 行政

内閣府 国立公文書館の機能・施設の在り方等に関する調査検討会議、委員、2017.9～

教授 **大津 透** OTSU, Toru

1. 略歴

1983年3月 東京大学文学部国史学専修課程卒業
1985年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程国史学専門課程修了
1987年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程国史学専門課程中退
1987年4月 山梨大学教育学部講師（歴史学）
1990年9月 山梨大学教育学部助教授（歴史学）
1994年11月 博士（文学）
1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2002年10月-2003年2月 スイス、ジュネーブ大学招聘教授
2010年7月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本古代史

b 研究課題

古代天皇制、日唐律令制比較研究、摂関期国家の研究

c 概要と自己評価

日本古代の律令制を東アジア世界の中で位置付けることを目的とし、それにともない古代天皇制の解明、敦煌吐魯番文書の研究、摂関政治期の国制の解明を行っている。山中裕編『御堂関白記全註釈』全16冊の成果をふまえて、国文学研究者と歴史学研究者の共同作業によって、摂関期の史料を解説するのに役に立つ『藤原道長事典』を編集し刊行することができた。科研費をうけて長年続けている天聖令にもとづく律令制の比較研究については、唐令復原上の諸問題を整理し、佐藤信氏の退職記念論文集に執筆した。また来年の譲位を見据え、編集委員として企画した『天皇の歴史』シリーズ全10巻を講談社学術文庫から刊行することになり、最新の研究成果を追補した。

d 主要業績

(1) 著書

単著、大津透、『天皇の歴史1 神話から歴史へ』、講談社学術文庫、2017.12

(2) 編著

大津透編、『摂関期の国家と社会』、山川出版社、2016.11

大津透・池田尚隆編、『藤原道長事典 御堂関白記からみる貴族社会』、思文閣出版、2017.9

(3) 論文

大津透、「日本古代のオホヤケ構造」、吉川真司・倉本一宏編『日本的時空間の形成』、思文閣出版、171-191頁、2017.5

大津透、「唐令復原と天聖令一賦役令を中心とする覚書一」、佐藤信編『律令制と古代国家』、吉川弘文館、471-501頁、2018.3

(4) 解説

大津透、「解説」、石母田正『日本の古代国家』、岩波文庫、537-554頁、2017.1

(5) 学会発表

国際、大津透、「日唐古文書学比較研究の一視点」、2017中国社会科学論壇（史学）第6届中国古文書学国際研討会、中国社会科学院当代研究所（北京）、2017.8.10

国内、大津透、「令集解研究の回顧と展望」、井上光貞生誕 100 周年記念シンポジウム「日本の律令と律令制研究」、明治大学、2017.9.30

国内、大津透、『御堂関白記』からみる藤原道長の政治権力」、陽明文庫講座「藤原道長とその時代」、セッション杉並、2018.1.27

(6) 会議主催(チェア他)

国際、「第 61 回国際東方学会議」、司会・企画、シンポジウム「東アジアの中の日本文化—奈良平安時代を中心に」、日本教育会館、2016.5.20、(会議記事、『東方学会報』110、15-17 頁、2016.7、Chairperson's Report、『国際東方学会議紀要』59、pp.130-135、2016.12)

(7) 小論

大津透・池田尚隆・磐下徹・黒須友里江、「『御堂関白記』が記憶する栄華」、『鴨東通信』104、2-7 頁、2017.4

大津透、「『御堂関白記』との長いつきあい—藤原道長の実像に迫る」、『歴史書通信』231 号、2-4 頁、2017.5

大津透、「吉田孝先生を偲ぶ」、『唐代史研究』20 号、239-241 頁、2017.8

大津透、「ヤマトから飛鳥へ」、『本』2018 年 1 月号、20-21 頁、2017.12

大津透、「序」、佐藤信編『史料・史跡と古代社会』、吉川弘文館、1-3 頁、2018.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師(集中講義)、同志社大学文学部、2016.8

非常勤講師(集中講義)、山口大学人文学部、2016.9

(2) 学会

国内、日本歴史学会、理事代表 2014.9~2016.7、評議員 2002.7~

国内、東方学会、常務理事 2015.6~2017.6、評議員 2017.6~、国際東方学会議運営委員

教授 **鈴木 淳** SUZUKI, Jun

1. 略歴

1986 年 3 月 東京大学文学部国史学科卒業

1992 年 3 月 東京大学大学院人文科学研究科国史学専攻博士課程修了

(1995 年 3 月 博士(文学)学位取得)

1992 年 4 月 東京大学社会科学研究所助手

1994 年 4 月 東京大学教養学部助教授

1996 年 1-10 月 ドイツ、ボーフム大学 (Ruhr-Universität Bochum) 客員教授

1996 年 4 月 東京大学大学院総合文化研究科助教授 (大学院重点化による)

1999 年 10 月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授

2007 年 4 月 同准教授

2012 年 8 月 同教授

2012 年 8 月-2013 年 3 月 米国、イェール大学 (Yale University) 客員研究員

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近代史

b 研究課題

明治期の機械工業が元来の研究課題。新技術の導入が社会をどのように変えて行くのかという問題関心を中心に、史料に即した明治・大正期の再検討を心がけている。

c 概要と自己評価

講座ものの執筆や共同研究に参加したため、従来より幅広く対象をとらえることができるようになり、産業遺産の研究でも多くの知見を得られたが、手を広げすぎて多忙なため、検討を深め、また体系的に成果を提示することが課題となっている。

d 主要業績

(1) 著書

共著、橋本毅彦編、『安全基準はどのようにできてきたか』、東京大学出版会、2017.5、68-85 頁執筆

共著、小林和幸編、『明治史講義【テーマ篇】』、筑摩書房、2018.3、143-158 頁執筆

(2) 論文

鈴木淳「日本における陸軍航空の形成」横井勝彦編著『航空機産業と航空戦力の世界的展開』日本経済評論社、2016年12月、15-50 頁

鈴木淳、「横須賀軍港の人的構成」上山和雄編『軍港都市史研究IV 横須賀編』清文堂、2017年1月、185-221 頁

(3) 学会発表

国内、鈴木淳、「勸工寮葵町製糸場の設備と意義」、2017年度政治経済学・経済史学会秋季学術大会 自由論題報告、大阪商科大学、2017.10.14

(4) 啓蒙

鈴木淳、「横須賀造船所再考—地元出身者の就業に注目して」『開国史研究』16、2016.3、6-26 頁

鈴木淳、「世界遺産のその先 富岡製糸場と絹産業遺産群」『日本歴史』824、2017.1、88-94 頁

鈴木淳、「近代史を語るうえでの史跡の役割」『月間文化財』644号、2017.5、4-7 頁

鈴木淳、「産業技術史の観点から」独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所保存科学研究センター近代文化遺産室『未来につなぐ人類の技⑩ 近代文化遺産の保存理念と修復理念』独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所、2017.3、47-54 頁

鈴木淳、「賢問愚問解説コーナー 器械製糸と座繰製糸の生産量について」、『歴史と地理』、712 日本史の研究 260、23-26 頁、2018.3

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、史学会、理事、2016.10～2017.12

国内、日本産業技術史学会、理事、2009.5～2017.12、副会長 2017.5～2017.12

国内、政治経済学・経済史学会、編集委員、2009.1～2017.12、理事 2017.10～

(2) 行政

省庁、文化庁、文化審議会専門委員、2014.3～2017.12

准教授 **牧原 成征** MAKIHARA, Shigeyuki

1. 略歴

1994年3月 東京大学文学部国史学専修課程卒業
1996年3月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻修士課程修了
1999年12月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻博士課程単位修得の上退学
2000年1月 日本学術振興会特別研究員 (PD)
2003年3月 博士 (文学) (東京大学) (博人社 390号)
2004年4月 宇都宮大学教育学部助教授 (社会科教育講座)
2007年4月 宇都宮大学教育学部准教授 (同)
2011年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近世史

b 研究課題

近世前期を中心に、土地制度、身分と身分制、商品流通などの観点から近世社会の特質を検討している。

c 概要と自己評価

第一に、中央（上方・江戸）と地方における城下町の形成や税制・経済政策の比較、在地社会における貨幣の循環、金融の問題について検討し、近世社会経済史の全体的な捉え方について自分なりに考える機会を得られた。第二に、江戸幕府に仕える下級の臣下である御家人層における家や相続、組や身分の検討を深め、近世身分制論に関する認識を深めることができた。部分的ではあるが、引き続き自分なりに視野の拡大と深化を果たすことができたと思う。

d 主要業績

(1) 著書

共著、中林真幸ほか、『岩波講座日本経済の歴史2 近世』、2017.8

編著、木村直樹・牧原成征ほか、『十七世紀日本の秩序形成』、吉川弘文館、2018.3

共著、高埜利彦ほか、『日本近世史研究と歴史教育』、山川出版社、2018.3

(2) 論文

牧原成征、「近世的社會秩序の形成」、『日本史研究』、644、24-49 頁、2016.4

牧原成征、「近世史部会報告批判」、『日本史研究』、656、2017.4

Makihara Shigeyuki、「Naissance des guerriers des temps prémodernes : la séparation entre guerriers et paysans à Ōmi - 」、『Histoire, économie & société』、2.2017、59-79 頁、2017.12

(3) 学会発表

国内、牧原成征、「近世に女商人はいいたか?」、国立歴史民俗博物館・共同研究「日本列島社会の歴史とジェンダー」第4回研究会、2017.5.6

国際、牧原成征、「幕臣団における家と身分」、JSPS-CNRS 日仏二国間セミナー「身分制社会における身分と周縁—16～19世紀における日本とフランス」、国際基督教大学、2017.11.24

(4) 予稿・会議録

牧原成征、「近世社会経済史の捉え方」、北海道高等学校日本史教育研究会第40回大会記念シンポジウム「日本近世史研究と歴史教育」、札幌市教育文化会館、2016.8.4

牧原成征、「仙台と江戸、藩政と幕政」、宮城県高等学校社会科（地理歴史科・公民科）教育研究会歴史部会、宮城県仙台第一高等学校、2016.9.23（『宮城県高等学校社会科（地理歴史科・公民科）教育研究会研究紀要』、57、28-33 頁、2017.3）

(5) 会議主催(チェア他)

国内、「史学会大会」、実行委員（企画、趣旨説明、司会）、東京大学法文1号館、2016.11.12

国内、「史学会大会」、実行委員（企画、趣旨説明、司会）、東京大学法文1号館、2017.11.13

(6) 教科書

『詳説日本史B 改訂版』、笹山晴生ほか、山川出版社、2017、編集協力

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、慶応大学文学部、「日本史特殊」、2017.4～2018.3

その他、フランス社会科学高等研究院、「江戸の貧民街ほか」、2018.3

(2) 学会

国内、日本歴史学会、評議員、2017.7～

1. 略歴

- 1989年4月 東京大学教養学部文科Ⅲ類入学
- 1991年4月 東京大学文学部国史学専修課程進学
- 1993年3月 東京大学文学部国史学専修課程卒業
- 1993年4月 東京大学大学院人文科学研究科国史学専攻修士課程進学
- 1995年3月 東京大学大学院人文科学研究科日本史学専攻修士課程修了
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻（日本史学）博士課程進学
- 1997年7月 同 博士課程（日本史学）中退
- 1997年8月 東京大学史料編纂所助手
- 2007年4月 東京大学史料編纂所助教
- 2009年1月 博士（文学）学位取得（東京大学）
- 2012年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本中世史

b 研究課題

中世武家政権の研究、14世紀政治社会史の研究

c 概要と自己評価

もっぱらモンゴル襲来を中心に鎌倉時代後半の外交・政治史研究に取り組んだ。また別に北条時頼政権について検討する機会を得たことにより、13世紀半ばから一貫する朝幕関係を見通す視座を得ることができた。今後は14世紀へと視野を拡大し、室町幕府成立期・南北朝期の政治史研究に進んでいきたいと考えている。また共同研究の一環として『平家物語』に取り組み、歴史学の立場から文学作品にアプローチする方法を模索した。さらに古記録から古文書の作成や授受を読み解くことで、古文書学の新たな一面を開拓することを試みた。

d 主要業績

(1) 論文

高橋典幸、「悪党のゆくえ」、中島圭一編『十四世紀の歴史学』（高志書院）、11-30頁、2016.6

(2) 書評

高橋昌明、『平家と六波羅幕府』、東京大学出版会、『史学雑誌』、125編4号、50-59頁、2016.4

上杉和彦、『鎌倉幕府統治構造の研究』、校倉書房、『歴史学研究』、968、52-55頁、2018.3

(3) 解説

高橋典幸、『熊野御幸記』（藤原定家） 霊地熊野をめざす貴族たち」、松菌斎・近藤好和編『中世日記の世界』（ミネルヴァ書房）、319-329頁、2017.4

高橋典幸、「生駒報告を聞いて 2016年度日本史研究会大会中世史部会報告批判」、『日本史研究』、656号、49-52頁、2017.4

高橋典幸、「日本史における中世」、出口雄一・神野潔・十川陽一・山本英貴（編）『概説日本法制史』（弘文堂）、219-223頁、2018.3

(4) 学会発表

国内、高橋典幸、「御家人の西遷について」、国立歴史民俗博物館基幹研究「中世日本の地域社会における武家領支配の研究」第4回共同研究会、桜城館（佐賀県小城市）、2017.9.6

国内、高橋典幸、「奥州合戦にみる戦い」、武蔵野大学文学研究科博士課程開設記念シンポジウム「武士と合戦」、武蔵野大学（東京都西東京市）、2017.11.16

(5) 啓蒙

高橋典幸、「元弘・建武の乱と相模」、関幸彦（編）『相模武士団』（吉川弘文館）、70-87頁、2017.8

高橋典幸、「足利尊氏らしい文書」、『多分野交流プロジェクト研究ニューズレター』、78、2018.3

(6) 監修

高橋典幸、『学習まんが 日本の歴史5』、集英社、2016.10

高橋典幸、『学習まんが 日本の歴史6』、集英社、2016.10

高橋典幸、『学習まんが 日本の歴史7』、集英社、2016.10

高橋典幸、『学習まんが 日本の歴史8』、集英社、2016.10

(7) 会議主催(チェア他)

国内、「第114回史学会大会・日本中世史部会」、実行委員、日本史部会(中世史部会)司会、東京大学、2016.11.12

国内、「第115回史学会大会・日本中世史部会」、実行委員、日本史部会(中世史部会)司会、東京大学、2017.11.13

(8) 教科書

『詳説日本史』、高橋典幸、その他、山川出版社、2016

(9) 共同研究(産学連携除く)

国内、参画、国立歴史民俗博物館、基幹研究「中世日本の地域社会における武家領主支配の研究」、2016～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、東洋大学(文学部)、「日本史学演習」、2016.4～2018.3

非常勤講師、慶應義塾大学(文学部)、「日本史特殊講義演習」、2016.4～2018.3

その他、第20回常呂公開講座、「古文書の様式と身体」、2016.10

その他、朝日カルチャーセンター新宿、「学びなおす日本史 中世編」、2016.10～2017.1

その他、神奈川県立鎌倉高校、「源頼朝と鎌倉」、2017.6

その他、国土館大学日本史講演会、「中世人のサイン、花押」、2017.6

その他、平成29年度東京都歴史教育研究会秋季講演会、「日本中世史の新しい捉え方 鎌倉幕府と朝廷の関係を見直す」、2017.11

(2) 学会

国内、史学会、編集委員、2016.6～2018.5

国内、日本歴史学会、評議員、2016.7～

国内、日本古文書学会、理事、評議員、2016.9～

准教授 **三枝 暁子** MIEDA, Akiko

1. 略歴

1995年3月 日本女子大学文学部史学科卒業

1995年4月 東京大学文学部歴史文化学科研究生入学

1996年3月 東京大学文学部歴史文化学科研究生修了

1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻(日本史学) 修士課程入学

1999年3月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻(日本史学) 修士課程修了

1999年4月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻(日本史学) 博士課程進学

2003年3月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻(日本史学) 博士課程単位取得退学

2003年4月 日本学術振興会特別研究員(PD)～2005年3月

2005年4月 立命館大学文学部任期制講師～2008年3月

2006年6月 博士(文学)学位取得

2008年4月 立命館大学文学部准教授

2016年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本中世史

b 研究課題

13～16世紀における日本中世の都市社会構造、中世身分制

c 概要と自己評価

13～16世紀の京都を素材として、日本中世の都市の社会構造の分析を進め、特に災害下の民衆の動向や、非人身分に象徴される被差別民の社会的位置について検討した。あわせて、中世身分制研究の研究史をふりかえる機会にも恵まれ、自身の研究の今日的意義について考えることができた。また、この数年来検討してきた、観光言説においては等閑視されがちな京都の特定の「場」や集団の歴史について、広く伝える機会を得ることもできた。今後は、都市居住者の身分・空間が大きく変動していく16世紀の政治および社会の動向について、考察を深めていきたい。

d 主要業績

(1) 著書

共著、出口雄一・神野潔ほか『概説日本法制史』、172-186頁、2018.3

(2) 論文

三枝暁子、「地震と権力—文禄の大地震をめぐって—」、『科学』、86-8、779-782頁、2016.8

三枝暁子、「中世身分制と差別」、『歴史評論』、801、6-19頁、2016.12

(3) 座談会

大山喬平、久野修義、馬田綾子、三枝暁子ほか3名、「大山喬平氏の中世身分制・農村史研究の軌跡—「領主制・中世村落・身分制」研究から「ゆるやかなカースト社会」論、「ムラの戸籍簿」研究へ」、『部落問題研究』218、3-111頁、2016.10

(4) 学会発表

国内、三枝暁子、「近世都市京都の成立をめぐって—「町人」身分について考える—」、歴史学研究会中世史部会例会、2016.12.18

(5) マスコミ

「古都の深層—秘められた場の歴史5 西ノ京」『京都新聞 朝刊』、2017.11.15

「古都の深層—秘められた場の歴史6 嵐山」『京都新聞 朝刊』、2017.12.6

「古都の深層—秘められた場の歴史10 東福寺」『京都新聞 朝刊』、2018.1.17

(6) 共同研究（産学連携除く）

国内、参画、東京大学史料編纂所、共同利用・共同研究拠点一般共同研究「史料編纂所所蔵賀茂別雷神社関係史料を中心とした同社文書および社内組織の研究」、2016.4～2018.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、立命館大学（文学部）「京都学フィールドワーク」、2016.9（夏期集中授業）

非常勤講師、立命館大学（文学部）「京都学フィールドワーク」、2017.9（夏期集中授業）

その他 大山崎ふるさとセンター連続講演会『「保」をめぐる住民のつながり—自治の基層』「京都・西之京七保の歴史と文化—北野社門前の祭祀結合—」、2016.9

(2) 学会

国内、都市史学会、企画委員、編集委員、2017.12～

1 1 中国語中国文学

教授 藤井 省三 FUJII, Shozo

1. 略歴

- 1976年3月 東京大学文学部中国文学科卒業（文学士）
- 1978年3月 東京大学大学院人文科学研究科中国文学専攻課程修了
- 1978年4月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程（中国文学）～1982年3月
- 1979年9月 復旦大学（中国文学系、中国政府国費留学生）～1980年8月
- 1982年4月 東京大学文学部助手
- 1985年4月 桜美林大学文学部助教授（中国文学）
- 1988年4月 東京大学文学部助教授（中国文学）
- 1991年9月 東京大学より博士（文学）学位を授与される
- 1994年7月 東京大学文学部教授
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授
- 2018年3月 定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国近現代文学

b 研究課題

- (1) 魯迅・胡適から莫言・鄭義・高行健・韓寒・郭敬明に至る現代中国文学の研究。
- (2) 夏目漱石・芥川龍之介から松本清張・村上春樹に至る日中両国文化人の交流、影響関係の研究。
- (3) 香港・台湾・シンガポール・南洋における文学と地域主義との関わりに関する研究。
- (4) 中国語圏映画の研究。

c 概要と自己評価

(1)(2)に関しては、中国語論文「魯迅文学日語翻訳思考—以竹内好的《呐喊》爲中心」（『華東師範大学学報（哲学社会科学版）』、73-78頁、2017.1）などを発表した。

(3)に関しては中国語論文「東山彰良《流》中的台灣表象」（『聯合文学』台北、第392号、94-99頁、2017.6）などを発表した。

(4)に関しては講演「魏徳聖による日台関係史三部作：『海角七号』2008、『セデック・バレ』2011、『KANO』2012」（第3回日台作家会議、東京大学伊藤ホール、2017.11.4）などを行った。

d 主要業績

(1) 著書

共著、藤井省三、『文化・越境・表象——中日文化交流研究』、重慶・西南師範大学出版社、2016.1

共著、藤井省三、『中国現代作家手稿及文献国際学術研討会論文集』、上海・上海世紀出版集團 上海文化出版社、2016.4

共著、藤井省三、『そばと私』、季刊「新そば」編、文春文庫、2016.9

共著、『越境する中国文学』編集委員会（編）、『越境する中国文学』、東方書店、2018.2

(2) 論文

藤井省三、「魯迅文学日語翻訳思考——以竹内好的《呐喊》爲中心」、『華東師範大学学報（哲学社会科学版）』、73-78頁、2017.1

藤井省三、「魯迅と夏目漱石および村上春樹——坊っちゃん・阿Q・牛河利治の系譜 付録・北京で魯迅に会い損ねた芥川龍之介」、『二松学舎大学人文論叢』、第98輯、1-37頁、2017.3

藤井省三、「アジア文学は、いま——中国・台湾文学を中心に」、『P.E.N.』、443号、22-23頁、2017.5

藤井省三、「魯迅と佐藤春夫——兩位作家間的互訳与交往」、『社会科学輯刊』、2017.5

藤井省三、「東山彰良《流》中的台灣表象」、『聯合文学』台北、第392号、94-99頁、2017.6

(3) 書評

- 閻連科ほか、『閻連科ほか』、『みすず』、24-25 頁、2016.2
閻連科、『年月日』、『東京新聞』、2016.12
読書アンケート特集、『読書アンケート特集』、『みすず』、2017 年 1、2 月合併号、5-6 頁、2017.1
炸裂志、閻連科（著）、泉京鹿（訳）、『公明新聞』、2017.2.6 掲載、2017.2
読書アンケート特集、『読書アンケート特集』、『みすず』、2018 年 1、2 月合併号、7 頁、2018.1

(4) 解説

- 藤井省三、爲陳朝輝博士著『文学者の革命——論魯迅与日本無産階級文学』作序、『文学者の革命:論魯迅与日本無産階級文学』陳朝輝著、1-3 頁、2017.8

(5) 学会発表

- 国際、藤井省三、「東アジアを生きる文学」、東アジアを生きる文学、東京大学伊藤国際学術研究センター地下 1 階 ギャラリー1、2016.2.16
国際、藤井省三、「現代日中文化交流の系譜：夏目漱石・魯迅・太宰治・村上春樹と村上チルドレン 付論、「竹内魯迅」の問題性」、互為方法的中国和日本／相互・方法としての中国と日本、北京大学、2016.3.15
国際、藤井省三、「On the representation of Taiwan image in the works of Taiwanese authors in Japanese language after the war: from Qiu Yonghan (邱永漢) to HIGASHIYAMA Akira (東山彰良 or 王震緒)」、国際台湾文学研討会、カリフォルニア大学サンタバーバラ校 UCSB、2016.5.10
国際、藤井省三、「魯迅电影作品在日本的接受以《阿Q正传》(1981)为中心」、The Story of Ecology and Religion、ソウル、三育大学、2016.7.7
国際、藤井省三、「佐藤春夫与魯迅——两位作家的相互翻译和交往」、2016 魯迅文化論壇、中国人民大学（北京）、2016.9.24
国際、藤井省三、「魯迅と外国文学——エロシエンコ童話集、落谷虹児詩画集からマーク・トウェイン『イブの日記』まで」、東京大学週系列活動講演、台湾大学、2016.11.3
国内、藤井省三、「日本における現代中国詩受容略史」、中国詩人との交流シンポジウム、東京大学文学部 3 号館 5 階 英文辞書室、2017.1.23
国内、藤井省三、「アジア文学は、いま——中国・台湾文学を中心に」、日本文学、世界文学のいま、帝京大学メディアライブラリーセンター、2017.2.28
国内、藤井省三、「魯迅と日本、仙台における魯迅」、第 116 回日本皮膚科学会総会、仙台国際センター、2017.6.3
国際、藤井省三、「魯迅と日本近代作家：夏目漱石『坊っちゃん』と『阿Q正伝』」、文藻外語大学シンポ：東アジアの文学交流、2017.6.10
国際、藤井省三、「作爲日本“国民作家”的夏目漱石与魯迅」、大師対話：魯迅与夏目漱石、紹興文理学院、2017.9.11
国際、藤井省三、「魯迅文学日語翻訳与標点問題：以竹内好的《呐喊》翻譯爲中心」、北大中文系“現代文学与書写語言”国際学術研討会、2017.9.22
国内、藤井省三、「日本の「国民作家」としての夏目漱石と魯迅」、漱石と魯迅、百年の“対話”（大師対話：魯迅与夏目漱石）、東京大学法学政治学系総合教育棟 102 号室、2017.10.21
国際、藤井省三、「魏徳聖による日台関係史三部作：『海角七号』2008、『セデック・バレ』2011、『KANO』2012』、第 3 回日台作家会議、2017.11.4
- (6) 会議主催(チェア他)
- 国際、「日本という壁」シンポジウム、チェア、Panel 4 日本の「壁」を語る詩人と作家 / The Challenge of Japan in Contemporary Chinese Literature、東京大学伊藤ホール、2016.9.17
国際、「第 116 回日本皮膚科学会総会」、チェア、特別企画 5 『魯迅』、仙台国際センター、2017.6.2~2017.6.4
国際、「第 3 回日台作家会議」、主催、東大伊藤ホール、2017.11.3~2017.11.4
- (7) 総説・総合報告
- 藤井省三、「老外漢学家的車轆轤話(5)現代中国学生与毛沢東的《体育之研究》」、『日経中文網』、<http://cn.nikkei.com/columnviewpoint/column/23538-2017-02-04-06-57-45.html>、2017.2
藤井省三、「老外漢学家的繰り言(5)現代中国の学生と毛沢東の「体育之研究」」、『日経中文網』、<http://cn.nikkei.com/columnviewpoint/column/23538-2017-02-04-06-57-45.html?start=1>、2017.2
藤井省三、「老外漢学家的車轆轤話(6)村上春樹中的“南京大虐殺”——新作《刺死騎士团长》中的中国』、『日経中文網』、<https://cn.nikkei.com/columnviewpoint/column/24257-2017-03-20-04-59-39.html>、2017.3

藤井省三、「“老外漢学家”の繰り言(6)村上春樹の中の「南京事件」——新作『騎士団長殺し』における中国』、『日経中文網』、<http://cn.nikkei.com/columnviewpoint/column/24257-2017-03-20-04-59-39.html?start=1>、2017.3

藤井省三、「黒田真美子教授のガリ勉文学少女時代」、法政大学国文学会『日本文学誌要』、28-29頁、2017.3

藤井省三、「老外漢学家的車轆轤話(7)杭州の魯迅桜』、『日経中文網』、<http://cn.nikkei.com/columnviewpoint/column/25199-2017-05-19-04-55-00.html>、2017.5

藤井省三、「“老外漢学家”の繰り言(7)杭州の魯迅桜』、『日経中文網』、<http://cn.nikkei.com/columnviewpoint/column/25199-2017-05-19-04-55-00.html?start=1>、2017.5

藤井省三、「老外漢学家的車轆轤話(8)東京大学第90届五月校園節与中国高校的聯歡会』、『日経中文網』、<http://cn.nikkei.com/columnviewpoint/column/25542-2017-06-13-04-56-00.html>、2017.6

藤井省三、「“老外漢学家”の繰り言(8)東大第90回五月祭と中国の大学聯歡会』、『日経中文網』、<http://cn.nikkei.com/columnviewpoint/column/25542-2017-06-13-04-56-00.html?start=1>、2017.6

藤井省三、「老外漢学家的車轆轤話(9)走進仙台皮膚科学会的“魯迅”』、『日経中文網』、<https://cn.nikkei.com/columnviewpoint/column/26032-2017-07-17-04-54-00.html>、2017.7

藤井省三、「“老老外漢学家(老人外人中国文学者)”の繰り言(9)仙台の皮膚科学会における魯迅』、『日経中文網』、<http://cn.nikkei.com/columnviewpoint/column/26032-2017-07-17-04-54-00.html?start=1>、2017.7

藤井省三、「老外漢学家的車轆轤話(10)由首爾的“中国電影論壇”想起』、『日経中文網』、<http://cn.nikkei.com/columnviewpoint/column/26745-2017-08-30-04-54-00.html>、2017.8

藤井省三、「“老老外漢学家(老人外人中国文学者)”の繰り言(10)ソウルの「中国映画フォーラム」で思い出すこと』、『日経中文網』、<http://cn.nikkei.com/columnviewpoint/column/26745-2017-08-30-04-54-00.html?start=1>、2017.8

藤井省三、「老外漢学家的車轆轤話(11)中国的網絡謠言和電視劇』、『日経中文網』、<http://cn.nikkei.com/columnviewpoint/column/26959-2017-09-17-04-51-10.html?limitstart=0>、2017.9

藤井省三、「“老老外漢学家(老人外人中国文学者)”の繰り言(11)中国のネットデマとテレビドラマ』、『日経中文網』、<http://cn.nikkei.com/columnviewpoint/column/26959-2017-09-17-04-51-10.html?start=1>、2017.9

藤井省三、「老外漢学家的車轆轤話(12)“网”(枉)言可畏——中国的网络謠言和魯迅的教诲』、『日経中文網』、<http://cn.nikkei.com/columnviewpoint/column/27600-2017-10-30-04-51-40.html>、2017.10

藤井省三、「“老老外漢学家(老人外人中国文学者)”の繰り言(12)“網”言可畏[もうげんおそるべし]——中国のネットデマと魯迅の教え』、『日経中文網』、<http://cn.nikkei.com/columnviewpoint/column/27600-2017-10-30-04-51-40.html?start=1>、2017.10

藤井省三、「“白芭花[ルビ:しろすすき]から“幻の黄金の公孫樹”への回帰』、『2017黄金の公孫樹——日台作家東京会議/台日作家東京会議』、6-7頁、2017.11

藤井省三、「從「白芭花」到「夢幻的黄金公孫樹」的回歸』、『2017黄金の公孫樹——日台作家東京会議/台日作家東京会議』、8-9頁、2017.11

藤井省三、「老外漢学家的車轆轤話(13)多重“自画像”的記憶——山形電影節所觀中国電影紀錄片』、『日経中文網』、<https://cn.nikkei.com/columnviewpoint/column/28530-2017-12-27-04-51-20.html?limitstart=0>、2017.12

藤井省三、「“老老外漢学家(老人外人中国文学者)”の繰り言(13)多重の“自画像”としての記憶——山形映画祭で見た中国ドキュメンタリー映画』、『日経中文網』、<https://cn.nikkei.com/columnviewpoint/column/28530-2017-12-27-04-51-20.html?start=1>、2017.12

藤井省三、「日本魯迅研究の歴史と現状—藤井省三教授訪談 聞き手:呂周聚』、『社会科学輯刊』、2018.5

藤井省三、「希望語る魯迅に救われ』、『読売新聞』、2018年3月28日夕刊、2018.8

(8) マスコミ

「現代北京の“老炮兒”と民国期の閩土』、『日経中文網』、日本経済新聞社、2016

「東京・池袋で余華さんと演劇『兄弟』を見て』、『日経中文網』、日本経済新聞社、2016.4.21

「老外漢学家的繰り言(3)「永遠的少年」村上春樹がイエール大学名誉文学博士となる時』、『日経中文網』、日本経済新聞社、2016.7.15

「老外漢学家的繰り言(4)莫言が名調子で語る“The Book of Novels”』、『日経中文網』、日本経済新聞社、2016.12.28

(9) 受賞

国内、林敏潔、藤井省三、Lin Minjie, FUJII Shozo、第4回岡倉天心翻訳賞、国際アジア共同体学会主催、毎日新聞社協賛、2016.11.19

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 特別講演、中国人民大学、「魯迅与夏目漱石:關於《哥兒》与《阿Q正伝》之系譜關係」、2016.3
- 特別講演、中国人民大学、「關於魯迅恋愛小説的比較研究:《傷逝》与電影以及森鷗外《舞姫》」、2016.4
- 特別講演、紀伊國屋書店新宿本店、「魯迅」、2016.4
- 特別講演、信濃木崎夏期大学、「魯迅と日本文学との影響關係——夏目漱石・芥川龍之介・村上春樹のばあい」、2016.8
- 特別講演、高麗大学、「魯迅与村上春樹」、2016.10
- 特別講演、一般社団法人アジア連合大学院機構主催 グローバルアジア中国塾第2回、「現代中国文化論:ノーベル賞作家莫言と映画監督 ジャ・ジャンクー(賈樟柯)を中心に」、2016.10
- 特別講演、文藻外語大學日本語文系(台湾高雄市)、「村上春樹和中國語圈文學」、2016.11
- 特別講演、中国人民大学、「魯迅与芥川龍之介」、2016.11
- 特別講演、中国人民大学、「魯迅与愛羅先珂」、2016.11
- 特別講演、中国人民大学、「在紐約談戀愛的胡適:文学革命理論与達達派画家 Edith Clifford Williams」、2016.11
- 特別講演、中国人民大学、「魯迅与莫言」、2016.12
- 特別講演、中国人民大学、「圍繞現代中国小説的電影改編——魯迅、陳白塵的《阿Q正伝》与余華、張芸謀的《活着》」、2016.12
- 特別講演、北京師範大学、「魯迅与日本現代文学」、2016.12
- 特別講演、中国人民大学文学院閻連科教授講義、「跟青年作家座谈会」、2016.12
- 特別講演、かわさき市民フロンティア文学講座、「村上春樹の中の魯迅」、2017.3
- その他、かわさき市民フロンティア、「ノーベル文学賞作家莫言の人と文学」、2017.3
- その他、南京師範大学外語学院、「魯迅与村上春樹以及《刺殺騎士团长》」、2017.3
- その他、南京航空航天大学外語学院、「魯迅与村上春樹」、2017.3
- その他、杭州師範大学外語学院、「魯迅与村上春樹」、2017.3
- その他、台湾文化センター、「閲読時光~映像と文学の蜜月~楊遠(ヤン・クイ、ようき、1905-85)『新聞配達夫(1932-1934)』」、2017.7
- その他、信州木崎夏期大学、「第1講中国文学の現在、ノーベル文学賞作家莫言と村上春樹チルドレン、第2講中国文学の現在中国の村上春樹チルドレン」、2017.8
- その他、中国人民大学「海外名師」講演、「魯迅《故郷》与松本清張的初期小説《父系之手指》」、2017.9
- その他、中国人民大学「海外名師」講演、「魯迅与村上春樹」、2017.9
- その他、中国人民大学「海外名師」講演、「魯迅《藤野先生》(1926)与太宰治(1909-48)『惜別』(1945)」、2017.9
- その他、かわさき市民アカデミー文学講座・古典は新訳で召し上がれ!古典新訳で楽しむ世界文学、「近現代中国文学と魯迅——『故郷阿Q正伝』『酒樓/非攻』第1回近現代中国文学史の中の魯迅(スーパー・ダイジェスト版)「故郷」を例として」、2017.10
- その他、かわさき市民アカデミー文学講座・古典は新訳で召し上がれ!古典新訳で楽しむ世界文学、「近現代中国文学と魯迅——『故郷阿Q正伝』『酒樓/非攻』第2回魯迅を読む(1)芥川龍之介「毛利先生」(1919年1月)と魯迅「孔乙己」(1919年3-4月頃)」、2017.10
- その他、かわさき市民アカデミー文学講座・古典は新訳で召し上がれ!古典新訳で楽しむ世界文学、「近現代中国文学と魯迅——『故郷阿Q正伝』『酒樓/非攻』第3回魯迅を読む(2)森鷗外「舞姫」(1890)と魯迅「愛と死(原題:傷逝)」(1925執筆?)、魯迅「非攻」(1934作)と酒見賢一小説『墨攻』(1991)およびアンディ・ラウ(劉徳華)主演映画『墨攻』(2006)」、2017.10
- その他、第13回東大中文村上春樹研究会、「『騎士团长殺し』の中の中国」、2017.10
- その他、北京外国語大学、「魯迅在東亞——以日本人的閲読史爲主、從太宰治、大江健三郎、寺山修司以及村上春樹」、2017.11
- その他、中国人民大学「海外名師」講演、「村上春樹“超然”時代的終結:以《列克星敦的幽霊》中東亜戦争的記憶爲中心」、2017.12
- その他、中国人民大学「海外名師」講演、「魯迅与竹内好:帰化翻譯之功罪」、2017.12
- その他、南京・浦江学院、「魯迅と村上春樹および『騎士团长殺し』の中の中国」、2017.12
- その他、南京師範大学日語系大学院ゼミ、「魯迅与竹内好:帰化翻譯之功罪」、2017.12
- その他、南京師範大学・中北大日語系、「村上春樹のなかの中国:『IQ84』と「阿Q正伝」および『騎士团长殺し』と南京事件」、2017.12

その他、広東外語外貿大学東方語言文化学院「東亜魯迅研究」座談会、「日本魯迅研究中的比較文学方法」、2018.1
その他、東京・台湾文化センター、「『海峡を渡る幽霊——李昂短篇集』刊行記念・著者来日トーク」、2018.2
その他、東大文学部第235回文化交流研究懇談会、「魯迅と日本文学——芥川龍之介、寺山修司、村上春樹を中心に」、
2018.2
その他、東大文学部1大教室、「最終講義——魯迅と現代東アジア文学史」、2018.3

教授 **大西 克也** ONISHI, Katsuya

1. 略歴

1985年3月 東京大学文学部中国語中国文学専修課程卒業
1985年4月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻修士課程入学
1987年3月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻修士課程修了
1987年4月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻博士課程進学
1988年9月 中華人民共和国北京大学中国語言文学系留学（至1990年2月）
1990年3月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻博士課程退学
1990年4月 神奈川大学外国語学部専任講師
1993年4月 神奈川大学外国語学部助教授（至1995年3月）
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
1998年3月 文部省在外研究員に採用され、中国広州市中山大学に於いて研修（至1998年12月）
2013年1月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（現在に至る）

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国語学、中国古文字学

b 研究課題

(1) 上古中国語の文法研究

構文と文法範疇の相関的変容の諸相、及びそれに関与する様々なファクターの解明を目指している。

(2) 戦国秦漢出土文字資料の研究

戦国秦漢時代の出土文字資料の解読の他、言語がどのように文字化されたかという視点に基づき、地域毎の用字法の相違、秦による文字統一の実態や文字政策に関する探究を行っている。

c 概要と自己評価

研究課題(1)に関しては、上古の中国人が認識した世界をどのように言語化したのか、コーパスと残された文献の背後にはどのような世界が広がっているのかという新たな問題意識から研究を進めている。研究課題(2)に関しては、統一前後の出土資料における漢字の使用実態の解明を進めているが、近年は秦系や楚系の文献に見られる他国の文字影響に着目し、一筋縄ではいかぬ文字の歴史の複雑性に焦点を当てている。

d 主要業績

(1) 論文

大西克也、「釋「喪」「亡」」、『第二十八屆中國文字學國際學術研討會論文集』、2017.5

木村英樹、大西克也、松江崇、木津祐子、「中国語史における疑問詞の指示特性——（人）を解とする疑問詞を中心に」、

『楊凱榮教授還曆記念論文集 中日言語研究論叢』、2017.7

大西克也、「浙江大学蔵竹簡『左伝』は研究資料たり得るか」、『汲古』、72、2017.12

(2) 学会発表

国際、大西克也、「論上古漢語代詞“之”和“其”的替代功能」、第九屆國際古漢語語法研討會、Humboldt-Universität zu Berlin、2016.7.29

国内、大西克也、「上古中国語における疑問詞の指示特性」、日本中国語学会第66回全国大会、立命館アジア太平洋大学、2016.11.12

国際、大西克也、「伝世文献から見た楚簡における「喪」と「亡」について」、国際シンポジウム「出土資料を通じた中国文献の再評価」、日本女子大学、2017.3.18

国際、大西克也、「説“見”——清濁別義的另一個解釋」、漢語史研究国際研討會(2017)、復旦大学、2017.9.16

国際、大西克也、「説“雨”和“雪”——氣象詞語在古漢語中的語法表現」、北京大學第一屆古典學國際學術研討會——中國古代語言、文學和文獻研究的古典學視野、北京大学、2017.10.19

(3) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、大西克也、研究代表者、「概念表現と実体表現から見た中国語文法史の展開」、2014～2017

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、中央研究院語言學研究所、「上古漢語疑問代詞的指稱特點——以問人代詞為中心」、2017.2

セミナー、日比谷図書文化館、「漢字と秦の文字統一——最新の出土資料から見えてきたもの」、2017.3

セミナー、漢文教育学会、「出土資料から見た秦の文字統一」、2017.7

(2) 学会

国内、東方学会、学術委員、2011～、日本中国学会、評議員、2013.4～、

書学書道史学会、学術諮問委員、2016.4～

教授 齋藤 希史 SAITO, Mareshi

1. 略歴

1986年3月	京都大学文学部文学科中国語学中国文学専攻卒業
1986年4月	京都大学文学部聴講生
1988年4月	京都大学大学院文学研究科修士課程中国語学中国文学専攻入学
1990年3月	京都大学大学院文学研究科修士課程中国語学中国文学専攻修了(文学修士)
1990年4月	京都大学大学院文学研究科博士課程中国語学中国文学専攻進学
1991年3月	京都大学大学院文学研究科博士課程中国語学中国文学専攻退学
1991年4月	京都大学人文科学研究所助手
1997年4月	奈良女子大学文学部講師
1999年4月	奈良女子大学文学部助教授
2000年4月	国文学研究資料館文献資料部助教授
2000年4月	奈良女子大学文学部併任助教授
2001年10月	東京大学大学院総合文化研究科併任助教授
2002年10月	東京大学大学院総合文化研究科助教授
2002年10月	国文学研究資料館文献資料部併任助教授
2007年4月	東京大学大学院総合文化研究科准教授
2012年4月	東京大学大学院総合文化研究科教授
2015年5月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国古典文学

b 研究課題

- (1) 中国古典詩文、とりわけ六朝から唐宋にかけての詩賦および文学論。
- (2) 古代から近代にいたる漢字圏の生成と展開、またその言語・文字・文学・出版。

c 概要と自己評価

- (1)については、単著『詩のトポス 人と場所を結ぶ漢詩の力』等において成果を示した。
- (2)については、論文「近世日本の漢詩文：秩序・流通・手法」(『漢』の声：吟詠される佳句)および夏目漱石の漢詩などを対象とした解説・講演・論文等において成果を示し、また科学研究補助金(A)「東アジア古典学の次世代拠点形成」等の共同研究活動を積極的に行っている。

d 主要業績

(1) 著書

- 単著、齋藤希史、『詩のトポス 人と場所を結ぶ漢詩の力』、平凡社、2016.5
辞書・辞典・事典、齋藤希史、『漱石辞典』(「漢学」「韓非」「韓愈」「史記」「春秋・春秋左氏伝・公羊伝」「晋書」「楚辞」「杜甫」「李白」執筆)、翰林書房、2017.5
共著、齋藤希史、『漢文脈の漱石』(「漱石と漢詩文：修辭と批評」執筆)、翰林書房、2018.3

(2) 論文

- 齋藤希史、「近世日本の漢詩文：秩序・流通・手法」、『日本語学』、35(10)、56-65 頁、2016.9
齋藤希史、「(漢)の声：吟詠される佳句」、『中古文学』、100、81-93 頁、2017.11

(3) 学会発表・講演

- 齋藤希史、「近代東亞世界的形成與漢字圏：翻譯、訓讀體、亞洲主義」、國際學術講座「亞洲共同體與語言、文化、消費」、文藻外国語大学(台湾・高雄)、2016.5.2
齋藤希史、「詩の翻譯：欧・漢・和」、集英社高度教養寄付講座第6回講演会、東京大学文学部、2016.7.2
齋藤希史、「漢字世界の言と文」、嘉泉大学校アジア文化研究所第30回國際學術大会「ユーラシア文明とアルタイ」、嘉泉大学校アジア文化研究所(韓国・ソウル)、2016.9.30
齋藤希史、「漱石と漢詩文：修辭から世界へ」、二松學舎大学創立140周年記念事業シンポジウム「漢文脈の漱石」、二松學舎大学、2017.3.11
齋藤希史、「(漢)の声：吟詠される詩文」、中古文学会春季大会シンポジウム「平安文学における(漢)の受容—その日本化の様相」、東京女子大学、2017.5.27

(4) 書評・解説等

- 齋藤希史、「郎君独寂寞(漢文ノート30)」、『UP』、45(4)、42-47 頁、2016.4
齋藤希史、「起承転結(漢文ノート31)」、『UP』、45(7)、55-59 頁、2016.7
齋藤希史、「解説 切りつめたことばを解きほぐす」、『文春学藝ライブラリー 漱石の漢詩』、文藝春秋、2016.8
齋藤希史、「読書の秋(漢文ノート32)」、『UP』、45(10)、35-42 頁、2016.10
齋藤希史、「杜甫詩注(漢文ノート33)」、『UP』、46(1)、39-45 頁、2017.1
齋藤希史、「漱石における漢詩文：小説とのかかわりから」、『漢文教室』(大修館書店)、203、6-15 頁、2017.5
齋藤希史、「友をえらばば(漢文ノート34)」、『UP』、6(7)、51-57 頁、2017.7
齋藤希史、「スクナシジン(漢文ノート35)」、『UP』、46(10)、46-52 頁、2017.10
齋藤希史、「漢詩人(漢文ノート36)」、『UP』、47(1)、52-59 頁、2018.1
齋藤希史、「翻訳語事情」、『読売新聞』、2016.4.4(「積極的」)、2016.6.6(「声明」)、2016.8.1(「体操」)、2016.10.3(「鉄道」)、2016.12.5(「郵便」)、2017.2.6(「世代」)、2017.4.3(「辞書」)、2017.6.5(「歴史」)、2017.08.7(「多様性」)、2017.10.2(「文化」)、2017.12.4(「常識」)、2018.2.12(「試験」)
齋藤希史、書評、下定雅弘・松原朗編『杜甫全詩訳注 全4巻』講談社学術文庫、『産経新聞』、2016.11.7

(5) 研究テーマ

- 文部科学省科学研究費補助金、齋藤希史、研究代表者、「東アジア古典学の次世代拠点形成—国際連携による研究と教育の加速」、2015~2018

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、早稲田大学政治経済学部

授業担当教員、ベトナム国家大学人文社会大学大学院・ベトナム国家大学日越大学大学院（ベトナム・ハノイ）

招聘教授、コレージュ・ド・フランス（フランス・パリ）、2017.4.22-5.19（セミナー“Qu'est-ce que le monde sinographique?”
他）

セミナー、“Japanese Vernacular Kambun?”、プリンストン大学 EAS（米国・プリンストン）、2016.9.21

セミナー、「漱石における小説と漢詩文——二〇世紀の表現／批評行為として」、コロンビア大学 EALAC（米国・ニューヨーク）、2016.9.22

ワークショップ、「日本漢文」、コロンビア大学 EALAC、2016.9.23

特別講義、「漢字圏としての東アジア」、東西大学校日本研究センター（韓国・釜山）、2017.11.24

特別講義、「漢籍の声」、浙江工商大学東亜語言文化学院（中国・杭州）、2018.3.12

(2) 学会

国内、中国社会文化学会理事、東方学会学術委員、六朝学術学会理事、日本中国学会評議員、日本近代文学館運営審議委員

12 東洋史学

教授 水島 司 MIZUSHIMA, Tsukasa

1. 略歴

1976年3月 東京大学文学部東洋史学専修課程卒業
1976年4月 東京大学大学院人文科学系研究科修士課程入学
1979年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手
1988年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授
1992年12月 東京大学文学部より博士号（文学）取得
1995年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授
1997年10月 東京大学大学院人文社会系研究科教授
2018年3月 定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

南アジア近現代史

b 研究課題

1. 歴史研究への地理情報システムの応用
2. 在地社会論、ミーラース体制からの18世紀南インド経済史分析
3. 歴史統計分析による18-20世紀の長期変動の分析
4. グローバル・ヒストリーと南アジア

c 概要と自己評価

学内での教育・研究活動に加え、基盤研究S「インド農村の長期変動」の研究代表、人間文化研究機構「現代インド地域研究」東京大学拠点代表を務め、また、科研（基盤研究A）「グローバルヒストリー研究の新展開と近現代世界史像の再考」の分担者となるなど、学外研究者との共同研究の組織化に尽力している。また、NHKの高校生向け世界史講座を担当し、一般向けの社会教育も行った。

d 主要業績

(1) 著書

編著、水島司、『環境に挑む歴史学』、勉誠出版、2016
共著、水島司・島田竜登、『グローバル経済史（放送大学教材）』、放送大学、2018.3

(2) 論文

水島司、「南インドの環境と農村社会の長期変動」、『環境に挑む歴史学』、246-263頁、2016
水島司、「足元の空間から共同性構築を—グローバル・ヒストリーの中の国家」、『2100年へのパラダイム・シフト』、71-73頁、2017
水島司、「インドにおける都市・農村の長期変動に関する研究」、『科研費NEWS2017年度』、1、2017

(3) 学会発表

国際、水島司、"Did the Shift from the Share-Distribution System to the Raiyatwari System cause any Structural Change in Class Differentiation?"、日本南アジア学会第29回全国大会、2016.9.24

(4) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、研究成果公開促進費・データベース、水島司、研究代表者、「アジア地図データベース」、2017～
受託研究、学振・二国間交流事業（共同研究）、水島司、研究代表者、「インドと日本における都市成長の比較史：鉄鋼都市を事例にして」、2017～2018

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本南アジア学会、理事長、2016.10～2018.9

1. 略歴

- 1991年3月 東京大学文学部東洋史学専修課程卒業
1993年3月 東京大学大学院人文科学研究科（東洋史学）修士課程修了
1995年3月 東京大学大学院人文科学研究科（東洋史学）博士課程中退
1995年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手
1999年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所情報資源利用研究センター助手
[2000年5月に、東京大学より博士（文学）の学位を取得]
2001年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

主な研究課題は、近代中国における政治体制の模索、都市政治、経済建設、ナショナリズム、日中関係史。最近では、近代中国における歴史学の形成と日本の「東洋史学」の交流の考察にも関心がある。

c 概要と自己評価

中国近代における政治体制、中国沿海部と内陸部の経済的關係、知識人の国際関係認識など、複数の研究課題を並行して進めている。それらの成果の一部は論文にまとめて発表することができたが、それぞれのテーマに即した著作としてまとめていく作業も進行中である。また、科学研究費基盤(C)「20世紀初頭の中国における軍制の変遷と政治統合」にも取り組んでいる。

d 主要業績

(1) 論文

- 吉澤誠一郎、「白鳥庫吉の東洋史学——史学史的考察として」、渡邊義浩編『中国史学の方法論』汲古書院、2017.5
吉澤誠一郎、「中華民国初期における大總統就任式典」、『東洋史研究』76巻1号、2017.6
吉澤誠一郎、「義和団をめぐる記憶と中国ナショナリズムの位相」、川田順造編『ナショナル・アイデンティティを問い直す』山川出版社、2017.10
吉澤誠一郎、「民国初年の対日ボイコットにおける東南アジア華僑と孫文」、日本孫文研究会編『孫文とアジア太平洋——ネイションを越えて』汲古書院、2017.11

(2) 学会発表

- 国際、吉澤誠一郎、「白鳥庫吉の東洋史学——史学史的考察として——」、第8回日中学者中国古代史論壇、日本教育会館、2016.5.20
国際、吉澤誠一郎、「武士道の近代命運：晚清中國的尚武理念與性別重構」、第5届「漢化・胡化・洋化」：傳統社會的挑戰與回應國際學術研討會、國立中正大學(台灣嘉義縣民雄鄉)、2016.11.5
国際、吉澤誠一郎、「民国初年の対日ボイコットにおける東南アジア華僑と孫文」、孫文生誕150周年記念國際學術シンポジウム、神戸大学統合研究拠点、2016.11.27
国内、吉澤誠一郎、「辛亥革命にみる軍人の忠誠と反逆」、第67回日本西洋史学会小シンポジウム「忠誠のゆくえ——近代移行期における軍事的エトスの比較史」、一橋大学、2017.5.22
国内、吉澤誠一郎、「「文人」瞿秋白の革命ロシア体験」、史学会第115回大会シンポジウム「ロシア革命と20世紀」、東京大学、2017.11.11

3. 主な社会活動

(1) 学会等の委員

- 国内、日本学術会議、連携会員（2014年10月～現在）
国内、東洋文庫、兼任研究員（2009年4月～現在）
国内、中国社会文化学会、理事（2001年7月～現在）
国内、東方学会、学術委員（2013年6月～現在）
国内、東洋史研究会、評議員（2008年11月～現在）
国内、史学研究会、評議員（2013年6月～現在）

(2) 非常勤など

放送大学客員准教授 (2013年4月～現在)

准教授 **佐川 英治** SAGAWA, Eiji

1. 略歴

- 1990年3月 岡山大学文学部史学科卒業
- 1990年4月 大阪市立大学文学研究科修士課程東洋史学専攻入学
- 1992年3月 同上 修了。文学修士の学位を取得
- 1992年4月 大阪市立大学文学研究科博士課程東洋史学専攻入学
- 1994年9月 武漢大学(中国)にて歴史系高級進修生として在外研究(～1996年7月)
- 2001年3月 大阪市立大学文学研究科博士課程東洋史学専攻修了。大阪市立大学文学研究科より博士(文学)の学位を取得
- 2001年10月 岡山大学文学部助教授
- 2006年4月 岡山大学大学院社会文化科学研究科助教授
- 2007年4月 岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授
- 2010年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国古代史

b 研究課題

皇帝権力の形成と展開、4～5世紀の遊牧民族の南下と社会変容、都城史、石刻資料を用いた社会史

c 概要と自己評価

主に都城史の分野で自著『中国古代都城の設計と思想』(勉誠社、2016年)で残された幾つかの課題について研究をおこなった。共著の『東アジア古代都市のネットワークを探る』は2105年に東京大学で開催した国際シンポジウムをもとにした論文集である。また科研費、挑戦的萌芽研究「7世紀東アジア世界における文化的多様性とその淵源についての研究」を進めた。その中で論文「北魏末の北辺社会と六鎮之乱」や学会発表「唐長安城の朱雀大街と日本平城京の朱雀大路」など特に高く評価できる研究成果を生んだ。

d 主要業績

(1) 著書

共著、黄曉芬、鶴間和幸編、佐川英治ほか17名、『東アジア古代都市のネットワークを探る一日・越・中の考古学最前線一』、2018.2

(2) 論文

佐川英治、「従西郊到円丘—《文館詞林・後魏孝文帝祭円丘大赦詔》所見孝文帝的祭天礼儀—」、『中古中国研究』、1、1-26頁、2017.6

佐川英治、「ロンドン “Law and Writing Habits in the Ancient World” 学会参加記」、『東方学』、134、112-121頁、2017.7

佐川英治、「鄴城に見る都城制の転換」、『アジア遊学』、213、2017.8

佐川英治、「北魏末の北辺社会と六鎮之乱—以楊鈞墓誌和韓買墓誌為線索—」、『魏晋南北朝隋唐史資料』、36、2017.11

(3) 学会発表

国際、佐川英治、「北魏末期北辺社会と六鎮之乱—以楊鈞墓誌和韓買墓誌為線索—」、秦漢魏晋南北朝史国際学術研討会、2016.8.19

国際、佐川英治、“Research into a Northern Qi Pillar Honouring a Local Buddhist Benevolent Society”、International Conference “Law and Writing Habits in the Ancient World”、2016.9.1

国際、佐川英治、「六朝建康城と東亜都城」、「六朝歴史と南京記憶」国際学術研討会、2017.3.11

国際、佐川英治、「鄴城所見中國都城制度的轉換」、中国魏晉南北朝史学会第十二届年会暨国際學術研討会、2017.8.17
国内、佐川英治、「唐長安城の朱雀大街と日本平城京の朱雀大路—都城の中軸線からみた日中の政治文化—」、唐代史研究会夏期シンポジウム、2017.8.23

国内、佐川英治、「都城制の画期をめぐる歴史学と考古学—曹魏の鄴と洛陽の復元を中心に—」、日本中国考古学会2017年度大会、2017.11.3

(4) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、挑戦的萌芽研究、佐川英治、研究代表者、「7世紀東アジア世界における文化的多様性とその淵源についての研究」、2016～2017

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、復旦大学文史研究院、「古代東亜都城的理念」、2016.5

特別講演、人民大学歴史学院、「古代東亜的都城理念」、2016.12

特別講演、北京大学人文社会科学研究院、「北魏六鎮史三題—設置、変質、崩壊—」、2016.12

非常勤講師、中央大学、「グローバルヒストリー入門／東洋中世史A、東アジア中世史／東洋中世史B」、2017.4～2018.3

特別講演、清華大学歴史系思想文化研究所、「北魏六鎮与对于高車部族的羈縻政策」、2017.10

(2) 学会

国際、中国魏晉南北朝史学会、海外名誉理事、2016.9～

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

民間企業、東京書籍株式会社、教科書「新しい社会」専門委員、2017.5～2018.3

准教授 **島田 竜登** SHIMADA, Ryuto

1. 略歴

1996年3月	早稲田大学政治経済学部経済学科卒業
1998年3月	早稲田大学大学院経済学研究科理論経済学・経済史専攻修士課程修了
2001年11月	ライデン大学アジア・アフリカ・アメリンディア研究センター上級修士課程修了
2005年12月	ライデン大学より博士学位 (Doctor) 取得
2006年3月	早稲田大学大学院経済学研究科理論経済学・経済史専攻博士後期課程退学
2006年4月	西南学院大学経済学部講師
2007年4月	西南学院大学経済学部准教授
2012年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

東南アジア史、海域アジア史、アジア経済史

b 研究課題

近世・近代のアジア域内貿易、オランダ東インド会社史、GIS を利用したアジア史研究、グローバル・ヒストリーと歴史叙述

c 概要と自己評価

2012年4月に着任して6年が経過した。このうち、2016年度から2017年度にかけて研究成果として発表したものは下記の論文6件などがある。また、2017年度前期に特別研究期間を取得し、科学研究費を利用してオランダのライデン大学に滞在し、国際共同研究ネットワークづくりにも力を注いだ。

d 主要業績

(1) 著書

共編著、村松伸・島田竜登・籠谷直人編、『歴史に刻印されたメガシティ』メガシティ3、東京大学出版会、2016.8

共著、水島司・島田竜登、『グローバル経済史』放送大学教育振興会、2018.3

(2) 論文

島田竜登、「会社のつくった都市バタヴィア—オランダ東インド会社時代、1619-1799年—」、村松伸・島田竜登・籠谷直人編『歴史に刻印されたメガシティ』メガシティ3、東京大学出版会、2016.8、75-97頁、2016.8

島田竜登、「モノに問う歴史学—グローバル・ヒストリーの一つの方法—」、『比較文明』、32、39-55頁、2016.11

島田竜登、「近世海域アジア世界とオランダ東インド会社の日本貿易」、荒野泰典編『近世日本の国際関係と言説』溪水社、187-205頁、2017.4

島田竜登、「ケンペルとシャム—七世紀末のタイ・アユタヤ朝の一断面—」、川分圭子・玉木俊明編『商業と異文化の接触—中世後期から近代におけるヨーロッパ国際商業の生成と展開—』吉田書店、777-798頁、2017.7

島田竜登、「史上初のグローバル・カンパニーとしてのオランダ東インド会社」、羽田正編『グローバル・ヒストリーの可能性』山川出版社、287-303頁、2017.10

Ryuto Shimada, "Invisible Links: Maritime Trade between Japan and South Asia in the early Modern Period," in: A.J.H. Latham and Heita Kawakatsu (eds.) *Asia and the History of the International Economy: Essays in Memory of Peter Mathias*, London and New York: Routledge, pp. 57-71, 2018.2

(3) 書評・新刊紹介等

島田竜登、新刊紹介、大阪大学歴史教育研究会・公益財団法人史学会編『教育が開く新しい歴史学』、『史学雑誌』、第125編第4号、94-95頁、2016.4

島田竜登、新刊書紹介、太田淳著『近世東南アジア世界の変容—グローバル経済とジャワ島地域社会—』、『東南アジア—歴史と文化—』、45、164-167頁、2016.5

島田竜登、書評、金澤周作編『海のイギリス史—闘争と共生の世界史—』、『西洋史学』、261、78-80頁、2016.6

(4) 解説

島田竜登、「デ・ハウトマンの東インド諸島航海記」、池田嘉郎・上野慎也・村上衛・森本一夫編『名著で読む世界史120』山川出版社、234-236頁、2016.11

Ryuto Shimada, "Beyond Diplomacy: Japan and Vietnam in the 17th and 18th Centuries," *The Newsletter, The International Institute of Asian Studies (IIAS)*, No. 79, pp. 36-37, 2018.3

(5) 口頭発表

国際、Ryuto Shimada, "Statistics of the Java's International Trade in the Nineteenth Century," Workshop on Asian Trade Networks in the Long 19th Century, Wohlfahrt Toyama, Toyama, Japan, 2016.5.23

国内、島田竜登、「グローバル・ヒストリー研究におけるアフリカ」、日本アフリカ学会第53回学術大会、日本大学、2016.6.5

国際、Ryuto Shimada, "American Shipping at Batavia from the Late Eighteenth Century to the Mid-Nineteenth Century," Seventh International Congress of Maritime History Conference, Murdoch University, Perth, Australia, 2016.6.30

国際、Ryuto Shimada, "Another World History of Sugar: Sugar Trade and the Asian Economy in the Early Modern Period," Workshop: Sugar Culture in Asia in the Early Modern Period: Its Production, Trade and Consumption, The University of Tokyo, Tokyo, Japan, 2016.7.29

国際、Ryuto Shimada, "The Sugar Trade by the Dutch East India Company and its Rivals for the Japanese Market in the Seventeenth and Eighteenth Centuries," Workshop: Maritime Worlds around the China Seas: Emporiums, Connections and Dynamics, Academia Sinica, Taipei, Taiwan, 2016.8.31

国際、Ryuto Shimada, "Java Connected with the Global Economy: A GIS-based Analysis of the International Trade of Java during the Nineteenth Century," The 2nd Workshop on Asian Trade Networks: GIS-based Global History from Asian Perspectives, The University of Tokyo, Tokyo, Japan, 2016.10.1

国際、Ryuto Shimada, "Java Connected with the Global Economy: A GIS-based Analysis of the International Trade of Java during the Nineteenth Century," The 5th International Conference on Asian Network for GIS-based Historical Studies: State of the Art in Historical G.I.S. in Asia, University of the Philippines Diliman, Quezon City, The Philippines, 2016.12.3

国際、Ryuto Shimada, "Iranian Settlers in Ayutthaya for Intra-Asian Trade during the Seventeenth and Eighteenth Centuries," To the Seas and Beyond: An International Conference on the History of the Maritime Silk Road, Hong Kong Museum of History, Hong Kong, China, 2016.12.17

国際、Ryuto Shimada, "Vietnamese Trade with Japan in the 17th and 18th Centuries," Conference: Vietnam and Korea as "Longue Durée" Subject of Comparison: From the Pre-modern to the Early Modern Periods, University of Social Sciences & Humanities, Vietnam National University, Hanoi, Hanoi, Vietnam, 2017.3.4

- 国際、Ryuto Shimada, “Gold Trade between Japan and India by the Dutch East India Company,” JSPS-ICSSR Joint Seminar: Commodities, Markets and Merchants in the Indian Ocean World, 1500-1860, The University of Tokyo, Tokyo, Japan, 2017.3.17
- 国際、Ryuto Shimada, “Maritime Asian Trade in the Eighteenth Century from Global Perspectives,” Seminar at the Department of Asia, Africa and Mediterranean, “L’Orientale” University of Naples, Naples, Italy, 2017.6.5
- 国際、Ryuto Shimada, “Competition in the Indian Sales Market for Copper between Dutch and English Companies during the Eighteenth Century,” Fifth European Congress on World and Global History, Corvinus University of Budapest, Budapest, Hungary, 2017.9.1
- 国際、Ryuto Shimada, “Indonesians to Tokugawa Japan: Indonesian people at the Dutch Trading Post in Nagasaki and Japanese Impression of Islam in the Early Modern Period,” Seminar at Faculty of Humanities, University of Indonesia, Depok, Indonesia, 2017.10.18
- 国際、Ryuto Shimada, “Tainan as a Global Center: Global Trade and Agricultural Development by the Dutch East India Company in the Seventeenth Century,” The Fifth International Conference on Tainan Area Studies: Political, Economic, and Cultural Development of the Early Tainan Region (10th-18th Century), National Cheng Kung University, Tainan, Taiwan, 2017.10.21
- 国内、島田竜登、「グローバル・ヒストリーは共生の歴史学となりうるのか?」、比較文明学会第35回大会シンポジウムII「暴力を乗り越えることができるか」、東海大学、2017.10.29
- 国際、島田竜登、「日本植民地時代の台湾における東南アジア史研究—台北帝国大学文政学部南洋史学講座を中心として—」、台湾学研究中心10周年国際学術検討会「近代台湾与東南亜」、国立台湾図書館、新北、台湾、2017.11.24
- 国際、Ryuto Shimada, “The Japan Trade by Persian Settlers at Ayutthaya in the Seventeenth Century,” Workshop: The Persian Gulf as a Global Commercial Sphere, 1500-1800, Leiden University, The Netherlands, 2017.11.28
- 国際、Ryuto Shimada, “Japanese Views of India during the Early Modern Period,” Seminar on Networks of Knowledge in the Asian World: 16th to 19th Centuries, Savitribai Phule Pune University, Pune, India, 2018.1.11
- 国際、Ryuto Shimada, “Japanese Views of India and the World during the Early Modern Period,” International Workshop: Trade, Migration, Belief: Crossing Early Modern Asia, 16th-18th Centuries, “L’Orientale” University of Naples, Naples, Italy, 2018.3.13
- 国際、Ryuto Shimada, “The Growth of International Trade in Early Modern and Modern Southeast Asia,” International Workshop on Emerging States in Global Economic History (2), Research Institute for Humanity and Nature (RIHN), Kyoto, Japan, 2018.3.26

(6) 研究テーマ

- 科学研究費補助金、島田竜登、研究代表者、基盤研究(B)「近世アジアと砂糖の世界史：砂糖の生産・国際流通・消費文化に関する国際共同研究」、2015年度～2017年度
- 科学研究費補助金、島田竜登、研究代表者、国際共同研究加速基金(国際共同研究強化)「近世アジアと砂糖の世界史：砂糖の生産・国際流通・消費文化に関する国際共同研究(国際共同研究強化)」、2016年度～
- 科学研究費補助金、島田竜登、研究代表者、基盤研究(C)「グローバル商品の誕生：世界の一体化初期局面の主要15品目の生産と多様な消費文化」、2016年度～
- 日本学術振興会二国間交流事業(インドとのセミナー(ICSSR))、島田竜登、セミナー代表者、「インド洋世界における商品・市場・商人、1500-1860年」、2016年度

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 非常勤講師、立正大学経済学部、「アジア経済史」、2014年度～
- 非常勤講師、立教大学法学部、「世界史概説」、2016年度～
- 非常勤講師、早稲田大学政治経済学部、「グローバル史」、2017年度～
- 客員准教授、放送大学、「グローバル経済史」、2017年度～

(2) 学会等

- 史学会、大会実行委員、2012～、編集委員、2014～
- 社会経済史学会、幹事、2014～
- 東南アジア学会、学術渉外委員、2013～
- 東洋学・アジア研究連絡協議会、会計監査、2014～
- 比較文明学会、幹事、2011～2017、理事、2017～、編集委員、2014～、編集委員会委員長、2017～

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

京都大学東南アジア地域研究所、共同研究員、2011～2018

東洋文庫、研究員(客員)、2013～

Brill, Editorial Board Member, Book Series: *European Expansion and Indigenous Response*, 2017-

准教授 守川 知子 MORIKAWA, Tomoko

1. 略歴

- 1994年3月 京都大学文学部史学科(西南アジア史学専攻)卒業
1996年3月 京都大学大学院文学研究科東洋史学(西南アジア史学)専攻修士課程修了
1996年4月 京都大学大学院文学研究科歴史文化学専攻(西南アジア史学専修)博士後期課程進学
1997年11月 テヘラン大学文学部史学科博士課程留学
2002年3月 京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学
2002年4月 京都大学研修員
2002年8月 バンベルク大学人文学部イラン学科留学
2003年4月 日本学術振興会特別研究員PD
2005年11月 博士(文学)学位取得(京都大学)
2006年4月 北海道大学大学院文学研究科歴史地域文化学専修・東洋史学講座 助教授
2007年4月 北海道大学大学院文学研究科 准教授
2016年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

西アジア史、イラン史、宗教社会史

b 研究課題

シーア派の聖地巡礼や死者を聖地に埋葬する「移葬」など、西アジアの宗教社会史的研究を主たる研究課題としている。近年は、アルメニア人などの宗教マイノリティにみるイスラーム社会やムスリムのみた仏教・キリスト教といった異文化接触に関心があり、また、前近代のペルシア語文献や学術書から「知」の諸相を解明しようと試みている。

c 概要と自己評価

2016年4月に着任したばかりであり、環境の変化に戸惑うことの多い2年間であった。この間、JFE21世紀財団のアジア歴史研究助成を受け、西アジア・イスラーム社会の異教徒に関する研究を進めるとともに、科学研究費基盤(B)「近世ユーラシアにおける宗教・交易ネットワークとアルメニア人」や、ナポリ東洋大学との二国間交流事業による、近世期のユーラシア・インド洋世界に関する国内外での研究交流に積極的に取り組んでいる。

d 主要業績

(1) 著書

共編著、Tomoko Morikawa and Christoph Werner, *Vestiges of the Razavi Shrine: Athar al-Razaviya : a Catalogue of Endowments and Deeds to the Shrine of Imam Riza in Mashhad*, The Toyo Bunko, 2017.3

共著、弘末雅士編、『海と陸の織りなす世界史』、春風社、2018.3

(2) 論文

Tomoko Morikawa, "Les Lieux de Commémoration et les funérailles Qājār: « Le Transport des Corps » dans la société chiite", in Anna Caiozzo (ed.) *Mythes, rites et émotions: Les funérailles le long de la Route de la soie*, Paris: Honoré Champion, pp. 249-263, 2016. 5

守川知子、「シーア派イスラーム社会の聖地巡礼と死者の「移葬」」、『文化交流研究』、30、15-27頁、2017.3

(3) 学会発表

国内、守川知子、「シーア派社会の聖地と巡礼」、第40回文化交流茶話会、2016.5.12

- 国際、Tomoko Morikawa, “Sugar and Society in Early Modern Iran”, International Workshop: Sugar Culture in Asia in the Early Modern Period: Its Production, Trade and Consumption, The University of Tokyo, 2016.7.29
- 国際、Tomoko Morikawa, “Erada-yi Marzi-yi Othmani dar ‘Iraq dar Qarn-e Nuzdahom-e Miladi (Ottoman Immigration Office at the Iraq-Iran Border in the 19th Century)”, Summer Special Lectures, Isfahan University, 2016.8.14
- 国内、守川知子, 「世界史・イスラーム史のなかの古代西アジア文明」、シンポジウム「西アジア文明学の創出 2 古代西アジア文明が現代に伝えること」、池袋サンシャインシティ文化会館、2017.3.3
- 国際、Tomoko Morikawa, “Safavid Mission to Siam and the Indian Ocean in the Late Seventeenth Century”, JSPS-ICSSR Joint Seminar: Commodities, markets and Merchants in the Indian Ocean World, 1500-1860, The University of Tokyo, 2017.3.17
- 国内、守川知子, 「改宗者と17世紀の西アジア社会」、第72回羽田記念館定例講演会、2017.12.2
- 国内、守川知子, 「近世西アジア社会における「異教徒」と宗教的社会変容」、シンポジウム「歴史の智慧をどう活かすか?—21世紀の日本がアジアと共生をめざすための歴史研究」、国際基督教大学アジア文化研究所、2017.12.9
- 国際、Tomoko Morikawa, “Deciphering Cuneiform and Its Impact on ‘Iranian’ Historiography”, ICSSR-JSPS Joint Seminar, Networks of Knowledge in the Asian World – 16th to 19th centuries, Savitribai Phule Pune University, 2018.1.18
- 国際、Tomoko Morikawa, “Muhammad Rabi’ b. Muhammad Ibrahim: A Muslim Traveller to the Theravada Buddhist Society”, International Workshop: Trades, Migration, Belief: Crossing Early Modern Asia, 16th-18th Centuries, ‘Orientale’ University of Naples, 2018.3.12

(4) マスコミ

「イランの新春、爽快な3月に」、京都新聞【ソフィア 京都新聞文化会議】、2017.12.29

(5) 翻訳

監訳、ムハンマド・ブン・マフムード・トゥーサー (Muhammad b. Mahmud Tusi)、*‘Aja’ib al-Makhlūqat wa Ghara’ib al-Mawjudat*、守川知子監訳、ペルシア語百科全書研究会訳注、『被造物の驚異と万物の珍奇 (10)』、『イスラーム世界研究』、10、275-302 頁、2017.3

監訳、ムハンマド・ブン・マフムード・トゥーサー (Muhammad b. Mahmud Tusi)、*‘Aja’ib al-Makhlūqat wa Ghara’ib al-Mawjudat*、守川知子監訳、ペルシア語百科全書研究会訳注、『被造物の驚異と万物の珍奇 (11・完)』、『イスラーム世界研究』、11、322-386 頁、2018.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、津田塾大学、「イスラーム地域研究」、2017年度

(2) 学会等

国内、東洋史研究会、評議員、2016.11～

国内、日本中東学会、評議員、2017.4～

13 中国思想文化学

教授 **小島 毅** KOJIMA, Tsuyoshi

29 次世代人文学開発センター《先端構想部門》参照

教授 **横手 裕** YOKOTE, Yutaka

1. 略歴

- 1988年3月 東京大学文学部中国哲学専修課程卒業
- 1990年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（中国哲学専攻）修了
- 1991年8月 東京大学大学院人文科学研究科第一種博士課程（中国哲学専攻）中退
- 1991年9月 京都大学人文科学研究所助手
- 1997年4月 千葉大学文学部助教授
- 2003年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
- 2015年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国思想、道教

b 研究課題

- (1) 道教思想、道教史の解明
- (2) 道教と中国仏教の交渉史
- (3) 儒・仏・道の三教交渉史を中心とする中国思想史

c 概要と自己評価

研究の中心は道教であるが、道教と中国仏教との関係、および儒・仏・道の三教の影響関係からみた中国思想史についても考察を進めている。三教についてはこれまで道・仏の関係を論じることが多く、とくに道教の内丹説と仏教とのかかわり方について多角的な考察を行ってきたが、三教みつどもえの関係についてはあまり論ずることができなかったため、本期間では新たに儒教知識人の考える仏教・道教関係などについても考察を試みた。また道教に関しては根本資料の「道蔵」に対する科研プロジェクトの調査と研究を一層推し進めた。

d 主要業績

(1) 論文

横手裕、「宋元道教的内丹養生法」、『道教圖像・考古與儀式』、香港中文大学出版社、2016、313-350頁

Yokote Yutaka, "The Development of Taoist Studies in Japan: With a Focus on the Eleventh to Seventeenth Centuries", in *Acta Asiatica 112*, Tokyo: The Tōhō Gakkai, 2017, pp.67-89

横手裕、「茶と道教修行——宋金内丹家の考える茶の功罪——」、『学芸国語国文学』50、東京学芸大学国語国文学会、2018.3、124-134頁

(2) 学会発表

国際、横手裕、「日本に現存する嘉興蔵とその研究について」、近世東亜佛教的文献和研究：工作坊暨青年学者研究會、台湾・仏光大学、2016.7.15

国際、横手裕、「山東地区の道教について」、全球漢籍合璧与漢学合作研究研討会、中国・山東大学、2016.11.26

国際、横手裕、「全真教の内丹説」、シンポジウム「道教への多角的アプローチ」、韓国・ソウル大学、2017.8.8

国際、横手裕、「日本宮内庁書陵部所蔵道蔵的由来和現状」、《儒蔵》論壇系列學術講座第197講、中国・四川大学、2018.1.16

(3) 啓蒙

横手裕、「『北頂』娘娘廟今昔——オリンピック公園の片隅の話——」、『北京を知るための52章』、明石書店、2017.12、pp.159-163

(4) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究（A）、横手裕、研究代表者、「宮内庁書陵部所蔵道蔵を中心とする明版道蔵の調査と研究」、2016～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

早稲田大学文学学術院、非常勤講師、2017.4～2018.3

名古屋大学文学部、非常勤講師、2017.4～2017.9

千葉大学文学部、非常勤講師、2017.10～2018.3

国際日本文化研究センター、研究員、2016.4～

(2) 学会

日本道教学会、理事、論文審査員、2016～

中国社会文化学会、理事、2016～

日本中国学会、論文審査委員、2016～

教授 陳 捷 CHEN, Jie

1. 略歴

1985年7月 北京大学中国語言文学系古典文献専攻卒業
1988年7月 北京大学中国語言文学系古典文献専攻修士課程修了
1988年7月 北京大学中国語言文学系・古文献研究所助手
1990年8月 北京大学中国語言文学系・古文献研究所専任講師（～1995年3月）
1994年2月 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫訪問研究員（～1995年1月）
1994年8月 東京大学東洋文化研究所外国人研究員（～1995年3月）
1998年3月 東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻（東アジア思想文化専門分野）博士課程単位取得退学
1998年4月 文部省学術振興会特別研究員 PD
1999年4月 日本女子大学人間社会学部文化学科専任講師（～2003年3月）
2001年4月 東京大学大学院人文社会系研究科博士（文学）学位取得
2003年4月 日本女子大学人間社会学部文化学科助教授
2004年4月 国文学研究資料館研究部助教授
2007年4月 国文学研究資料館研究部准教授
2013年4月 国文学研究資料館研究部教授
2017年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国書籍史 東アジアの書籍交流史 日中文化交流史

b 研究課題

1. 明清時代の中国地方の商業出版について
2. 江戸時代の詩経学と博物学
3. 江戸～明治時代の日中学術交流

c 概要と自己評価

東アジアの文化交流を視野に入れながら、日本と中国の書籍文化と学術交流史を研究している。本期間では『古逸叢書』の研究、清国駐日公使館随員孫点の日記と詩文集などの自筆稿本の整理研究、羅振玉の日本滞在中の文化活動などのテーマを中心として研究を進め、さらにまた、江戸時代の中国文化の受容と多元文化とに關係する事例として、詩経学の発展に注目し、「詩経図」および博物学者たちによる詩経研究の成果を研究してきた。

d 主要業績

(1) 論文

陳捷、「和刻本の変種——中国に伝わった日本の版木とその摺本について」、東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要『文化交流研究』31号、pp.27-36、東京大学文学部次世代人文学開発センター、2018.3

陳捷、「邁宋書館銅版『西清古鑑』の出版について」、早稲田大学中国古籍文化研究所編『中国古籍文化研究 稲畑耕一郎教授退休記念論集』、pp.101-113、東方書店、2018.3

(2) 学会発表

国際、陳捷、「中国人外交官が見た明治日本—清国駐日公使館随員孫点の日記を中心として—」、東アジア文化交渉学会第8回大会、関西大学東西文化研究所、2016.5.8

国際、陳捷、「羅振玉旅日時期刊印日藏漢籍事業概観」、「学人羅振玉研究会」、中国・旅順博物館、2016.10.19-20

国際、陳捷、「和刻本の変種：流入中国の日本版片及其印本」、「東亜古代雕版印刷与版片国際学術研讨会」、中国・揚州雕版印刷博物館、2016.10.21-26

国際、陳捷、「十九世紀日藏漢籍回流与広州」、「2016年古籍版本目録学国際学術会議」、中国・中山大学図書館、2016.11.8-9

国際、陳捷、「接受・融合・創新：從『毛詩品物圖考』看十八世紀日本『詩経』名物學研究的特色」、北京大學第一屆古典學國際學術研討會「中國古代語言、文學和文獻研究的古典學視野」、北京大学人文學苑、2017.11.18-19

国際、陳捷、「關於江戸時代的『詩経圖』」、「經學文獻學國際學術研討會」、北京大学中関新園、2017.12.21-24

(3) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究C、陳捷、研究代表者、「明清時代における濳湾（江西金溪）の出版業に関する総合的研究」、2017～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

「關於十九世紀後半葉日藏漢籍回流中国的商業渠道」、中央研究院近代史研究所檔案館中型會議室、2016.12.5

「和刻本の変種：清末流入中國的日本版片及其中国印本」【臺大中文系學術專題演講】、台大文學院會議室、2016.12.6

(2) 学会

日本中国学会、中国社会文化学会

14 インド語インド文学

准教授 梶原 三恵子

KAJIHARA, Mieko

1. 略歴

- 1989年3月 大阪大学文学部哲学科インド哲学専攻卒業
- 1991年3月 大阪大学大学院文学研究科哲学哲学史専攻博士前期課程修了
- 1996年3月 大阪大学大学院文学研究科哲学哲学史専攻博士後期課程単位取得退学
- 1996年9月 米国ハーヴァード大学大学院サンスクリット・インド学科留学
- 2002年6月 博士 (Ph.D.) 学位取得 (ハーヴァード大学)
- 2009年10月 京都大学人文科学研究所助教
- 2012年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

ヴェーダ学、インド学

b 研究課題

古代インドの家庭儀礼と社会文化史

c 概要と自己評価

専門としている「ヴェーダ宗教儀礼からみる古代インドの文化史」というテーマについて、三つの方向から研究を進めた。第一に、ヴェーダの宗教伝統における学習入門の儀礼と、非ブラフマニズム宗教である初期仏教における入門の儀礼を比較し、後者が前者の発展の文脈上にあることを解明した。第二に、紀元前後から頻繁に現れる「贈与の際に手に水を灌ぐ」という表現について、ヴェーダ文献および仏教文献から用例を収集し、その発展史をあとづけた。第三に、2009年からフィールドワークを続けている南インド・ケララ州のヴェーダ伝承について、どのような形で古代宗教が現代社会に生きているか、学習儀礼を中心に検証する作業を継続した。これらの主題はいずれも数年にわたり研究してきたが、前二者についてはこの二年で論文としてまとめ公刊するに至った。

d 主要業績

(1) 論文

梶原三恵子、「ウパニシャッドと初期仏典の一接点 — 入門・受戒の儀礼とブラフマチャリヤ —」、『人文学報』109、33-102頁、2016年

Kajihara, Mieko. "The Upanayana and the 'Repeated Upanayana(s)'" In: *Vedic Investigations* (ed. Asko Parpola and Petteri Koskikallio): 271-296. Motilal Banarsidass, Delhi. 2016年

梶原三恵子、「古代インドにおける授与の諸儀礼と水」、『印度学仏教学研究』、65(1)、283-290頁、2016年

梶原三恵子、「家庭儀礼一覧「十六行事」からみるナンブーディリ社会の現在」、『南アジア研究』28、232-234頁、2016年

Kajihara, Mieko. "Giving the Bride to the Bridegroom with Water at the Ancient Indian Marriage Ritual." *Studies in Indian Philosophy and Buddhism* 25 : 1-30. 2017年

梶原三恵子、「インドにおけるヴェーダの伝承について」、『国際哲学研究』7、51-55頁、2018年

(2) その他

梶原三恵子、「月に守られた者」、『世界の名前』（編：岩波書店辞典編集部）、岩波新書：1-3頁、2016年

(3) 学会発表

国際、Kajihara, Mieko. The sodasa-kriyas and today's Namputiri society. *The Brahmanism and Hinduism: Prolegomena* (International Symposium). Institute for Research in Humanities, Kyoto University, 2016.3.11

国内、梶原三恵子、「グリヒヤーストラにおける手と水の儀礼」、日本印度学仏教学会第67回学術大会、東京大学本郷キャンパス、2016.9.4

国内、梶原三恵子、「聖典学習者と禁欲 — brahmacarin 再考」、共同研究「ブラフマニズムとヒンドウイズム」第2回シンポジウム「古代インドにおけるアセティシズムの諸相 — 禁欲・出家・苦行 —」、京都大学人文科学研究所、2017.3.25

国内、梶原三恵子、「インドにおけるヴェーダの伝承について」、東洋大学国際哲学研究センターシンポジウム「聖典はどのように伝えられたのか—宗教の言葉と思想を考える」、東洋大学、2017.10.21

国内、梶原三恵子、「入門儀礼と学習儀礼における衣について」、共同研究「ブラフマニズムとヒンドゥイズム」第4回シンポジウム「古代・中世インドの儀礼、制度、社会」、東京大学、2018.3.24

(4) 会議主催 (チェア他)

国内、日本印度学仏教学会第67回学術大会、実行委員、東京大学、2016.9.3～2016.9.4

国内、共同研究「ブラフマニズムとヒンドゥイズム」第3回シンポジウム、共催、京都大学人文科学研究所、2017.10.7

国内、共同研究「ブラフマニズムとヒンドゥイズム」第4回シンポジウム、共催、東京大学、2018.3.24～2018.3.25

(5) 共同研究 (産学連携除く)

国内、京都大学人文科学研究所共同研究「ブラフマニズムとヒンドゥイズム：南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性」共同研究員、2016～

国内、南アジア地域研究推進事業「南アジア地域研究」東京大学拠点 (TINDAS) 拠点構成員、2017～

(6) 研究テーマ

梶原三恵子、文部科学省科学研究費補助金基盤B・研究代表者、「ヴェーダからポスト・ヴェーダの宗教・文化の共通基盤と重層性の研究」、2017～

梶原三恵子、文部科学省科学研究費補助金基盤B・研究分担者、「南インド希少ヴェーダ学派の文献集成と翻訳研究」(研究代表者：藤井正人)、2013～2017

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、インド思想史学会、理事、2016.4～

国内、日本印度学仏教学会、理事、2017.9～

国内、日本南アジア学会、会員

国内、東方学会、会員

国際、American Oriental Society, Member

(2) 行政

日本学術会議 連携会員、2017.10～

15 インド哲学仏教学

教授 丸井 浩 MARUI, Hiroshi

1. 略歴

- 1972年4月 東京大学教養学部文科Ⅲ類入学
- 1974年4月 東京大学文学部印度哲学印度文学科進学
- 1976年3月 同上 卒業
- 1976年4月 東京大学大学院人文科学研究科印度哲学専攻修士課程入学
- 1979年3月 同上 修了
- 1979年4月 東京大学大学院人文科学研究科印度哲学専攻博士課程進学
- 1983年3月 同上 単位取得退学
- 1984年1月 インド・プーナ大学サンスクリット高等研究センター在学（～1986年1月）
（文部省給費留学生）
- 1983年4月 財団法人東方研究会専任研究員（～1990年3月）
- 1990年4月 武蔵野女子大学短期大学部専任講師（～1992年3月）
- 1992年4月 東京大学文学部助教授
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（大学院部局化に伴う）
- 1999年1月 同上 教授
- 2018年3月 定年退職

<学位>

- 2011年11月 博士（文学）（東京大学）

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

専門分野はインド哲学。インドの哲学的思索の伝統諸派（ダルシヤナ）のなかで、特に多元論的世界観と分析的、合理的思考を特徴とする、ニヤーヤ学派（インド論理学派）・ヴァイシェーシカ学派のサンスクリット文献の解読・解釈、およびその思想（史）研究が中核となっている。そうした専門分野の研究成果を核としつつ、最近の研究課題は、(1) インド思想における哲学と宗教の交錯関係の解明に向かって、特に寛容精神あるいは包括主義と呼ばれる思想を、宗教多元主義や異宗教間対話・共生、あるいはサステナビリティ問題といった現代的な問題意識から見直すこと、および (3) 文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (B) 「インドにおける因果の思想の研究」(2016～2019年度) の研究代表者として、特に仏教を含むインド哲学諸派における「因果の思想」に関する新たな共同研究への発展を図ってきた。仏教を含めたインド哲学の特質を文献実証的かつ比較思想的に解明することを目指している。

c 概要と自己評価

この2年間の研究活動は専門分野の業績としてはあまり成果をあげることはできなかった。ただし上述の研究課題 (1) に関しては一本の論文執筆と一冊の出版物編集（共同）を行い、故中村元博士の平和思想に関する考察を有る程度深めることができた。また論文成果とはなっていないが、科研基盤B「インドにおける因果の思想の研究」という共同研究をスタートさせ、仏教とその他のインド哲学諸派の間で「因果」をめぐる議論には、重要な共通点と相違点が明らかになってきたことは、注目すべき成果と言える。他方、一般市民にむけた啓蒙活動はかなり充実した成果と実績をあげることができた。特にNHKEテレの長寿番組である「こころの時代～宗教・人生」に、「ブッダ最後の旅」に学ぶ」というテーマで2016年4月から9月まで毎月一回出演した（2017年10月から2018年3月まで再放送。そのガイドブック『「ブッダ最後の旅」に学ぶ』2万冊も完売）。そのほか公開講座や講演などの活動は非常に充実していた。2017年11月には東京大学公開講座で講師を務めた。2018年3月の最終講義をもって、無事に東京大学での教育・研究活動を締めくくることができた。なお2017年にインド文化関係評議会（ICCR）から ICCR Distinguished Indologist Award 2017 を受賞し、11月27日にインド大統領府における授賞式に参列したことを最後に記す。

d 主要業績

(1) 著書

丸井浩『「ブッダ最後の旅」に学ぶ』(NHKE テレビ番組「こころの時代—宗教・人生—」のガイドブック), NHK 出版, 2016年4月, 175pp.

丸井浩『インダの共生思想の総合的研究—思想構造とその変容を巡って—』白峰社, 2017年3月, xi+570pp. (前田 専學・釈悟震他と共編)

(2) 論文

丸井浩「世界平和への希求—人類の教師, 中村先生からのメッセージの重み—」『日本仏教教育学研究』24, 2016年3月, pp.19-41

丸井浩「平和思想としての仏教の可能性—中村元博士からのメッセージを探る—」『インダの共生思想の総合的研究—思想構造とその変容を巡って—』白峰社, 2017年3月, pp.22-40

(3) 学会口頭発表(論文発表となつたものは除く)、シンポジウム、学術講演

丸井浩「「インダ哲学」は宗教と不二不異か——日本の〈ニヤヤ学〉研究の回顧と展望をかねて——」日本印度学仏教学会第67回大会(学会創立65周年記念)・特別部会「日本のインダ哲学研究における回顧と展望」, 東京大学, 2016年9月3日

丸井浩「インダ古来のサステナビリティ(ダルマ)——秩序と規範の一体性」東京大学公開講座第126回「新たな秩序」, 東京大学大講堂(安田講堂)、2017年11月11日

丸井浩「異宗教間共生とインダ哲学」(韓国・東国大学校仏教文化研究院招待講演)、東国大学校、2017年12月11日

(4) その他

丸井浩「「無我」の教え—対立を乗り越えるための知恵—」『浅草寺仏教文化講座』第61集, 2017年8月, pp.42-61

丸井浩「「マンダラ的思考」のすすめ」『情報化社会を疑う眼 一心寺編『ちょっといい話』第13集, 2017年9月, pp.366-371, pp.390-395

(5) 講演など

丸井浩「インダの宗教と植物」平成28年度足利学校アカデミー, 足利市生涯学習センター, 2016年6月18日

丸井浩「インダの伝統思想に学ぶ」取手市民大学特別講座, 取手ウェルネスクラブプラザ多目的ホール, 2017年1月30日

丸井浩「「ブッダ最後の旅」に寄せて」平成29年度足利学校アカデミー, 足利市生涯学習センター, 2017年6月17日

丸井浩「現代に生きるブッダの教え」一心寺日曜学校開講式記念講演, 2017年6月25日

3. 主な社会活動

(1) 他部局・他機関での講義等

東大EMP講師、第15期-18期

学習院大学非常勤講師(思想史講義)、2016年度、2017年度

NPO法人中村元記念館東洋思想文化研究所(東方学院松江校)非常勤講師(集中講義)、2016年度、2017年度

(2) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

財団法人東京大学仏教青年会、理事

公益財団法人中村元東方研究所、主任研究員2014.4～現在、常務理事・事務局長

財団法人大法輪石原育英会、理事

教授 **下田 正弘** SHIMODA, Masahiro

29 次世代人文学開発センター《創成部門》 参照

1. 略歴

1983年3月	東京大学文学部印度哲学印度文学専修課程卒業(学士)
1983年4月	東京大学大学院人文科学研究科印度哲学印度文学専攻修士課程入学
1986年3月	同大学院(印度哲学印度文学専攻)修士課程修了(修士)
1986年4月	東京大学大学院人文科学研究科印度哲学印度文学専攻博士課程進学
1990年3月	東京大学大学院人文科学研究科印度哲学印度文学専攻博士課程単位取得退学
1991年4月	日本学術振興会特別研究員(平成5年3月迄)
1998年4月	愛知学院大学文学部日本文化学科 助教授(平成16年1月迄)
1998年10月	博士(文学)の学位取得
2004年1月	愛知学院大学文学部日本文化学科 教授
2010年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

仏教学、東アジアの仏教及び日本仏教に関する研究。

b 研究課題

東アジアにおける仏教の研究。特に日本仏教における修行、学問に関する研究を行っている。学問に関わるところでは、古代の論義に関する研究を南都に残された法会資料を用いながら考察を進めており、古代から中世に掛けて行われた仏教教理に関する論争に焦点を当てている。また、当時の僧侶の仏身観にも焦点を当てて研究を行った。また修行道に関する研究は、東南アジアや東アジア世界に伝わる止観と呼ばれる修行の実際に注意を払いながら、東アジア世界に残された文献資料を用いて、修行道の内容を明らかにすることを旨として研究を進めている。

c 概要と自己評価

2016年4月から2018年3月までの間は、科学研究費(分担)の研究の一環として、日本中世の仏教における仏身論の研究を行い学会で発表したが、論文には到らなかった。また、『法勝寺御八講問答記』のデジタル化を考え、TEI方式で記述することを企画し、学生とともに作業を開始したが作業途上である。また別の科研費で中世の仏教界に関するまとめを、修行と学問という二つの視点から行い、こちらは共著で出版することができた。2016年より寄付研究部門の部門長を務めており(アジア研究図書館附属上廣倫理財団寄付研究部門)、そちらの仕事に多くの時間を取られており、研究の時間がうまく取れていないことは否めない。とはいえ、寄付研究部門との関連で、アジアやヨーロッパの大学図書館を訪問し、情報交換をするなど、有意義な時間を持てたことは有意義であった。最終的には多少、仕事が過剰気味と思われ、また広げた仕事が多くなりすぎている感があるので、この点の調整を、今後の課題としたい。

d 主要業績

(1) 論文

蓑輪顕量「中世法相宗における理の理解」『三友健容博士古稀記念論集 智慧のともしびーアビダルマ佛教の展開 中国・朝鮮半島・日本篇』山喜房仏書林、2016.3.8: 271-288

蓑輪顕量「日本仏教における継承と伝統」『浄土真宗総合研究』10<特集テーマ 伝灯奉告法要>、2016.9.13-30

蓑輪顕量「止観研究の歴史とその現代的意義」『印度学仏教学研究』65-1, 140号: 1-10、2016.12、印度学仏教学会

蓑輪顕量「南都の戒律—中世の復興から現代を考える—」楠淳證編『南都学・北嶺学の世界』所収、法蔵館、2018.3: 166-187

蓑輪顕量「学問と修行から見た中世仏教」: 大久保良竣編『日本仏教の展開』所収、春秋社、2018.3(査読無し): 127-165

(2) 学会発表

国内、蓑輪顕量、「止観研究の歴史とその現代的意義」、日本印度学仏教学会、東京都文京区 東京大学、2016.9

国際、蓑輪顕量、「Longing for India-Japanese Buddhist and India」、Buddhism in India-Japan Relations、Tagore hall, in New Delhi, in India、2017.3.17

国内、蓑輪顕量、「日本中世における仏身論の展開」、日本印度学仏教学会、花園大学、2017.9.2

国際、蓑輪顕量、「日本の三論宗について」中日佛学会議、福山賓館、山東省煙台、中国、2017.11

国内、蓑輪頭量、「仏教の止観とマインドフルネス—その特徴と問題点を探る—」、日本マインドフルネス学会、於早稲田大学井深大記念ホール国際会議場、2017.12.17

国際、蓑輪頭量、「仏教の止観と日本中世の禅宗」於浙江大学、中国浙江省杭州、2018.3.27

国際、蓑輪頭量、Manuscript concerning Debates(Rongi) in the Medieval Japan and the Effective Utilization Method, Seminar In the Dakka University, 2018.3.18

(3) 予稿・会議録

国内会議、蓑輪頭量、「南都の戒律—中世の復興から現代を考える」、南都学/北嶺学の世界、奈良県奈良市薬師寺食堂、2017.5

『南都学・北嶺学の世界』、166-187 頁、2018.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

立正大学大学院 非常勤講師

東洋大学大学院 非常勤講師

(2) 学会

国内、日本印度学仏教学会、理事、評議員、常務委員

国内、日本宗教学会、常務理事、評議員

国内、東アジア仏教研究会、会長

国内、パーリ学仏教文化学会、理事

国内、KIERA-LP 学会、会長 (2015.10～)

(3) 学外組織 (学協会、省庁を除く) 委員・役員

一般財団法人東京大学仏教青年会、理事

准教授 **高橋 晃一**

TAKAHASHI, Kouichi

1. 略歴

1991年4月 東京大学教養学部文科三類 入学
1993年4月 東京大学文学部印度哲学専修課程 進学
1995年3月 同 上 卒業
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻修士課程 入学
1998年3月 同 上 修了
1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻博士課程 進学
2002年3月 同 上 単位取得退学
2002年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 助手 (～2005年3月)
2004年9月 博士 (文学) (東京大学)
2005年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 学術研究支援員 (～2005年9月)
2005年10月 日本学術振興会海外特別研究員 (ハンプルク大学アジア・アフリカ研究所) (～2007年9月)
2007年10月 東京大学大学院人文社会系研究科 学術研究支援員 (～2008年3月)
2008年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 特任研究員 (～2012年3月)
2012年4月 筑波大学大学院人文社会科学部研究科 助教 (～2013年3月)
2013年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 特任研究員 (～2017年3月)
2017年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

- (1) インド仏教の論書研究
- (2) チベット撰述の注釈文献に関する研究
- (3) サンスクリット語およびチベット語文献の XML によるマークアップ方法の研究

b 研究課題

(1) インド仏教の文献は、大きく経・律・論の三つの分野に分けられる。そのうち、論は仏教思想家が著した哲学文献であり、論書と呼ばれる。この論書を主な研究対象としている。特にインド大乘仏教の一学派である瑜伽行派の論書を分析し、その思想形成の過程を考察している。この学派の思想は唯識思想として知られているが、最初期の文献では唯識思想は説かれず、ものの実在を前提にして思想が構築されている。この最初期の思想形態そのものの解明と、唯識思想へ展開した過程を解明し、仏教における唯識説の意義を考察することを課題としている。特にこのような哲学的思想と、大乘仏教としての倫理的実践の關係に着目して、瑜伽行派の思想を包括的に明らかにすることを目指している。

(2) (1) と関連して、チベット人によって著された瑜伽行派文献に対する注釈書の内容分析を行う。近年、発見・公刊された『カダム全書』という著作群には瑜伽行派文献に対する注釈が数多く含まれており、その内容の分析は喫緊の課題となっている。

(3) こうしたテキスト分析に関しては、電子化テキストによるデータベースの作成が効率の良い方法と考えられる。近年では XML を用いたテキスト分析が盛んに行われるようになってきたが、既存のガイドラインである TEI:P5 は、サンスクリット語およびチベット語の仏教文献の分析に関しては、改良の余地がある。実際に文献をエンコーディングしながら、具体的な問題提起をすることを目指す。

c 概要と自己評価

(1) 従来の研究では瑜伽行派の哲学的な思想と、大乘仏教としての倫理的実践の關係性に着目した研究はほとんどなされてこなかっただけでなく、一部の研究においては両者は思想史的に見て無關係に発展したとさえされる場合も見られる。しかし、この学派の最初期の文献を分析すると、瑜伽行派の哲学的思想は、大乘仏教の倫理的実践と直結し、利他行を標榜する大乘仏教の行動原理に基盤を与えるものであることを示すことができる。これは従来の研究の視点に大きな改変を加えるものであり、重要な意義を持つと考えているが、成果は学会での発表のみであり、今後、論文の形で公開しなければならない。

(2) 『カダム全書』は近年になって発見・公刊されたもので、その全体像も明確になってはいない。そのため、科学研究費基盤 B に応募し、特に瑜伽行派の基本思想を扱う文献についての分析を行うための準備をしている。

(3) これまでに、非階層構造を持ったサンスクリット語文献の XML による分析について主に考察してきた。XML は文字列をタグと呼ばれる記号 (例: `<p></p>` など) で囲むことで、テキストデータを構造的に分析することができるが、タグ同士がお互いをまたぐような構造 (非階層構造) を XML で分析することは難しいとされている。サンスクリット語仏教文献で、明らかに非階層構造を持つテキストを例にし、XML によるタグ付の可能性を模索した。また、この考察の過程で、一般的に文献は論理構造と物理構造の二重の構造を本来的に具えていることが明らかになった。そこから、テキストの内容分析を目的とする場合、XML によるタグ付けは論理構造を優先させることで、例として取り上げた非階層構造のエンコーディングが可能になることを指摘することができた。これは複雑な構造を持つ文献の分析をより基本的な技術で行うための提案であり、今後、(2) の『カダム全書』の分析に応用が期待できる成果といえる。

d 主要業績

(1) 論文

高橋晃一、「『菩薩地』における菩薩藏 (bodhisattvapitaka) の位置づけ」、『インド哲学仏教学研究』、24、41-62 頁、2016.3

高橋晃一、「Conceptualization (*vikalpa*) of Other Sentient Beings in the Early Yogācāra texts」、『印度学仏教学研究』、67-3、2017.3

(2) 学会・シンポジウム発表

国内、高橋晃一、「初期唯識文献における「他人の分別」」、日本印度学仏教学会第 67 回学術大会、2016.9.4

国内、高橋晃一、「『菩薩地』「真実義品」における菩薩道」、日本印度学仏教学会第 68 回学術大会、2017.9.2

国内、高橋晃一、「非階層構造を含むテキストのマークアップ —論理構造と物理構造の観点から—」、国際シンポジウム デジタルアーカイブ時代の人文学の構築に向けて —仏教学のための次世代知識基盤の構築—、2018.1.6

3. 主な社会活動

(1) 非常勤講師

大正大学非常勤講師

(2) 学会

日本印度学仏教学会、評議員、常務委員

仏教思想学会、幹事

東方学会

日本チベット学会

日本南アジア学会

International Association of Buddhist Studies

Japanese Association for Digital Humanities

16 イスラム学

教授 柳橋 博之 YANAGIHASHI, Hiroyuki

1. 略歴

- 1980年3月 東京大学文学部東洋史学専修課程卒業
- 1983年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（東洋史学）
- 1988年9月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学（東洋史学）
- 1988年10月 茨城大学教養学部専任講師
- 1989年4月 同 助教授
- 1993年4月 東北大学大学院国際文化研究科助教授
- 1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（1997年度は東北大学大学院と併任）
- 2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
- 2010年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

イスラーム法、法学ハディース

b 研究課題

法学に関わるハディース（預言者ムハンマドの言行の記録）の形成過程を研究している。

c 概要と自己評価

最近の5年間は、法学的な内容を含むハディース（預言者伝承）に関する英文による大部の著作の執筆に専念していたために、研究業績はほとんどなかった。しかし2018年5月にその出版が決定した。

d 主要業績

(1) 論文

柳橋博之、「洗淨用の水をめぐる法学説とハディースについて」、『西南アジア研究』、85号、1-17頁、2016.10

(2) 解説

柳橋博之、「学界回顧2016、東洋法制史」、『法律時報』、88(12)、2016.11

柳橋博之、「学界回顧2016、東洋法制史」、『法律時報』、89(13)、2017.11

(3) 学会発表

国内、柳橋博之、「イスラーム法とハディース（預言者伝承）」、日本オリエント学会第59回大会、東京大学、2017.10.28

国際、柳橋博之、「Statistical analysis of isnāds as a method for determining the provenance, and the currency in time and place, of legal rules in the 8th century CE.」、Hadith and Law in Early Islam, A Workshop of the LAWALISI project、エクセター大学、イギリス、2017.11.27

(4) 会議主催(チェア他)

国内、「日本オリエント学会第59回大会」、実行委員長、2017.10.28～2018.10.29

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、一般社団法人日本イスラム協会、代表理事、2016.4～

日本中東学会、評議員、2016.4～

1. 略歴

- 1992年3月 東京大学文学部イスラム学専修課程卒業
- 1992年4月 東京大学大学院人文科学研究科イスラム学修士課程入学
- 1994年3月 同修了
- 1994年4月 東京大学大学院人文科学研究科イスラム学博士課程進学
- 1998年3月 博士（文学）の学位取得
- 1998年4月 東京大学東洋文化研究所研究機関研究員（2000年3月まで）
- 2000年4月 日本学術振興会特別研究員（PD）（2003年3月まで）
- 2004年4月 神田外語大学外国語学部専任講師
- 2008年4月 神田外語大学外国語学部准教授
- 2013年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

シーア派思想史

b 研究課題

9世紀以降のシーア派思想史における「極端派」思想と十二イマーム派、イスマール派の形成過程との関係について研究している。

c 概要と自己評価

主流シーア派の自己形成、およびそれに呼応する形で成立したアラウィー派、ドゥルーズ派の初期思想について研究し、その成果を一つの研究ノートと三度の口頭発表で公開することができた。研究はおおむね順調に進んでいる。

d 主要業績

(1) 著書

- 共著、大城道則(編著)、『死者はどこへいくのか：死をめぐる人類五〇〇〇年の歴史』、河出書房新社、2017.2
- 共著、市川裕(代表者)、『科学研究費研究助成金基盤研究A ユダヤ・イスラーム宗教共同体の起源と特性に関する文明史的研究 成果報告書 2013-2016年度』、2017.3
- 共著、杉木恒彦・高井啓介(編)、『霊と交流する人びと：媒介者の宗教史 上巻』、リトン社、2017.3
- 編著、菊地達也、『イスラム教の歴史』、河出書房新社、2017.11

(2) 論文

菊地達也、『英知の書簡集』の宇宙創成論：「真理の開示」翻訳(1)、『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』、48、227-237頁、2017.3

(3) 学会発表

- 国内、菊地達也、「イスラム教のウンマ体制下における諸宗教・諸宗派：イスラム少数派によるキリスト教徒・ユダヤ教徒への宣教」、「基盤A ユダヤ・イスラーム宗教共同体の起源と特性に関する文明史的研究」研究会、東京大学駒場キャンパス、2016.5.14
- 国内、菊地達也、「アラウィー派創始者ハスィービーの思想とその背景」、「中東・北アフリカの少数派再考」東京大学中東地域センター・福山市立大学都市経営学部、共催：科学研究費基盤B「中東・北アフリカ地域のイスラーム圏の少数派と弱者に関する総合的研究」、福山市立大学、2016.7.14
- 国内、菊地達也、「Surviving Strategies of the Druzes」、Studies on Religious and Socio-Political Minority Groups in Middle Eastern Societies, 2nd Meeting、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2017.3.4

(4) 会議主催(チェア他)

国内、「日本オリエント学会第59回大会」、実行委員、2017.10.28～29

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、専修大学、「アジア思想特殊講義3/イスラム思想史2」、2017.9～2018.3

(2) 学会

国内、日本イスラム協会、『イスラム世界』編集委員長、2016.3～

17 西洋古典学

教授 葛西 康德 KASAI, Yasunori

1. 略歴

- 1978年3月 東京大学法学部第一類（私法コース）卒業
- 1986年8月 連合王国ブリストル大学古典学・考古学科留学（1988年7月まで）
- 1992年2月 Ph.D.学位取得（連合王国ブリストル大学）
- 1978年4月 東京大学法学部助手
- 1982年4月 新潟大学教養部講師
- 1986年4月 新潟大学法学部助教授
- 1992年4月 新潟大学法学部教授
- 1993年11月 オクスフォード大学クライスト・チャーチ客員研究員（1995年1月まで）
- 1995年4月 新潟大学大学院現代社会文化研究科担当（「古典社会文化論」担当）
- 1999年9月 オクスフォード大学ベイリオル・コレッジ客員フェロー（2000年9月まで）
- 2002年4月 新潟大学法学部法政コミュニケーション学科長（2003(平成15)年3月まで）
- 2004年4月 新潟大学大学院実務法学研究科教授
- 2006年4月 大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科教授
- 2011年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋古典学 ギリシア・ローマ法

b 研究課題

- 1 古代ギリシア人の「対立状況における行動様式」の特徴を、compliance と defiance という概念枠組を用いて、経済、法、宗教、哲学等の諸側面から総合的に考察する。そして、それらを、The Greeks on Compromise というタイトルで一冊にまとめたいたいと考えている。
- 2 古代ギリシア法をローマ法およびそのほかの西洋法の中に、総合的に位置づける。具体的には、古代ギリシア法入門のような形でまとめたいたいと思っている。
- 3 西洋学問の近世・近代の日本への移入を「文化転移」として、「普及」と「翻訳」という視点から総合的に把握する。

c 概要と自己評価

上記の研究課題に関して今期は以下のような具体的な研究作業を実施した。

- 1 課題1に関して、特に宗教と法の側面から、一般的な話を公開講演で行うとともに、学会で研究発表を行った。
- 2 課題2に関しては、デモステネスの私訴弁論の翻訳解説（36-38）を継続して行い、2017年度末現在、校正段階まで来ている。また、科研費研究として「法学提要」の歴史的・総合的研究を開始し、その中にギリシア法を位置付ける可能性を探っている。
- 3 課題3に関して、2016、2017年度年度は「他分野交流演習」を大学院オムニバス授業として開始した。この授業は今後も継続する予定である。尚、このような問題関心と1のギリシア人の総合的把握の交錯する分野の基本文献として、フランソワ・アルトウグの『オデュッセウスの記憶』を共訳出版した。

d 主要業績

(1) 共訳

葛西康德・松本英実（共訳）フランソワ・アルトウグ『オデュッセウスの記憶』東海大学出版部、2017年3月刊

(2) 小論

葛西康德、「東京大学草創期の授業再現3」『他分野交流プロジェクト研究ニューズレター』77号

葛西康德、「東京大学草創期の授業再現4」『他分野交流プロジェクト研究ニューズレター』78号

(3) 学会発表

日本宗教学会学術大会パネル報告、「ローマ帝国における諸民族と宗教」報告テーマ「ローマ法と宗教」2016年9月11日

(4) 研究会報告

“Surety and Security”, Rushmore Room, St. Catharine’s College, Cambridge, UK, 30th August 2016 (Tue)
(国際) 4th Tokyo-Cambridge Research Seminar on Law and Humanities, and 4th Tokyo Edinburgh Humanities and Law Seminar, 5 (MON) September 2016, Old Medical School, University of Edinburgh,

(5) 総説・総合報告

第123回平成28年度春季東京大学公開講座「無駄」、5月28日、「無駄とはなにか」12時50分～17時10分、葛西康徳「古代ギリシアにおける三つの無駄？」14時10分～15時、於安田講堂

(6) 共同研究・受託研究

科学研究費基盤研究 (A) (一般) (H29～H32)

「イスラエル国がラリア地方の新出土シナゴグ史料に基づく一神教の宗教史再構築」

(分担) (研究代表者: 市川裕)

科学研究費基盤研究 (B) (一般) (H29～H32)

「法学提要 (Institutiones) の比較法学的総合研究」

(代表者: 葛西康徳)

科学研究費基盤研究 (B) (一般) (H29～H32)

「民主制アテナイの演説文化: 法廷における実践的修辭戦略に関する総合的研究」

(分担) (研究代表者: 佐藤昇)

科学研究費基盤研究 (C) (一般) (H26～H28)

「混合法における信託の比較法制的研究」

(分担) (研究代表者: 松本英実)

科学研究費基盤研究 (C) (一般) (H29～H31)

「ミクスト・リーガル・システムにおける慣習法の位置」

(分担) (研究代表者: 松本英実)

科学研究費基盤研究 (C) (一般) (H29～H31)

「日本におけるギリシア演劇の受容と世界的発信に関する実証的総合研究」

(分担) (研究代表者: 野津寛)

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

2016年度

大妻女子大学「法律と現代社会」非常勤講師 (2単位)

津田塾大学「ラテン語」非常勤講師 (4単位)

千葉大学法科大学院「法制史」非常勤講師 (2単位)

2017年度

大妻女子大学「法律と現代社会」非常勤講師 (2単位)

青山学院大学法学部「基礎法特論 A/B (ローマ法)」(4単位)

(2) 学会

「日本西洋古典学会(委員)」 「日本法制史学会」 「日本宗教学会」 「19世紀学学会」

「法とコンピュータ学会(理事)」

The Hellenic Society, The Selden Society, World Society of Mixed Jurisdiction Jurists

International Academy of Comparative Law (Associate member)

(3) 行政

北陸信越地方交通審議会船員部会公益委員 (2016年度)

(4) 学外組織 (学協会、省庁を除く) 委員・役員

日本学術会議連携会員

新潟大学超域学術院運営委員会委員

18 フランス語フランス文学

教授 月村 辰雄 TSUKIMURA, Tatsuo

1. 略歴

1974年3月	東京大学文学部卒業（フランス語フランス文学）
1976年3月	同 大学院人文科学研究科修士課程修了（仏語仏文学）
1977年10月	パリ高等学術研究院博士課程（フランス政府給費留学、～80年9月）
1979年10月	パリ第3大学東洋語東洋文化研究所講師（日本語科、～80年9月）
1981年3月	東京大学大学院人文科学研究科博士課程中途退学（仏語仏文学）
1981年4月	同 文学部助手（フランス語フランス文学）
1986年4月	獨協大学外国語学部専任講師（フランス語科）
1989年4月	東京大学文学部助教授（フランス語フランス文学）
1995年1月	同 教授（フランス語フランス文学）
1995年4月	同 大学院人文社会系研究科教授（仏語仏文学）
2000年4月	同 文化資源学研究専攻（文書学専門分野）に配置換
2014年4月	同 フランス語フランス文学専門分野に配置換
2017年3月	定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

フランス文学（中世文学、ルネサンス文学）
文化資源学（書物史、ヨーロッパ図書館史）

b 研究課題

(1) マルコ・ポーロ研究

マルコ・ポーロ『東方見聞録』の中世フランス語本、イタリア方言本、ラテン語本等の比較研究。

(2) 中世西ヨーロッパのアジア観についての研究

『アレクサンドロス大王物語』、とりわけその一枝篇「アレクサンドロス大王の樂園への旅」、プレスター・ジョンの手紙、カルビーニ、ルブルク、オドリコ等の東方旅行記録、ハイトンの地誌、マンドヴィルの架空旅行記など、12～14世紀のヨーロッパの東方記述の総体を対象に、中世西ヨーロッパのアジア観についての研究を進めている。

(3) レトリック教育史研究

古典修辞学が古代ギリシア以降、19世紀末のフランスに至るあいだ、どのように学校教育の中で教えられてきたのかという問題を、とりわけディスクールのような型を教える初等教科書『プロギュムナスマタ』を中心に研究している。

(4) 明治期の演説研究

レトリックの歴史に関連して、文化資源学においては、明治初頭の日本にヨーロッパのどのようなレトリック教本が移入され、それがどのように理解、ないしは誤解されて、自由民権運動とともに盛んになった演説の中に取り入れられたのかを研究している。

1. 略歴

- 1976年3月 東京大学教養学科（フランスの文化と社会）卒業
1979年3月 同 大学院人文科学研究科修士課程修了（仏語仏文学）
1982年10月 パリ第三大学東洋語東洋文明研究所講師（～'83年9月）
1985年12月 同 第三期課程博士（フランス文学・19世紀部門）
1986年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程（仏語仏文学）単位取得のうえ退学
1986年4月 同 教養学部助手
1988年4月 同 助教授
1992年4月 同 文学部助教授
1995年4月 同 大学院人文社会系研究科助教授
1996年2月 同 教授
2004年4月
～2006年3月 東京大学大学院人文社会系研究科副研究科長・東京大学教育研究評議員
2011年4月 東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長（～2013年3月）

2. 主な研究活動

a 専門分野

フランス近代詩。フランス現代文学の諸相

b 研究課題

- (1) ランボー『地獄の一季節』の、主題論的、ジャンル論的視点からの再検討。
- (2) 『ランボー詩選』仏日二カ国語版の準備。
- (3) ボードレール韻文詩における修辞、および散文詩の生成論的・主題論的研究。
- (4) 現代作家ル・クレジオの形成における記憶と想像力、自伝とフィクションの関わりの研究。

c 概要と自己評価

- (1)は、長年の課題で現在も続行中。パリ＝ソルボンヌ大学での国際会議「ランボーの季節」《Les saisons de Rimbaud》を、フランス、ベルギーの研究者3名との共同企画で開催した。現在、論集の出版準備中である。また、同大学で『地獄の一季節』のスピーチ・アクト的側面に光を当てる講演を行なった（ともに2017年3月）。
- (2) は、2018年度中に刊行の予定。
- (3)(1)とも関連するが、コレージュ・ド・フランス（パリ）において、ボードレールとランボーを、継承と離反の二重の関係において捉える4回連続講義を行なった（2016年4-5月）。また、ボードレール没後150年記念国際会議を東京大学において開催した（フランス、イタリアの研究者4名+日本人研究者6名、2017年5月）。論集刊行に向けての作業が進行中。
- (4)ル・クレジオの短編集『心は燃える』が、鈴木雅生との分担訳で刊行された（2017年）。南京大学（中国）における国際会議「ル・クレジオとアジア」において、「ル・クレジオと日本文化」《Le Clézio et la culture japonaise》と題する発表を行なった（2017年10月）。また、ル・クレジオ氏を招聘し、「詩の魅力」と題する講演会を企画した（2018年3月）。

d 主要業績

(1) 論文

Yoshikazu Nakaji, « De la modernité du poète en prose », *L'Année Baudelaire* 18 /19, 2016, p.293-306

(2) 解説

中地義和、「二重の肖像」、『書簡の時代—ロラン・バルト晩年の肖像』訳者解説、みすず書房、2016、p.194-211

中地義和、「あとがき」、『仏語仏文学研究』第49号塩川徹也先生古稀記念特集号、2016、p.705-709

中地義和、「訳者あとがき」、ル・クレジオ『心は燃える』、作品社、2017、p.184-197

(3) 翻訳

中地義和（単独訳）、A・コンパニオン『書簡の時代—ロラン・バルト晩年の肖像』、みすず書房、2016年、216p.

中地義和、ル・クレジオ『心は燃える』（鈴木雅生と共訳）、作品社、2017、198p.

中地義和 (単独訳)、ジャン＝リュック・ステンメツ、「十月の日本」より三篇および「訳者付記」、『すばる』、2017年10月号、p.230-236

(4) 公刊された対談

対談「冬の陽ざしのなかで」J.M.G. ル・クレジオ・中地義和、『早稲田文学』、2016春、p.181-191

講演「青春を書く 老年を書く」J.M.G.ル・クレジオ、聞き手・訳 中地義和、『文學界』、2016.4、p.168-189/ 東大TV「ル・クレジオ氏講演会 2015『青春を書く 老年を書く』」

Entretien avec Yoshikazu Nakaji, Rimbaud ivre, blog de Jacques Bienvenu, publié samedi 9 janvier 2016

(<http://rimbaudivre.blogspot.jp/2016/01/entretien-avec-yoshikazu-nakaji.html>)

(5) 学会発表・講演

国外 «Roland Barthes et le Japon» (招待講演)、Université de Genève、2016年4月11日

国外 «"Mon sort dépend de ce livre": vie et art dans *Une saison en enfer*» (招待講演)、Université Paris-Sorbonne、2017年3月22日

国外 «Le poème en prose et le narratif: *Illuminations*» (国際学会«Narration et invention en littérature et cinéma»での発表)、Université de Genève、2017年3月24日

国内「『ぼくの運命はこの本にかかっている』——ランボー『地獄の季節』の解釈と翻訳」(招待講演)、北海道大学文学研究科、2017年7月21日

国外 «Le Clézio et la culture japonaise» (国際学会 «Le Clézio et l'Asie»での発表)、中国、南京大学、2017年10月9日

(6) 会議主催等

«Les saisons de Rimbaud» (国際学会の共同企画・運営)、Université Paris-Sorbonne、2017年3月16-18日

«Baudelaire 150 ans après» (国際学会の主催)、東京大学人文社会系研究科、2017年5月28日

3. 主な社会活動

(1) 学会

コレージュ・ド・フランス (招聘講師)、4回連続講義 «Les inventions d'inconnu: Rimbaud face à Baudelaire»、2016年4月-5月

パリ＝ソルボンヌ大学 (客員教授)、2017年3月-4月

日本フランス語フランス文学会

国際フランス研究学会

国際ランボー研究誌「バラッド・ソヴァージュ」(*Parade sauvage*) 学術委員

「ボードレール年鑑」(*L'Année Baudelaire*) 編集委員

「クリティーク」誌 (*Critique*) 国際審査委員

「ランボーの友」誌 (*Les Amis de Rimbaud*) 日本通信員

(2) 行政

人文社会系研究科・文学部 学術奨励委員会委員長 (2016.4.1-2017.3.31)

人文社会系研究科・文学部 組織運営委員会委員長 (2017.4.1-2018.3.31)

1. 略歴

1981年3月	東京大学文学部第三類フランス語フランス文学専修課程卒業
1981年4月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程入学（仏語仏文学）
1985年4月	東京大学大学院人文科学研究科専攻博士課程進学
1985年9月	パリ第3大学博士課程（～1989年3月）（フランス文学、フランス政府給費留学生）
1989年4月	東京大学文学部助手
1990年4月	一橋大学法学部専任講師
1993年4月	一橋大学法学部助教授
1997年5月	一橋大学大学院言語社会研究科助教授
2000年4月	東京大学大学院総合科学研究科助教授
2007年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2012年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授、現在に至る

2. 主な研究活動

a 専門分野

ジェラルール・ド・ネルヴァルの作品を中心とするフランス・ロマン主義文学。近現代小説論、翻訳論、映画論。

b 研究課題

- (1) フランス・ロマン主義文学における「作者」像の成立と変容。
- (2) フランス19世紀文学史の再検討。
- (3) 近現代文学における「翻訳」をめぐる問題の探求。
- (4) フランス映画における「作家主義」の再検討。

c 概要と自己評価

(1)については、科学研究費を得て、18世紀文学やロマン派音楽の研究者も含む横断的、複眼的な探求を試みた。その成果の一端を刊行することができた。

(2)については、(1)の研究と連動しつつ、とりわけジェラルール・ド・ネルヴァルの代表作『火の娘たち』の翻訳・研究を進め、ロマン主義的ポエジーと小説的リアリズムの相互関係の考察を深めている。また19世紀の小説に大きなインパクトを与えたプレヴオの小説『マノン・レスコー』を詳細な解説を付して翻訳刊行した。

(3)もまた、(1)および(2)と緊密に関連する主題であり、「作者」の問題を考える際に「翻訳者」という補助線を引くことが意義をもつというアイデアのもと、フランスおよび日本の作家における事例を探っている。その具体例として井伏鱒二論を書き進めており、近々単著として刊行の予定である。

(4)に関しては、フランス映画理論史上、最重要の存在とみなされるアンドレ・バザンの研究を継続し、一次資料を検討しつつ、「作家主義」の実相を考察している。

d 主要業績

(1) 著書

野崎歓、『夢の共有——文学と翻訳と映画のはざままで』岩波書店、2016年、212p.

『文学批評への招待』丹治愛、山田広昭編、2018年、放送大学教育振興会、分担執筆（野崎歓、「4 小説の分析」 pp.70-86；「5 映画の分析」 pp.87-101）

(2) 論文

野崎歓、「井伏鱒二論 第一章「鱒二は修業中です」」、「すばる」、2016年5月、pp.200-215

野崎歓、「井伏鱒二論 第二章 ドクトル・イブセの翻訳教室」、「すばる」、2016年7月、pp.314-330

野崎歓、「第三の性と出会うとき——フランス文学とホモセクシュアリティ」、「すばる」、2016年8月、pp.94-103

野崎歓、「井伏鱒二論 第三章 架空の日記の謎」、「すばる」、2016年9月、pp.228-245

野崎歓、「井伏鱒二論 第四章 「こころ悩めば旅にいだよ」」、「すばる」、2016年11月、pp.268-286

野崎歓、「歌声と回想——ルソー、シャトーブリアン、ネルヴァル」、塚本昌則・鈴木雅雄編『声と文学——拡張する身体誘惑』平凡社、2017、pp.256-275

野崎歓、「井伏鱒二論 第五章 戦場のドクトル・イブセ」、「すばる」、2017年3月、pp.306-323

Kan Nozaki, « Gérard de Nerval et le partage du rêve », *Revue Nerval*, Paris, Classiques Garnier, n.1, 2017, pp.43-58

- 野崎敏、「井伏鱒二論 第六章 水のほとりは命のただ中」、「すばる」、2017年5月、pp.214-233
- 野崎敏、「井伏鱒二論 第七章 宝さがしの旅」、「すばる」、2017年7月、pp.218-238
- 野崎敏、「井伏鱒二論 第八章 田園に帰る」、「すばる」、2017年9月、pp.252-274
- 野崎敏、「フランス文学から映画へ——ロベール・ブレッソンの場合」、小川公代・村田真一・吉村和明編『文学とアダプテーション——ヨーロッパの文化的変容』春風社、2017年、pp.35-60
- Kan Nozaki, « Nerval à la lumière de Said : au-delà de l'orientalisme », *Gérard de Nerval, histoire et politique*, sous la direction de Gabrielle Chamarat, Jean-Nicolas Illouz, Mireille Labouret, Bertrand Marchal, Henri Scepi, Gisèle Séginger, Paris, Classiques Garnier, 2018, pp. 85-98

(3) 書評

- 野崎敏、クツツエー『イエスの幼子時代』書評「北海道新聞」2016年7月24日朝刊
- 野崎敏、墓田桂『難民問題』書評、東京新聞、2016年11月20日朝刊
- 野崎敏、バーナビー・コンラッド三世『アブサンの文化史』書評、日本経済新聞、2月26日朝刊
- 野崎敏、「世界文学の海原をへめぐる精神の航跡——池澤夏樹『世界文学を読みほどく』」、「波」、2017年4月、p.92
- 野崎敏、「ここではなく、別の場所へ」——金井美恵子『カストロの尻』、「波」、2017年6月、p.20
- 野崎敏、ロマン・ガリ『夜明けの約束』書評、「週刊読書人」、2017年7月14日
- 野崎敏、キン・フー、山田宏一、宇田川幸洋『キン・フー 武俠電影作法 新装版』書評、「キネマ旬報」、2017年8月下旬、pp.148-149
- 野崎敏、オリヴィエ・ブルドー『ボージャングルを待ちながら』書評、日本経済新聞、2017年10月26日
- 野崎敏、陳浩基著・天野健太郎訳『13・67』書評、「中央公論」、2017年12月、pp.192-193
- 野崎敏、空族『バンコクナイト 潜行一千里』書評、「文藝」、2018年春、p.497

(4) 学会発表・講演

- 中条省平、野崎敏、三浦哲哉「ヌーヴェルヴァーグを総括する」、日本フランス語フランス文学会 2016年度春季大会、学習院大学、2016年5月28日
- 野崎敏、「鷗外とフランスの絆」、文京区立森鷗外記念館、2016年10月22日
- 中条省平、野崎敏、「ジャック・ドゥミの世界」、日仏会館「映像と講演」、2017年2月15日
- 野崎敏、「ノワール映画の系譜 フランスから香港へ」、東京国立近代美術館フィルムセンター、2017年9月30日
- 野崎敏、「アダプテーションの『新しい波』ヌーヴェルヴァーグとバルザック」、日本比較文学会 2017年度東京支部大会シンポジウム「アダプテーションの力」、2017年10月15日
- 野崎敏、「『マノン・レスコー』の時を超える魅力」、光文社古典新訳文庫 Readers Club Reading Session、第37回、紀伊国屋書店新宿本店、2018年1月26日
- 松浦寿輝、野崎敏、堀江敏幸、「フランス文学夜話」、代官山蔦屋書店、2018年3月13日

(5) 啓蒙

- 野崎敏、「ことばのプレゼント」、「基礎英語」2016年4月、第73巻第1号、pp.126-131
- 野崎敏、「PICKUPMOVIE」、「芸術新潮」、2016年4月、p.145；5月、p.145；6月、p.137；7月、p.147；8月、p.217；9月、p.137；10月、p.145；11月、p.147；12月、p.111；2017年1月、p.129；2月、p.129；3月、p.145；4月、p.145；5月、p.145；6月、p.123；7月、p.161；8月、p.147；9月、p.147；10月、p.129；11月、p.129；12月、p.169；2018年1月、p.121；2月、p.121；3月、p.161
- 野崎敏、「目をつぶってはならない ポール・アンドリュウ・ウィリアムズ監督『アイヒマン・ショー』」、「すばる」、2016年5月、pp.340-341
- 野崎敏、「ロメールと女たち」、「キネマ旬報」、2016年4月上旬、pp.38-41
- 野崎敏、「映画が尾行するとき——アダプテーションの力」、『二重生活』パンフレット、スターサンズ/ミラクルヴォイス、2016年6月
- 野崎敏、ジャック・ジャンクー監督『山河ノスタルジア』評、日本経済新聞、2016年4月22日夕刊
- 野崎敏、ジャック・ドゥミ監督『ローラ』解説、『ローラ』DVDリーフレット、アイ・ヴィー・シー、2016年6月中条省平、野崎敏対談、「映画と文学の間でたえず、揺れ動いて」、「キネマ旬報」2016年通巻2533号、No.1719、7月上旬、pp.58-66
- 野崎敏、「シャルリを憐れむ歌」、「ふらんす」、2016年7月、p.14
- 野崎敏、「純白の花嫁 チェ・ドンフン監督『暗殺』」、「すばる」、2016年8月、pp.304-305
- 野崎敏、「母にめぐりあうために」、ウニー・ルコント監督『めぐりあう日』パンフレット、『EQUIPE DE CINEMA』211号、岩波ホール、2016年8月、pp.8-9

- 野崎敏、「愛の教育装置としての仏文」、「淡青」(東京大学広報誌)、2016年9月、p.10
- 野崎敏、「《カルメン》または自由の女神への讃歌」、NHK交響楽団ビゼー「カルメン」フライヤー、2016年10月
- 野崎敏、「アクション史を塗り替えたこの3本」、「キネマ旬報」2016年10月下旬号、pp.48-49
- 野崎敏、「子どもは映画の未来である エイドリアン・クワン監督『小さな園の大きな奇跡』」、「すばる」、2016年11月、pp.340-341
- 沼野恭子、野崎敏、小野正嗣、藤井光、(進行)辛島デイヴィッド「座談会 21世紀の暫定名著——海外文芸篇」、『21世紀の暫定名著』群像編集部編、講談社、2016年、pp.175-227
- 野崎敏、「あまりにも深い、「美」への憧憬——『ミュージズ・アカデミー』」、「キネマ旬報」、2016年12月上旬、pp.36-37
- 野崎敏、「ヒッチコックとバザン トリュフォーのふたりの父」、「キネマ旬報」、2016年12月下旬、pp.55-56
- 野崎敏、「美しい日本語 森鷗外『安井夫人』——切迫こそが美しい」、「群像」、2017年1月、pp.180-181
- 野崎敏、「男子禁制の愉悦 レア・プール監督『天使にシヨパンの歌声を』」、「すばる」、2017年2月、p.334-335
- 野崎敏、「「香港映画の街角」のいま」、「キネマ旬報」、2017年1月下旬、pp.51-53
- 「interview 野崎敏 評論集『夢の共有』刊行——文学と映画の「翻訳的關係」、毎日新聞、2017年1月21日朝刊
- 野崎敏、「文庫双六 セルバンテス『ドン・キホーテ』」、「週刊新潮」2017年2月2日、p.121
- 野崎敏、「エドワード・ヤンと夜の学校——『クーリンチェ少年殺人事件』のために」、「文學界」、2017年3月、pp.80-81
- 塩川徹也・野崎敏、〈パスカル『パンセ』を読む〉、「週刊読書人」、2017年2月10日
- 野崎敏、「文庫双六 フレデリック・ブラウン『さあ、気持ちがよいになりなさい』」、「週刊新潮」2017年3月2日、p.125
- 野崎敏、「文庫双六 ガーネット『狐になった奥様』」、「週刊新潮」2017年3月30日、p.127
- 野崎敏、「きみの歌はぼくの歌 ヤスミン・アフマド監督『タレントタイム』」、「すばる」、2017年5月、pp.302-303
- 野崎敏、「「あり得る」ルベン仏大統領 『自由・平等・博愛』どこへ」、毎日新聞、2017年4月13日夕刊
- 野崎敏、「文庫双六 モーム『世界の十大小説』」、「週刊新潮」、2017年4月28日、p.127
- 野崎敏、「耕論 顕在化した闇 克服の過渡期」朝日新聞、2017年5月9日朝刊
- 野崎敏、「私の三冊」、「図書」(岩波文庫創刊90年記念 臨時増刊)、2017年5月、p.57
- 野崎敏、豊崎由美対談、「海外文学への誘い」、「青春と読書」、2017年5月臨時増刊、pp.24-29
- 野崎敏、「文庫双六 穂村弘『短歌という爆弾』」、「週刊新潮」、2017年6月8日、p.127
- 野崎敏、「文庫双六 井伏鱒二『釣師・釣場』」、「週刊新潮」、2017年7月6日号、p.117
- 野崎敏、「早稲田のまちで繰り広げる作家夫婦の物語 久松静児監督『愛妻記』」、一般社団法人不動産協会広報誌「F-ORE」、2017年7月、pp.10-11
- 野崎敏、「文庫双六 谷崎潤一郎『独探』」、「週刊新潮」2017年8月3日、p.117
- 野崎敏、内田洋子『どうしようもないのに、好き イタリア15の恋愛物語』集英社文庫、解説、2017年8月、pp.236-241
- 野崎敏、「もう手遅れだ、まだ間にあう ン・ガーリオン他監督『十年』」、「すばる」、2017年8月、pp.302-303
- 野崎敏、「『ヤンヤン 夏の想い出』——エドワード・ヤンと小柄な男児の秘密」、「『エドワード・ヤン——再見・再考』フィルムアート社、2017年、pp.226-236
- 野崎敏、「失われた書物を求めて」、「東京の古本市」東京都古書組合、2017年9月4日、1面
- 野崎敏、「文庫双六 カミュ『異邦人』」、「週刊新潮」2017年9月14日、p.117
- 野崎敏、「不器用で矛盾だらけの男たち」、映画「セザンヌと過ごした時間」パンフレット、2017年9月、Bunkamura、pp.4-5
- 野崎敏、「文庫双六 江戸川乱歩『黄金豹』」、「週刊新潮」2017年10月12日、p.119
- 野崎敏、「リュミエールとメリエス 映画の父たち」リュミエール!」パンフレット、東京テアトル、2017年10月、pp.8-9
- 野崎敏、「文庫双六 勝新太郎『俺 勝新太郎』」、「週刊新潮」2017年11月9日、p.119
- 野崎敏、「エイブの黙示録 『猿の惑星 聖戦記』」、「すばる」、2017年11月、pp.302-303
- 野崎敏、「カメラに愛された男、レオー」、映画『ライオンは今夜死ぬ』パンフレット、ビターズエンド、2107年11月、pp.7-8
- 野崎敏、「映画の味は健康回復の味」、「PHP からだスマイル (PHP くらしラク〜る 1月増刊)」、PHP 研究所、2018年1月、pp.128-131
- 野崎敏、「文庫双六 高野秀行『ワセダ三畳青春記』」、「週刊新潮」、2017年12月7日、p.117
- 野崎敏、「清冽な『北』の経験——松家仁之『光の犬』を読む」、「新潮」、2018年1月、pp.264-267

野崎敏、「視差の刺激に満ちた体験——ジェイムズ・キャントンほか『世界文学大図鑑』、「英語教育」、2018年1月、
p.94

諏訪敦彦、「映画の楽しみをレオーとともに」聞き手・野崎敏、「芸術新潮」、2018年2月号、pp.102-105

中条省平、野崎敏対談、「ジャン=ピエール・レオーとは何か」、「キネマ旬報」、2018年1月上旬、pp.36-39

野崎敏、「文庫双六 澁澤龍彦『プリニウスと怪物たち』」、「週刊新潮」、2018年1月18日、p.117

野崎敏、「子どもは（大人も）判ってくれない 諏訪敦彦監督『ライオンは今夜死ぬ』、「すばる」、2018年2月、
pp.328-329

野崎敏、「井伏鱒二を読む喜び」、「文藝春秋」、2018年2月、pp.82-84

野崎敏・堀江敏幸対談、「再発見・井伏鱒二 対談・友釣りのエクリチュール」、「すばる」、2018年3月、pp.96-115

野崎敏、「『大いなる幻影』、反復する喜び」、「『大いなる幻影（デジタル修復版）』パンフレット、川崎市アートセンタ
ー、2018年2月、pp.8-9

野崎敏、「文庫双六 井原西鶴『好色一代男』」、「週刊新潮」、2018年2月15日、p.115

柴田元幸・野崎敏・松永美穂・和田忠彦・山口裕之、「シンポジウム 翻訳という想像空間」、「世界」、2018年3月、
pp.188-199

野崎敏、「『恋多き女』、愛の波動が広がるとき」、ジャン・ルノワール監督『恋多き女』パンフレット、川崎市アート
センター、2018年3月、pp.8-9

野崎敏、「日常のひとこまに息づく美」、「『ART GALLERY テーマで見る世界の名画』、第7巻「風俗画 日常へのま
なざし」、集英社、2018年3月、pp.90-91

野崎敏、「文庫双六 クリフォード・ストール『カッコウはコンピュータに卵を産む』」、「週刊新潮」、2018年3月15
日、p.135

野崎敏、「まちと映像の記憶 全編にわたって東京のまちを撮影——野村芳太郎監督『東京湾』、「FORE」一般社団
法人不動産協会、2018年2月、pp.10-11

(6) 翻訳

野崎敏（単独訳）、プレヴォ『マノン・レスコー』翻訳・解説・年譜、光文社古典新訳文庫、348p、2017年12月

野崎敏（単独訳）、アンドレ・バザン「作家主義について」翻訳・訳者解説、「アンドレ・バザン研究」第1号、山形
大学人文学部附属映像文化研究所、2017年3月31日、pp.60-85

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本フランス語フランス文学会員

「ルヴュ・ネルヴァル」(*Revue Nerval*) 誌日本連絡員

(2) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

小西国際交流財団日仏翻訳文学賞選考委員長

群像新人文学賞選考委員

芸術選奨推薦委員

1. 略歴

- 1982年3月 東京大学文学部第三類フランス語フランス文学専修課程卒業
1984年4月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程入学（仏語仏文学）
1987年4月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程進学
1988年10月 パリ第12大学博士課程（～1991年9月）（フランス文学、フランス政府給費留学生）
1992年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程退学
1992年4月 東京大学文学部助手
1994年4月 白百合女子大学文学部専任講師（フランス文学）
1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教（フランス語フランス文学）
2010年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（フランス語フランス文学）

2. 主な研究活動

a 専門分野

フランス近代文学。

b 研究課題

- (1) ポール・ヴァレリー研究。「夢」というトポス、断章という形式からの検討。
- (2) クレオール文学研究。エキゾティシズムとは無縁の、活力にあふれたその作品美学の研究を、セゼール、グリッサン、シャモワゾー、コンフィアンなどの作品読解を通して進めている。
- (3) 20世紀フランス文学における散文の研究。小説全盛の19世紀とは異なり、20世紀には、詩的強度を備えたさまざまな散文作品が書かれるようになった。とりわけ、時間意識、夢と覚醒というテーマ、さらにイメージの活用法という視点から、その特質の一端を捉えようと試みている。

c 概要と自己評価

- (1)については、長年の課題として研究を続けている。ヴァレリーにおける詩学に焦点を当てて研究集会を共同主催、その成果を『ヴァレリーにおける詩と芸術』（水声社）として出版する予定である。ヴァレリーと日本文学との関わりについても、石川淳をめぐって行った研究をさらに展開する準備を進めている。
- (2)については、グリッサンの大著『カリブ海のディスクール』を共訳で翻訳し、現在校正中である。また、クレオール文学を日本語で訳そうとする時に生じる問題について、研究集会で発表した。
- (3)については、20世紀フランス文学について、「夢」というテーマをめぐって、ヴァレリー、プルースト、ブルトン、サルトル、バルトを比較検討する論文を執筆、現在一本の原稿としてまとめようとしている。また、ウィリアム・マルクス『文学との訣別』の翻訳が現在印刷中。この批評家は、18世紀から20世紀にかけて、文学が社会において途方もなく高い地位を獲得した後、価値下落の憂き目に遭った状況を分析している。

d 主要業績

(1) 論文

- 塚本昌則、「放心の幾何学——20世紀フランス文学における眠りと夢（1）——」、『思想』、2016年8月号（n.1108）、p.78-96
塚本昌則、「放心の幾何学——20世紀フランス文学における眠りと夢（2）——」、『思想』、2016年12月号（n.1112）、p.110-132
Masanori Tsukamoto, « La photographie dans l'œuvre critique de Valéry », *Textimage*, n° 8 : Poésie et image à la croisée des supports, Hiver 2017, http://revue-textimage.com/13_poesie_image/tsukamoto1.html
塚本昌則、「放心の幾何学——20世紀フランス文学における眠りと夢（3）——」、『思想』、2017年3月号（n.1115）、p.93-114
塚本昌則、「放心の幾何学——20世紀フランス文学における眠りと夢（4）——」、『思想』、2017年9月号（n.1121）、p.83-105
Masanori Tsukamoto, « Valéry et Proust : Deux poétiques du rêve », *Valéry et les sciences*, Fata Morgana / Musée Paul Valéry, 2017, p.51-74
塚本昌則、「ロラン・バルトにおける眠りと覚醒——〈中性〉をめぐって——」、『日本フランス語フランス文学会 関東支部論集』、第26号(2017.12)、p.61-76

Masanori Tsukamoto, « Dessin et rêve chez Valéry — autour de Degas Danse Dessin », Degas Danse Dessin : Hommage à Degas avec Paul Valéry, Musée d'Orsay / Gallimard, 2017, p.58-65

塚本昌則、「放心の幾何学——20 世紀フランス文学における眠りと夢 (5)——」、『思想』、2018 年 6 月号 (n.1130)、p.116-137

(2) 書評

塚本昌則、イレーネ・ネミロフスキー『血の熱』、『週刊読書人』、2016.7.15

塚本昌則、「2016 年回顧・外国文学 (フランス)」、『週刊読書人』、2016.12.23

塚本昌則、「2017 年回顧・外国文学 (フランス)」、『週刊読書人』、2017.12.22

塚本昌則、タハール・ベン・ジェルーン『嘘つきジュネ』、『週刊読書人』、2018.3.23

(3) 学会発表

国外、Masanori Tsukamoto, « Valéry et Proust – deux poétiques du rêve », Musée Paul Valéry (Montpellier, France)での国際研究集会 « Paul Valéry et les sciences » (2016.9.23-25)での発表、2016.9.25

国内、塚本昌則、「ローデンバックの写真小説」、日白修好 150 周年記念シンポジウム実行委員会主催『文化・知の多層性と越境性へのまなざし——学際的交流と「ベルギー学」の構築をめざして』(2016.12.10-11)での発表、東京理科大学神楽坂キャンパス富士見校舎、2016.12.10

国内、塚本昌則、「ロラン・バルトにおける眠りと覚醒——〈中性的なもの〉をめぐる」、日本フランス語フランス文学会関東支部 2016 年度大会シンポジウム「20 世紀フランス文学における夢」での発表、東京外語大学、2017.3.4

国外、Masanori Tsukamoto, « Breton au Japon – une passivité créatrice », Bibliothèque Nationale de France (Paris)での国際研究集会 « Breton après Breton (1966-2016) – Philosophies du surréalisme » (2017.4.26-27)での発表、Auditorium de la galerie Colbert、2017.4.26

国内、塚本昌則、「シミュレーションの詩学——ヴァレリーにおける身体の変容」、2017 年度秋季日仏シンポジウム芸術照応の魅惑 3 「ヴァレリーにおける詩と芸術」(2017.10.21-22)での発表、日仏会館、2017.10.21

国内、塚本昌則、「クレオール文学をどう訳すか」、早稲田大学・現代フランス研究所、日仏会館フランス事務所主催の国際研究集会「世界文学から見たフランス語圏カリブ海——ネグリチュードから群島の思考へ——」(2018.3.25-26)での発表、日仏会館、2018.3.26

(4) 翻訳

共訳、André Gide / Pierre Loÿs / Paul Valéry, “Correspondance à trois voix : 1888-1920”、松田浩則・山田広昭・塚本昌則・森本淳生訳、アンドレ・ジイド／ピエール・ルイス／ポール・ヴァレリー『三声書簡 1888-1890』、水声社、2016.5、695p.

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本フランス語フランス文学会員

19 南欧語南欧文学

教授 浦 一章 URA, Kazuaki

1. 略歴

1982年3月	東京大学教養学部教養学科イギリス科卒業
1984年3月	同 文学部イタリア語イタリア文学専修課程卒業
1987年3月	東京大学大学院人文科学研究科フランス語フランス文学専門課程(イタリア語イタリア文学専攻)修士課程修了
1987年4月	東京大学大学院人文科学研究科フランス語フランス文学専門課程(イタリア語イタリア文学専攻)博士課程進学
1988年3月	東京大学大学院人文科学研究科フランス語フランス文学専門課程(イタリア語イタリア文学専攻)博士課程中途退学
1988年4月	東京芸術大学音楽学部一般学科専任講師
1990年4月	同 助教授
1994年4月	東京大学文学部南欧語南欧文学科助教授
1995年4月	同 大学院人文社会系研究科助教授
2010年4月	同 教授、現在に至る。

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

(ダンテを中心とした) イタリア文学、中世オック語文学

c 概要と自己評価

概要

『ダンテ研究 I』(東京、東信堂、1994年)以降も、『神曲』以前のダンテ、恋愛詩人としてのダンテを研究の中心に据え、1230年頃からホーエンシュタウヘン家の宮廷で花開いたシチリア派の詩人たちや、それに続くシチリア・トスカーナ派の詩人たちについての知識を深め、さらには南仏トルバドールたちの詩に対する理解を深めること。ダンテは少なくとも8名のトルバドールに言及しており、そのうちアルナウト・ダニエルを「煉獄篇」第26歌に登場させる際には、わざわざオック語で語らせるという念の入りようである。そのため、ダンテとトルバドールとの関係に対する興味が現在では次第に大きくなりつつある。また、恋愛詩の伝統はペトラルカをへて、時と地域、個性の壁を超越した一種の文学的コイナーを形成してゆくため、ダンテ以降の恋愛詩をも視野に含めるよう努め、ダンテの受容史という観点から、その最初の崇拜者ともいべきボッカチオおよび騎士道物語詩(とりわけタツソ)にも関心を寄せている。

自己評価

『神曲』とも対照させながら、『シタ・ノワ』に収録された韻文のスタイルの変化を跡づけることが現在の主要な課題であるが、文体を問題とする困難な研究は少しずつ前進を続けている。トスカーナ地方の文学(とりわけダンテ)がアペニン山脈以北の地方、たとえばボローニャを中心としたエミリア・ロマーニャ地方や、パドヴァ、ヴェネツィア、トレヴィーゾなどを含むヴェネト地方でどのように受容されたかについても知見を深めるべく努めている。教育面では、現在、効果的な文学史教育を模索中であるが、必要な講義資料の整備を進めつつ、19-20世紀の作家にとり組んでいる(2011年度より引き続き、リゾルジメント期の作家を主題として発展中である)。すでに中世オック語入門に関してはルーティーン化が完了したとあってよい状況だが、入門を終えた後の教育体制の改善は中断している。また、イタリアの「詩的言語」の特徴を語学的な観点から体系的に教育すべく案を練っている。

d 主要業績

(1) 論文

Kazuaki Ura (浦一章)、『Tre note per Guido Guinizzelli, Nicolò de' Rossi e Giovanni Quirini』、『Letteratura italiana antica』、XV、199-222頁、2014.2

浦一章、「3つの覚書——グイニツェッリ、ニコロ・デ・ロッシ、ジョヴァンニ・クイリーニ」、『イタリア語イタリア文学』(東京大学人文社会系研究科南欧語南欧文学研究室紀要)、VII、3-65頁、2014.4

Kazuaki URA (浦一章)、『Giovanni Quirini, lettore “sintagmatico” di Dante, Rime, LXVII e LXVIII』、『Lingue testi culture. L'eredità di Folena vent'anni dopo. Atti del XL Convegno Interuniversitario (Bressanone, 12-15 luglio 2012)』、『Quaderni del Circolo filologico linguistico padovano, 28, 349-369 頁、2014.7

Kazuaki URA (浦一章)、『Il genere *Renga* e l'autorialità plurima』、『L'autorialità plurima. Scritture collettive, testi a più mani, opere a firma multipla. Atti del XLII Convegno Interuniversitario (Bressanone, 10-13 luglio 2014) [= Quaderni del Circolo filologico linguistico padovano, 30]』、『319-34 頁、2015.7

(2) 学会発表

国際、Kazuaki URA (浦一章)、『Nascita, sviluppo e prassi del *Renga*: un genere giapponese di autorialità plurima』、『L'autorialità plurima. Scritture collettive, testi a più mani, opere a firme multipla』、『Bressanone, 10-13 luglio 2014、2014.7.12

(3) 翻訳

個人訳、チャールズ・S・シングルトン (Charles S. Singleton)、『キタ・ノワ試論』(『*Essay on the Vita Nuova*』) [第5章]、浦一章、『キタ・ノワ試論』[第5章]、『イタリア語イタリア文学』(東京大学人文社会系研究科南欧語南欧文学研究室紀要)、VII、91-109 頁、2014.4

個人訳、エンリーコ・ディ・ボルボーネ、*Diario*、浦一章、『エンリーコ・ディ・ボルボーネ一行の九州滞在記』、『イタリア語イタリア文学』(東京大学人文社会系研究科南欧語南欧文学研究室紀要)、VII、111-208 頁、2014.4

(4) 史料

浦一章、『フェルディナンド・デ・メディチ大公子の蒐集活動に関する史料から(1)』、『小佐野重利編『西欧 17 世紀以降の王侯の絵画コレクションの形成における複製絵画の影響』、2011-13 年度科学研究補助金基盤研究 [B] 報告書、課題番号 23320029、東京、東京大学大学院人文社会系研究科美術史研究室、2014 年、55-78 頁、2014.4

浦一章、『フェルディナンド・デ・メディチ大公子の蒐集活動に関する史料から(2)』、『小佐野重利編『西欧 17 世紀以降の王侯の絵画コレクションの形成における複製絵画の影響』、2011-13 年度科学研究補助金基盤研究 [B] 報告書、課題番号 23320029、東京、東京大学大学院人文社会系研究科美術史研究室、2014 年、79-99 頁、2014.4

(5) 会議主催 (チェア他)

国内、『Furio Brugnolo 教授 (パドヴァ大学) 講演会』、『主催、東京大学文学部南欧文学研究室 (2015.4.6 および 2015.4.9)、京都大学文学部イタリア文学研究室 (2015.4.16)

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、集英社 (および東京大学文学部)、『恋愛における最大の悲しみ——ダンテと宮廷風恋愛の伝統』、2014.12

特別講演、群馬県立土屋文明記念文学館、『『神曲』に描かれた中世イタリア——ダンテ生誕 750 周年に寄せて』、2015.12

20 英語英米文学

教授 今西 典子 IMANISHI, Noriko

1. 略歴

1974年3月	お茶の水女子大学文教育学部英文科卒業
1976年3月	東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻修士課程修了
1977年3月	東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻博士課程単位取得のうえ中途退学
1977年4月	富山大学文理学部（改組後 人文学部）専任講師
1981年4月	富山大学文理学部（改組後 人文学部）助教授
1982年10月	お茶の水女子大学文教育学部 専任講師
1985年11月	お茶の水女子大学文教育学部 助教授
1995年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 助教授
1996年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授
2017年3月	定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

英語学／言語学

b 研究課題

「普遍文法と言語獲得理論研究」

さまざまな言語事象について、大人の文法だけでなく子供の文法に関する通言語的資料を検討・考察し、表現形式とそれが担う意味との対応を律する原理や習得過程を律する原理を実証的に解明し、統語論と意味論・語用論とのインターフェイスや言語機能と他の認知体系とのインターフェイスに課される制約を解明することにより、言語間変異と言語の習得可能性を妥当に説明しうる普遍文法の構築を模索する。

c 概要と自己評価

2016年度も、統語論と意味論・語用論とのインターフェイスに課される制約の解明という問題に焦点をあてて、2つの共同プロジェクト研究を行った。ひとつは「こころの時間学」研究（科研費）で、言語・哲学の研究者とともに、時間の言語表現化に係るさまざまな問題を考察・討議し、脳内での時間の表示について、2015年度の脳科学研究者との実験的共同研究をさらに進展させた。個人の研究としては、時間の言語化にみられる多様性は、述語の内在的語彙的意味特性である相の情報と生得的に備わっている「時間関係解釈原理」が個別言語の時制と相の形態統語標識の体系と相互作用することにより生じることを実証的に明らかにするとともに、形態類型論的に異なる3つの言語、英語、イヌクティット語、日本語を母語として獲得している幼児の縦断的自然発話資料調査に基づき、時間の言語化の発達過程の様相にどのように普遍性と多様性が具現化しているかを考察した。なお、この研究成果は、2017年度に『Brain and Nerve』（69巻11号、医学書院）に公刊予定で、形態論・統語論と意味論・語用論とのインターフェイスに課される制約から言語観変異が生じる様相を言語獲得の資料により裏付けられることを示すものである。もうひとつは、否定あるいは反駁的バイアスを含む意味解釈を導く「修辞疑問」について、修辞疑問は統語形式としては多くの言語で純粹疑問の表現形式とほぼ同じ形式になりうるのになぜ異なる意味解釈が与えられるのかについて解明を試みる共同研究（科研費）において、2015年度の研究成果を踏まえ、修辞疑問における多重WH句制約、修辞疑問における Pied-Piping に関わる制約、修辞解釈と感嘆文の意味解釈の類似性などについて、WH-形式の特性や発話動詞による埋込み構造の日英語間の相違等に基づき、英語と日本語の共通特性と相違性について原理的説明を探り、共著論文としてまとめた。

最終講義「ことばの研究のおもしろさ: 普遍性と多様性の探求」では、Question-Answering Systems について、英語、ドイツ語、フランス語という西欧諸語および日本語との共通特性と相違性について考察し、人間の言語では、どのような応答形式が可能であるかを探り、さらになぜそのような変異が可能であるのかを統語論と意味論・語用論のインターフェイスにおける制約という観点から探求した研究成果を提示した。

これら3つの研究は、言語機能における 'the third factor' の解明に寄与するという意味において重要なものであり、今後のさらに研究を進めることにより、普遍文法と言語機能を解明する研究の進展に寄与することが期待される。

d 主要業績

(1) 論文

今西典子、稲田俊明、「日英語の修辭疑問の特性と統語制約：言語の普遍性と多様性の探求（2）」、『長崎大学言語教育研究センター論集』第5号、1-18頁、2017.3

今西典子、「時制の解釈と生涯効果（Lifetime Effects）」、高見健一他編『〈不思議〉に満ちたことばの世界』250-254頁、開拓社、2017.3

(2) 学会発表

国内、今西典子、「ことばの研究のおもしろさ：普遍性と多様性の探求」、東京大学英文学会、2017.3.20

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本学術会議、連携会員、2014.4～2017.3

国内、日本英語学会、評議員、2016年度

(2) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

市河賞選考委員、2016年度

とやま賞選考委員、2016年度

東京言語研究所運営委員、2016年度

教授 **大橋 洋一** OHASHI, Yoichi

1. 略歴

- | | |
|---------|------------------------------|
| 1976年3月 | 東京教育大学文学部文学科英語英文学専攻 卒業（文学士） |
| 1979年3月 | 東京大学大学院人文科学研究科修士課程 修了（英文学） |
| 1979年4月 | 東京大学文学部英文科 助手 |
| 1981年4月 | 中央大学法学部 専任講師（英語） |
| 1983年4月 | 学習院大学文学部英米文学科 専任講師 |
| 1985年4月 | 学習院大学文学部英米文学科 助教授 |
| 1994年4月 | 学習院大学文学部英米文学科 教授 |
| 1996年4月 | 東京大学大学院人文社会系研究科 助教授（英語学英米文学） |
| 1999年4月 | 東京大学大学院人文社会系研究科 教授 |

2. 主な研究活動

a 専門分野

英国演劇・批評理論

b 研究課題

- (1) シェイクスピアを中心とする英国初期近代演劇の研究。
- (2) 英国演劇研究。
- (3) 英語圏の文学理論の研究。教育の場で、理論あるいは分析法をいかに教えるかという問題も視野に入れる。

c 概要と自己評価

上記(1)に関しては、継続研究課題。2016年～17年においては、シェイクスピアの悲劇に関する包括的な研究を実施。2018年より研究成果を公表予定。またシェイクスピア劇を中心としてアダプテーション問題を考察した。(2)についてはハロルド・ピンターに関する研究を本格的に開始。また演劇分野としては英国演劇におけるメタドラマと不条理演劇を考察。(3)エコクリティシズムの視点と方法を、文学研究や教育の場へ適用することを考察し、2016年～2017年は動物論に集中。シェイクスピア研究・英文学研究と動物論との合体を考えた。

d 主要業績

(1) 論文

大橋洋一、「未来への帰還」、岩田和男・武田美保子・武田悠一（編）『アダプテーションとは何か——文学／映画批評の論理と実践』世織書房、25-48 頁、2017.3

(2) 翻訳

監訳、ドイル、メルヴィルほか『クィア短編小説集——名づけえぬ欲望の物語』平凡社ライブラリー、平凡社、2016.8
(オリジナル・アンソロジー)

共訳、Terry Eagleton、*Across the Pond*、大橋洋一・吉岡範武訳、『アメリカ人はどうしてあなののか』河出文庫、2017.7
(『アメリカ的、イギリス的』河出ブックス 2014 を改題、文庫化)

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

集中講義、神戸市立外国語大学外国語学部英米学科、「英米文化特殊講義」、2016.9

講演、「シェイクスピアとアダプテーション——The Tamer Tamed」、京都女子大学英文学会 2016 年度大会、2016.11

講演、「シェイクスピア作品の子どもたち」(基調講演 II)、第 46 回日本イギリス児童文学研究大会、中京大学、2016.11

(2) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

福原記念英米文学研究助成基金、運営委員、2012 年～

教授 **渡邊 明** WATANABE, Akira

1. 略歴

1987 年 3 月	東京大学文学部英語英米文学専修課程卒業
1989 年 3 月	東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻修士課程修了
1993 年 9 月	マサチューセッツ工科大学大学院言語・哲学科博士課程修了 博士号 (Ph.D. in Linguistics) 取得 博士論文 AGR-Based Case Theory and Its Interaction with the A-bar System
1994 年 4 月	神田外語大学外国語学部英米語学科専任講師
1997 年 4 月	同 大学院言語科学研究科助教授
1998 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2016 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

英語学／理論言語学

b 研究課題

程度表現の構造と意味

c 概要と自己評価

2016 年度は科研費基盤 (C) の課題「日英語の程度表現の統語構造と意味」の 2 年目にあたる。計量単位語と自然数で研究の進展が見られた。

まず、計量単位語については、日数表現が準数詞扱いの「数」との組合せで「じつ」となり、全体としては「か／にち／じつ」の交替形を持つことから出発し、分類詞や計量単位語が数詞と結合する場合に大和言葉系統と漢語系統の表現の混在が厳密に禁じられることについての理論的考察を行った。演算メカニズムとしては、混在を禁じるフィルターが働くことで、形態実現の可能性を絞り込む結果になっていると提案した。この研究の副産物としては、例外的な音形をもつ漢語の数少ない例としてよく知られている「いち」、「しち」、「はち」、「にち」が、いずれも数詞ないし

日数表現であることを確認したことが挙げられる。これらの成果は、Societas Linguistica Europaea 49 という国際学会で発表した。

自然数と数詞との関係については、前の科研課題のときから論文としての発表が持ち越しになっていたが、これまで見落としていたヒルベルトの自然数理解をあらたな提案の中で位置づけることにも成功し、また、発達心理学における直近の成果を批判的に取り込む形でまとめ、国際学術誌に発表した。基本的なアイデアは、句構造成形の演算操作を任意の単一の語彙項目に繰り返し適用することで自然数列に対応可能な集合列を作り出すことができる、というチョムスキーの提案の微調整であるが、任意の単一の語彙項目の代わりに空集合を使えば、数詞の言語分析に関して、数学で現在採用されているフォン・ノイマンの集合論的定義と直接比較して甲乙を論じることができるということが、本研究課題に着手してからの重要な展開といえる。

2017年度は、程度概念を内包している名詞が最上級と組合わされる場合に見られる日本語独自の現象を発見した。*big basketball fan* に対応する日本語の形が「大のバスケットボールファン」ように形容詞ではない修飾語を用いることをこの年度に出版された日本語の統語論についてのハンドブックの担当章において指摘しておいたが、そこからの展開である。日本語の形容詞のシステム、ひいては普遍文法での形容詞のシステムについて示唆するところも少なくなく、日本語の「大きい」と「多い」が歴史上関連しているというよく知られている事実や、英語の量子化 *most* に対応する「大部分」という日本語の表現が「大」を含んでいるという事態と相まって、個別言語の個別語彙項目の特殊性として従来片付けられていた事柄を理論的観点から分析していく端緒となることが期待される。2018年秋に学会発表の予定である。

また、日本語の名詞に可算／非可算の区別が存在することを立証した論文を仕上げ、オープンアクセスの国際学術誌に発表した。これは、上記の「大部分」という表現などについての分析がカギになっている。

d 主要業績

(1) 書籍章担当

Akira Watanabe, 'Attributive Modification,' in *The Handbook of Japanese Syntax*, ed. by Shigeru Miyagawa and Hisashi Noda, De Gruyter Mouton, 783-806 頁、2017.9

Akira Watanabe, 'Measure Nouns and Numerals,' in *The Handbook of Japanese Contrastive Linguistics*, ed. by Prashant Pardeshi and Taro Kageyama, De Gruyter Mouton, 477-505 頁、2018.2

(2) 論文

Akira Watanabe, 'Natural Language and Set-Theoretic Conception of Natural Number,' *Acta Linguistica Academica* 64: 125-151 頁、2017.3

Akira Watanabe, 'Division of Labor between Syntax and Morphology in the Kichean Agent-Focus Construction,' *Morphology* 27: 685-720 頁、2017.10

Akira Watanabe, 'The Mass/Count Distinction in Japanese from the Perspective of Partitivity,' *Glossa: a journal of general linguistics* 2(1): 98. 1-26 頁、2017.11

(3) 学会発表

国際、Akira Watanabe, 'Number Features and Numerals,' 49th Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea、ナポリ（イタリア）、2016.9.3

(4) 予稿・会議録

国際会議、Akira Watanabe, 'Amount Relatives in Japanese,' *Proceedings of the Eighth Formal Approaches to Japanese Linguistics Conference*, 189-208 頁、2016.12

3. 主な社会活動

(1) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

Linguistic Inquiry (出版元 MIT Press)、編集委員、2016.4～2018.3

Journal of East Asian Linguistics (出版元 Springer)、編集委員、2016.4～2018.3

the Language Faculty and Beyond (John Benjamins)、advisory board member、2016.4～2018.3

Acta Linguistica Academica、編集委員、2017.1～2018.3

1. 略歴

1979年4月	九州大学文学部 入学
1983年3月	同大学同学部英語学英米文学専門課程 卒業
1983年4月	東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻修士課程 入学
1986年3月	同大学院同研究科同専攻修士課程 修了
1986年4月	東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻博士課程 入学
1988年3月	同大学院同研究科同専攻博士課程 中退
1988年4月	東京女子大学文理学部英米文学科 専任講師
1992年4月	同大学同学部同学科 助教授
1993年9月	ノースカロライナ大学チャペルヒル校 フルブライト交換研究員（～1994年9月）
1997年4月	立教大学文学部英米文学科 助教授
1999年4月	同大学同学部同学科 教授
2003年9月	ノースカロライナ大学チャペルヒル校 フルブライト交換研究員（～2004年9月）
2007年4月	立教大学文学部文学科英米文学専修 教授
2017年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

アメリカ文学、特にアメリカ南部文学

b 研究課題

アメリカ南部文学の総体的特徴のひとつとして「戦後性」に着目し、ドイツの文化史家ウォルフガング・シヴェルブッシュが2002年に唱えた「敗北の文化」の概念を枠組みとして、日本の近代文学、あるいは所謂「戦後文学」との相対的比較を行う。

c 概要と自己評価

2005年に出版した著書『敗北と文学——アメリカ南部文学と日本近代文学』においてその概要を提示した、19世紀中葉の南北戦争以降の「敗北の文学」としてのアメリカ南部文学と、所謂「戦後文学」を含む日本近代文学の比較検討に関するおおまかな定式ないし視座にしたがって、対象となる両文学それぞれのより細かい時代区分における比較検証を継続的に行っている。2016年度においては日本の「戦後文学」の変容の様相を、60～70年台の大江健三郎、70～80年台の中上健次、80～90年台以降の村上春樹を取り上げて、おのおのが影響下にあると意識しているアメリカ作家（それぞれマーク・トウェイン、ウィリアム・フォークナー、レイモンド・カーヴァー）との比較検証を通じて析出することを試み、英語論文として世に問うた。結果として、すでに前記著書においても指摘していた日本の「戦後文学」の「戦後性」の射程の著しい短さがあらためて問題視されるに至り、2017年度は主として、「十五年戦争」終結直後、日本文壇・批評界を席卷した「戦後文学論争」の具体的な成り行きに着目することで、日本の戦後文学における「戦後性」をより厳密に検証することを試み、その過程で仮説的に逢着した「戦後性」の特徴を、「戦後文学論争」収束後ただちに世に出、その後の「純文学」界を牽引してきた小島信夫の独特の戦後表象、なかんずく『墓碑銘』における「混血性」のうちにひとまず見出して、この「混血性」をアメリカ南部文学に比較的頻繁に現れる黒人と白人の混血児の悲劇、特にウィリアム・フォークナーの『八月の光』におけるそれとを比較対照し、一考を論文として提出した（2018年度中に出版予定）。同時に、戦後文学としてのアメリカ南部文学の完成期とも言える「南部文芸復興期」の文学のうちでも異彩を放つ小説家トマス・ウルフ、さらに「文芸復興期」末期ないし「文芸復興期」以降と称される第二次大戦以降の南部文学からカーソン・マッカーズ、トルーマン・カポーティの文学を検討するとともに、日本の「戦後文学論争」そのものの内実に関して、白井吉見編『戦後文学論争』（全2巻）に所収された、日本の戦後まもなく熱を帯びて展開された論考を各種検討中であり、今後継続予定である。

d 主要業績

(1) 著書

辞書・辞典・事典、アメリカ学会編、『アメリカ文化事典』、丸善、2018.1

(2) 論文

後藤和彦、「変節者アティカス?」、『アメリカ学会会報』、192、1頁、2016.11

後藤和彦、「英文学と日本文学——日本人アメリカ文学者のアポロギア」、日本英文学会関東支部編『教室の英文学』、278-288 頁、2017.5

Kazuhiko Goto, "Post-War Japanese Novelists and American Literature," Oxford Research Encyclopedia of Literature, <http://literature.oxfordre.com/view/10.1093/acrefore/9780190201098.001.0001/acrefore-9780190201098-e-204?rskey=lwhDvo&result=6>, 2017.5

(3) 解説

後藤和彦、「書くことと生きること——小説家トマス・ウルフの真実」、トマス・ウルフ『天使よ故郷を見よ』（大沢衛 訳）、下巻、509-520 頁、2017.7

(4) 学会発表

国内、後藤和彦、「再見アメリカの影——戦後文学とアメリカ小説について」、日本アメリカ文学会九州支部（九州アメリカ文学会）大会、佐賀大学、2017.5.13

国内、後藤和彦、「アメリカ・南部・文学」、日本英文学会九州支部大会、長崎大学、2017.10.22

国内、後藤和彦（加藤光也、中村和恵、森慎一郎とともに）、「外人になってしまう」——戦後文学と「英語」の問題（シンポジウム「英米文学と日本語」）、日本英文学会関東支部大会、中央大学、2017.10.28

国内、後藤和彦、「トマス・ウルフと小説以前の問題」、東大英文学会、東京大学法文 2 号館 2 番大教室、2018.3.17

(5) 受賞

国内、後藤和彦、科研費審査員として表彰、日本学術振興会、2016.9.30

(6) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、後藤和彦、研究代表者、「アメリカ南部文学の戦後性について——戦後日本文学との比較考察」、2016～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、立教大学、「演習および大学院特殊講義」、2017.4～

その他、関西学院大学大学院、「比較文学特殊講義」、2017.8

(2) 学会

国内、日本英文学会、評議員、2017.6～

准教授 **阿部 公彦** ABE, Masahiko

1. 略歴

1985 年 3 月	静岡県静岡聖光学院高等学校卒業
1985 年 4 月	東京大学教養学部文科三類入学
1989 年 3 月	同 文学部英語英米文学科専修課程卒業
1989 年 4 月	東京大学大学院人文科学研究科（英語英米文学専攻）入学
1992 年 3 月	同 修士課程修了・修士（文学）
1993 年 10 月	連合王国ケンブリッジ大学大学院博士課程入学（英米文学専攻）
1997 年 5 月	同博士課程修了 博士号取得（文学） タイトル：‘Wallace Stevens and the Aesthetic of Boredom’
1992 年 4 月	東京大学文学部英語英米文学科助手
1993 年 4 月	帝京大学文学部助手
1997 年 4 月	帝京大学文学部専任講師
2001 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

英米文学

b 研究課題

英語圏の詩や小説の研究を中心とする。個々の作品の緻密な解釈と、作品を作品たらしめる力学の解明に向けた努力を研究の中心としつつ、同時に、「なぜ詩でなければならないか?」「なぜ小説なのか?」という素朴な疑問との取り組みをも課題とする。詩や小説を自足的なジャンルとみなすのではなく、「詩的であること」「小説的であること」を絵画・舞台芸術、スポーツ、インターネット空間などとの関係でとらえることもテーマとする。

c 概要と自己評価

概要

2014年度から2015年度にかけては、ポライトネスに研究の焦点を移し、詩や小説の語り手が読者とどのような人間関係を築こうとしているかという疑問を足がかりに、語りの作法構築の問題を考察した。その成果として『善意と悪意の英文学史』がある。また『幼さという戦略』は日本文学を主にとりあげたものだが、英文学研究で得た知見も大いに生かされており、詩や小説の語り手の本来的な「弱さ」や「幼さ」を考察している。

自己評価

ポライトネスへの注目を出発点にした文学研究はまだ一般的にも広がりを見せているとは言えないので、今後は協同研究のような形でネットワークを広げつつ、より広範にわかる対象をとりあげながら理論の洗練をめざしたい。また「凝視」の研究の延長線上として、「共視」や「錯視」「注意散漫」といった類似テーマの研究も引き続き行う予定である。

d 主要業績

(1) 著書

単著、阿部公彦、『名作をいじる 「らくがき」式で読む最初の1ページ』、立東舎、2017.9

その他、平野啓一郎・飯田橋文学会編、『現代作家アーカイブ1 自身の創作活動を語る：古井由吉、高橋源一郎、瀬戸内寂聴』、東京大学出版会、2017.10

単著、阿部公彦、『史上最悪の英語政策——ウソだらけの「4技能」看板』、ひつじ書房、2017.12

(2) 論文

阿部公彦、「文体に注意を払って読むとは」、『英語のスタイル』、140-153頁、2017

阿部公彦、「境目に居つづけること — 批評と連詩と大岡信」、『現代詩手帖』、2017年6月号、136-140頁、2017

阿部公彦、「ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』:小説はものになれるか? :付録「自称『ワハハ』教授」へのインタビュー」、『文學界』、2017年10月号、49-52頁、2017

阿部公彦、「充実した不可能:『かつらの合っていない女』をめぐって」、『現代詩手帖』、2017年11月号、20-23頁、2017

阿部公彦、「ボブ・ディランの拒絶力」、『現代詩手帖』、2017年2月号、75-79頁、2017.2

阿部公彦、「英語と生命力—英詩が教える(かもしれない)言葉の運動感覚」、日本英文学会関東支部編『教室の英文学』、48-55頁、2017.5

阿部公彦、「ナマ・イシグロの「ナマさ」は?——英語原文をちら見する」、『別冊宝島 カズオ・イシグロ読本——その深淵を暴く』、118-121頁、2017.12

(3) 書評

高樹のぶ子、『オライオン飛行』、講談社、「文學界」、2016年12月号、288-289頁、2016

綿矢りさ『手のひらの京』(『新潮』)・朝井リョウ『ままならないから私とあなた』(『文學界』)・牧野真有子『絵姿女房への挨拶』(『群像』)、『群像』、2016.2

戊井昭人「ゼンマイ」(『すばる』)・宮内悠介「半地下」(『文學界』)・片瀬チヲル、「草の婚約」(『群像』)、『群像』、2016.3

李龍徳「報われない人間は永遠に報われない」(『文藝』)、荻世いをら「私のような軀」(『すばる』)、高村薫「移動販売車」(『群像』)、『群像』、2016.4

吉田修一、『橋を渡る』、文藝春秋、「週刊現代」、2016年4月9日号、135頁、2016.4

後藤大祐、『誰もいない闘牛場にベルが鳴る』、土曜美術社出版販売、「詩と思想」、2016年4月号、23頁、2016.4

藤岡啓介、『翻訳者あとがき讃—翻訳文化の舞台裏』、未知谷、「週刊読書人」、2016年4月29日・5月6日合併号、6頁、2016.4

平野啓一郎、『マチネの終わりに』、毎日新聞社、「群像」、2016年6月号、288-289頁、2016.6

横山茂雄、竹内勝徳、仲谷正史ほか、『神の聖なる天使たち』、『身体と情動』、『触楽入門』、研究社、彩流社、朝日出版社、「週刊読書人」、2016年7月22日、4頁、2016.7

川上弘美、『大きな鳥にさわられないように』、講談社、『すばる』、2016年8月号、312頁、2016.8

西村賢太、『蠕動で流れ、汚泥の川を』、集英社、『週刊現代』、2016年8月6日号、131頁、2016.8

津島祐子、『ジャッカ・ドフニ』、集英社、『週刊読書人』、2016年8月12日号、5頁、2016.8

J.M.クッツェー著、鴻巣友季子訳、『イエスの幼子時代』、早川書房、『すばる』、2016年10月号、322頁、2016.10

三浦衛、『カメレオン』、春風社、『図書新聞』、2016年10月22日号、4頁、2016.10

ジェイ・ルービン、『村上春樹と私』、東洋経済新報社、『産経新聞』、2016年12月4日朝刊、2016.12

保坂和志、『地鳴き、小鳥みたいな』、講談社、『共同通信』、2016年12月8日配信、2016.12

今村夏子、『星の子』、朝日新聞出版、『すばる』、2017年8月号、290-302頁、2017

クリスチナ・ロセッティ、『ゴ布林・マーケット』、『春風新聞』、2017年秋冬号、8頁、2017

柴崎友香、『千の扉』、中央公論新社、『文學界』、2017年12月号、310-311頁、2017

佐々木敦、『新しい小説のために』、講談社、『群像』、2017年12月号、262-263頁、2017

西村賢太、『芝公園六角堂跡』、文芸春秋、『文學界』、2017年4月号、306-7頁、2017.3

綿矢りさ、『私をくいとめて』、朝日新聞出版、『小説トリッパー』、2017年春号、202-203頁、2017.4

小林エリカ、『彼女は鏡の中を覗きこむ』、集英社、『すばる』、2017年5月号、313頁、2017.5

又吉直樹、『劇場』、新潮社、『共同通信』、2017年5月11日配信、2017.5

古井由吉、『ゆらく玉の緒』、新潮社、『図書新聞』、2017年5月27日、4頁、2017.5

多和田葉子、『百年の散歩』、新潮社、『群像』、2017年6月号、334-335頁、2017.6

遠藤不比人、『情動とモダニティ』、彩流社、『週刊読書人』、2017年6月2日号、5頁、2017.8

川端康成、『雪国』、『神奈川新聞』、10月15日朝刊、7頁、2017.10

(4) 解説

阿部公彦、「日本語版解説」、ウィリアム・デレズウィッツ、米山裕子訳『優秀なる羊たち：米国エリート教育の失敗に学ぶ』、2016.2

阿部公彦、「読書アンケート」、『みすず』、1/2月号、pp.28-29、2017.1

阿部公彦、「解説」、西村賢太『下手に居丈高』徳間文庫<徳間書店>、214-21頁、2017.4

阿部公彦、「解説—女神たちに魅せられて」、リチャード・ブローティガン、福岡健二訳『ブローティガン 東京日記』平凡社ライブラリー、191-99頁、2017.4

阿部公彦、「解説：多和田葉子の聖と俗——到来する言葉を待つということ」、多和田葉子『変身のためのオピウム・球形時間』講談社文芸文庫、424-435頁、2017.10

阿部公彦、「インタビューを終えて ことばのなりぎわを聴く」、『現代作家アーカイブ1 自身の創作活動を語る：高橋源一郎、古井由吉、瀬戸内寂聴』、143-145頁、2017.10

(5) 学会発表

国内、Masahiko Abe, Steve Clark, Laurence Williams, Noriyuki Harada, Alex Watson, Kazuyoshi Oishi, chaired by Neil Addison, 'Panel Symposium on Academic Career Development', The 7th Annual Liberlit Conference for Discussion and Defense of the Role of 'Literary' Texts in the English Curriculum, Tokyo Woman's Christian University, 2016.2.22

国内、阿部公彦、「中国詩人との交流シンポジウム — 詩歌と世界」、中国詩人との交流シンポジウム — 詩歌と世界、東京大学本郷キャンパス・文学部3号館5階英文辞書室、2017.1.23

国内、阿部公彦、「Demystifying Academic Pathways: Symposium on Career Development', The 8th Annual Liberlit Conference: Demystifying without Diminishing the Literary Text, 東京女子大学、2017.2.20

国内、阿部公彦、「楽しくて危険な文学の魅力」、SEKAI、2017.3.7

国内、阿部公彦、「文学インタビュー第10回 黒井千次」、東京大学新図書館トークイベント EXTRA 公開収録、東京大学文学部・法文一号館115教室、2017.3.8

国内、阿部公彦、「漱石作品とおなかの具合」、日本近代文学会、東京外国語大学、2017.5.28

(6) 啓蒙

阿部公彦、「詩とことば 1月」、『読売新聞』、2016.1

阿部公彦、『英語教育』という幻想』、『UP』、2016.1

阿部公彦、「詩とことば 2月」、『読売新聞』、2016.2

阿部公彦、「詩とことば 3月」、『読売新聞』、2016.3

阿部公彦、「私にとっての名訳と訳者の工夫・こだわり」、『文芸翻訳入門——言葉を紡ぎ直す人たち、世界を紡ぎ直す言葉たち』、pp.88-95、2017.3

阿部公彦、「作家と胃弱」、『図書』、pp.20-23、2017.7

(7) マスコミ

「詩とことば」(詩季評)、『読売新聞』1月17日朝刊 p.12、2017.1.17

「インタビュー」:「英語をたどって4 「紙上ディベート 入試改革」、『朝日新聞』、2017年6月16日夕刊、2面、2017.6.16

「詩とことば 夏」(詩季評)、『読売新聞』7月11日 p.13、2017.7.11

「アンケート 2017年上半期の収穫から」、『週刊読書人』 p.5、2017.7.21

創作合評:栗田有起「毛婚」、鴻池留依「ナイス・エイジ」、乗代雄介「未熟な同感者」(合評者:島田雅彦、倉本さおり)、『群像』2017年8月号、p.290-302、2017.8

創作合評:水原涼「クイーンズ・ロード・フィールド」、小林里々子「私の子ども」、加藤秀行「海亀たち」(合評者:島田雅彦、倉本さおり)、『群像』2017年9月号、p.292-304、2017.9

創作合評:町田康「湖畔の愛」、木村紅美「雪子さんの足音」、三輪太郎「その八重垣を」(合評者:島田雅彦、倉本さおり)、『群像』2017年10月号、p.320-334、2017.10

「イングリッシュについてコメント「共同通信」配信」、『毎日新聞』『西日本新聞』、2017.10.5

「詩とことば 秋」(詩季評)、『読売新聞』10月17日朝刊、2017.10.17

インタビュー:『名作をいじる』:まずは最初の一ページ、『赤旗日曜版』 p.29、2017.11.19

インタビュー:『文研』1985/2017、『駒場文学特別号』 p.40-44、2017.11.23

「純文学 今年の収穫」、『共同通信』、2017.12

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本英文学会 理事 2017.5～

国内、日本英文学会関東支部 支部長 2017.4～

国内、日本アメリカ学会英文号編集委員 2016.8

(2) 社会活動

朝日カルチャーセンター講師 2016.8～2018.6

集中講義 関西学院大学 2017.8、聖心女子大学 2016.8、2017.8

准教授 **諏訪部 浩一** SUWABE, Koichi

1. 略歴

1994年3月 上智大学文学部英文学科卒業

1997年3月 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻修士課程修了

2002年3月 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻博士課程単位取得退学

2004年4月 東京学芸大学教育学部講師

2004年6月 ニューヨーク州立大学バッファロー校大学院英文科博士課程修了

2006年4月 東京学芸大学教育学部助教授

2007年4月 東京学芸大学教育学部准教授

2007年10月 東京大学大学院総合文化研究科准教授

2010年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

アメリカ文学

b 研究課題

モダニズム文学を中心とするアメリカ小説研究

c 概要と自己評価

主たる研究対象は、ウィリアム・フォークナーを中心としたアメリカにおけるモダニズム期の小説である。個々の作品を、大戦間という時代的文脈と小説の発展という美学的問題とあわせて、包括的に考察し、理解することを目標としている。そうした目的のために、近年においては「純文学」だけではなく、「大衆文学」と見なされている作品をも研究対象としてきた。2016～17年度は、フォークナーへの関心を発展させる一方、フォークナー以後の現代小説などを広く視野に収めた研究を継続的におこなった。

d 主要業績

(1) 著書

単著、諏訪部浩一、『アメリカ小説をさがして』、松柏社、2017.3

共著、日本英文学会（関東支部）、『教室の英文学』、研究社、2017.5

辞書・辞典・事典、新村出、『広辞苑 第七版』、岩波書店、2018.1

辞書・辞典・事典、アメリカ学会、『アメリカ文化事典』、丸善出版、2018.1

(2) 論文

諏訪部浩一、「叙事詩から小説へ—四つの「熊」を読む」、『フォークナー』、18号、pp.123-34、2016.4

諏訪部浩一、「偉大なアメリカ小説」を取り戻す?—「世界文学」時代のアメリカ小説、『ユリイカ』、第49巻第1号、pp.157-63、2017.1

諏訪部浩一、「加藤一二三について語るための予備的考察」、『ユリイカ』、第49巻第11号、pp.130-35、2017.7

諏訪部浩一、「恐怖の起源に向かって—スティーヴン・キングの初期作品」、『ユリイカ』、第49巻第19号、pp.52-59、2017.11

(3) 書評

金澤哲（編）、『ウィリアム・フォークナーと老いの表象』、『週刊読書人』、2016年5月6日号、第5面、2016.5

奥泉光、『ビビビ・ビ・バップ』、『群像』、71巻8号、312-13頁、2016.8

タナハシ・コート、『美しき闘争』、『週刊読書人』、2017年8月18日号、第5面、2017.8

(4) 学会発表

国内、諏訪部浩一、「文学史と作家研究」、第55回日本アメリカ文学学会全国大会、ノートルダム清心女子大学、2016.10.2

国内、諏訪部浩一、「ポスト冷戦期文学における戦争とサバイバル」、九州アメリカ文学学会、福岡大学、2016.12.17

国内、諏訪部浩一、「回顧と展望—「フォークナーと日本文学」をめぐる（シンポジウム「フォークナーと日本文学」）」、第20回日本ウィリアム・フォークナー協会全国大会、鹿児島大学稲盛会館、2017.10.13

国内、諏訪部浩一、「シンポジウム 読むべきか、読まざるべきか—本との新たなつきあい方」、第16回東京大学ホームカミング日文学部企画、東京大学本郷キャンパス、2017.10.21

(5) 啓蒙

諏訪部浩一、「手放せない幻想」、『小説すばる』、第30巻第6号、39頁、2016.6

諏訪部浩一、「フォークナーはえらい」、『図書』、第817号、24-29頁、2017.3

諏訪部浩一、「Go West」ビル・ビバリー、熊谷千寿訳『東の果て、夜へ』、早川書房、441-47頁、2017.9

(6) 翻訳

個人訳、William Faulkner, "Light in August", 諏訪部浩一、『八月の光』(上)、岩波文庫、2016.10

個人訳、William Faulkner, "Light in August", 諏訪部浩一、『八月の光』(下)、岩波文庫、2016.11

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、学習院大学、「英語文化コース演習D」、2016.4～2017.9

非常勤講師、立教大学、「米文学特殊研究6 A、6 B」、2016.4～2017.3

非常勤講師、東北大学、「英文学各論」、2016.8

非常勤講師、早稲田大学、「英米文学特殊研究4」、2016.9～2017.3、「英米文学特殊研究3」、2017.4～9

非常勤講師、東北学院大学、「現代英米文学演習II」、2016.9、「現代英米文学演習IV」、2017.8～9

(2) 学会

国内、日本英文学会、事務局長、2016.4～2017.5

国内、日本アメリカ文学会、代議員、2017.4～2018.3

国内、日本アメリカ文学会東京支部、評議員、2016.4～2018.3、副支部長、2017.4～2018.3、支部会報編集委員、2017.4～2018.3

国内、日本ウィリアム・フォークナー協会、評議員、2016.4～2018.3、編集委員、2016.4～2018.3

21 ドイツ語ドイツ文学

教授 重藤 実 SHIGETO, Minoru

1. 略歴

- 1970年4月 東京大学教養学部文科3類入学
1974年3月 東京大学文学部第3類（言語学専修課程）卒業（文学士）
1974年4月 同 大学院人文科学研究科独語独文学専門課程修士課程進学
(1975年7月～1977年9月 ドイツ学術交流会(DAAD)奨学金によりドイツ連邦共和国ボン大学、シュトゥットガルト大学に留学)
1978年3月 東京大学大学院人文科学研究科独語独文学専門課程修士課程修了（文学修士）
1978年4月 同 大学院人文科学研究科独語独文学専門課程博士課程進学
1979年4月 同 教養学部助手
1980年4月 一橋大学経済学部講師
1984年4月 東京大学教養学部助教授
(1984年4月～85年3月 一橋大学経済学部併任)
(1991年10月～93年3月 アレクサンダー・フォン・フンボルト財団研究奨学金によりドイツ連邦共和国テュービンゲン大学に研究滞在)
1996年4月 東京大学大学院総合文化研究科助教授
(1996年4月～97年3月 東京大学大学院人文社会系研究科併任)
1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2004年10月 東京大学大学院人文社会系研究科教授
2017年3月 定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

ドイツ語学

b 研究課題

現代ドイツ語の記述、および現代ドイツ語を生み出したドイツ語史の記述を研究の目標と考えている。背景となる言語理論や言語変化についての理論についての考察も必要となる。

研究では、最近是一般言語学の言語理論に関することとドイツ語史に関することに重点を置いている。

c 概要と自己評価

一般言語理論については、特に結合価理論の最近の発展に関心を持っている。この理論に基づく新しいドイツ語記述の可能性があることを示したいと思っている。またドイツ語音声学の発展に基づき、新しいドイツ語発音辞典についての評価が必要だと考えている。

授業は現代ドイツ語文法理論とドイツ語史に見られる言語変化を中心としておこなった。

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

明治大学文学部非常勤講師 2014.4～2016.3

成城大学文芸学部非常勤講師 2015.4～2016.3

1. 略歴

- 1984年3月 東京大学教養学部教養学科第2・ドイツの文化と社会卒業
1986年3月 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻修士課程修了
1986/88年 ロータリー財団奨学生としてドイツ連邦共和国ミュンヘン大学留学
1991年4月 共立女子大学国際文化学部専任講師
1992/93年 ドイツ学術交流会 (DAAD) 奨学金によりドイツ連邦共和国マンハイム大学留学
1996年4月 共立女子大学国際文化学部助教授
2001/02年 アレクサンダー・フォン・フンボルト財団研究奨学金によりドイツ連邦共和国ベルリン自由大学研究滞在
2002年4月 慶應義塾大学文学部助教授
2005年4月 慶應義塾大学文学部教授
2007年4月 慶應義塾大学大学院文学研究科委員兼任
2011年4月 東京大学文学部・大学院人文社会系研究科教授 (現職)

2. 主な研究活動

a 専門分野

ドイツ近現代文学

b 研究課題

ヴァルター・ベンヤミン研究、ハインリッヒ・フォン・クライスト研究

c 概要と自己評価

ベンヤミン研究は、同時代の作家フーゴー・フォン・ホーフマンスタールやエルンスト・ユンガーらの、いわゆる保守革命運動との関係を考察する作業を進めている。また、日本独文学会学会誌『ドイツ文学』欧文版“Neue Beiträge zur Germanistik” 155号「ベンヤミン特集」の責任編集をつとめ、テーマ設定および導入を執筆した。科研費による研究プロジェクトに関しては、「情動と技術の人間学的考察」(2013~2015年度)に引き続き、「「抗争」言説の再検討(ドイツ文学の場合)」(2016~18年度)を進め、多くの内外の研究者との議論を行い、実りあるものとなっている。クライスト研究としては、「〈政治的なるもの〉の詩人」としての側面から日本独文学会 2017年春季研究発表会においてシンポジウムを企画し、司会・パネリストを務めた。政治における「双務的秩序」の喪失という歴史の変容のなかでドイツ文学を読み直す試みの中心にクライスト作品を位置づける作業を続けている。2016年8月に韓国中央大学校において開催された「アジアゲルマニスト会議」に、日本独文学会会長として参加し、基調講演を行なった。また、ドイツの大学より招待講演の依頼を二度受けた(2016年4~5月)ほか、学会発表を二度行なっている(2016年10~11月)。

d 主要業績

(1) 論文

大宮勘一郎、「『充たされざる者』あるいは終わりのなき慰撫」、『ユリイカ』、カズオ・イシグロ特集、2017.12
OMIYA, Kanichiro, 「Einleitung zum Sonderthema: "Halt, Schritt, Trab, Galopp - Walter Benjamin Weiter, Tiefer Lesen"」、
『Neue Beiträge zur Germanistik』、155、7-13頁、2018.3

(2) 学会発表

- 国際、OMIYA, Kanichiro, 「Die Aufgabe der Übersetzung im Zeitalter der Globalisierung」、Asiatische Germanistentagung、Seoul, Korea、2016.8.22
国際、OMIYA, Kanichiro, 「Statement zur Podiumsdiskussion "Geisteswissenschaften und gesellschaftliche Bedürfnisse"」、Die Geisteswissenschaften vor den gesellschaftlichen Bedürfnissen Laufende Diskussionen in Deutschland und Japan、Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaft, Berlin、2016.11.1
国際、OMIYA, Kanichiro, 「Von Kokugaku zur Japanischen Romantik」、Deutsch-Japanische Komparatistik im weltkulturellen Kontext, Freie Universität Berlin、2016.11.2
国内、大宮勘一郎、「ペンテジレアー — 「政治的なるもの」と「愛」」、日本独文学会春季研究発表会、日本大学文学部、2017.5.28
国際、OMIYA, Kanichiro, 「Auf der Brücke wohnen - Über Heideggers Bauen und Wohnen nachdenken」、West-östliche Raumfigurationen - Wohnen und Unterwegssein、学習院大学、2017.9.8

国内、大宮勘一郎、「『ヨーロッパの文学』とドイツ」、ヨーロッパの文学、東京大学、2017.12.9

(3) 啓蒙

大宮勘一郎、「道草のドイツ – Don DeLillo の”Zero K”など」日本独文学会ウェブサイト・コラム、2016.7.16
(<http://www.jgg.jp/modules/kolumne/details.php?bid=136>)

大宮勘一郎、『ヴェルター』とゲーテ」、ジュール・マスネ『ウェルテル』プログラム、23-26 頁、2016.11

大宮勘一郎、「アンティゴネの時」、『SPAC 劇場文化』、2017.4

(4) マスコミ

「オースターの身体と内面」、『週間読書人』、2017.5.19

(5) 翻訳

個人訳、Robert Walser、"Der Anspruchsvolle"、大宮勘一郎、『求めの高い男』、『MONKEY』、Vol. 9、91 頁、スイッチ・パブリッシング、2016.6

(6) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、大宮勘一郎、OMIYA, Kanichiro、研究代表者、「[抗争] 言説の再検討（ドイツ文学の場合）(Reconsidering the Discourse of Antagonism)」、2016～2018

3. 主な社会活動

(1) 学会

学会（国内）、日本独文学会理事、2013～2017

学会（国内）、日本独文学会会長、2015～2017

学会（国内）、日本独文学会主催「2019 年アジアゲルマニスト会議」実行委員、2017～

(2) 他機関での講義等

招待講演、Femuniversität in Hagen、「Die Ethik des Nahkampfes in der deutschen Literatur um 1800」、2016.4

招待講演、Universität Mannheim、「Teilen oder Tauschen」、2016.5

訪問教授、Freie Universität Berlin、2017.8

准教授 宮田 眞治 MIYATA, Shinji

1. 略歴

1987 年 3 月 京都大学文学部卒業（文学士）
1989 年 3 月 京都大学大学院文学研究科修士課程（ドイツ語学・ドイツ文学専攻）修了（文学修士）
1990 年 3 月 京都大学大学院文学研究科博士後期課程（ドイツ語学・ドイツ文学専攻）退学
1990 年 4 月 神戸大学教養部助手
1991 年 10 月 神戸大学教養部講師
1992 年 10 月 神戸大学文学部講師
2000 年 10 月 神戸大学文学部助教授
2000 年 4 月 文部省在外研究員としてドイツベルリン自由大学に留学（2001 年 2 月まで）
2007 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

近代ドイツ語圏文学

b 研究課題

18世紀の文学・思想が研究の中心にある。もともと初期ロマン主義研究から出発し、ノヴァーリスを中心に仕事を進めてきた。とくに超越論哲学・自然科学との関係において初期ロマン主義が展開した独自の表現技法と、その背景にある言語・芸術観が興味を中心にあつた。また、その問題意識を継承する20世紀の文学者・思想家の系譜も研究の対象となった。現在は、啓蒙期の文学・思想を、ロマン主義の前史という観点に限定されることなく研究している。また、18世紀以後、ドイツ語圏にあつて、自然科学者であり、あるいは自然科学研究から出発しつつ、文学者であつた人々—ハーラー、リヒテンベルク、ノヴァーリス、アルニムから現代にいたるまで—の営みを〈実験者の文学〉という観点から跡付けるという作業を進めている。

c 概要と自己評価

二つのシンポジウムでの発表以外では、G.Ch.リヒテンベルク(1742-1799)が30年以上にわたって書き残したノート『雑記帳』*Sudelbücher* 日本語版の編集・翻訳作業に集中した。2000ページ以上の原著をテーマ別に編集し、詳細な注と解説および年譜を付したもので、この規模での刊行は日本初となる(2018年6月に作品社より刊行された)。

ドイツロマン主義・啓蒙主義をさまざまなコンテクストにおいて検討するという年来の研究方針は継続中であり、今期は、1) フランスの詩人ポール・ヴァレリーのリズム論を、ドイツ近代リズム論との関連において検討する、2) ドイツロマン派の作家E.T.A.ホフマンとフランス啓蒙主義の思想家D.ディドロの作品を、固有名の使用という観点からインターテクスチュアルに分析する、という二つの試みとなった。

d 主要業績

(1) 学会発表

国内、宮田眞治「ヴァレリーとリズム—ドイツ近代からの視座」、「日仏シンポジウム 芸術照応の魅力Ⅲ—ヴァレリーにおける詩と芸術」、2017年10月22-23日、日仏会館、23日に発表

国内、宮田眞治「ホフマンとディドロ」、「シンポジウム：名前の詩学—文学作品における固有名と否定性の諸相、2018年2月11日、東京大学本郷キャンパス法文2号館113教室

(2) 書評

ヴィンフリート・メニングハウス(著) 伊藤秀一(訳)、『美の約束』、『シェリング年報』、第24号、182-186頁、2016.7

Haru Hamanaka: Erkenntnis und Bild. Wissenschaftsgeschichte der Lichtenbergischen Figuren um 1800. 『ドイツ文学』第154号、日本独文学会、265-269頁、2017年6月

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本シェリング協会、理事、2008.10～

国内、日本独文学会、理事、2017.5～

22 スラヴ語スラヴ文学

教授 三谷 恵子 MITANI, Keiko

1. 略歴

1981年3月	東京大学文学部露語露文学専攻卒業
1983年3月	東京大学大学院人文科学研究科修士修了（露語露文学）
1983年4月	東京大学人文科学研究科博士課程進学
1986年10月	ザグレブ大学哲学部留学（～1988年9月）
1989年3月	東京大学文学部人文科学研究科博士課程修了
1990年4月	東京大学文学部助手（ロシア語ロシア文学研究室）
1993年6月	筑波大学文芸言語学系講師
1997年7月	同助教授
1999年4月	京都大学人間・環境学研究科助教授
2005年4月	同教授
2013年4月	東京大学人文社会系大学院教授（スラヴ語スラヴ文学科）

2. 主な研究活動

a 専門分野

スラヴ語学、スラヴ語歴史文法、中世スラヴ文献学；ロシア語学；ボスニア・クロアチア・セルビア語圏および旧ユーゴ圏の言語文化；スラヴ語圏の少数言語；言語接触と言語維持。

b 研究課題

以下の事柄を研究課題としている。すなわち、共通スラヴ語から現代のスラヴ諸言語にいたる変化のプロセスを、文献学的に解明にすること。スラヴ語間の類似性と共通性、また個別のスラヴ語における言語特徴とくに形態統語論的特徴について実証的に分析すること。旧ユーゴ圏における言語と文化の諸相、とりわけ言語と社会や歴史の関わりに注目し社会言語学的視点をとり入れた言語研究を行うこと。またスラヴ文献学、スラヴ語史、中世スラヴ文化研究の融合的研究としての中世スラヴ比較文献研究を行うこと。

c 概要と自己評価

スラヴ語史、スラヴ語文法論とくにロシア語およびボスニア・クロアチア・セルビア語の通時的および共時的研究を進めている。また中欧に分散するスラヴ系少数言語について、現地調査をふまえた実証的な研究を行っている。さらに中世文献を言語学、翻訳理論、比較テキスト研究などを融合された新たなアプローチで分析する試みに着手し、この成果は海外の国際学会、国内で自ら開催した国際シンポジウムで発表している。さらにこれらの成果を論文として刊行し、同時にスラヴ語学概論やボスニア・クロアチア・セルビア語の授業に反映させている。

d 主要業績

(1) 著書

『比較で読みとくスラヴ語のしくみ』白水社、2016年、全246頁

(2) 論文

三谷恵子「クロアチア語の第二未来形とuz-接頭辞付加動詞現在形」SLAVISTIKA XXXI号2016年6月、299-316

三谷恵子『「十二の金曜日の物語」スラヴ・リセンション写本の比較研究』ロシア語ロシア文学研究48号、2016、1-23

三谷恵子『「ヨアシ王の夢」—中世スラヴテキストの分析—』ロシア語研究26号、2016、91-10

Keiko Mitani. Sintakšičke odlike slovenskih srednjovekovnih zakonika. Prilog komparativnoj sintaksi slovenskih jezika. Motokei Nomađi (ed.) *Serbica Iaponica. Doprinos japonskih slavista srpskoj filologiji*. Novi Sad, Sapporo, Beograd: Matica srpska. Slavic Eurasian Research Centre, 2016. pp.23-34

Keiko Mitani. Dubrovnik i svet srednjovekovnog Balkana. Istorijke i literaturne činjenice u vezi sa kupovinom Stona. Motokei Nomađi (ed.) *Serbica Iaponica. Doprinos japonskih slavista srpskoj filologiji*. Novi Sad, Sapporo, Beograd: Matica srpska. Slavic Eurasian Research Centre, 2016. pp.36-57

三谷恵子『『コンスタンティノス一代記』13章“ソロモン王の盃の銘”—R. ヤコブソンのスラヴ文献学への貢献 再訪—』SLAVISTIKA XXXII号、2017. 73-90

Keiko Mitani. 2017. The Croatian Tradition of the Story of Akir the Wise in South Slavonic Recensions. SLOVO, sv. 67 (2017), 1-21. UDK 821.163-3“13/16“:09 75.

Keiko MITANI. 2017. Uz-prefixation and dependnet future in Croatian. Rasprave. 43/2. 379-397. UDK 811.163.4236676.

三谷恵子「近代国家の法における民衆言語—V.ボギシッチの言語観—」『青山ローフォーラム』6巻2号、2018年1月、1-20

(3) 学会発表

国際、The Story about the Twelve Fridays”: A Text-critical Study of South Slavic and Russian manuscripts. The 20th conference on Balkan and South Slavic Linguistics, Literature and Folklore. Utah University, 29.4.2016

国際、The Dream of King Jehoash: Textual structure and Intertextuality. The Annual Meeting of the European Association for Biblical Studies. Leuven, Leuven Catholic University. 19. July, 2016

国際、DALIKANJE: Da li je to loše? (Is that bad?). Realia of Language Use and Standard Language Ideology in Croatia. International Symposium "Standard Language Ideology in Slavic Lands". Slavic Eurasian Rearch Centre. Hokkaido Univ. August 6. 2016. Sapporo

国内、Сивилла и Сивиллины сказания: славянские сказания о пророчице с гусиными ногами. 2016.10.22、日本ロシア文学会全国大会パネル発表、Динамические аспекты средневековой славянской письменности: текст, язык, образ повествования. 2016年10月22日、北海道大学文学部

国際、Slavic Versions of the Skanderbeg Story: Textual Relationship and Narrator Attitude. Балканский тезаурус: взгляд на Балканы извне и изнутри. Балканские чтения 14. Тезисы и материалы. Москва. Русская Академия. 19 апреля 2017 года

国際、Keiko Mitani. Croatian Glagolitic Texts of “The Story about the Twelve Fridays”: Textual Features and Relationship with other Slavonic Copies. Međunarodni znanstveni skup Fenomen Glagoljice. Biograd-Zadar, 12. i 13. svibnja 2017. Grad Biograd i Zadar. Zadar, 13.5.2017

国内、三谷恵子「環バルト海地域の言語接触と言語変化」日本スラヴ学研究会シンポジウム『バルト諸語とその隣人たち』、2017年6月17日、上智大学

国際、Keiko Mitani, Evlutive Change and Adaptive Change in Croatian – What Andersen’s “abductive and deductive” model tells us about Language Change. ICHL 23 The 23rd International Conference on Historical Linguistics. July 31-Aug. 4, 2017 Hotel Contessa San Antonio, Texas. Aug.2.2017 (Skype participation)

国際、Keiko Mitani. Inscription on Solomon’s Chalice in Chapter XIII of *Vita Constantini*: An Old Question Revisited. SBL/EABS 2017 International Meeting. Humboldt University, Berlin, 10.Aug. 2017

国内、Кэйко Митани, Лингвистический и текстологический анализ славянских списков повествования «Деяния апостолов Петра и Андрея в стране варваров». Панель Между источниками и списками: текстологические исследования средневековой славянской письменности 2017-10-15. Джэчи Университет、(日本ロシア文学会上智大学大会 10月15日)

(4) 予稿・会議録

国際会議、Keiko Mitani, Slavic Versions of the Skanderbeg Story: Textual Relationship and Narrator Attitude. Балканский тезаурус: взгляд на Балканы извне и изнутри. Балканские чтения 14. Тезисы и материалы. Москва 18-20 апреля 2017 года. М. 2017. С.52-56.～

(5) 共同研究(産学連携除く)

国内、主催、北海道大学スラブユーラシア研究センター、「中世スラヴ語テキストの多元的研究—スラヴ文献言語学の新たなアプローチをめざして」、平成29年度

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、ロシア東欧学会、理事、2015.12～2018年現在

日本ロシア文学会副会長、2015.11～2017.10、会長、2017.10～(2021.全国大会まで)

教授 沼野 充義 NUMANO, Mitsuyoshi

23 現代文芸論 参照

准教授 楯岡 求美 TATEOKA, Kumi

1. 略歴

- 1987年4月 東京大学教養学部文科Ⅲ類入学
- 1990年10月 第二回ソ連給費留学生としてロシア国立レニングラード大学留学（～1992年9月）
- 1993年3月 東京大学教養学部教養学科第二地域文化学科（ロシアの文化と社会）卒業
- 1996年3月 東京大学大学院人文社会系研究科（スラヴ語スラヴ文学）修士課程修了
- 1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科（スラヴ語スラヴ文学）博士課程進学
- 1999年9月 東京大学大学院人文社会系研究科（スラヴ語スラヴ文学）博士課程単位取得退学
- 1999年10月 北海道大学スラブ研究センター・COE 講師
- 2000年4月 神戸大学国際文化学部・講師
- 2001年4月 神戸大学国際文化学部・助教授
- 2001年8月 ロシア国立人文大学人文歴史学部（モスクワ）にて研修
（文部省派遣若手在外研修 ～2002年4月）
- 2003年1月 学位・博士（文学）取得
- 2007年4月 神戸大学大学院国際文化学研究科・准教授
- 2010年8月 イギリス・ケンブリッジ大学ウルフソン・コレッジおよびロシア国立人文大学人文歴史学部にて
研修（神戸大学若手教員長期海外派遣プログラム ～2011年4月）
- 2016年4月 東京大学大学院人文社会系研究科（スラヴ語スラヴ文学）准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

ロシア・ソ連の文学、ロシア・ソ連文化論、ロシア・ソ連演劇史。

b 研究課題

主としてロシア語による文学・演劇・映画を素材として、芸術表現の特質と可能性、時代や社会による価値体系の変容や人間関係の諸相を明らかにすることを目的とする。

c 概要と自己評価

ロシア・ソ連では、文学と共に演劇・映画がメディアとしても重要な社会的機能を担っている。これらのジャンルの創作が歴史のおよび現在の社会においてどのように受容されているのかを、笑い話や起源などの民衆文化も含め、現地調査と文献調査を平行して研究を行っている。近年の研究関心は翻案研究とロシア語をドミナントとするソ連文化形成との二つの領域にわたる。

ポストモダン以降の文化潮流においては、狭義の意味での作品のオリジナリティを論じることは難しくなっている。個別創作者の独創性や表現力がどのように評価されるのかを、文学と演劇・映画といった異なるメディアによる翻案作品を比較検証する。感情など視覚化言語化の難しいものが、メディアの変更にもない、どのようなメカニズムで情報が付与され欠落する者に注目することで、演劇や文学それぞれのジャンル固有の表現特性の有無について考察を行っている。

さらに、ロシア連邦外の旧ソ連圏におけるロシア語文化の形成プロセスの再検討とポストソ連期における継承と離反の現況についての研究を進めている。特にコーカサス地域出身の創作者の活動に注目し、従来は画一的に中心から周縁へと一方的に伝達されたと考えられてきたソ連文化の多様性について再検討することを目指し、現地調査および文献調査をベースとした研究を行っている。

これらの成果は国内外の研究会、シンポジウムの企画し、参加することで国際的に専門の研究者間での交流を図り、論文及び共著書等において刊行している。現場で活動する創作者とも研究成果の共有をはかるために上映や講演の企画を実施し、学生にも授業等の場において成果を還元している。

d 主要業績

(1) 共著

楯岡求美「ロシアの笑い話におけるエスニック・ステレオタイプ」、pp.406-437、定延利之編著『限界芸術「面白い話」による音声言語・オラリティの研究』ひつじ書房、2018.3 所収

(2) 論文

楯岡求美、「チェーホフの『かもめ』とスタニスラフスキーの演技システム形成期—演劇における内面表現の諸相—」、『東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要 文化交流研究』、30、2017.3

Kumi TATEOKA, Georgian Stage Performance and Japa, *Dialogue between Georgia and Japan*, 2018.3

(3) 学会発表

国際、Kumi TATEOKA, «Мистерия-буфф» Маяковского: попытка представить «текущий момент» в театральном пространстве, О утопии к катастрофе: советский культурный эксперимент. 30 августа – 4 сентября, 2016. Филологический факультет, Белградского университета.

国際、Kumi TATEOKA, Georgian Stage Performance and Japan : Dialogue between Georgia and Japan: the History and Future Scientific-Cultural Exchange, 2017.7.28, Ivane Javakhishvili Tbilisi State University Faculty of Humanities.

国内、Kumi TATEOKA Чехов и театр в Японии: 国際学術シンポジウム「チェーホフとサハリン島の文学（А.П.Чехов и литература Сахалина）」、2017.10.12、東京大学大学院人文社会系研究科

国際、Kumi TATEOKA, «Мистерия-буфф» Маяковского: Исторический процесс и его театральная репрезентация: The 9th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies, 2018. 6. 29-30, National University of Mongolia, Ulaanbaatar.

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

楯岡求美『どんどん』アフタートーク、2017年11月13日、劇団地点（京都）

楯岡求美「ウラジーミル・ヴィソツキー：歌と演劇と映画」、人文研アカデミー2017 連続レクチャー上映会「ロシア革命百周年記念映画祭」、2017年11月23日、京都文化博物館

(2) 学会

日本ロシア文学会、理事、2016.12～2018 現在、国際交流委員長、2016.12～2018 現在

23 現代文芸論

教授 沼野 充義 NUMANO, Mitsuyoshi

1. 略歴

- 1977年3月 東京大学教養学部教養学科学士
1979年3月 東京大学人文科学研究科（露語露文学専攻修士課程）修士
1981年9月～1985年7月 ハーヴァード大学 Harvard University フルブライト全額給費奨学生として留学（スラヴ語スラヴ文学専攻博士課程）
1984年6月 ハーヴァード大学修士
1985年3月 東京大学人文科学研究科（露語露文学専攻博士課程）単位取得満期退学
1984年2月～1985年6月 ハーヴァード大学、ティーチング・アシスタント
1985年8月～1989年1月 東京大学教養学部、専任講師（ロシア語教室・教養学科ロシア分科）
1987年10月～1988年9月 ワルシャワ大学東洋学研究所、客員講師（日本語日本文学）
1989年1月～1994年3月 東京大学教養学部、助教授（ロシア語教室・教養学科表象文化論）
1994年4月～2004年3月 東京大学文学部、助教授（スラヴ語スラヴ文学）
2000年5月～11月 ロシア国立人文大学（モスクワ）、客員研究員（国際交流基金フェロー）
2002年10月～11月 モスクワ大学アジア・アフリカ研究所、客員教授
2004年4月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授、現在に至る
2016年7月 ハーバード大学世界文学研究所（Institute for World Literature）ハーバード大学夏期集中セッションセミナーリーダー（客員教授）

2. 主な研究活動

a 専門分野

近現代ロシアおよびポーランド文学、現代日本文学を視野に入れた世界文学論、越境・亡命文学

b 研究課題

- (1) ロシア・東欧から日本までを視野に入れた形での新たな世界文学論へのアプローチ
- (2) ポスト共産主義時代のロシア東欧文学の総合的研究
- (3) ユーラシア研究という新たな枠組みの中でのロシア東欧文学の位置づけ
- (4) ロシア近代小説の研究と翻訳（特にチェーホフ、ナボコフ）
- (5) 近現代ロシア詩の読解と新しいロシア詩アンソロジーの編纂

c 概要と自己評価

（概要） 興味と活動は近・現代文学全般にわたり、現代世界文学への比較文学的アプローチや現代日本文学の批評・時評も行なっているが、本来の専門領域はロシア文学およびポーランド文学（主として19～20世紀）である。1994年文学部に赴任して以来、スラヴ語スラヴ文学専修課程と並行して、西洋近代語近代文学専修課程の教育・運営に一貫して携わり、2007年4月に西洋近代語近代文学専修課程を改組した形で現代文芸論専修課程が創設されると、こちらに研究・教育の軸を移しながらも、スラヴ語スラヴ文学の専修課程の研究・教育活動にも引き続き関わってきた。またモスクワ大学およびワルシャワ大学との大学間交流協定の実施担当者として、東京大学とこれらの大学との研究交流および学生交換の世話役を一貫して務めてきた。

スラヴ文学の研究と並行して、「世界文学」の視点からできるだけ幅広く現代文学を（日本文学の特殊性と普遍性も視野に入れて）とらえるように努めている。一国一言語の枠内に収まらないような、亡命・越境・二言語併用などの問題に特に関心がある。

2013年からは、5年間にわたる科研費研究プロジェクト（基盤研究(A)）「越境と変容—グローバル化時代におけるスラヴ・ユーラシア研究の超域的枠組みを求めて」（研究期間 平成25年度～平成29年度）の研究代表者として、ロシア東欧研究と、日本・アジアを視野に入れた世界文学研究を融合させた形の共同研究を推進した（分担研究者は17名程度）。

ロシア東欧の専門分野における主要な関心の一つは、ソ連崩壊・東欧革命後の状況を文化史的にとらえることであり、その作業を通じて、因習的なロシア文学史の枠組みを変え、また文化の境界を見直す必要があることを主張して

きた。またロシア文学における「詩的」なものの理論化を考えており、小説研究にこれまで偏ってきたため未発達な日本におけるロシア詩理解の基礎を固めるべく努めている。

海外（特にロシア東欧）と日本の文化・文学交流にも関心があり、国際交流基金や文化庁の様々な企画に協力し、ロシアや東欧の作家との交流や、日本文学の海外紹介といった事業にも積極的に参加している。最近では交流対象をアジアにも広げ、中国や韓国の研究者との交流も進めている。そういった機会にできた人的ネットワークも、研究・教育活動に活かしており、スラヴ研究における東アジアの研究ネットワーク構築を目指している。

2015年8月に千葉市幕張で開催された第9回国際中欧・東欧研究協議会（ICCEES）世界大会においては組織委員長を務め、世界49カ国から1300人以上の参加者のあった大規模国際学会の事務局の中心として中欧・東欧研究の国際的ネットワークの強化に努めた。

2016年7月にはハーバード大学世界文学研究所（Institute for World Literature）の夏期集中セッションにセミナーリーダー（客員教授）として招かれ、2週間にわたって世界の若手文学研究者たちと集中セミナーを行い、世界文学研究へのアプローチを試み、また研究者ネットワークを広げることができた。さらに2017年2月27日から3月1日にかけて、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部「新・日本文学」招聘事業 特別講義シリーズの一環として、ハーバード大学世界文学研究所所長の比較文学者、デイヴィッド・ダムロッシュ氏を招聘し Japanese Literature in the World という集中講義を組織することができた。

（自己評価） 研究上の関心と活動範囲が年々広がっていき、またスラヴ語スラヴ文学と現代文芸論の両方の分野にまたがって研究・教育を行っているため、広い視野からのダイナミックな研究・教育活動を目指してはいるものの、研究のためのエネルギーと時間が分散して総花的になりやすく、それぞれのテーマについてきちんとしたまとめができないまま放置してあるものも多い。また年をとるに従って、引き受けざるをえない役職が多くなり、会議や事務的作業に多くの時間をとられる一方で、研究のための集中的な時間の確保がますます難しくなってきた。

ロシア文学研究の分野では、2016年1月にはこれまでのチェーホフ研究のいちおうの決算というべき単行本『チェーホフ 七部の絶望と三部の希望』（講談社）を出版できたのは、一定の成果であった。その後、チェーホフ研究は国際的な研究者ネットワークを構築し、さらに展開すべく計画を練ってきた。2017年にサハリンのチェーホフ博物館の研究者らと国際シンポジウムを行うことができたのは、その一つの成果である。

世界文学研究へのアプローチに関しては、2016年7月にハーバード大学世界文学研究所に招かれて、セミナーリーダーとして世界の若手研究者たちが参加する集中セミナーを2週間にわたって行った経験が大きい。この結果、欧米だけでなく、ロシア東欧や日本・東アジアも視野に入れた世界文学研究の新たな枠組をより具体的に考えられるようになった。

d 主要業績

(1) 著書

編著、沼野充義編、『ポケットマスターピース10 ドストエフスキー』、集英社文庫、2016.7

編著、沼野充義、『8歳から80歳までの世界文学入門 対話で学ぶ<世界文学>連続講義4』、光文社、2016.8

共著、工藤庸子、池内紀、柴田元幸、沼野充義『世界の名作を読む 海外文学講義』、角川ソフィア文庫、2016.8（第5章・第6章、89-124頁を執筆）

編著、沼野充義、『つまり、読書は冒険だ。対話で学ぶ<世界文学>連続講義5』、2017.3

共著、亀山郁夫、沼野充義『ロシア革命100年の謎』、河出書房新社、2017.11

単著、沼野充義『NHK テキスト 100分de名著 スタニスワフ・レム ソラリス』、NHK出版、2017.12

(2) 論文

沼野充義、「親不孝娘の冒険、あるいは人生が芸術を模倣することについて（アヴィーロヴァとチェーホフ）」、『SLAVISTIKA』、XXXI, 257-272頁、2016.6

沼野充義、「村上春樹とドストエフスキー——現代日本文学におけるロシア文学の影響をめぐって」、小森陽一・曾桂秋編『村上春樹における両義性』（村上春樹研究叢書TC003）淡江大学出版中心、83-108頁、2016

沼野充義、「なぜ古典新訳は次々に生まれるのか?」、藤井光編『文芸翻訳入門』フィルムアート社、53-80頁、2017.3
Мишүси Нумано（沼野充義）、「К изучению истории «истории русской литературы» в Японии. Конспект доклада」、『れにくさ』7、160-167頁、2017.3

沼野充義、「ヤコブソンとナボコフの確執をめぐって—象、イーゴリ、スパイ」、『SLAVISTIKA』、XXXII, 41-60頁、2017.6

沼野充義、「「かえるくん、東京を救う」と世界文学」、沼野充義監修・曾桂秋編『村上春樹における秩序』、淡江大学出版中心（台湾）、55-80頁、2017.7

(3) 書評

J・M・クツツェー、『イエスの幼子時代』2、日本経済新聞、2016.8.14

エマニュエル・キャレル、『リモノフ』、『中央公論』、2016.9

川上弘美、『森へ行きましょう』(可能世界に展開する「女の多生」)、『新潮』、2018.1

*このほか、『毎日新聞』書評委員として、年間6~7本、文学・人文関係書の書評を『毎日新聞』日曜書評欄「今週の本棚」に掲載。

(4) 解説

沼野充義、「生を全面的に更新すること——政治の革命と芸術の革命」、神奈川大学評論、86 特集ロシア・東欧の100年、2-3頁、2017.3

沼野充義、「ロシア文学」、本の雑誌編集部編、別冊本の雑誌19『古典名作』、本の雑誌社、27-31頁、2017.8

沼野充義、「「アダプテーション論的転回」に向けて」、小川公代・村田真一・吉村和明編『文学とアダプテーションヨーロッパの文化的変容』、春風社、5-12頁、2017.10 (同書「まえがき」として)

沼野充義、「小説が書けないといって泣いていたKさんへ——だったら『鼻に挟み撃ち』を読んでごらん」、いとうせいこう『鼻に挟み撃ち』、173-182頁、集英社文庫、2017.11

沼野充義、毛利公美(共著)、「ナボコフと演劇」、ナボコフ『処刑への誘い 戯曲 事件 ワルツの発明』新潮社、471-491頁、2018.2

(5) 学会発表

国際会議、沼野充義、「かえるくん、東京を救う」と世界文学」、2016年第5回村上春樹国際シンポジウム、淡江大学(台湾)、2016.5.28

国際、Mitsuyoshi Numano、「Contemporary Tendencies in the Study of Russian and Soviet Literature in Japan: Toward an East Asian Network of Scholars」、East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies(上海、中国)、2016.9.2

国際、Мицүёси Нумано、「Составляя новую антологию русской поэзии」、第4回国際翻訳者会議(モスクワ、ロシア)2016.9.8-11

国際(招待講演)、「20世紀日本の<戦争と平和>—加賀乙彦の大河小説『永遠の都』と『雲の都』を読む」、The 10th Days of Japan at the University of Warsaw(ワルシャワ、ポーランド)、2016.10.24

国際、Mitsuyoshi Numano、「Sarkatvelo Dreaming: Reception of Georgian Images in Japan through Russian Literature」、International Conference “Dialogue between Georgia and Japan: Exploring the History and Future of Scientific and Cultural Exchange”(トビリシ国立大学、グルジア)、2017.6.28

国際、沼野充義、基調講演「人間ならざる者たち」の魅惑と恐怖」、第6回村上春樹国際シンポジウム、同志社大学、2017.7.9

国際、「Чайка летит в космос, а Харуки - на Сахали」、国際学術シンポジウム「チェーホフとサハリン島の文学」(サハリン・チェーホフ「サハリン島」博物館と共催)、東京大学文学部、2017.10.12

国内、沼野充義、「トランプ・プーチン時代のロシア東欧の文化事情」、ロシア・東欧学会、津田塾大学、2017.10.21

(6) 啓蒙

ポーランドの国民作家シェンキェヴィチ生誕170周年・没後100周年記念特別企画、講演「ヘンリク・シェンキェヴィチの生涯と作品」、ポーランド広報文化センター・現代文芸論研究室・スラヴ語スラヴ文学研究室共催、東京大学文学部1番大教室、2016.6.12

沼野充義、「地上ではいまだに戦争で人々が殺しあい」、Rething Books編『今日の宿題』、Numabooks、66-67頁、2017.5
第8回東京大学文学部公開講座、「ドストエフスキー、トルストイ、チェーホフ——ロシア文学の鬱蒼たる森を探索する」、東京大学文学部1番・2番大教室、2017.6.24

池澤夏樹、沼野充義、鴻野友季子(座談会)「世界文学は越境する」、『池澤夏樹、文学全集を編む』、河出書房新社、46-63、2017.9

ナボコフ・コレクション(新潮社・全5巻刊行記念公開対談、多和田葉子と、新宿紀伊國屋書店、2017.11.7

(7) 会議主催(チェア他)

国内、「世界文学・語圏横断ネットワーク」、チェア、いま世界(の)文学をどう読むか?—研究・教育・出版、東京大学文学部1番大教室、2016.4.9

東大オープン講座「人生に、文学を。」共催企画・コーディネーター、日本文学振興会と共催、東京大学文学部法文1号館115番教室、2016.11.6

ノーベル賞受賞作家アレクシエーヴィチとの対話「『戦争は女の顔をしていない』から『セカンドハンドの時代へ』」企画・司会、現代文芸論研究室主催、東京大学文学部1番大教室、2016.11.25

国際シンポジウム「<聖なる患者>が切り開く文学の未来—ロシアの作家・中世研究者エヴゲニー・ヴォドラスキンを迎えて」企画コーディネーター・パネリスト、スラヴ語スラヴ文学/現代文芸論研究室・国際交流基金共催、文学部1番大教室、2017.3.19

JLPP シンポジウム「日本文学の翻訳をめぐる」チェア、学会会館、2018.3.1

EU 文学フェスティバル企画「ヨーロッパ文学の最前線—Rein Raud との対談」、日欧州連合代表部ヨーロッパハウス、2017.11.23

ポーランドの SF 小説家スタニスワフ・レムのタバ（日本未公開映画上映とパネ・ルディスカッション）、企画およびチェア、ポーランド広報文化センター主催、代官山ツタヤ、2017.11.25

(8) 総説・総合報告

Mitsuyoshi Numano, 「Dialogues with History and Signposts Toward Tomorrow /過去との対話、未来への道しるべ」、『Worth Sharing』 Vol. 5、2-3 頁、国際交流基金、2017.2

沼野充義、特別企画「カズオ・イシグロのノーベル文学賞受賞と世界文学」、『学術の動向』2018年2月号、72-73 頁

(9) マスコミ

沼野充義、「アンジェイ・ワイダ監督追悼」、毎日新聞、2016.10.19

(10) 翻訳

沼野充義日本語版監修、ジェイムズ・キャントン他著『世界文学大図鑑』越前敏弥訳、三省堂、2016（奥付なし。日付なし）

ウラジーミル・ナボコフ「ワルツの発明」、ナボコフ『処刑への誘い 戯曲 事件 ワルツの発明』、新潮社、345-454 頁、2018.2

(11) 予稿・会議録

沼野充義、「かえるくん、東京を救う」と世界文学」、第5回村上春樹国際シンポジウム予稿集、淡江大学（台湾）、31-45 頁、2016.5

Nana Gelashvili, Mitsuyoshi Numano（共編）、『Dialogue between Georgia and Japan: Exploring the History and Future of ScientificCultural Exchange (Proceedings)』 Department of Contemporary Literary Studies, The University of Tokyo, 130 pp, 2018.3

Mitsuyoshi Numano(編)、『World Literature and Japanese Literature in the Era of Globalization: In Search of a New Canon (Proceedings)』 Department of Contemporary Literary Studies, The University of Tokyo, 212 pp, 2018.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義など

スーパーグローバルハイスクール<グローバル・リーダー学>授業、「グローバル化時代の文学の可能性——日本文学から世界文学へ——」、三重県立四日市高等学校、2016.6.18

日本語教師ロシア赴任前研修講義、「ロシアにおける日本文学の受容—ロシア人は村上春樹がお好き？——源氏物語から村上春樹まで」、日露青年交流センター、2016.8.5

JPIC 読書アドバイザー養成講座基調講、「世界の文学を読む—あまりにも本が多すぎてどこから読んだらわからず途方に暮れているあなたのために」、日本出版会館、2016.8.26

東京大学文学部公開講義、「世界文学への誘い—未踏の沃野のヒロイン、ヒーローは君たちだ」、北海道北見市常呂高等学校、2016.10.7

第305回日文研フォーラム「山崎佳代子「セルビア・アバンギャルド詩と『日本の古歌』」コメンテーター、ハートピア京都大会議室、2016.11.15

親鸞賞発表記念東本願寺シンポジウム・パネリスト報告、「紀貫之からマラルメまで——言語が存続するための手段としての詩人たち」、東本願寺（京都）、2016.12.6

JASRAC 講座ミュージック・ジャンクション「世界を旅する音楽—ウクライナの音楽と文学」（講演およびナターシャ・グジーと公開対談）、JASRAC けやきホール、2017.1.27

KAC Performing Arts Program 2016/Contemporary Theater Program 古典戯曲連続講座第2回「チェーホフ——チェーホフは森のキノコです」（講義および三浦基との対談）、京都芸術セン、2017.3.12

朝日カルチャーセンター横浜、「連続講義—ユダヤ精神史—第1回—ユダヤ学のすすめ（総論）」、朝日カルチャーセンター横浜、2017.4.8

特別連続講演、「(1) О современной японской литературе Восприятие русской литературы в Японии сегодня, (2) Переводя Чехова снова на японский язык」、Музей кн. Чехова «Остров Сахалин», Южно-Сахалинск、2017.5.25

文学サロン講演、「ロシア文学の現在 ペレストロイカからプーチンまで」、日本文芸家協会・脱原発社会を目指す
 文学者の会共催、日本文芸家協会、2017.7.12

ジョゼフ・コンラッド生誕160周年記念特別企画講演、「ジョセフ・コンラッドとポーラ」ポーランド広報文化セン
 ター・東京大学文学部現代文芸論研究室共催、東京大学文学部2番大教室、2017.7.14

Global Japan Studies Summer Program 2017 講義「Japanese Literature after World War II: Kawabata, Abe, Oe, and Murakami」、
 王匡大学東洋文化研究所、2017.8.5

2017年度第4回グローバル・リーダー学「文化研究」分野講義、「グローバル化時代に世界文学をどう読むか？—想
 像力と人文知をめぐる」、三重県立四日市高等学校、2017.9.9

公開対談（池澤夏樹と）、「チェーホフの『サハリン島』をめぐる」、北海道立文学館、2017.10.22

特別講義、「文学は何の役に立つのか？—「ポスト・トルース」時代のことば」、桐光学院中学・高等学校、2017.11.11

上智大学公開学習センター講義、「日本人とロシア文学—内田魯庵から村上春樹まで」、上智大学、2017.11.15

津田塾大学英文学科企画特別講義シリーズ「カズオ・イシグロ ノーベル文学賞受賞記念連続講演会」第1回、「カ
 ズオ・イシグロとノーベル賞と世界文学」、津田塾大学広瀬記念ホール、2017.11.18

NHK『100分de名著』特別講座、「世界文学を徹底的に語りつくす—ドストエフスキーからカズオ・イシグロま
 で」（島田雅彦と）、NHK文化センター青山教室、2018.1.15

(2) 学会

国内、日本スラヴ学研究会、会長、2015.6～

国内、日本ロシア・東欧研究連絡協議会(JCREES)、幹事、2016.4～

国内、日本学会議、連携会員、2014.10～

国内、日本スラヴ学研究会、会長、2015.6～

国内、日本ロシア文学会、学会大賞選考委員長、2015.10～2017.10

国内、表象文化論学会、学会賞選考委員、2016～2017

教授 柳原 孝敦 YANAGIHARA, Takaatsu

1. 略歴

1989年3月 東京外国語大学外国語学部スペイン語学科 卒業

1989年4月 東京外国語大学大学院外国語学研究所修士課程入学（ロマンス系言語専攻）

1991年3月 同 修了

1991年4月 Centro de Estudios Literarios, Instituto de Investigaciones Filológicas de la Universidad
 Nacional Autónoma de México [メキシコ国立自治大学文献学研究所文学研究センター]
 訪問研究生（メキシコ政府交換留学生として、～1992年2月）

1992年4月 東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程進学（地域文化専攻）

1995年3月 同 単位取得退学

1996年4月 法政大学経済学部助教授

2002年4月 Centro de Estudios Latinoamericanos Rómulo Gallegos [ロムロ・ガリエーゴス・ラテンアメリカ研究
 センター、ベネズエラ] 客員研究員（～2003年3月）

2004年4月 東京外国語大学外国語学部助教授

2007年4月 同 准教授

2009年4月 東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授（大学院重点化による）

2012年4月 同 教授

2013年10月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2017年4月 同 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

スペイン語圏の文学、ラテンアメリカ思想文化論

b 研究課題

知識人たちの環大西洋的ネットワークの形成。

c 概要と自己評価

研究課題である環大西洋地域を横断する知識人たちのネットワークの形成と個々の活動、その表現の様態についての研究は進行中である。その一環としての『テキストとしての都市 メキシコDF』は2018年度の出版予定だが、2017年度中はその仕上げにも時間を割いた。

d 主要業績

(1) 論文

柳原孝敦、「劇場と祭のトポス——カルペンティエールの場合」、『れにくさ』、第8号、240-255頁、2018.3

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本イスペインヤ学会理事（広報担当）2014年4月～2018年3月

准教授 **阿部 賢一** ABE, Kenichi

1. 略歴

1995年3月	東京外国語大学外国語学部ロシア・東欧語学科チェコ語専攻卒業
1999年3月	東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程修了
2002年6月	パリ第4大学第3課程スラヴ研究科DEA取得
2003年3月	東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程修了
2003年10月	北海道大学スラブ研究センターCOE 研究員
2004年4月	東京外国語大学大学院国際文化講座助手
2005年4月	武蔵大学人文学部ヨーロッパ比較文化学科専任講師
2008年4月	同准教授
2010年4月	立教大学文学部文学科文芸・思想専修／文学研究科比較文明学専攻准教授
2016年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中東欧文学、比較文学

b 研究課題

20世紀プラハの文学・美術

c 概要と自己評価

現在、主に以下のテーマに基づき、研究を進めている、

- (1) プラハの前衛芸術
- (2) 中東欧における文学史記述
- (3) 翻訳の諸問題

長年研究を進めてきた(1)に関しては、単著『カレル・タイゲ ポエジーの探求者』（水声社、2017年）に結実することができ、一定の到達点を示すことができたように思われる。具体的には、チェコ・シュルレアリスムを兩大戦間期中の東欧の文化状況に位置付けることで、構成主義的傾向と詩的想像力の融合の傾向がカレル・タイゲの思想に裏付けられることを明らかにした。

(2) に関しては、第一段階として「シレジアの文学史記述」を取り上げ、多言語空間の文学史記述に伴う受容および流通の問題を多面的に検討している。今後は、ボヘミア、モラヴィアの諸地域の文学史記述も射程に入れ、中東欧全体の問題としての文学史記述を掘り下げていく予定である。

(3) については、多言語空間であるプラハの翻訳の位相について、Pavel Eisner の事例を中心に研究を進めている。ユダヤ系の翻訳家にとって、チェコ語とドイツ語の言語空間を架橋する翻訳という行為は「領域化」の様相を呈しており、その問題系をさらに分析していく予定である。また文芸翻訳の実践を通して得た知見も研究に反映することができればと思っている。

d 主要業績

(1) 著書

- 単著、阿部賢一『カレル・タイゲ ポエジーの探求者』水声社、2017.12、全340頁
共著、都甲幸治ほか『世界の8大文学賞 受賞作から読み解く現代小説の今』立東舎、2016.9
共著、藤井光ほか『文芸翻訳入門 言葉を紡ぎ直す人たち、世界を紡ぎ直す言葉たち』フィルムアート社、2017.3
共著、小野尚子・本橋弥生・阿部賢一・鹿島茂『ミュンシャ バリの華、スラヴの魂』新潮社、2018.1

(2) 論文

- 阿部賢一「ウィーンとプラハ 「新しい芸術」を探し求めて」、池田祐子編『ウィーン 総合芸術に宿る夢 西洋近代の都市と芸術4』竹林舎、381-402頁、2016.7
阿部賢一「プラハのシュルレアリスム 複数の「現実」、複数の「イズム」」、『ユリイカ』48巻10号、173-182頁、2016.10
阿部賢一「「空いている椅子」、あるいはリハルト・ヴァイネルの「書かないことの不可能性」をめぐる」、『れにくさ 現代文芸論研究室論集』7巻、114-124頁、2017.3
阿部賢一「チェコ・シュルレアリスムの《ポエジー》 カレル・タイゲを中心に」『文化交流研究 東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要』30巻、67-73頁、2017.3
阿部賢一「The era of "Slav epic" ムハをめぐる複数の文脈 プラハ、スラヴ、そしてフリーメイソン」、『芸術新潮』68巻3号、48-53頁、2017.3
阿部賢一「ヨゼフ・チャペックと戦争」、『チャペック兄弟とその時代 カレル・チャペック誕生125周年、ヨゼフ・チャペック没後70周年記念論文集』日本チェコ協会・日本チャペック兄弟協会、149-162頁、2017.3

(3) 書評

- ベルンハルト・シュリンク『階段を下りる女』（新潮社、2016年）、共同通信、2017年8月
ボレスワフ・プルス『人形』（未知谷、2017年）、『東京新聞』、2018年3月18日
ボレスワフ・プルス『人形』（未知谷、2017年）、『すばる』、2018年5月号
Marijeta Bozovic and Matthew D. Miller, eds., *Watersheds: Poetics and Politics of the Danube River* (Boston: Academic Studies Press, 2016), 380 pp., *Acta Slavica Iaponica*, Vol. 39, pp.99-100, 2018.5

(4) 学会発表

- 国内、「カルロ・スピノラの物語：ヤロスラフ・ドゥリフ作品における日本」第一回日本チェコ文化会議、チェコ大使館、2016.6.12
国際、*Inspirations of East in Central Europe: Karel Teige's Case*, European Network for Avant-Garde and Modernism Studies, Université de Rennes, 2016.6.21
国内、「カフカにみる「チェコ」文学との交点 ニュムツォヴァーとランゲルを介して」、日本独文学会 2016年秋季研究発表会、関西大学、2016.10.21
国内、「中欧をつなぐ点と線、あるいは文化的連続性」、シンポジウム「中欧の現代美術」、東京大学、2017.6.4
国内、「集英社高度教養寄付講座 第12回講演会 ヨーロッパの文学」、東京大学、2017.12.9
国内、「『シレジア』の文学史記述に関する横断的研究」「スラブ・ユーラシア地域を中心とした総合的研究」プロジェクト型共同研究報告会、2017.12.10
国内、「チェコ語圏からの視点、シレジアの文学史記述」、「シレジア」の文学史記述に関する横断的研究に関する研究会、北海道大学、スラブ・ユーラシア研究センター小会議室、2018.3.3
国内、「翻訳家 Paul/Pavel Eisner の夢想した「共生」」、「プラハとダブリン、亡霊メディアの言説空間——複数の文化をつなぐ《翻訳》諸相」第4回研究会、2018.3.6
国内、コメンテータ、ミニシンポジウム「中東欧の音楽作品を聴く—音楽、言語、歴史をつなぐ鑑賞の手引き」、日本スラヴ学研究会、東京大学、2018.3.29

(5) 予稿、会議録

阿部賢一「カフカに見る「チェコ文学」との交点 ニュムツォヴァーとランゲルを介して」、『独文学会研究叢書』Nr. 123、35-44 頁、2017.9

(6) 啓蒙

講演（招待）、「翻訳から見るプラハの文学」、駒澤大学、2017.6.23

講演、「チェコ文学を読む、語る。」、本の場所、2018.1.21

講演、「カレル・タイゲ」、シス書店（恵比寿）、2018.2.18

(7) 翻訳

ヤン・ヴァイス「遅れる鏡」、『たべるのがおそい』第2号、書肆侃侃房、2016.10

カレル・ヤロミール・エルベン『命の水 チェコの民話集』西村書店、2017.10、全174頁

イジー・クラトフヴィル『約束』河出書房新社、2017.1、全298頁

ピアンカ・ベロヴァー「湖」、『文藝』2018年春季号、2018.1、375-385頁

マルケータ・ブルナ＝ゲブハルトヴァー「ピプスイから見たフラバル、フラバルから見たピプスイ」、『れにくさ』第8号、2018.3、207-220頁

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、東京外国語大学（2009年～）

(2) 学会

国内、日本スラヴ学研究会、企画編集委員長、2016年6月～現在に至る

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

国内、翻訳コンテスト審査員（チェコセンター）、2016年～現在に至る

2 4 西洋史学

教授 高山 博

TAKAYAMA, Hiroshi

HP: <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~tkymh/index.html>

1. 略歴

- 1980年3月 東京大学文学部西洋史学科卒業
- 1980年4月 東京大学大学院人文科学研究科西洋史学修士課程入学
- 1982年3月 東京大学大学院同研究科同修士課程修了（文学修士）
- 1982年4月 東京大学大学院同研究科同博士課程進学
- 1984年9月 アメリカ、エール大学大学院歴史学博士課程入学
(Harvard Yenching Institute, Doctoral Scholarship for Junior Faculty, 1984-88 による)
- 1986年5月 アメリカ、エール大学大学院 M.A. (Master of Arts) 取得
- 1987年9月 アメリカ、エール大学 teaching assistant (12月まで)
- 1988年3月 東京大学大学院人文科学研究科西洋史学博士課程単位取得退学
- 1989年6月 イギリス、ケンブリッジ大学客員研究員 (1990年3月まで)
- 1990年5月 アメリカ、エール大学大学院歴史学博士課程修了、Ph.D.取得
Robert S. Lopez Memorial Prize (最優秀中世史博士論文賞)
- 1990年4月 一橋大学助教授 (経済学部) (1993年4月から1994年3月まで併任助教授)
- 1993年4月 東京大学文学部助教授 (文化交流研究施設)
- 12月 サントリー学芸賞
- 1994年6月 地中海学会賞
- 10月 マルコ・ポーロ賞
- 1995年10月 フランス、国立社会科学高等研究院客員研究員 (1996年9月まで)
(国際交流基金フェローシップによる)
- 1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授 (文化交流研究施設・基礎部門)
- 2001年10月 (西洋史学助教授を併任)
- 2002年4月 21世紀COEプログラム委員会分野別審査・評価部会委員 (人文科学) (2005年まで)
- 2002年10月 イタリア、American Academy in Rome, R.A.A.R. (Resident of American Academy in Rome), (12月まで)
- 2004年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 (西洋史学) 現在に至る
- 2004年4月 日本学術振興会 学術システム研究センター研究員 (人文学) (2007年3月まで)
- 2008年4月 文部科学省、科学官 (2012年3月まで)
- 2009年10月 アメリカ、UCLA, CMRS Distinguished Visiting Scholar
- 2015年6月 西洋中世学会会長 (～現在)
- 2016年4月 紫綬褒章
- 2016年6月 史学会理事長 (～現在)

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋中世史、地中海史

b 研究課題

- (1) 古代から現代に至る諸国家の形態、組織、統治システムの比較を行う。
- (2) 西洋中世の主要な君主国の統治システムを比較・検討し、その異同を明らかにする。
- (3) 異なる文化・宗教を背景に持つ様々な人間集団が、地中海を舞台にどのように接触・対応していったかを通時的に見通すとともに、地中海の回りに形成された三大文化圏 (ラテン・キリスト教文化圏、ギリシャ・ビザンツ文化圏、アラブ・イスラム文化圏) 研究の接合を目指す。
- (4) 上記三大文化が併存する十二世紀ノルマン・シチリア王国の解明を行う。
- (5) 異文化交流によって生じる様々な現象を分析し、人間集団が持つ特性と多様性を考える。

(6) グローバル化が社会や国家形態に及ぼす影響を考察する。

c 概要と自己評価

教育・研究上の義務は滞りなく果たすことができたと思う。

d 主要業績

(1) 著書

共著、Jean-Marie Martin & Rosanna Alaggio, eds., *Quei Maledetti Normanni. Studi offerti a Enrico Cuozzo per i suoi settant'anni da colleghi, allievi, amici*, 2 vols, Centro Europeo di Studi Normanni, 2016 (Hiroshi Takayama, "L'amministrazione di Ruggero I, fondamento del sistema amministrativo normanno")

(2) 論文

Hiroshi Takayama, "Classification of Villeins in Medieval Sicily," *Spicilegium*, vol. 1, pp. 3-16, 2017.12

(3) その他の刊行物

高山博「2016年の歴史学界：総説」『史学雑誌』126編5号、1-5頁、2017年5月

高山博「中世地中海から現代世界を見る」『国際哲学研究』7号、33-39頁、2018年3月

高山博「中世シチリア王国の研究～異文化が交差する地中海世界」UTokyo BiblioPlaza, 2018, May 28

Hiroshi Takayama, *Chusei Shichiria okoku no kenkyu (Study of the Medieval Kingdom of Sicily: Crossroads of the Mediterranean Civilizations)*, UTokyo BiblioPlaza, 2018, May 28

(4) 学会・研究会講演

高山博「中世シチリアにおける異文化の交流と衝突」研究プロジェクト「アジア・アフリカにおける諸宗教の関係の歴史と現状」上智大学、2017年6月17日

高山博「中世地中海から現代世界を見る」東洋大学国際哲学研究センター、東京、東洋大学2017、12月16日（2017年度「国際哲学研究センター」シンポジウム：「哲学と歴史学とを生涯学習として学ぶ意義」）

(5) 講演会企画・招聘・司会

Prof. Patrick Corbet (Universite de Lorraine), "L'Eglise medievale et le mariage: la question des interdits de parente entre epoux (9e-12e siecles)," 東京大学西洋史学研究室主催、東京大学本郷キャンパス、2016年3月23日（水）

Dr. Catherine Holms (Associate Professor, University of Oxford), "Byzantium Transformed? New Directions for the Study of Byzantium (600-1500) in the Age of Global History," 東京大学西洋史学研究室主催、東京大学本郷キャンパス、2016年7月20日（水）

Prof. Anna Abulafia (University of Oxford), "The Contested Seed of Abraham," KAKEN（課題番号15KK0062）・西洋中世学会後援、2017年6月9日（金）、東京大学本郷キャンパス

Prof. David Abulafia (University of Cambridge), "How to write the history of the Mediterranean" 第41回地中海学会大会（設立40周年記念大会）、記念講演、2017年6月10日（土）、東京大学本郷キャンパス

Prof. Claudia Rapp (University of Vienna), "Piety, Charity and Asceticism: The Social World of Christians in Late Antique Egypt," 東京大学西洋史学研究室主催・西洋中世学会後援、2017年10月24日（火）、東京大学本郷キャンパス

(6) 受賞

国内、高山博、紫綬褒章、日本国政府、2016.4

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、史学会、理事長、2016年6月～

国内、西洋中世学会、会長、2015年6月～

国内、地中海学会、常任委員、1999年6月～2017年6月

国内、史学研究会、評議員、2004年度～

(2) 学術雑誌編集等

国際、*Spicilegium* (Japan Society for Medieval European Studies, Japan), Editorial Board, 2015-

国際、*Corpus Membrarum Capuanarum* (Edizioni Scientifiche Italiane, Italy), Comitato Scientifico Onorario, 2014-

国際、*British Journal of Interdisciplinary Studies* (Science & Knowledge House Ltd, UK), Editorial Board, 2014-

国際、*The Mediterranean Seminar* (UCSC, USA), Advisory & Editorial Board, 2009-16

国際、*Archivio Normanno-Svevo* (Centro Europeo di Studi Normanni, Italy), Comitato Scientifico, 2008-

国際、*International Medieval Bibliography* (Brepols, UK): Regular Contributor for Japan, 1995-

1. 略歴

1991年	東京大学大学院人文科学研究科博士課程博士・博士（文学）
1991年11月	東京大学文学部助手
1993年4月	大阪外国語大学外国語学部助教授
2002年3月	ケンブリッジ大学古典学部客員研究員、クレアホール客員フェロー（～2003年2月）
2006年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2010年11月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

古代ギリシア史

c 概要と自己評価

研究・教育及びこれに関わる学内外の諸活動に従事し、責務を果たした。

d 主要業績

(1) 著書

- 単著、橋場弦『民主主義の源流：古代アテネの実験』、講談社学術文庫、2016.1
編著、橋場弦、村田奈々子ほか、『学問としてのオリンピック』、山川出版社、2016.7
共著、木村靖二、岸本美緒、小松久男編、『詳説世界史研究』、山川出版社、2017.11

(2) 書評

- 栗原麻子、『アッティカ民衆法廷における報復のレトリック—リュクルゴス『レオクラテス弾劾』を中心に—』、『法制史研究』、65号、313-315頁、2016.3
仲手川良雄、『古代ギリシアにおける自由と社会』、創文社、『歴史学研究』、952号、41-44頁、70頁、2016.12

(3) 啓蒙

- 橋場弦、「オリンピックの余韻」、『公研』、637号、14-15頁、2016.9
橋場弦、「誓う」、『公研』、643号、14-15頁、2017.3
橋場弦、「町村総会」、『公研』、649号、12-13頁、2017.9
橋場弦、「石の声を聞く」、『公研』、655号、14-15頁、2018.3

(4) 会議主催(チェア他)

- 国際、「国際シンポジウム 古代都市ポンペイの動物利用と街路風景Ⅱ」、主催、2016.12.10
国際、「古代史の会」、チェア、Kurt Raaflaub, War and young citizens' rebellion against democracy in late fifth-century Athens、東京大学文学部第三会議室、2017.9.19
国際、「古代史の会」、チェア、Neil McLynn, The Donatist Mirage: Aurelius of Carthage and the remaking of the African church、東京大学文学部第三会議室、2017.12.23

(5) 教科書

- 『詳説世界史』、木村靖二ほか、執筆、山川出版社、2017

(6) 研究テーマ

- 文部科学省科学研究費補助金、基盤研究(C)、橋場弦、Yuzuru Hashiba、研究代表者、「古代ギリシア民主政における無頭性とリーダーシップの研究」、2017～

3. 主な社会活動

(1) 学会

- 国内、日本西洋古典学会、委員、書評委員、2016.1～2017.12
国内、史学会、一般会員、2016.1～2017.12
国内、日本西洋史学会、一般会員、2016.1～2017.12
国内、法制史学会、一般会員、2016.1～2017.12
国際、Hellenic Society、一般会員、2016.1～2017.12

1. 略歴

- 1989年3月 大阪大学文学部史学科西洋史学専攻 卒業
1991年3月 大阪大学大学院文学研究科博士前期課程史学専攻 修了
1997年9月 同 博士後期課程 単位修得退学
1997年11月 パリ第1大学 博士(歴史学) 学位取得
1999年10月 大阪大学大学院文学研究科 助手
2000年4月 徳島大学総合科学部 助教授
2012年4月 上智大学文学部史学科 准教授
2014年4月 同 教授
2016年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

フランス近現代史

b 研究課題

19世紀パリの政治社会史、フランス共和主義の政治文化、近代フランスにおけるカトリシズム

c 概要と自己評価

研究では、上記「b. 研究課題」に挙げた3つのうちカトリシズムに関していくつかの成果を刊行することができた。19世紀パリの政治社会史については、科研費(基盤C)を得て民事籍簿復元事業の研究を開始した。教育では、フランス史研究者の育成に努めた。研究と教育の双方において、基本的な責務を果たしたと考える。

d 主要業績

(1) 著書

- 共著、南塚信吾、秋田茂、高澤紀恵編、長井伸仁著、『新しく学ぶ西洋の歴史—アジアから考える』、ミネルヴァ書房、2016.2
共著、鹿島徹、越門勝彦、川口茂雄編、『リクール読本』、法政大学出版局、2016.7
共著、中野智世、前田更子、渡邊千秋、尾崎修治編、『近代ヨーロッパとキリスト教—カトリシズムの社会史—』、勁草書房、2016.10
共著、指昭博、塚本栄美子編、長井伸仁ほか著、『キリスト教会の社会史—時代と地域による変奏—』、彩流社、2017.9

(2) 論文

- 長井伸仁、「現代の「祈り、働け」—第二次世界大戦後のフランスにおける労働司祭—」、『歴史と地理—世界史の研究—』、第249号、1-15頁、2016.11
長井伸仁、「第二次大戦後のフランスにおける司祭と労働について」、『文化交流研究』、第30号、43-51頁、2017.3
長井伸仁、「上智大学における学徒出陣—その歴史と記憶—」、『上智史学』、第62号、17-38頁、2017.11

(3) 解説

- 長井伸仁、「イエズス会フランス管区文書館を訪れて」、『上智ヨーロッパ研究』、第9号、177-179頁、2017.3
NAGAI Nobuhito, « Paul Feller, vu par un historien », *Transmettre* (Association des Amis de Paul Feller), no. 14, pp. 16-17, 2017.6

(4) 学会発表

- 国内、長井伸仁、「上智大学の学徒出陣—その歴史と記憶—」、上智大学史学会例会、2016.10.29

3. 主な社会活動

(1) 非常勤講師

非常勤講師、上智大学、「歴史学研究入門」、2016.4~2016.7

(2) 学会

国内、日本西洋史学会、『西洋史学』編集委員、2017.4~

1. 略歴

1986年4月	東京大学教養学部文科Ⅲ類 入学
1991年3月	東京大学文学部西洋史学専修課程 卒業
1991年4月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程西洋史学専攻 入学
1994年3月	同 修了
1994年4月	東京大学大学院人文科学研究科博士課程西洋史学専攻 進学
1995年10月	アイルランド共和国ダブリン大学留学
～97年9月	(1996年9月まではアイルランド政府給費留学生)
1999年3月	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程西洋史学専攻 単位取得退学
1999年4月	東京大学大学院人文社会系研究科西洋史学研究室 助手
2002年3月	博士(文学)学位取得
2002年4月	岐阜大学教育学部社会科教育講座(史学) 助教授
2007年4月	同 准教授
2012年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

アイルランド近代史、近代ブリテン世界史

b 研究課題

19世紀アイルランド農村史、近代ダブリン都市史、近代ブリテン世界史

c 概要と自己評価

教育・研究・学内業務において、基本的責任を果たした。

d 主要業績

(1) 著書

共著、Shunsuke Katsuta, “‘In death they are not divided’: The Irish Burial Act of 1824 and establishment of a ‘an open’ cemetery in Dublin”, in Katsumi Fukasawa, Benjamin J. Kaplan, Pierre-Yves Beaurepaire (eds.), *Religious interactions in Europe and the Mediterranean world: Coexistence and dialogue from the 12th to the 20th centuries*, Routledge, 2017.6

単著、Shunsuke Katsuta, *Rockites, magistrates and parliamentarians: Governance and disturbances in pre-Famine rural Munster*, Routledge, 2017.8

共著、勝田俊輔、『東京大学が文京区になかったら——「文化のまち」はいかに生まれたか』、NTT 出版、2018.1

(2) 学会発表

国内、勝田俊輔、「趣旨説明」、「18世紀ブリテン世界におけるコスモポリタニズム——ヒューム、スミス、パークの所論から」、東洋大学白山キャンパス、2016.12.3

国内、勝田俊輔、「複合国家論への留保——アイルランドの位置づけ」、シンポジウム「ヨーロッパ複合国家論の可能性——イギリス思想史研究との対話」、京都大学、2017.1.29

国内、勝田俊輔、「総評——コスモポリタニズムの歴史的文脈」、日本18世紀学会第39回全国大会、立教大学、2017.6.24

国内、勝田俊輔、「近世アイルランド(アルスタ)の植民都市——「市場」と「文明」、都市史学会大会シンポジウム「植民地と都市そして地域」、東京理科大学、2017.12.10

国内、勝田俊輔、「Georgian Dublin: マクロ的予備考察」、都市史学会ワークショップ「Georgian Dublinの都市空間: 建築史的観点から」、東京大学本郷キャンパス、2017.12.25

(3) 教科書

『新編新しい社会歴史』、勝田俊輔、その他、東京書籍、2016

3. 主な社会活動

(1) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

任意団体、史学会、編集委員、2013.5～2017.5、評議員、2014.5～

1. 略歴

- 1994年3月 東京大学文学部西洋史学専修課程 卒業
1994年4月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程西洋史学専攻 入学
1996年3月 東京大学大学院人文社会系研究科修士課程西洋史学専攻 修了
1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程西洋史学専攻 進学
1998年10月～2000年9月 ロシア連邦ロシア科学アカデミー・ロシア史研究所留学（文部省アジア諸国等派遣留学生）
2003年3月 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程西洋史学専攻 単位取得退学
2005年10月 博士（文学）学位取得
2006年9月 新潟国際情報大学情報文化学部情報文化学科 専任講師
2010年4月 東京理科大学理学部第一部教養学科 准教授
2013年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

近現代ロシア史

b 研究課題

ヨーロッパの周縁としてのロシアから、20世紀史を捉え直すこと。

c 概要と自己評価

ロシア革命100周年に関連して、2016年度末に単著『ロシア革命 破局の8か月』（岩波新書、2017年）を刊行し、2017年度にも池田他編『世界戦争から革命へ（ロシア革命とソ連の世紀1）』（岩波書店、2017年）はじめ、一連の論稿を発表した。二月革命と臨時政府の再評価を中心にして、ロシア革命についての最新の研究成果を発表し、社会に還元することができたと考える。2016年度・2017年度とも、ICCEES（国際中欧・東欧研究協議会）の執行委員会メンバーとして、国際的な研究者共同体の維持・発展に微力ながら貢献した。

d 主要業績

(1) 著書

- 共著、池田嘉郎、塩川伸明、『東大塾 社会人のための現代ロシア講義』、東京大学出版会、2016.6
編著、池田嘉郎、上野慎也、村上衛、森本一夫共編、『名著で読む世界史120』、山川出版社、2016.12
単著、池田嘉郎、『ロシア革命 破局の8か月』、岩波書店、2017.1
編著、池田嘉郎責任編集、『世界戦争から革命へ（『ロシア革命とソ連の世紀』1）』、岩波書店、2017.6
編著、松井康浩、中嶋毅、松戸清裕、浅岡善治、池田嘉郎、宇山智彦共編、『スターリニズムという文明（『ロシア革命とソ連の世紀』2）』、岩波書店、2017.7
編著、松井康浩、中嶋毅、松戸清裕、浅岡善治、池田嘉郎、宇山智彦共編、『冷戦と平和共存（『ロシア革命とソ連の世紀』3）』、岩波書店、2017.8
編著、松井康浩、中嶋毅、松戸清裕、浅岡善治、池田嘉郎、宇山智彦共編、『人間と文化の革新（『ロシア革命とソ連の世紀』4）』、岩波書店、2017.9
編著、松井康浩、中嶋毅、松戸清裕、浅岡善治、池田嘉郎、宇山智彦共編、『越境する革命と民族（『ロシア革命とソ連の世紀』5）』、岩波書店、2017.10

(2) 論文

- Yoshiro Ikeda, 「The Homeland's Bountiful Nature Heals Wounded Soldiers: Nation Building and Russian Health Resorts during the First World War」、『Adele Lindenmeyr et al. ed., Russia's Home Front in War and Revolution, 1914-22. Book 2: The Experience of War and Revolution』、201-220 頁、2016
池田嘉郎、「Япония и Россия: пересекающиеся пути развития (1905-1945)」、『Русская и японская цивилизации: Исторический анализ становления и развития национальных идентичностей』、136-154 頁、2016
池田嘉郎、「第一次世界大戦とロシア・リベラルのヨーロッパ認識：カデットを中心にして」、『ロシア史研究』、97、27-42 頁、2016.5

- 池田嘉郎、「トルストイ『戦争と平和』とロシア社会：祖国戦争100周年と第一次世界大戦に見る」、『SLAVISTIKA』、31、195-211頁、2016.6
- 池田嘉郎、「交差する日本とロシアの軌跡——1905年-1945年」、東郷和彦、A.I.パノフ編『ロシアと日本：自己意識の歴史を比較する』、107-128頁、2016.10
- 池田嘉郎、「ロシア革命は兵士を市民にしたのか」、『早稲田大学高等研究所紀要』、9、106-109頁、2017.3
- 池田嘉郎、「From the Meiji Emperor's Funeral to the Taisho Emperor's Coronation: Reporting the Japanese Imperial System in the Russia Press」、『Kimitaka Matsuzato ed., Russia and Its Northeast Asian Neighbors: China, Japan, and Korea, 1858-1945』、137-150頁、2017.3
- 池田嘉郎、「ロシア革命からソ連へ：実現したユートピアの歴史」、『思想』、1123、129-135頁、2017.11
- 池田嘉郎、「和田春樹のロシア革命史研究をめぐって：複合革命と「世界戦争の時代」」、『初期社会主義研究』、27、76-86頁、2017.12
- (3) 学会発表
- 国際、池田嘉郎、「Time and the Comintern: Rethinking the Cultural Impact of the Russian Revolution on Japanese Intellectuals」、The Culture of the Russian Revolution and its Global Impact: Semantics - Performances - Functions、LMU Munich、2016.6.4
- 国際、池田嘉郎、「Проекты установления республиканского строя в 1917 году: дискуссии о президентстве и парламенте」、Международный colloquium «ЭПОХА ВОЙН И РЕВОЛЮЦИЙ (1914 – 1922)»、ペテルブルグ、ヨーロッパ大学、2016.6.9
- 国際、池田嘉郎、「ロシア革命は兵士を市民にしたのか」、軍事的エトスの近代史、早稲田大学、2016.7.24
- 国内、池田嘉郎、「Временное правительство как правительство войны и революции」、ロシア史研究会年次大会、東京大学駒場キャンパス、2017.10.15
- 国際、池田嘉郎、「The Provisional Government and the East Within and Outside Russia」、The Asian Arc of the Russian Revolution: Setting the East Ablaze?、Yale-NUS College, Singapore、2017.11.16
- 国際、池田嘉郎、「The Crisis of Representation of the Sovereign in the Russian Revolution」、The Russian Revolution in the Long Twentieth Century、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、2017.12.8
- (4) 啓蒙
- 池田嘉郎、「日露戦争からロシア革命へ 国民国家というグローバル・スタンダード」、『中央公論』、131(4)、44-47頁、2017.4
- 池田嘉郎、「ロシア革命 100年後の教訓」、『文藝春秋 special』、11(4)、135-140頁、2017.8
- 池田嘉郎、「世界史の中のロシア革命」、『歴史地理教育』、871、4-9頁、2017.11
- (5) 総説・総合報告
- 池田嘉郎、「第22回国際歴史学会議 済南大会に参加して」、『思想』、1102、104-112頁、2016.2
- (6) マスコミ
- 「ロシア革命100年 影響と教訓」、『東京新聞 28-29面』、2017.2.21
- 「失敗としての革命描く」、『京都新聞 9面』、2017.4.28
- 「ロシア革命100年」、『毎日新聞』、2017.11.3
- 「ロシア革命から100年～そのとき何が起きていたのか？激しい経済格差、エリートと大衆の乖離、国際協調と国益…現代への教訓を探る」、TBS ラジオ「荻上チキ・Session-22」、2017.11.7
- 「ロシア革命100年、レーニン5つの誤算」、『日経 BizGate』、2017.11.7
- 「変容する「革命」観」、『四国新聞 13面』、2017.12.7
- (7) 教科書
- 『世界の歴史』、近藤和彦・羽田正（編）、執筆、山川出版社、2016
- 『世界の歴史』、近藤和彦・羽田正（編）、執筆、山川出版社、2017
- (8) 翻訳
- 共訳、K.O.Саркисов、「Сравнение идентичностей России и Японии после русско-японской войны (1905 - 1917 гг.)」、池田嘉郎、山脇大、『和解と対立』、東郷和彦、A.I.パノフ編『ロシアと日本：自己意識の歴史を比較する』、129-174頁、東京大学出版会、2016.10
- (9) 研究テーマ
- 文部科学省科学研究費補助金、基盤研究B、池田嘉郎、分担者(代表者は東大外)、「ジャコバン主義の再検討：「王のいる共和政」の国際比較研究」、2016～

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 B、池田嘉郎、分担者(代表者は東大外)、「第一次世界大戦と民間人―「武器を持たない兵士」の出現と戦後社会への影響」、2017～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

TBS ラジオ「荻上チキ・Session-22」出演（「ロシア革命から 100 年～そのとき何が起きていたのか？激しい経済格差、エリートと大衆の乖離、国際協調と国益…現代への教訓を探る」池田嘉郎×荻上チキ）（2017 年 11 月 7 日）

(2) 学会

ICCEES (International Council for Central and Eastern European Studies), member of the Executive Committee

JCREES（日本ロシア・東欧研究連絡協議会）からの ICCEES 日本代表、JCREES 参与

ロシア史研究会委員（大会企画担当）

『史学雑誌』編集委員

25 社会学

教授 松本 三和夫 MATSUMOTO, Miwao

1. 略歴

- 1981年3月 東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学
1982年4月 城西大学経済学部専任講師 (社会学)
1985年4月 城西大学経済学部助教授 (社会学)
1993年6月 博士 (社会学) 取得 (東京大学)
1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授 (社会学)
1998年10月 オックスフォード大学セントアントニーズカレッジ上級客員研究員 (～1999年10月)
2003年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 (社会学)
この間、エジンバラ大学ゲノム政策研究所 Distinguished Visiting Scholar (2007.6)、カリフォルニア大学バークレー校 Visiting Fellow (2013.3) を務める。
2018年3月 定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

科学社会学、理論社会学、環境社会学、災害社会学

b 研究課題

以下の4つの領域を中心に研究をすすめている。

- (1) 科学技術の社会学の学問的基盤に関する集成と展望
- (2) 「構造災」の理論の社会学的彫琢と集成
- (3) 不確実性のもとでの社会的意思決定に関する理論社会学的研究
- (4) 知の失敗の研究を他国の状況を念頭において展開する

c 概要と自己評価

(1)は、科学社会学の理論枠組みの鳥瞰図を描くとともに、それを災害、安全保障といった個別問題に適用する際の見通しと考慮すべき社会学的要因についてまとめることができた(論文参照)。(2)については、*The Sociology of Structural Disaster* と題する英文学術書を Routledge 社より刊行すべく、現在準備をすすめている。(3)は、とくに科学社会学と理論社会学を接合する基礎枠組を開発し、経路依存的な社会過程をへて極端な現象が生成するようすを記述、説明する課題に取り組んでいる。(4)は、すでに提示した知の失敗の研究を他国の状況を念頭において展開することをめざし、その一環として『知の失敗と社会』(岩波書店)の韓国語訳が2018年4月に異想booksより刊行される。

d 主要業績

(1) 論文

Miwao Matsumoto, “Knowledge and Security” (co-authored with K. Vogel et al.), in U. Feld, R. Fouché, C. Miller, and L. Smith-Doerr (eds.), *The Handbook of Science and Technology Studies 4th edition* (The MIT Press, 2016), pp. 973-1002

Miwao Matsumoto, “Researching Disaster from a STS Perspective” (co-authored with K. Fortun et al.), in U. Feld, R. Fouché, C. Miller, and L. Smith-Doerr (eds.), *The Handbook of Science and Technology Studies 4th edition* (The MIT Press, 2016), pp. 1003-1028

Miwao Matsumoto, “The sociology of Science and Technology”, in K. Korgen (ed.), *Cambridge Handbook of Sociology* (Cambridge University Press, 2017), Vol. 2, pp. 166-177

松本三和夫、「構造災—科学社会学からのメッセージ—」(『死生学・応用倫理研究』第22号、2017年、11-44頁)

松本三和夫、「構造災における制度の設計責任—科学社会学から未来へ向けて—」(『被災地から未来を考える』田中重好他編、第1巻、有斐閣、2017年、28-58頁)

Miwao Matsumoto, “‘Structural Disaster’ beyond Fukushima: Messages from the Sociology of Science and Technology” (co-authored with K. Juraku), in K. Chou (ed.), *Energy Transition in East Asia: A Social Science Perspective* (Abingdon: Routledge, 2018), pp. 145-159

松本三和夫、「公共知の社会学—学術と社会の境界面で想起すべきこと—」(『早稲田社会学年誌』第59号、2018年、39-59頁)

(2) マスコミ

「研究のフロンティア—構造災における不作為が緊急時に発現するメカニズムの科学社会学的研究」(『理論と方法』第31巻、第1号、2016年、192頁)

「構造災」(『原子力システムニュース』第28巻、第1号、2017年、18-20頁)

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

”The ‘Structural Disaster’: The Framework for Theory and History on Extreme Events”, Paper presented at the kick-off meeting of Franco-Japonais project, 30 March 2016, Tokyo

「構造災」(於・「核燃料サイクルバックエンドの科学」シンポジウムにてパネリストとして招待討論、2016年6月25日、東京大学)

”Risk and Structural Disaster”, Paper presented at 4S/EASST Joint Meeting, 31 August-3 September, 2016, Barcelona

「構造災と対米開戦前夜の重大事故」(於・科学社会学会「科学技術と戦争」シンポジウムにてパネリストとして討論、2016年10月30日、東京大学)

「セクターモデルと構造災」(於・東北大学高度教養教育・学生支援機構連続セミナーにて招待討論、2016年10月31日、東北大学)

「目前にあるけれど見えにくい重要問題とどう向き合えるか?—構造災」(於・文部科学省戦略的原子力共同研究プログラムワークショップにて基調講演、2017年2月25日、科学技術振興機構)

「構造災」(於・原子力システム研究懇談会にて招待講演、2017年3月21日、日本原子力産業協会)

”The ‘Structural Disaster’: Message from a Sociologist”, Invited Paper presented at Workshop on the Sewol Ferry Disaster, 23-26 June, 2017, Seoul

「学術と社会の境界面で想起すべきこと—科学社会学者の視点—」(於・早稲田大学社会学会シンポジウム「人文・社会科学の危機」にて招待講演、2017年7月8日、早稲田大学)

”Institutionalized Insensitivity to ‘Structural Disaster’”, Paper presented at 4S Annual Meeting, 30 August - 2 September, 2017, Boston.

「構造災をこえて—公共知と社会学—」(於・日本社会学会シンポジウム「公共性の危機と知の再創造」にて招待講演、2017年11月5日、東京大学)

”The ‘Structural Disaster’ and ‘Institutionalized Secrecy’”, Invited paper presented at École des Mines, 28 November, 2017, Paris

”The ‘Structural Disaster’ A Message from a Sociologist”, Invited paper presented at IHEST Conference, 30 November, 2017, Paris

「公共知の社会学—学術と社会の境界面で想起すること—」(於・東京大学文学部文化交流研究懇談会にて発表、2018年1月11日、東京大学)

「科学社会学からみえる知の風景—学術と社会の境界面で想起すること—」(於・東京大学文学部最終講義、2018年3月16日、東京大学)

(2) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

International Journal of Technoethics 編集理事 (2016年4月～)

International Sociological Association, Research Committee on the Sociology of Science & Technology (RC 23) 評議員 (2016年4月～2018年7月)

日本科学社会学会会長 (2016年4月～2019年3月)

1. 略歴

1984年3月 東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学
社会保障研究所、中央大学を経て、1993年4月から東京大学助教授
現在 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

福祉社会学、社会政策、比較福祉レジーム分析

b 研究課題

- (1) 社会政策および社会計画に関する理論的研究
- (2) 日本の地域社会計画に関する実証的研究
- (3) 諸外国の社会政策に関する研究
- (4) 社会保障をはじめとする社会政策に関する政策論的研究
- (5) 福祉国家と福祉社会に関する理論的実証的研究
- (6) 社会政策と社会意識に関する実証的研究

c 概要と自己評価

東アジア諸国における福祉レジームの比較分析をポスト・オリエンタリスト・アプローチによって遂行している。また、公共社会学に関する研究を行い、これを実証的な観点および理論的な観点で、単著と共編著にまとめることができた。また、現在は生産レジームと再生産レジームの発展段階における時間のズレが、各国の福祉レジームにどのような影響を及ぼすかについての研究を進めている。今後、これを継続・発展させることが課題である。

d 主要業績

(1) 論文

武川正吾、「東アジアのなかの日本：普遍主義の可能性」、『連合総研レポート』、319、2016.10

武川正吾、「いま、なぜ子供の貧困か」、『世界』、891、2017.2

武川正吾・角能、「社会保障の分野別に見た高福祉高負担への支持」、『厚生指標』、64(8)、2017.8

3. 主な社会活動

(1) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

福祉社会学会顧問、独立行政法人日本学術振興会事業委員会委員、国立社会保障・人口問題研究所評議員
社会政策学会顧問

1. 略歴

- 1981年3月 東京大学大学院社会学研究科修士課程修了
1983年3月 東京大学大学院社会学研究科博士課程中退
1983年4月 東京大学教養学部助手
1986年4月 法政大学社会学部専任講師
1988年4月 法政大学社会学部助教授
1994年10月 東京大学文学部助教授（東京大学大学院社会学研究科担当）
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（文学部担当）
1997年4月 オックスフォード大学オリエンタル・インスティテュート研究員（海外研修）
2000年4月 同研究科文化資源学専攻助教授（形態資料学専門分野）併任
2005年3月 博士（社会学）学位 東京大学
2005年9月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（文学部担当）
2009年6月 濱田総長下での東京大学「行動シナリオ」プロデュース会議メンバー
2011年4月 東京大学人文社会系研究科副研究科長（～2013年3月）
2015年4月 五神総長下での「東京大学ビジョン2020」起草会議メンバー
2017年4月 東京大学文学部長・人文社会系研究科長（～2019年3月）

2. 主な研究活動

a 専門分野

文化の社会学、歴史社会学、社会意識論、社会学方法論、社会調査史

b 研究課題

概要

- (1) 歴史社会学の思想と方法。柳田国男の方法論。
- (2) モノとしての書物をモデルとしたメディア文化の地層分析。読書空間論。ケータイ電話論。
- (3) 社会調査の社会史。日本近代における調査の実践史と方法意識の展開。
- (4) 文字テキスト以外の資料へのテキスト概念の可能性の拡大。かわら版・新聞錦絵データベースの実験、浅草公園十二階凌雲閣の研究など。

c 概要と自己評価

2016年度から2017年度にかけては、2014年にまとめられた『論文の書きかた』を踏まえて、大学院の演習において実践的な論文執筆をめぐる教育をおこなった。2017年度からは学部長職のため、学部講義と演習は担当する余裕がなくなったが、大学院では本研究科の社会学・文化資源学専門分野の学生だけでなく、学際情報学府や総合文化研究科等の多様な学生の論文指導を、当該学生が自発的に選んだテーマにそって実施した。柳田国男研究では、歴民博との共同研究でのサハリンの現地調査を踏まえ、共著『柳田国男と考古学』や『国立歴史民俗博物館研究報告』において、これまでほとんど論じられてこなかった「樺太紀行」の方法的な意義を発掘している。実験的な試みでもあった都市東京のシンボルであった建物の研究と民間学者のライフヒストリーを組み合わせた『浅草公園凌雲閣十二階』について、江戸東京博物館のシンポジウムに参加し、その報告書に発表内容にもとづいた報告を載せて啓発的な社会発信に携わった。この著作は、学際的な日本生活学会から、2017年度の今和次郎賞を授与された。また歴史民俗博物館の「万年筆の生活誌」の企画展示にかかわって、この普及した筆記具が人びとの文字を書く実践をいかに変えたのか、またこの新しい「民具」ともいべき近代の発明がいかなる産業化のプロセスを経たのか等を分析し、新たな歴史社会学の可能性を追求した。研究科長の職務の煩雑さに時間をとられて、2017年度に完成する予定で進めてきた『文化資源学講義』の刊行が遅れて2018年度にずれ込むことになったのは残念であった。

d 主要業績

(1) 論文

- 佐藤健二「柳田考古遺物の採集地はどこか?②: 樺太紀行の旅程」設楽博己・工藤雄一郎・松田睦彦編『柳田国男と考古学』新泉社、44-53頁、2016.5
佐藤健二「柳田国男と南方熊楠との交流: 民俗学の自覚」設楽博己・工藤雄一郎・松田睦彦編『柳田国男と考古学』新泉社、126-132頁、2016.5

- 佐藤健二「流言研究と「社会」認識：戦後日本社会学における「社会的なるもの」への想像力」池岡義孝・西原和久編『戦後日本社会学のリアリティ』東信堂、231-263頁、2016.10
- 佐藤健二「明治三十九年樺太紀行」再読『国立歴史民俗博物館研究報告』202号、243-265頁、2017.3
- 佐藤健二「毛筆字とペン字」「丸善の広告」「大衆化した万年筆」「万年筆を民俗学がとりあげる意義と可能性」「手紙・日記を綴る」「記録する」小池淳一編『万年筆の生活誌：筆記の近代』国立歴史民俗博物館、8、122,125,145,162,172頁、2016.3
- 佐藤健二「凌雲閣十二階からなにが見えたか」『浅草地域のあゆみⅡ：近代化と盛り場の変容』調査報告書第33集、東京都江戸東京博物館、39-57頁、2018.3

(2) 書評

KENJI SATÔ, 2016, "Book Review: The Undiscovered Country, Text, Translation, and Modernity in the Work of Yanagita Kunio. By Melek Ortabasi," *International Journal of Asian Studies*, Vol. 13, No. 2. July

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

静岡県立大学非常勤講師（2016年度）

(2) 学会

日本社会学会、社会調査協会

教授 白波瀬 佐和子 SHIRAHASE, Sawako

1. 略歴

- 1997年 オックスフォード大学 University of Oxford（社会学）・社会学博士
- 1997年4月 国立社会保障・人口問題研究所室長
- 2003年4月 筑波大学大学院システム情報工学研究科助教授
- 2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授（社会学）
- 2010年8月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（社会学）

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会階層論、人口社会学、計量分析

b 研究課題

主な研究課題として次の4つに取り組んでいる。

- (1) 少子高齢社会の不平等構造
- (2) 社会的、私的移転に関する実証研究
- (3) 資産の不平等に関する実証研究
- (4) 社会階層と移動に関する実証研究

c 概要と自己評価

人口高齢化と階層格差に関する研究を中心に進めている。特に、2013年度より特別推進研究「少子高齢化からみる階層構造の変容と格差生成メカニズムに関する総合的研究」（課題番号 25000001）を立ち上げ、2015年度には本事業の柱の一つである第7回「社会階層と社会移動に関する全国調査（SSM調査）」（1955年以降、10年ごとに実施されてきた）を実施した。さらに、高齢化に注目して「中高年者の生活実態に関する継続調査」の3回目を実施し、パネル分析研究も進めている。大型プロジェクトを運営し、海外での学会報告や英文ジャーナルに論文を掲載し、新たな研究成果の発表を進めており、ほぼ予定通り、研究成果をあげることができた。

d 主要業績

(1) 論文

Sawako Shirahase, 「Economic Inequality among Families with Small Children」、『Social Inequality in Post-Growth Japan』、107-120 頁、2017

白波瀬佐和子、「小さな世帯の増加と社会保障」、『社会保障研究』、第2巻・第1号、4-18 頁、2017.6

白波瀬佐和子、「人口構造の変化と経済格差」、『日本労働研究雑誌』、1月号 (No.690)、44-54 頁、2017.12

(2) 書評

アンソニー・B・アトキンソン、「21世紀の不平等」、東洋経済新報社、『経済セミナー』、no. 690、115 頁、2016.6

(3) 解説

白波瀬佐和子、「2015年「社会階層と社会移動に関する全国調査」(SSM調査)の実施」、『中央調査報』、No. 712、1-7 頁、2017.2

(4) 学会発表

国際、白波瀬佐和子、「Sociologies in Dialogue: An Asian Perspective」、Council of National Associations, ISA, Academia Sinica, Taiwan、2016.5.9

国際、白波瀬佐和子、「Generational Cohesion through Making a Bequest」、International Sociological Association, RC28、シンガポール国立大学、2016.5.26

国際、白波瀬佐和子、「Income inequality among families with children in the society with low fertility rates: Focusing on Japan with a cross-national perspective」、Sociological Forum, International Sociological Association、ウィーン大学、2016.7.11

国際、白波瀬佐和子、「Economic inequality among children in low-fertility societies:」、international sociological association, RC28、ベルン大学、2016.8.29

国際、白波瀬佐和子、「Mother's work and economic inequality among children in low-fertility societies: Focusing on Japan from a cross-national perspective」、EAJS International Conference、リスボン、2016.8.31

国内、白波瀬佐和子、「少子高齢社会における富の分配」、日本社会学会、九州大学、2016.10.9

国際、白波瀬佐和子、「Economic inequality among families with small children in low-fertility societies」、SNU-UT Joint Sociological Forum、東京大学、2016.11.14

国際、白波瀬佐和子、「Wealth Inequality in a Rapidly Aging Society: The Case of Japan」、International Sociological Association, RC28、ケルン大学、2017.4.1

国際、白波瀬佐和子、「Social inequality in occupational inheritance and wealth accumulation in Japan from an intergenerational perspective」、international sociological association, RC28、コロンビア大学、ニューヨーク、2017.8.9

国内、白波瀬佐和子、「社会階層論から見る世帯規模の縮小」、日本家族社会学会、京都大学、2017.9.8

国内、毛塚和宏・白波瀬佐和子・瀧川裕貴、「社会的不平等拡大への検証」、日本家族社会学会、京都大学、2017.9.9

国内、白波瀬佐和子、「人口高齢化を考慮した社会階層論再考——2015年SSM調査分析結果(1)——」、日本社会学会、東京大学、2017.11.4

(5) 研究報告書

白波瀬佐和子、「少子高齢化からみた社会階層論再考」、『2015SSM調査報告書 第2巻 人口・家族』、219-233 頁、2018

白波瀬佐和子、「2015年「社会階層と社会移動に関する全国調査」(SSM調査)」、『2015SSM調査報告書 第1巻 調査概要・方法』、1-12 頁、2018.3

白波瀬佐和子他、「「日本のくらしと仕事に関する全国調査」の概要と調査設計」、『2015SSM調査報告書 第1巻 調査概要・方法』、201-222 頁、2018.3

毛塚和宏・白波瀬佐和子・瀧川裕貴、「教育達成の世代関係からみる階層間格差の変容」、『2015年SSM報告書 第2巻 人口・家族』、27-43 頁、2018.3

(6) マスコミ

「貧困・格差をどうするか(上)「機会の不平等」解消急げ」、『日本経済新聞社』、2016.12.26

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本家族社会学会、理事、2016.9～

国外、International Sociological Association, Executive Committee member (2014-2018)

International Sociological Association, Research Committee of Social Stratification, Board member (2014-2018)

1. 略歴

1990年3月	東京大学大学院社会学研究科社会学修士課程修了
1995年	東京大学大学院社会学研究科社会学博士課程単位取得退学
1995年	信州大学人文学部人間情報学科文化情報論講座助手
1995年	専修大学文学部社会学科非常勤講師
1996年	富山大学人文学部非常勤講師
1998年	徳島大学総合科学部非常勤講師
1999年	岡山大学文学部行動科学科社会学・文化人類学講座講師
1999年	信州大学人文学部人間情報学科非常勤講師
2000年	筑波大学第一学群社会学類非常勤講師
2001年	岡山大学文学部行動科学科社会学・文化人類学講座助教授
2002年	信州大学人文学部人間情報学科文化情報論講座助教授
2005年	名古屋大学大学院国際多元文化専攻ジェンダー論講座非常勤講師
2006年	東京大学大学院人文社会系研究科社会学専門分野准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会問題の社会学
歴史社会学

b 研究課題

セクシュアリティの歴史社会学
少子化社会論
人口減少社会論
社会問題の構築主義アプローチ

c 概要と自己評価

概要:以下の領域を中心に研究を進めている。

- (1) 社会問題プロセスの理論化
- (2) 近代日本におけるセクシュアリティをめぐる言説の変容
- (3) 人口減少社会を前提とした制度設計・社会構想
- (4) 社会関係資本の測定を基盤にした地域再生

自己評価

(1) に関しては、少子化対策や有害コミック規制などの具体的な社会問題を取り上げ、その言説や政策の形成プロセスに関する理論形成を試みている。(2) に関しては、明治期初頭の性科学書『造化機論』の翻訳過程を追尾している。(3) については、少子化対策をやめて、人口減少を前提とした年金制度、経済成長、都市-農村間の財・サービスの分配などに関する論文をいくつか執筆した。(4) については、集落・村落レベルで社会関係資本を測定し、それが地域社会の持続可能性を生み出すかいかに着目した研究を継続している。

d 主要業績

(1) 著書

単著、赤川学、『これが答えだ！少子化問題』、筑摩書房、2017.2
単著、赤川学、『少子化問題の社会学』、弘文堂、2018.2

(2) 論文

赤川学、「構築された性から構築する性へ——ジェフリー・ウィークスの理論的変容を通して」、『現代社会学理論研究』、11号、4-13頁、2017.3
赤川学、「社会問題の歴史社会学をめざして」、『社会学評論』、68巻1号、118-133頁、2017.6
赤川学、「少子化問題における計画のゆくえ」、『計画行政』、40巻3号、9-14頁、2017.8
赤川学、「承認問題としてのセクシュアリティ」、『青少年問題』、668号、2-9頁、2017.10

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本社会学会、理事、2015.9～2018.9

准教授 **出口 剛司** DEGUCHI, Takeshi

1. 略歴

1993年3月 一橋大学社会学部卒業
1994年4月 東京大学大学院 社会学研究科社会学専攻 修士課程入学
1996年3月 同 人文社会系研究科社会文化研究専攻 修士課程修了
1996年4月 同 博士課程進学
2001年3月 同 博士課程単位取得退学
2001年4月 博士（社会学）学位取得（東京大学）
2001年4月～2007年3月 立命館大学産業社会学部助教授
2005年9月～2006年9月 フランクフルト大学社会研究所客員研究員
2007年4月～2008年3月 立命館大学産業社会学部准教授
2008年4月 明治大学情報コミュニケーション学部准教授
2011年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

理論社会学 社会学史研究

b 研究課題

- (1) フランクフルト学派の学説史研究
- (2) コミュニケーション理論、承認理論に基づく批判的社会理論の展開
- (3) 日本の社会学史の再評価と海外への紹介

c 概要と自己評価

- (1) エーリッヒ・フロムの理性概念とそれに基づく社会批判の再構成を行っている。その成果を国際エーリッヒ・フロム協会主催の国際会議で報告、論文として発表した。現在は後期フロムのナルシズム論の再評価を行う一方、後期ヒューマニズムを生成の哲学の観点から再構成する作業に取り組んでいる。
- (2) 現代資本主義の構造的性質を理論的に解明する。「資本主義的近代化のパラドックス」や現代社会がかかえる社会病理の諸相を承認論、コミュニケーション論の観点から分析している。
- (3) 欧米の社会学理論を背景に戦後日本で発展した社会学理論の独自性に注目し、その現代的意義を再評価すると同時に、国際会議の場で世界に発信している。

d 主要業績

(1) 論文

出口剛司、「戦後社会の生成と価値の社会学：作田啓一における『近代の超克』とその社会的展開」（奥村隆編『作田啓一 vs. 見田宗介』弘文堂、pp.40-74、2016.11

Takeshi Deguchi, 'Sociology of Japanese Literature after the Great East Japan Earthquake: Analysing the disaster's underrepresented impacts'. 『Anthony Elliott and Eric L. Hsu (Eds), The consequences of global disasters. New York: Routledge』, pp. 50-63, 2016

(2) 学会発表

国際、Takeshi Deguchi, 「Akira Kurihara's critical sociology and the "identity of tenderness": Reconsidering "colonisation of the lifeworld" from the anti-productivism perspective」, 9th International Critical Theory Conference in Rome. John Felice Rome Venter of Loyola University Chicago. Rome in Italy. 5th 7th May 2016

国際、Takeshi Deguchi、「Akira Kurihara's critical sociology and the "identity of tenderness": Reconsidering "colonisation of the lifeworld" from the anti-productivism perspective」、2014 SNU-UT Joint Sociological Forum, University of Tokyo. 14th-15th November 2016

国内(司会)、出口剛司、「社会学理論の最前線—空間」、日本社会学会史学会大会(シンポジウム)、東京女子大学、2016年6月26日

国内、出口剛司、「戦後社会の生成と価値の社会学: 初期作田における『近代の超克』を手がかりにして」、日本社会学理論学会(特別セッション・作田啓一の社会学)、神戸学院大学、2016年9月3日

国内(司会)、出口剛司、「社会学理論の最前線—社会」、日本社会学会史学会大会(シンポジウム)、広島大学、2017年6月25日

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、明治大学大学院情報コミュニケーション研究科、「社会的人間論」、2013.4～

非常勤講師、明治大学情報コミュニケーション学部、「コミュニケーション基礎」、2013.4～

非常勤講師、立教大学社会学部、「社会学史」、2013.4～

非常勤講師、中央大学法学部、「現代社会理論」、2013.9～

(2) 学会

国内、日本社会学理論会、運営委員長、2014.9～

国内、日本社会学会史学会、研究担当、2014.6～

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター、運営委員(学外委員)、2012.1～

准教授 **祐成 保志** SUKENARI, Yasushi

1. 略歴

1997年3月 東京大学文学部行動文化学科社会学専修課程卒業
1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻修士課程入学
1999年3月 同 人文社会系研究科社会文化研究専攻修士課程修了
2002年3月 同 博士課程単位取得退学
2004年4月 札幌学院大学社会情報学部講師(～2006年3月)
2005年5月 博士(社会学)学位取得(東京大学)
2006年4月 札幌学院大学社会情報学部助教授
2007年4月 信州大学人文学部准教授
2012年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

コミュニティの社会学、ハウジングの社会学、社会調査史

b 研究課題

- (1) 建造環境と社会構造の関係についての理論的・経験的研究
- (2) 米国、英国および日本における社会調査史

c 概要と自己評価

(1) 経験的調査を通じて選別主義的な住宅政策を支えてきた社会意識の分析を進めるとともに、住宅政策を普遍主義的な社会政策として再構成するための条件を考察した。また、歴史的制度論にもとづきイギリス福祉国家の変容と住宅市場危機の淵源を探ったS・ローのThe Housing Debate (2011年)の翻訳書を刊行した。(2) 米国の社会学的ハウジング研究において、「政治経済学」と「社会心理学」の系譜が「エスノグラフィ」を介して接続され、「いかにして実効的環境を記述・分析するか」という理論的・方法的基本問題が設定されるに至る過程を追跡した。

d 主要業績

(1) 翻訳

祐成保志 (訳)、『イギリスはいかにして持ち家社会となったか』ミネルヴァ書房、2017.9 (Lowe, S., 2011, *The Housing Debate*, Policy Press. の全訳)

(2) 論文

祐成保志、「住宅がもたらす分断をこえて」、井手英策・松沢裕作編『分断社会・日本』岩波書店、33-45頁、2016.6
SUKENARI, Yasushi, Housing Estates as Experimental Fields of Social Research, *Development and Society*, Institute for Social Development and Policy Research, Seoul National University, 45(1):69-87, 2016

祐成保志、「住まいが『受け継がれる』ための条件とは」、内田青蔵他編『受け継がれる住まい』柏書房、69-77頁、2016.9

祐成保志、「ハウジングとホーム：住宅政策は何に照準を合わせるべきか」、日本住宅会議編『深化する居住の危機：住宅白書2014-2016』ドメス出版、21-28頁、2016.12

祐成保志、「住宅研究と社会学の協働：『予言の自己成就』をめぐる」中島明子編『HOUSERS：住宅問題と向き合う人々』萌文社、43-50頁、2017.3

祐成保志、「住宅とコミュニティの関係を編み直す」宮本太郎編『転げ落ちない社会：困窮と孤立をふせぐ制度戦略』勁草書房、97-125頁、2017.10

祐成保志、「住生活の再建と仮設住宅」『都市住宅学』都市住宅学会、98、38-43頁、2017.8

祐成保志、「消費・生産・参加：『住まう』ことを支えるとは」『月刊福祉』全国社会福祉協議会、100(8)、40-45頁、2017.8

(3) 学会発表

国内、祐成保志、「現代都市における住宅問題」、日本社会学会第90回大会、東京大学、2017.11.4

国内、祐成保志、「団地はどのように新しかったのか?」、人間・環境学会第114回研究会「団地が積み重ねてきた経験」、法政大学、2018.2.17

国際、Sukenari Yasushi、「Aging and the concept of fair housing in the Japanese context」、From Room to Region: Age-Friendly Environmental Design and Planning in the Western Asia-Pacific、九州大学、2018.3.13

(4) その他

祐成保志、「縮退時代の住まいのあり方」、『新建築別冊 集合住宅の新しい文法』新建築社、120-121頁、2016.8

祐成保志、「コミュニティ・ワークとしての居住支援」、『すまいろん』住総研、100、4-5頁、2017.2

祐成保志、「私が経験した社会情報学」『社会情報』札幌学院大学総合研究所、25(1・2)、249-253頁、2017.2

祐成保志、「訳者解説」、祐成保志訳『イギリスはいかにして持ち家社会となったか』(前掲)、277-287頁、2017.9

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、日本大学文理学部、「社会学特殊講義3」、2016.4~2016.9、2017.4~2017.9

非常勤講師、静岡県立大学国際関係学部、「人間科学基礎論A・B」、2017.9、2018.2

(2) 学会

国内、日本生活学会、編集委員、2014~

国内、日本生活学会、理事、2016~

国内、日本社会学会、学術情報支援委員、2015~

26 社会心理学

教授 亀田 達也 KAMEDA, Tatsuya

1. 略歴

1982年	東京大学文学部卒業（社会心理学専修課程）
1989年	University of Illinois at Urbana-Champaign, Ph.D. (Department of Psychology)
1989年	東京大学大学院社会学研究科博士課程退学
1989年4月	東京大学文学部助手
1991年4月	東洋大学社会学部講師
1994年4月	北海道大学文学部助教授
1997年7月	Fulbright fellowship (University of Colorado at Boulder, Northwestern University)
2000年4月	北海道大学大学院文学研究科教授
2001年8月	Deutscher Akademischer Austausch Dienst Research Fellow (Max Planck Institute in Berlin, Center for Adaptive Behavior and Cognition)
2008年8月	Residential Fellow, Center for Advanced Study in the Behavioral Sciences at Stanford University
2012年4月	北海道大学社会科学実験研究センター長（兼務）
2014年10月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会心理学、意思決定科学、行動生態学

b 研究課題

社会的意思決定

c 概要と自己評価

概要

人が社会場面でいうさまざまな意思決定について、以下の3つのテーマを中心に研究している。

(1) 「集合知」の認知・生態学的基盤の理解

個人のもつさまざまな情報をよりよい社会的決定のためにどのように集約するのかという問いは、21世紀の社会科学の直面する重要課題の1つである。本プロジェクトでは、近年、生物学領域と情報科学領域で大きな注目を集めている社会性昆虫の「群知能」(swarm intelligence)に関する知見を参考にしながら、人間の集合行動における「集合知」の発生可能性について検討している。人間集団において集合知の生まれる認知的・生態学的な条件について、数理モデル、コンピュータ・シミュレーション、種間比較実験、インターネット実験などを用い理論的・実証的に明らかにする。

(2) 「正義」の脳科学的・行動的基盤の理解

富や権利の配分を含む「社会のあり方」に関する価値対立は、“Occupy Wall Street”運動に示されるように、喫緊の政治的・社会的課題になっている。本プロジェクトは、「社会のあり方」に関する人間の価値判断がどのような行動・認知・神経科学的メカニズムを持つのかを検討する。人文学・社会科学で蓄積されてきた規範的理論（「あるべき行為・社会とは何か」に関する論考）との対応関係を視野に入れながら、計算論的モデリング、MRIを用いた脳画像計測、eye-trackerを用いた視線計測、末梢自律神経反応の計測、内分泌反応計測などを含む、行動・認知・神経科学の研究手法を用いて、「社会価値」がどのように獲得され、私たちの心にどのように実装されるのかを実証的に探る。

(3) 「共感性」の認知・神経基盤の理解

「ヒトの共感能力とは何か」という問いは、社会的存在としての人間を考える上で極めて重要である。痛みや恐れ・興奮が集団内で伝搬するといった「原初的な共感」は、群れ生活を営む動物が同種他個体の反応をモニターし、その反応を自らも引き受けることで、捕食者の出現などの環境変化に直ちに反応できるように身体的に準備するといった適応的機能をもつだろう。一方、ヒトに特徴的とされる「高次共感」の機能的意義についてはほとんど分かっていない。本プロジェクトでは、「痛み反応の同期化現象」を軸に、ヒトの原初的共感と高次共感の相互作用を探る。また、相手との関係に応じて共感性がどのように変化するかについて、注意配分や情報探索行動、自律神経系反応の計測

を軸に解析し、得られた結果を他の動物種と比較する。さらに、課題遂行中の脳活動を fMRI により計測することで、共感の質・量の違いと相関する脳部位を特定し、これらの脳部位の賦活パターンが行動の個人差とどのように連動するのかについても併せて解明しようとする。

自己評価

上記の3つのプロジェクトは、

- (a) 科学研究費・基盤研究 A「集合知の認知・生態学的基盤」(平成 25-27 年度)、基盤研究 S「集合行動の認知・神経・生態学的基盤の解明」(平成 28-32 年度)
- (b) 日本学術振興会・課題設定による先導的人文・社会科学推進事業(領域開拓プログラム)「“社会価値”に関する規範的・倫理的判断のメカニズムとその認知・神経科学的基盤の解明」(平成 26 年 10 月～平成 29 年 9 月)、
- (c) 科学研究費・新学術領域研究(研究領域提案型)「ヒト社会における共感性」(平成 25-29 年度)

の支援を受けて行われた(すべて研究代表者)。いずれも、生物学・脳科学・情報科学・経済学・倫理学・法哲学の研究者とのコラボレーションを軸に、PD・大学院生などの若手をチームメンバーとするプロジェクト型研究である。数年間に亘る密接な協同の結果、文理あるいは専門の壁を超えた共通理解が大きく進み、共通概念のもとに研究を展開できる段階に達している。下記に見るように、その成果の一端は、国際誌の論文や、ハンドブック・辞典のチャプターとして公開されている。今後は成果の公開をさらにか速する。

d 主要業績

(1) 著書

単著、亀田達也、『モラルの起源—実験社会科学からの問い』、岩波新書、2017

共著、King, A., Kosfeld, M., Dall, S.R.X., Greiner, B., Kameda, T., Khalmetski, K., Leininger, W., Wedkind, C., & Winterhalder, B., 「Investors and exploiters in ecology and economics」, In L-A. Giraldeau, P. Hebb & M. Kosfeld (Eds.), 「Investors and exploiters in ecology and economics」 (pp.205-214). Cambridge, MA: MIT Press, 2017

(2) 論文

Kameda, T., Inukai, K., Higuchi, S., Ogawa, A., Kim, H., Matsuda, T., & Sakagami, M., 「Rawlsian maximin rule operates as a common cognitive anchor in distributive justice and risky decisions.」, 『Proceedings of the National Academy of Sciences of the USA』, 113(42), pp.11817-11822, 2016

Bryant G. A., Fessler D. M. T., Fusaroli R., Clint E., Aarøe L., Apicella C. L., Petersen M. B., Bickham S. T., Bolyanatz A., Chavez B., De Smet D., Díaz C., Fancovicová J., Fux M., Giraldo-Perez P., Hu A., Kamble S. V., Kameda T., Li N. P., Luberti F. R., Prokop P., Quintelier K., Scelza B. A., Shin H. J., Soler M., Stieger S., Toyokawa W., van den Hende E. A., Viciania-Asensio H., Yildizhan S. E., Yong J. C., Yuditha T., & Zhou Y., 「Detecting affiliation in colughter across 24 societies.」, 『Proceedings of the National Academy of Sciences of the USA』, 113, pp.4682-4687, 2016

Murata A, Saito H, Schug J, Ogawa K, & Kameda T, 「Spontaneous facial mimicry is enhanced by the goal of inferring emotional states: Evidence for moderation of “automatic” mimicry by higher cognitive processes.」, 『PLoS ONE』, 11(4), e0153128, 2016

村田藍子, 齋藤美松, 樋口さとみ, 亀田達也, 「ヒト社会における大規模協力の礎としての共感性の役割.」, 『心理学評論』, 58(3), 392-403 頁, 2016

Bertrand Jayles, Hye-rin Kim, Ramón Escobedo, Stéphane Cezera, Adrien Blanchet, Tatsuya Kameda, Clément Sire and Guy Theraulaz, 「How social information can improve estimation accuracy in human groups」, 『Proceedings of the National Academy of Sciences of the USA』, vol. 114, no. 47, pp. 12620-12625, 2017

小川昭利・横山諒一・亀田達也, 「日本語版 ToMLocaliser for fMRI の開発.」, 『心理学研究』, 88(4), 363-375 頁, 2017

Tindale, R. S. & Kameda, T., 「Group decision-making from an evolutionary/adaptationist perspective.」, 『Group Processes and Intergroup Relations』, 20(5), pp.669-680, 2017

上島淳史・亀田達也, 「資金獲得に伴う不確実性は他者のためのリスク選択に影響するか.」, 『心理学研究』, 88(4), pp.383-389, 2017

Toyokawa, W., Saito, Y., & Kameda, T., 「Individual differences in learning behaviours in humans: Asocial exploration tendency does not predict reliance on social learning.」, 『Evolution and Human Behavior』, 38, 325-333 頁, 2017

(3) 学会発表(招待講演のみ記載)

国際、Kameda, T., 「Panel discussion: Evolution and neural basis of morality (with Joshua Greene, Ralph Adolphs and Yukihiro Nobuhara).」, International symposium on brain and social mind: The origin of empathy and morality, Yokohama, Japan, 2016.7.23

国内、亀田達也, 「「セーギの味方」を引き受けるか—分配の正義をめぐる—」, 社会心理学会大会シンポジウム「政

- 治態度や規範の探求をめぐる社会心理学と政治学の対論」、関西学院大学、2016.9.18
- 国内、亀田達也、「行動経済学と社会心理学の関わりを考える：融合 or 止揚?」、行動経済学会第10回記念大会パ
ネルディスカッション「行動経済学の過去・現在・未来」、一橋大学、2016.12.4
- 国際、Kameda, T.、「Herd behavior: Its biological and social underpinnings.」、Langfeld Conference: From micro-level cognitive
phenomena to large-scale social dynamics、Princeton University、2017.5.12
- 国内、亀田達也、「「セーギの味方」を引き受けるか?——分配と共感性をめぐる」、Morality mod Science セミナー、
名古屋大学、2017.5.28
- 国内、亀田達也、「「世代間衡平」をめぐる協調的問題解決の可能性」、認知科学会第34回大会 Organized Symposium
「異質な集団の相互理解の認知科学：研究のすそ野を広げる方法論を求めて」、金沢大学、2017.9.14
- 国内、亀田達也、「集合知の発生条件を探る～日仏集団実験」、第81回日本心理学会大会公募シンポジウム「集合行
動のアルゴリズムを考える：計算論的な種間比較の可能性」、久留米シティプラザ（福岡県）、2017.9.20
- 国際、Kameda, T.、「Adaptive/neural bases of distributive justice: Does “ought” have empirical grounds in “be”?」、The 18th Winter
Workshop in Rusutsu: Mechanism of Brain and Mind、Rusutsu、2018.1.10
- 国内、亀田達也、「モラルの基礎を考える：実験社会科学からのアプローチ」、東京大学人間行動科学拠点キックオフ
シンポジウム、東京大学駒場、2018.2.19
- 国内、亀田達也、「モラルの起源を考える—実験社会科学からの問い」、第22回進化経済学会大会、九州大学箱崎キ
ャンパス、2018.3.30

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 国際、Kameda, T.、「Ecological, cognitive and neural basis of distributive justice.」、Keynote Address、Workshop on
“(self-)regulation of selfish behavioral tendencies – perspectives from Japan and Germany.”、University of Heidelberg,
Heidelberg, Germany、2016.5.11
- 国際、Kameda, T.、「Herd behavior: Its behavioral, psychological, and neural underpinnings.」、Colloquium Talk、Centre de
Recherches sur la Cognition Animale Université Paul Sabatier, Toulouse, France、2016.9.8
- 国際、亀田達也、「Groups as adaptive devices: Free-rider problems, the wisdom of crowds, and evolutionary games.」、Colloquium
Talk、Toulouse School of Economics, Toulouse, France、2016.9.9
- 国内、亀田達也、「正義やモラルは脳の中にどのような基盤をもつか?」、NTT 応用脳科学アドバンスセミナー、ワ
テラス・コモンホール、2016.10.8
- 国内、亀田達也、「社会の成り立ちを支える内分泌学」、第6回社会神経科学研究会、自然科学研究機構生理学研究
所、2016.11.14
- 国内、亀田達也、「社会におけるこころの研究の現状と展望について」、日本学術会議公開シンポジウム「心の先端研
究の展望」、京都大学高等研究院、2017.6.24
- 国内、亀田達也、「人文社会科学と神経科学はどのように連携できるか」、キーノート、文部科学省共同利用共同研究
拠点キックオフシンポジウム、玉川大学脳科学研究所、2017.9.3
- 国内、齋藤美松・亀田達也、「持続可能な社会形成に高齢層が果たす役割の検討」、第1回フューチャー・デザイン・
ワークショップ、総合地球環境学研究所（京都市）、2018.1.27

(2) 学会

International Congress of Psychology 2016 (Vice Chair of Scientific Program, Vice Chair of General Affairs)

社会心理学会理事

人間行動進化学会理事

心理学会代議員

(3) 行政

学術会議会員（第一部）

学術会議・心理学教育委員会委員長、科学者委員会委員

(4) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

Psychological Review (Consulting Editor、American Psychological Association)

International Congress of Psychology 2016 (Executive Committee)

1. 略歴

1992年	University of California, Los Angeles Ph.D
1992年	京都大学大学院文学研究科博士後期課程
1992年4月	名古屋明德短期大学講師
1995年4月	日本福祉大学情報社会科学部助教授
1999年6月	名古屋大学情報文化学部助教授
2001年4月	名古屋大学大学院環境学研究科助教授
2006年10月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2010年8月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会心理学

b 研究課題

- 1) Mind reading and moral judgments
- 2) Beliefs in free will and self-regulation
- 3) Methodology and Science communication

c 概要と自己評価

概要

1) Mind reading and moral judgments : 近年の社会心理学は、私たちが道徳的事柄、公正さに関心を抱く「モラル・エージェント」であるという人間観を提出している。この研究課題は、他者の心的状態（意図・動機・態度・感情など）の推論に基づき他者を「裁き」の視線で評価し、そこでの評価に基づき、「援助、非難、許し」などの道徳的な態度・行動を他者に向ける点に着目し、モラル・エージェントを支える社会的認知過程を解明することを目指す。

2) Beliefs in free will and self-regulation : 本研究課題は、自由意志信念や決定論的信念が自己制御的な行動や、自己・他者の行動理解に及ぼす影響について検討するものである。決定論的信念としては、遺伝子決定論、科学決定論、社会決定論などを対象とし、自由意志信念とともにそれらの認知構造の解明を目指すと共に、自己制御的な対人判断や行動を促進、抑制する心的メカニズムについて検討する。

3) Methodology and Science communication : 本研究課題では、「科学知・実践知・人文知」の融合領域として社会心理学を位置づけた上で、その立ち位置からの方法論の批判的検討、および、科学的成果を市民に伝達する際の諸問題についての検討を行う。特にAI、ロボット、自動運転など、新たな技術導入による影響や社会受容を対象に議論を進める。

自己評価

これらの研究課題について、科学研究費などの支援も得て、活発にデータ収集活動を行い、その成果を学会発表、論文という形で発信している。その多くは大学院生との共同研究であり、後継者育成についても努力している。1)については、その成果を著書にまとめたとともに、3)と融合させ、「ロボット」「人工知能」など、人以外の対象に対する心的状態の推論に議論を拡張し、応用可能性を検討するための研究プロジェクトを工学関係の研究者と遂行している。2)については「自由意志の有無」に関する科学コミュニケーション、また哲学者との共同研究として実験哲学的な概念分析へと議論を展開している。また、認識論についての大規模な国際比較研究のチームに日本のリーダーとして所属しており、国際交流も積極的に進めている。以上の研究は、科学哲学、工学などの研究者と進めているが、今後は、さらに研究のネットワークを広げるとともに、他分野に対しても積極的な研究の成果発信に努め、融合的領域としての社会心理学の基盤形成に尽力したい。

d 主要業績

(1) 著書

単著、唐沢かおり、『なぜ心を読みすぎるのか みきわめと対人関係の心理学』、東京大学出版会、2017

(2) 論文

- Tanibe, T., Shiraiwa, Y., & Karasawa, K., 「Opposition to popular legal participation and the reason-emotion framework: Empirical research on citizens' attitudes toward the lay judge system in Japan」, 『Journal of Human Environmental Studies』, 14, 9-16 頁, 2016
- 白岩祐子・小林麻衣子・唐沢かおり, 「知ることに対する遺族の要望と充足: 被害者参加制度は機能しているか」, 『社会心理学研究』, 32, 41-51 頁, 2016
- Jung, K. H., & Karasawa, K., 「How we view people who feel joy in our misfortune: The influence of expressed schadenfreude in interpersonal situation.」, 『Korean Journal of Social and Personality Psychology』, 30, 41-61 頁, 2016
- Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「When and by whom are apologies considered? The effects of relationship and victim/observer standing on Japanese people's forgiveness.」, 『Interpersona: An International Journal on Personal Relationships』, 10, 171-185 頁, 2016
- 二木望・渡辺匠・櫻井良祐・唐沢かおり, 「実体性が両面価値的な集団への行動意図に及ぼす影響: エイジズムに着目して」, 『社会心理学研究』, 32, 81-91 頁, 2016
- 渡辺匠・松本龍児・太田紘史・唐沢かおり, 「一般的・個人的自由意志尺度 (Free Will and Determinism Scale; FWDS) 日本語版の作成」, 『パーソナリティ研究』, 228-231 頁, 2016.2
- Machery, E., Stich, S., Rose, D., Alai, M., Angelucci, A., Berniūnas, R., Buchtel, E.E., Chatterjee, A., Cheon, H., Cho, I., Cohnitz, D., Cova, F., Dranseika, V., Lagos, A. E., Ghadakpour, L., Grinberg, M., Hannikainen, I., Hashimoto, T., Horowitz, A., Hristova, E., Jraissatim Y., Kadreva V., Karasawa, K., Kim, H., Kim, Y., Lee, M., Mauro, C., Mizumoto, M., Moruzzi, S., Olivola, C. Y., Omelas, J., Osimani, B., Romero, C., Rosas, A., Sangoi, M., Sereni, A., Songhorian, S., Sousa, P., Struchiner, N., Tripodi, V., Usui, N., Mercado, A. V., Volpe, G., Vosgerichian, H.A., Zhang, X., & Zhu, J., 「The Gettier Intuition from South America to Asia」, 『Journal of Indian Council of Philosophical Research』, 34, 517-541 頁, 2017
- Rose, D., Machery, E., Stich, S., Alai, M., Angelucci, A., Berniūnas, R., Buchtel, E.E., Chatterjee, A., Cheon, H., Cho, I., Cohnitz, D., Cova, F., Dranseika, V., Lagos, A. E., Ghadakpour, L., Grinberg, M., Hannikainen, I., Hashimoto, T., Horowitz, A., Hristova, E., Jraissatim Y., Kadreva V., Karasawa, K., Kim, H., Kim, Y., Lee, M., Mauro, C., Mizumoto, M., Moruzzi, S., Olivola, C. Y., Omelas, J., Osimani, B., Romero, C., Rosas, A., Sangoi, M., Sereni, A., Songhorian, S., Sousa, P., Struchiner, N., Tripodi, V., Usui, N., Mercado, A. V., Volpe, G., Vosgerichian, H.A., Zhang, X., & Zhu, J., 「Behavioral circumscription and the folk psychology of belief: A study in ethno-mentalizing」, 『Thought: A Journal of Philosophy』, 6, 193-203 頁, 2017
- Rose, D., Machery, E., Stich, S., Alai, M., Angelucci, A., Berniūnas, R., Buchtel, E.E., Chatterjee, A., Cheon, H., Cho, I., Cohnitz, D., Cova, F., Dranseika, V., Lagos, A. E., Ghadakpour, L., Grinberg, M., Hannikainen, I., Hashimoto, T., Horowitz, A., Hristova, E., Jraissatim Y., Kadreva V., Karasawa, K., Kim, H., Kim, Y., Lee, M., Mauro, C., Mizumoto, M., Moruzzi, S., Olivola, C. Y., Omelas, J., Osimani, B., Romero, C., Rosas, A., Sangoi, M., Sereni, A., Songhorian, S., Sousa, P., Struchiner, N., Tripodi, V., Usui, N., Mercado, A. V., Volpe, G., Vosgerichian, H.A., Zhang, X., & Zhu, J., 「Nothing at Stake in Knowledge. : A study in ethno-mentalizing」, 『Noûs』, 6, 1-24 頁, 2017
- 白岩祐子・唐沢かおり, 「刑罰抑制効果の検討: 「理性」重視の価値観に着目して」, 『人間環境学研究』, 15, 25-30 頁, 2017
- 白岩祐子・小林麻衣子・唐沢かおり, 「警察による阪大被害者政策の有効性—遺族の立場からの検討—」, 『犯罪心理学研究』, 55, 15-27 頁, 2017
- 福本都・苮米地飛・橋本剛明・唐沢かおり, 「自由意志信念が社会的相互作用場面での攻撃行動に与える効果 運命的決定論信念に着目して」, 『人間環境学研究』, 15, 73-80, 2017
- Tanibe, T., Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「We perceive a mind in a robot when we help it.」, 『PLoS One』, 12e0180952, 2017
- Sakurai, R., Watanabe, T., & Karasawa, K. (2017). 「The effect of goal attainability on conserving regulatory resources.」 『Journal of Human Environmental Studies』, 15, 87-92

(3) 学会発表

- 国際, Karasawa, K., 「Engineering the concept of free will (or the belief in free will?)」, International Conference on Ethno-Epistemology: Culture, Language, and Methodology, Kanazawa, Japan, 2016.6.4
- 国際, Karasawa, K., & Todayama, K., 「Concept engineering: A road to proposing a better concept definition」, 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan, 2016.7.25
- 国際, Tado'oka, Y., Ishii, K., Kato, J., & Karasawa, K., 「The effects of the growth mindset on two types of envy toward carrier women.」, 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan, 2016.7.25

- 国際、Jung, K. H., Karasawa, K., & Masuda, T., 「The functions of schadenfreude and gluckschmerz in gossip situation.」, 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan, 2016.7.26
- 国際、Tanibe, T., & Karasawa, K., 「Self-effacement in human-computer interaction: Social responses toward computers in Japan」, 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan, 2016.7.28
- 国際、Tanibe, T., & Karasawa, K., 「Autonomous cars and responsibility.」, 2016 Annual Conference of the Korean Psychological Association, Gunsan, South Korea, 2016.8.19
- 国内、齋藤真由・白岩祐子・唐沢かおり, 「裁判員裁判に対する認知が参加意欲へ及ぼす影響」, 日本社会心理学会第57回大会、関西学院大学, 2016.9.18
- 国内、田戸岡好香・樋口収・唐沢かおり, 「福島県産食品の風評被害に抑制が及ぼす影響」, 日本社会心理学会第57回大会、関西学院大学, 2016.9.18
- 国内、谷辺哲史・橋本剛明・唐沢かおり, 「ロボットに対する「心」の知覚を促進する要因」, 日本グループ・ダイナミックス学会第63回大会、九州大学, 2016.10.9
- 国内、平山和幸・和田将典・齋藤真由・保坂寛・唐沢かおり, 「コミュニティ意識が地域防災行動意図に与える影響とその媒介過程」, 第25回人間情報学会、東京大学, 2016.12.21
- 国際、Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「Mind attribution of “brain-dead” patient influences people’s attitudes toward organ transplant.」, 2017 Society for Personality and Social Psychology Convention, San Antonio, 2017.1.21
- 国際、Karasawa, K., 「Judgment bias in social psychology」, 3rd Taiwan-Japan Workshop on Computational Aesthetics, Taipei, Taiwan, 2017.3
- 国内、谷辺哲史・唐沢かおり, 「自動運転による自己と責任」, 第31回人工知能学会全国大会、名古屋・ウインクあいち, 2017.5.26
- 国内、唐沢かおり, 「社会心理学の意義を語る一知としての価値、そして公共性」, 日本グループ・ダイナミックス学会第64回大会、東京大学, 2017.9.30
- 国内、竹内真純・片桐恵子・唐沢かおり, 「高齢者のイメージと自己の高齢化意識がエイジズムに与える効果」, 日本グループ・ダイナミックス学会第64回大会、東京大学, 2017.9.30
- 国内、榊原瑞清・櫻井良祐・橋本剛明・唐沢かおり, 「道徳ジレンマ問題で道徳判断と行動選択の差を生じる要因の検討：自己制御と共感」, 日本グループ・ダイナミックス学会第64回大会、東京大学, 2017.10.1
- 国内、谷辺哲史・橋本剛明・唐沢かおり, 「不祥事企業の集団実体性と購買回避理由の関係」, 日本グループ・ダイナミックス学会第64回大会、東京大学, 2017.10.1
- 国内、福本都・苜米地飛・橋本剛明・唐沢かおり, 「自由意志信念が社会的相互作用場面での攻撃行動に与える影響—運命的決定論信念に着目して—」, 日本グループ・ダイナミックス学会第64回大会、東京大学, 2017.10.1
- 国内、森芳竜太・橋本剛明・唐沢かおり, 「多数派のふるまいが第三者の制裁行動に与える影響：二重過程モデルとの関連から」, 日本グループ・ダイナミックス学会第64回大会、東京大学, 2017.10.1
- 国内、笠原伊織・唐沢かおり, 「自由意志信念の否定が量刑判断に及ぼす影響—動機の変化に着目して—」, 日本グループ・ダイナミックス学会第64回大会、東京大学, 2017.10.1
- 国内、大高瑞都・唐沢かおり, 「家族間の視点取得：Social Relations Modelに基づく検討」, 日本グループ・ダイナミックス学会第64回大会、東京大学, 2017.10.1
- 国内、唐沢かおり, 「自動運転における責任の問題をめぐって」, 日本社会心理学会第58回大会、広島大学, 2017.10.28
- 国内、岡田真波・唐沢かおり, 「心理的距離が道徳判断に与える効果についての検討—時間的距離と道徳的偽善に視座を定めて—」, 日本社会心理学会第58回大会、広島大学, 2017.10.28
- 国内、笠原伊織・唐沢かおり, 「自由意志信念が道徳的判断に及ぼす影響：実験操作による自由意志信念の影響の変化に着目して」, 日本社会心理学会第58回大会、広島大学, 2017.10.28
- 国内、田戸岡好香・植松幹太・谷辺哲史・唐沢かおり, 「ステレオタイプ内容モデルによるうつ病患者イメージの検討」, 日本社会心理学会第58回大会、広島大学, 2017.10.28
- 国内、齋藤真由・白岩祐子・唐沢かおり, 「司法参加意欲の規定因：公正さ認知および主体・客体意識の効果」, 日本社会心理学会第58回大会、広島大学, 2017.10.28
- 国際、Tanibe, T., Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「Mind Perception toward Robots and Moral Behaviors.」, The Society for Personality and Social Psychology’s Annual Convention, Psychology of Media & Technology Preconference, Atlanta, 2018.3.1
- 国際、Tanibe, T., & Karasawa, K., 「Responsibility Judgments toward Traffic Accidents by Autonomous Cars.」, The Society for Personality and Social Psychology’s Annual Convention, Atlanta, 2018.3.2

(4) 会議主催(チェア他)

国際、「31st International Congress of Psychology」、実行委員、2016.7.24～2016.7.29

国内、「日本グループ・ダイナミックス学会第64回大会」、実行委員長、2017.9.30～2017.10.1

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本社会心理学会、2017.4～

国内、科学基礎論学会、2017.4～

(2) 行政

自治体、消防庁、科学技術政策、火災予防審議会委員、2016.4～

自治体、消防庁、科学技術政策、火災予防審議会委員、2017.5～

准教授 **村本 由紀子** MURAMOTO, Yukiko

1. 略歴

1984年4月	東京大学文科Ⅲ類入学
1988年3月	東京大学文学部社会心理学専修課程卒業
1988年4月	株式会社 日本長期信用銀行 入行
1992年4月	東京大学大学院社会学研究科社会心理学専攻修士課程入学
1994年3月	同 修了 (修士(社会心理学))
1994年4月	東京大学大学院社会学研究科社会心理学専攻博士課程進学
1997年3月	東京大学大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻博士課程単位取得退学
1998年4月	京都大学総合人間学部基礎科学科 助手 (2000年3月迄)
1999年3月	東京大学大学院人文社会系研究科 博士 (社会心理学)取得
2000年4月	岡山大学文学部行動科学科 助教授
2001年4月	岡山大学大学院文化科学研究科産業社会文化学専攻 助教授 (兼任)
2004年4月	横浜国立大学経営学部 助教授
2005年4月	横浜国立大学大学院国際社会科学研究科 助教授
2007年4月	横浜国立大学大学院国際社会科学研究科 准教授
2011年4月	横浜国立大学大学院国際社会科学研究科 教授
2011年10月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会心理学

b 研究課題

心と社会環境の相互構成過程の探究

- 1) 多元的無知による集団規範の維持過程
- 2) 文化的慣習の社会生態学的基盤
- 3) 組織文化・風土をめぐる諸問題

c 概要と自己評価

1) 集団規範の生成と再生産過程…人は周囲の他者の行動を観察し、特定の行動が共有されていると感じることによって、「規範」の存在を知覚する。人はその知覚に基づき、たとえそれが自らの選好とは異なっているとしても、規範にしたがった行動をとる傾向がある。この行動がさらに他者によって観察されることで、やがて、実際には誰も望んでいないはずの規範が予言の自己成就的に維持・再生産される。こうした「多元的無知」現象の共同主観的な相互規定メカニズムを検討することは、心の社会・文化的起源を探るうえで重要な意味をもつと考えられる。私たちは、実験室内にミニマルな規範伝達の連鎖を作り出すことで、このメカニズムに迫る試みを行っている。また、多元的無知の生起や伝播に影響を及ぼす社会環境の特質の探究も進めている。

2) 文化的慣習の社会生態学的基盤…ある社会や集団において、特定の慣習や思考様式が共有され、維持されている理由について体系的な検討を行うには、その慣習や思考様式を取り巻く生態環境の特質と歴史、環境に適應する過程で作られた特有の社会構造や人間関係のありよう、それらの維持・再生産に寄与する個人々の心理や行動の特質、といった諸変数間の関係を丹念に探り、描き出すことが必要となる。私たちは、社会の現場における慣習や思考様式の「事例」に焦点を当て、マイクロ・エスノグラフィーの研究方法論を用いてその生成・維持過程を継時的に追跡する試みを行っている。

3) 組織文化・風土をめぐる諸問題…国や民族といった大きなレベルの文化に比して、小規模で人の入れ替わりが頻繁に行われる企業組織の文化は、変化プロセスの把握が比較的容易であるため、心と文化に関わる理論構築に向けた検証が行いやすいという利点がある。私たちのこれまでの研究では、強い組織文化は組織変革にとって正負両面の効果をもつ（生産性向上のための学習を促進する一方で、環境変化に対応した柔軟な変革を抑制しうる）ことが示された。現在はさらに視野を広げ、各種の人事制度（ハード）と文化・風土（ソフト）の相互作用の様相や、それらが従業員の心理・行動に与える多面的な影響過程についての検討を行っている。

自己評価

研究の実施にあたっては、研究室所属の大学院生はもとより、国内外の研究者（経営学・社会学・人類学等の関連他領域を含む）とも広く連携して、国際的・学際的な視野に立つ共同研究プロジェクトとしての展開に努めている。一部のテーマに関しては科学研究費の助成を受けている。いずれの研究テーマに関しても、その成果は随時、学会発表および学術論文として発信している。また、企業や地域共同体など、社会の現場に根差した研究を手がけていることから、実社会への研究成果の還元と、産学連携にも努めている。

d 主要業績

(1) 著書

編著、Maria Cecilia Gastardo-Conaco, Ma. Elizabeth J. Macapagal and Yukiko Muramoto (Eds.), 『Asian Psychology and Asian Societies in the Midst of Change. Psychological Association of the Philippines』、2017.8

分担執筆、村本由紀子、「社会と個人」繁樹数男 編著『心理学概論（公認心理師の基礎と実践 2）』、pp.161-176、遠見書房、2018.3

(2) 論文

岩谷舟真・村本由紀子・笠原伊織、「評判予測と規範遵守行動の関係：関係流動性に着目して」、『社会心理学研究』、第32巻2号、104-114頁、2016.11

村本由紀子・遠藤由美、「変わらずにいるために変わり続ける：環境変化と文化的慣習の維持過程」、『心理学研究』、第87巻5号、495-505頁、2016.12

Yukiko Muramoto and Kazuki Yamada、「The effects of psychological distance on dispositional attribution in Japanese culture.」、『M. C. Gastardo-Conaco, M. E. J. Macapagal, & Y. Muramoto (Eds.), Asian Psychology and Asian Societies in the Midst of Change』、101-125頁、2017.8

正木郁太郎・村本由紀子、「多様化する職場におけるダイバーシティ風土の機能、ならびに風土と組織制度との関係」、『実験社会心理学研究』、第57巻1号、12-28頁、2017.9

岩谷舟真・村本由紀子、「多元的無知の先行因についての検討：他者の選好推測に注目して」、『実験社会心理学研究』、第57巻1号、29-41頁、2017.9

岩谷舟真・村本由紀子、「規範遵守行動を導く2つの評判：居住地の流動性と個人の関係構築力に応じた評判の効果」、『社会心理学研究』、第33巻1号、16-25頁、2017.9

Shiho Futagami and Yukiko Muramoto、「A study on work attitudes of Japanese employees from the perspective of decent work」、『Journal Transition Studies Review』、24(2)、21-29頁、2017.12

今瀧夢・相田直樹・村本由紀子、「リーダーの暗黙理論がチーム差配に及ぼす影響：失敗した成員に対する評価に着目して」、『社会心理学研究』、第33巻3号、2018.3

(3) 学会発表

- 国際、Shuma Iwatani & Yukiko Muramoto, 「Antecedent conditions of pluralistic ignorance: An experimental investigation on preference estimation and normative behavior.」、International Congress of Psychology、Yokohama, Japan、2016.7.25
- 国際、Ikutaro Masaki & Yukiko Muramoto, 「The effects of workplace diversity and inclusive climate on employee morale in Japan.」、International Congress of Psychology、Yokohama, Japan、2016.7.27
- 国際、Kaori Enomoto, Atsushi Kawada, Kanta Uematsu, Shuma Iwatani, Tomoya Kawajiri, Eiichiro Watamura, & Yukiko Muramoto, 「Effects of place attachment and perceived benefit-cost of community involvement on participation in crime prevention activities in a Japanese urban community.」、International Congress of Psychology、Yokohama, Japan、2016.7.27
- 国際、Yukiko Muramoto, 「Effects of informal evaluation and feedback in daily communication on employees' work motivation.」、International Congress of Psychology、Yokohama, Japan、2016.7.29
- 国際、Ikutaro Masaki & Yukiko Muramoto, 「Pluralistic ignorance about inclusive climate in organization: The effects of personal attitudes toward diversity and the estimated attitudes of others.」、International Association for Cross-Cultural Psychology、Nagoya, Japan、2016.8.2
- 国際、Shuma Iwatani & Yukiko Muramoto, 「The effects of relational mobility on reputation estimation and normative behavior.」、International Association for Cross-Cultural Psychology、Nagoya, Japan、2016.8.2
- 国内、正木郁太郎・村本由紀子, 「職場のダイバーシティの心理的影響と、組織風土の調整効果: 性別とキャリア志向のダイバーシティに着目して」、日本社会心理学会第57回大会、関西学院大学、2016.9.17
- 国内、岩谷舟真・村本由紀子, 「地域活動への参加を促進する要因 (2): 流動性に着目して」、日本社会心理学会第57回大会、関西学院大学、2016.9.17
- 国内、相田直樹・村本由紀子, 「暗黙理論が複数課題選択時の努力配分戦略に及ぼす影響」、日本社会心理学会第57回大会、2016.9.18
- 国内、二神枝保・村本由紀子, 「従業員のしごと能力開発とキャリア・プランに関する研究: 日本企業とスイス企業の比較分析」、しごと能力学会第9回大会、慶應義塾大学、2016.10.20
- 国際、Shuma Iwatani & Yukiko Muramoto, 「The asymmetric perception of fairness on vicarious retribution between the retaliator and the retaliated.」、Asian Association of Social Psychology、Auckland, New Zealand、2017.8.27
- 国際、Keita Suzuki & Yukiko Muramoto, 「Are incremental theorists always more "adaptive" than entity theorists?: Effects of implicit theories on the sensitivity to opportunity cost.」、Asian Association of Social Psychology、Auckland, New Zealand、2017.8.28
- 国内、正木郁太郎・村本由紀子, 「職場の性別ダイバーシティの心理的影響とダイバーシティ風土の調整効果: 複数企業の比較による企業差と展望」、日本グループ・ダイナミクス学会第63回大会、東京大学、2017.9.30
- 国内、岩谷舟真・村本由紀子, 「集団内地位と規範遵守行動の関係についての実験的検討」、日本社会心理学会第58回大会、広島大学、2017.10.28
- 国内、正木郁太郎・森行範・村本由紀子, 「情緒的コミットメントはプロアクティブ行動を促すか: 人材流動性の調整効果」、日本社会心理学会第58回大会、広島大学、2017.10.29
- 国内、鈴木啓太・村本由紀子, 「暗黙理論による課題選択方略の検討: 課題難易度に対する柔軟性に着目して」、日本社会心理学会第58回大会、広島大学、2017.10.29
- 国際、Shuma Iwatani & Yuiko Muramoto, 「Trust and harmony-seeking orientation as key factors of cooperation.」、Society for Personality and Social Psychology、Atlanta, USA、2018.3.2

(4) 会議主催(チェア他)

- 国際、「The 23th Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology」、実行委員、Nagoya, Japan、2016.7.30～2016.8.3
- 国内、「日本グループ・ダイナミクス学会第64回大会」、ワークショップ企画(企業組織研究の最前線が抱える困難と可能性: 研究者と実務家, 双方の視点より)、東京大学、2017.9.30
- 国内、「日本グループ・ダイナミクス学会第64回大会」、実行委員、2017.9.30～2017.10.1

(5) 受賞

- 国内、岩谷舟真・村本由紀子, 日本社会心理学会賞(奨励論文賞)、「多元的無知の先行因とその帰結: 個人の認知・行動的側面の実験的検討」、日本社会心理学会、2016.9.16

(6) 翻訳

- 共訳、Pushkala Prasad, "Crafting Qualitative Research: Working in the Postpositivist Traditions", 箕浦康子(監訳)ほか、『質的研究のための理論入門: ポスト実証主義の諸系譜』、2018.1

(7) **研究テーマ**

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 (C)、村本由紀子 (研究代表者)、「自他の認知の連続性と境界に関する多面的検討」、2016.4～2018.3 (継続中)

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 (C)、村本由紀子 (分担研究者: 代表者は東大外)、「戦略的人材開発の日欧比較研究: 産学官連携によるグローバル人材開発」、2016.4～2018.3

3. 主な社会活動

(1) **他機関での講義等**

非常勤講師、立正大学、「文化心理学」、2016.4～2016.9

非常勤講師、放送大学神奈川学習センター、「木を見る西洋人 森を見る東洋人」、2016.10～2017.3、2017.10～2018.3
セミナー、筑波大学附属高等学校、「進路説明会 (社会学系分科会)」、2017.7

27 文化資源学

《文化資源学専門分野》

教授 木下 直之 KINOSHITA, Naoyuki

1. 略歴

1979年3月	東京芸術大学美術学部芸術学科卒業
1981年3月	東京芸術大学大学院美術研究科芸術学専攻修士課程中途退学
1981年4月	兵庫県立近代美術館学芸員
1995年4月	同美術館学芸課長
1997年4月	東京大学総合研究博物館助教授
2000年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2001年4月	国立民族学博物館助教授併任（～2003年4月）
2004年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授
2017年4月	静岡県立美術館館長（兼務）

2. 主な研究活動

a 専門分野

文化資源学

b 研究課題

幕末・明治期の造形表現の形成と変容と展開を、従来の美術史学の枠組みを離れて追跡している。既存領域である美術に隣接する写真、芸能、祭礼、見世物、民衆娯楽の領域に目を向けるとともに、それらの表現活動と社会の関係の解明にも取り組んでいる。とりわけ、明治期の戦争（台湾出兵と日清戦争）に限定することで、両者の関係を領域横断的に明らかにしたいと考えている。

文化財保護体制のような評価の仕組みに対して、評価されないものの実態と、それを評価しない仕組みの双方をも明らかにしたい。後者は当時の文化政策の研究へと展開するはずだ。とりわけ、幕末明治期の排仏運動・廃仏毀釈を、この考察を解明する手掛かりにしたいと考えている。開設時より関わった文化資源学専攻における新たな研究領域の開拓と構築に対し、こうした歴史的視点の導入を積極的に進めてきた。

また、2017年度より静岡県立美術館館長を兼務したことで、大学での研究成果を公立美術館の現場に活かすという文化経営学的な課題も大きくなった。

c 概要と自己評価

近年の研究には、以下の三本の柱を立てている。第1に「展示」、第2に「文化財」、第3に「近代の文化政策」である。

第1の展示研究は、狭義の博物館学にとらわれず、また博物館に限らずに広く何らかの物品や問題が展示されている環境を対象とする。主に、戦争の記憶（戦意昂揚や慰霊）を伝える展示、彫刻の屋外展示、動物展示（見世物や動物園の歴史と課題）を重点的に研究している。とりわけ動物展示に関しては、展示状況のみならず、経営実態を含めて現場をよく調査するとともに、2011年より公益社団法人日本動物園水族館協会の広報戦略会議のメンバーとして、さらに環境省が2013-2015年度に設置した動植物園等公的機能推進方策のあり方検討会の委員として、また2017年度は東京都の葛西臨海水族園の在り方検討会の委員として、動物園・水族館の将来像を考える実践的な活動も展開しつつある。日本動物園水族館協会が7回にわたって開催した公開シンポジウム「いのちの博物館の実現にむけて—消えていのか、日本の動物園と水族館」のすべての回でコーディネーターを務めた。さらに2015年度より同協会の顧問に就任し今日に至っている。

人文学の研究者が動物園問題に関わることは、社会的にきわめて有意義な活動と認識している。一方で、公的な協会に関わるだけでは見えない現実、協会非加盟の動物園・水族館の実態とそれらが歩んだ歴史にも目を向ける必要を痛感している。それらについては東京大学出版会の雑誌『UP』に「動物園巡礼」と題して連載し、広く問題提起してきた。文学部に開設されている博物館学芸員課程講座においては「博物館展示論」を担当しているが、そこでもその視

野に動物園と水族館をとらえて講義し、受講者の関心を高めてきた。この実践的な研究成果は、2018年度に単行本として東京大学出版会から出版を予定している。

第2の文化財研究は、文化領域における価値評価を問題にし、これを歴史的な視野の中でとらえてきた。宝物・国宝・文化財・文化遺産・文化資源をキーワードに、文化財や芸術作品を相対化し、たとえばかつての寺社の開帳と現代の博物館の展覧会を対等に研究対象とすることで、文化資源学の展望を示したいと考えている。

とりわけ、講義「東京大学探索—埋蔵文化財と文化資源学」を毎年開講し、「埋蔵文化財」の概念を広げてきた。すなわち、「埋蔵」とはかならずしも地中に埋もれているものに限らず、地上にあってその姿が見えているにもかかわらず、意識されないもの、評価されないものを、東京大学本郷キャンパスをフィールドにして徹底的に解明してきた。東京大学における戦争体験の記憶にも言及したこの成果の一部は、2016年度に上梓した拙著『近くても遠い場所—1850年から2000年のニッポンへ』晶文社に含まれ、また2018年度早々に上梓した共著『東京大学本郷キャンパス—140年の歴史をたどる』東京大学出版会というかたちで公表できた。

第3の文化政策研究に関しては、2013年秋にロンドンの大英博物館で開催された「春画展」に協力・関与し、その後同展の日本開催が難航したことを受けて、日本社会と春画展示を考える春画展示研究会を文化資源学会に開設した。2014-2015年度に7回の研究会を開催し、最終回は公開フォーラムとした。その成果は『文化資源学』第12号（2014年）、第13号（2015年）で公表した。問題を春画展にとどめず、社会が性表現をどのように管理してきたのかを問う文化政策研究とした。したがって、2014年に発生した猥褻物頒布をめぐる「ろくでなしこ事件」の裁判にも参考人として関与し、積極的に発言した。これらの成果を、2017年度に拙著『せいきの大問題—新股間若衆』新潮社として公表した。さらに、2017年度からは地方自治体が設置した公立美術館の運営に携わったことで、日本社会における性表現の管理に関する研究をより実践的に進めたいと考えている。

以上の三本の柱を研究軸とすることで、学内での教育と学外への発信、さらには学外での発信がうまく噛み合い出した。トータルとして、19世紀の日本文化の知られざる一面を明らかにできると考えている。

d 主要業績

(1) 論考

- 「田々展考—2016年の原田直次郎と黒田清輝」『国立新美術館研究紀要』第3号、2016
- 『近くても遠い場所—1850年から2000年のニッポンへ』晶文社、2016
- 『せいきの大問題—新股間若衆』新潮社、2017

3. 主な社会活動

(1) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

- 武蔵野美術大学非常勤講師、2016.4～2018.3
- 独立行政法人国立美術館運営委員、2016.4～2018.3
- 独立行政法人文化財機構運営委員、2016.4～2018.3
- 公益財団法人京都服飾文化研究財団評議員、2016.4～2018.3
- 公益財団法人アサヒビール芸術文化財団理事、2016.4～2018.3
- 公益財団法人亀井温故館評議員、2016.4～2018.3
- 公益社団法人日本動物園水族館協会広報戦略室員、2016.4～2018.3
- 公益社団法人日本動物園水族館協会顧問、2016.4～2018.3

1. 略歴

1980.04	東京大学教養学部理科 I 類、入学
1982.04	同学部教養学科第一文化人類学学科、進学
1984.03	同学科、卒業
1984.04	東京大学大学院社会学研究科修士課程文化人類学専攻、入学
1986.03	同修士課程、修了
1986.04	同研究科文化人類学専攻博士課程、進学
1988.04	社会学研究科より総合文化研究科へ移管
1990.08	東京大学大学院総合文化研究科博士課程文化人類学専攻、中途退学
1995.11	東京大学大学院総合文化研究科、博士号（学術）取得
1994.04 - 1997.03	東京大学教養学部専任講師
1996.04	大学院総合文化研究科超域文化科学専攻専任講師に配置換
1997.04 - 2004.09	東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻助教授
2004.10 -	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻助教授
2005.04 - 2009.03	国立民族学博物館文化動態研究部門客員研究員
2009.04 -	東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻准教授
2014.09 -	東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻教授

2. 主な研究活動

多様な状況における文書・読み書き、その人間・社会との関係の研究

a 専門分野 b 研究課題

文化資源学（文書文化論）

主に発展途上国を念頭に置きつつ、広く文書・読み書きと人間・社会の関係について研究している。また、調査研究方法の検討、改善にも強い関心を持っている。様々なフィールド調査で得られるデータや知見を、言語能力、数的能力、道具使用等に関する認知科学や、文書をはじめとする認知的人工物 (cognitive artifacts) の変化に関する歴史学的研究と有機的に接合することを目指して、隣接諸分野の研究者との共同研究にも積極的に取り組んでいる。

c 概要と自己評価

2014～2015 年度に引き続き、以下の 3 つの課題を意識しつつ、相互に関連しあう複数の研究を並行して進めた。

- ・文化資源学としての文書文化の考察
- ・デジタル技術と文書文化の関係の考察
- ・文書・読み書きに関する多様な領域の専門家との共同作業の推進

(1) 文化資源学の展開をデジタル技術を援用しながら分析する試み「文化資源学の射程」プロジェクトの研究結果をまとめた共著論文が『Journal of the Japanese Association for Digital Humanities』2(1)で公表された（査読付き）。

(2) 分科会幹事を務めてきた文化資源学会「文化資源学の展望プロジェクト：文化資源学を支えるテクノロジー」の研究成果を『文化資源学』14号の特集として監修し、その一部として「神田祭附け祭り・つくりものプロジェクト報告」を寄稿した（査読なし）。さらに、これらの研究活動を踏まえて、『文化資源学』15号の特集「文化資源学と私」に「文化資源学の近未来」を寄稿した（依頼論文）。

(3) 東京文化資源会議（伊藤滋会長、吉見俊哉幹事長）の幹事に就任し、分科会「地図ファブ」のメンバーとして神田地域の歴史と食文化に関するデータベースを構築し、それらのデータをインタラクティブに見ることのできるアプリケーション「神田祭ぶらり」の開発に参加し、公開シンポジウムを行った。また、データベース・アプリの開発過程を分析した研究報告を「第45回可視化情報シンポジウム」で行った。

(4) 2014.4より国際協力機構（JICA）中米・カリブ地域生活改善広域アドバイザーとして現地調査、協力を行ってきたコスタリカ共和国における生活改善プロジェクト情報システム構築に関する共著論文が「JICA Institute Working Paper No.146」として公開され（査読付き）、『可視化情報シンポジウム 2016 OS7: ビッグデータと知識の可視化』において生活改善アプローチ可視化システムに関する研究発表を行った。また、『電子情報通信学会誌』より依頼を受け、「途上国における ICT とリテラシー」を寄稿した（依頼論文）。

(5) 共同研究者として参加した国立民族学博物館・共同研究プロジェクト「近代ヒスパニック世界における文書ネットワーク・システムの成立と展開」(2013.10-2017.3、代表：吉江貴文)の一環として「研究者の集合知の可視化を試み、成果を「スペイン植民地帝国 文書ネットワーク」として公開した。<http://bunteku.sakura.ne.jp/hisGisMinpaku/>。

以上のように、歴史学、情報学、国際協力、地域開発など多様な分野の専門家との共同作業を積極的に行い、成果を発信してきた。この二年間は、研究発表、論文投稿に加えて、データベース構築、アプリ開発など、ICTを活用した発信の選択肢が増えたこと、また、論文執筆においても、紙ベースからウェブ上へと主たるメディアがかわった移行しつつあることが印象的である。また、東京文化資源会議での活動を通してこれまでに以上に地域の行政、市民、企業と連携する機会が増えたことも大きな変化である。今後も、引き続き、学際性、社会連携、情報技術の積極的活用を重視した文化資源の分析を進めていく。

d 主要業績

(1) 論文

中村雄祐、「平成27年神田祭附け祭り・つくりものプロジェクト報告：2013~2015年」、『文化資源学』、14、113-124頁、2016.6

中村雄祐・鈴木親彦、「特集「文化資源学を支えるテクノロジー」はじめに」、『文化資源学』、14、65-66頁、2016.6
Tomomi Kozaki, Yusuke Nakamura、「The Evolving Life Improvement Approach: From Home Taylorism to JICA Tsukuba, and Beyond」、『JICA Research Institute Working Papers』、No.146、2017.3

Yusuke Nakamura, Chikahiko Suzuki, Katsuya Masuda, Hideki Mima、「Designing Research for Monitoring Humanities-based Interdisciplinary Studies: A Case of Cultural Resources Studies (Bunkashigengaku 文化資源学) in Japan」、『Journal of the Japanese Association for Digital Humanities』、2(1)、2017.9

中村雄祐、「途上国におけるICTとリテラシー」、『電子情報通信学会誌』、Vol. 100, No. 11、2017.11

(2) 学会発表

国内会議、中村雄祐、「コスタリカにおける生活改善アプローチ検証プロジェクト 可視化システムの展開」、可視化情報シンポジウム2016 OS7: ビッグデータと知識の可視化、工学院大学、2016.7.19

国内、中村雄祐、鈴木親彦、真鍋陸太郎、「祭礼における文化資源の活用 —「神田祭ぶらり」の開発を軸に—」、第45回可視化情報シンポジウム、工学院大学(新宿キャンパス)、2017.7.19

(3) 予稿・会議録

国内会議、中村雄祐、「コスタリカにおける生活改善アプローチ検証プロジェクト 可視化システムの展開」、可視化情報シンポジウム2016 OS7: ビッグデータと知識の可視化、工学院大学、2016.7.19

『可視化情報シンポジウム2016 講演論文集』、2016.7

国内、中村雄祐、鈴木親彦、真鍋陸太郎、「祭礼における文化資源の活用 —「神田祭ぶらり」の開発を軸に—」、第45回可視化情報シンポジウム、工学院大学(新宿キャンパス)、2017.7.19

『可視化情報シンポジウム2017 講演論文集』、2017.7

(4) マスコミ

「神田祭ラボお披露目会」、2017.4.22

「2年に一度、神田祭で体験する歴史と今@神田明神」、『T-Cha (東京文化資源会議ニューズレター) vol.1』、2017.9.30

(5) データベース

真鍋陸太郎、中村雄祐、鈴木親彦、岸川雅範、「神田祭ぶらり」、2017.4

中村雄祐、「スペイン植民地帝国 文書ネットワーク」、2018.2

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、文化資源学会、理事、2014.7~

国際、Japanese Association of Digital Humanities、学術雑誌編集委員、2014.10~

(2) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

独立行政法人、国際協力機構、中米・カリブ地域生活改善広域アドバイザー、2014.4~

任意団体、東京文化資源会議、幹事、2017~

- 教授 **小林 真理** KOBAYASHI, Mari
27 文化資源学《文化経営学専門分野》 参照
- 准教授 **松田 陽** MATSUDA, Akira
27 文化資源学《文化経営学専門分野》 参照
- 教授 **古井戸 秀夫** FURUIDO, Hideo
29 次世代人文学開発センター《萌芽部門》 参照
- 教授 **月村 辰雄** TSUKIMURA, Tatsuo
18 フランス語フランス文学 参照
- 教授 **大西 克也** ONISHI, Katsuya
11 中国語中国文学 参照
- 教授 **佐藤 健二** SATO, Kenji
25 社会学 参照
- 教授 **渡辺 裕** WATANABE, Hiroshi
07 美学芸術学 参照
- 教授 **長島 弘明** NAGASHIMA, Hiroaki
09b 日本語日本文学（国文学） 参照
- 教授 **鈴木 淳** SUZUKI, Jun
10 日本史学 参照
- 教授 **ミュラー アルバート・チャールズ** MULLER, Albert Charles
29 次世代人文学開発センター《創成部門》 参照
- 准教授 **高岸 輝** TAKAGISHI, Akira
03 美術史学 参照

《文化経営学専門分野》

教授 小林 真理 KOBAYASHI, Mari

1. 略歴

1987年3月	早稲田大学教育学部社会科社会科学専修卒業
1987年4月	早稲田大学大学院政治学研究科修士課程政治学専攻入学
1990年3月	早稲田大学大学院政治学研究科修士課程政治学専攻修了（政治学）
1990年4月	早稲田大学大学院政治学研究科博士後期課程政治学専攻入学
1993年5月	早稲田大学人間科学部助手（1996年3月まで）
1996年3月	早稲田大学大学院政治学研究科博士後期課程政治学専攻単位取得満期退学
1998年4月	昭和音楽大学音楽学部助手
2000年4月	静岡文化芸術大学文化政策学部講師
2001年1月	博士（人間科学）
2004年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授（職名変更）
2016年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

文化資源学、文化経営学、文化政策学

b 研究課題

文化を支える諸制度、それと反対のベクトルである文化の発展を阻害する制度について関心をもってきた。研究の中心を法制度においてきたが、最近では国や自治体の文化政策の動向に対応して、文化にとってよりよい政策の企画、立案、執行のあり方について考えている。とくに行政改革が現実に行われ、市町村合併の推進及び2003年に地方自治法改定で施行された指定管理者制度が導入される状況の中で、公立文化施設（美術館、文化ホール等）の望ましい運営方法とそれを管理する文化政策のあり方を研究の対象としてきた。

他方、芸術を支える制度としての劇場についても関心を持っており、この数年はドイツの劇場のあり方をめぐる動向、それを取り巻く文化政策、環境について関心をもって研究している。とはいえ、そもそも「制度」そのものについて疑問をもっていることから、あるべき「制度」に固執しているわけではない。むしろ「制度」を超えた活動、とくにドイツの社会文化活動とそれを巡る政策に大いなる関心を持っている。

c 概要と自己評価

これまでに自治体文化政策の現場において、条例制定、計画策定、そして事業展開の基盤づくりに携わってきたが、それらを検証し、記述する作業に入っている。その参照枠として、イギリスにおける文化政策の展開の状況を振り返るロバート・ヒューイソンの"Cultural Capital -The Rise and Fall of Creative Britain"の翻訳を行った。日本の文化政策を振り返ったときに、イギリスからの影響は多大であり、あたかも順調に進んでいるように紹介されているものが、実態としてどのような課題をもっていたかということを知る上で大変参考になる書物だった。日本の文化政策が拡大を続けていく中で、それをどのように行っていくか、またどのような制度を整えていくかを改めて考える上で重要な示唆を与えると考える。さらに、文化芸術、アート・プロジェクト、フェスティバル、創造都市、おもてなし、クール・ジャパン、観光立国、文化外交、知的財産立国、オリンピックの文化プログラム等々、直接的に文化という名称を冠していなくとも文化的事象に係る政策、施策、そして事業が様々なレベルで展開されるようになっている。これらの問題を研究対象として考察していく上での基礎的な知識を提供するという意味で、東京大学出版会から『文化政策の現在』シリーズ3巻を刊行できた。

d 主要業績

(1) 著書

編著、小林真理、『文化政策の現在シリーズ第1巻 文化政策の思想』、2018.2

編著、小林真理、『文化政策の現在シリーズ第2巻 文化政策の領域』、2018.3

(2) 翻訳

個人訳、Robert Hewison、"Cultural Capital -The Rise and Fall of Creative Britain"、小林真理、『文化資本—クリエイティブ・ブリテンの盛衰』、2017.11

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、お茶の水女子大学、「博物館経営論」、2017.4～

非常勤講師、早稲田大学、「文化政策」、「法学」

非常勤講師、東京芸術大学、「文化政策」

(2) 行政

自治体、大阪市ミュージアムビジョン推進会議、立案、委員、2016.4～2017.3

省庁、地域創造、地域創造大賞（総務大臣賞）審査委員、2016.4～2018.3

自治体、高知県、立案、高知県文化芸術振興ビジョン専門アドバイザー、2016.4～2017.3、評価委員、2017.4～2018.3

自治体、三重県、立案、評価・推進会議委員、2016.4～

自治体、奈良県、文化資源活用補助金選定審査会委員、2016.6～2017.3

省庁、文化庁、芸術選奨選考審査員、2016.6～2017.3

自治体、酒田市産業・交流都市創造会議、立案、委員、2016.9～

自治体、森鷗外記念館指定管理者選定委員会専門部会、委員、2016.9～

助成団体、独立行政法人日本学術振興会、国際科学研究費委員会専門委員、2016.10～2017.9

自治体、八王子市、立案、新たな集いの拠点施設の整備に向けた基本計画に係わる懇談会参加者、2016.10～

省庁、文部科学省、日本ユネスコ国内委員会委員、2016.12～

省庁、文化庁、文化庁長官表彰（文化芸術創造都市部門）選考会議委員、2017～

自治体、静岡県、立案、文化政策審議会委員、2017.3～

自治体、奈良県、立案、これからの文化財保護体系検討会議、2017.4～

自治体、武蔵野市、立案、武蔵野市文化振興基本方針策定委員会委員、2017.5～

自治体、三重県、立案、新しいみえの文化振興方針・評価推進会議委員、2017.7～

自治体、東京都大田区、立案、大田区文化振興推進協議会委員、2017.10～

准教授 **松田 陽** MATSUDA, Akira

1. 略歴

- 1997年3月 東京大学文学部歴史文化学科西洋史学専修課程卒業
- 2002年11月 ロンドン大学UCL 考古学研究所修士課程修了 学位取得 修士（文化遺産研究）
- 2003年3月 東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻修士課程修了 学位取得 修士（文化経営学）
- 2004年5-7月 国連教育科学文化機関（ユネスコ）パリ本部文化セクター文化遺産部コンサルタント
- 2005年6-8月 国連教育科学文化機関（ユネスコ）パリ本部文化セクター文化遺産部コンサルタント
- 2009年10月 ロンドン大学UCL 考古学研究所博士課程修了 学位取得 博士（パブリックアーケオロジー）
- 2010年9月 ロンドン大学UCL 考古学研究所名誉講師（Honorary Lecturer）
- 2011年9月 セインズベリー日本藝術研究所学術アソシエイト（Academic Associate）
- 2011年9月 イーストアングリア大学（University of East Anglia）世界美術・博物館学科（School of World Art Studies and Museology）准教授（Lecturer）
- 2014年8月 イーストアングリア大学（University of East Anglia）芸術・メディア・アメリカ研究学科（School of Art, Media and American Studies）准教授（Lecturer）（組織再編）
- 2015年1月 イーストアングリア大学高等教育実践準修士課程修了 学位取得 準修士（高等教育実践）
- 2015年10月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

文化資源学、文化遺産研究、パブリックアーケオロジ、博物館研究

b 研究課題

私の研究の根底にあるのは、人々にとって過去が何を意味するのかという問いにある。いかにも大仰な問いだが、この関心に導かれるかたちで、これまで人々が社会においてどのように過去をイメージし、理解し、使う（そして場合によっては「消費する」）のかをさまざまな角度から考察してきた。直接関連する分野としては、文化資源学、文化遺産研究、博物館研究、物質文化研究、人文地理学などがあげられるが、おそらくあらゆる学問分野に何らかのかたちに関わりがあり、分野横断的に展開できるテーマではないかと思っている。これまでは考古学に関連する文化遺産を事例研究にすることが多く、その中でパブリックアーケオロジという領域に強い関心をもってきた。現在は、古墳と地域住民の関係史、そして自然災害に対する社会の記憶というテーマにとりわけ注力している。東京大学本郷キャンパスという文化資源を魅力的にプレゼンテーションする方策にも興味をもっている。

c 概要と自己評価

2016～2017年度は主に、(1)日本と欧州における文化遺産保護の理念と制度、(2)古墳と地域住民との関係史、(3)自然災害に対する社会の記憶、(4)東京大学本郷キャンパスという文化資源、という4つのテーマに絞って研究を遂行した。平成28年度東京大学卓越研究員に選ばれたことによって、いずれの研究テーマも集中的に考察することができた。

(1)「日本と欧州における文化遺産保護の理念と制度」については、論考出版と学会発表によって成果を公開してきたが、とりわけ『Reconsidering Cultural Heritage in East Asia』の本をオープンアクセス出版したことによって、理論考察に関する一つの区切りをつけることができた。また、自らが研究代表者をつとめる科研費プロジェクト「考古遺跡を発掘調査終了後に地域の文化資源として活用する方法論の検討」の推進を通じて、イタリアのソマ・ヴェスヴィアーナにある古代ローマ遺跡（東京大学が発掘調査中）を社会的に活用するための方策を検討する資料・データを蓄積した。

(2)「古墳と地域住民の関係史」については、これまでに数年かけて各地の古墳に関する文献精査ならびに現地調査を精力的に行ってきたが、「古墳と地域社会の近現代史」の論考をまとめたことによって、いよいよ分析結果を公開していく段階に入った。数年以内には著作物としてまとめたかと考えている。

(3)「自然災害に対する社会の記憶」に関しては、理論考察を行うための文献精査を終了し、また同時並行で進めてきた現地調査で集めたデータ群も質的・量的に充実してきた。この成果の一端は、2019年に予定されているイタリアの国立ナポリ考古学博物館での展覧会「伊日の火山文化」によって公表するつもりである。

(4)「東京大学本郷キャンパスという文化資源」については、2015年10月に東京大学に着任して以来、資料とデータを積極的に集積してきたが、その成果を公開できる段階に入りつつある。公開に際しては、学術出版と同時に、実際に本郷キャンパスをプレゼンテーションする方策も考える予定である。

d 主要業績

(1) 著書

編著、Akira Matsuda and Luisa Mengoni, 『Reconsidering Cultural Heritage in East Asia』、Ubiquity Press、2016.9

(2) 論文・論考

松田陽、「イギリスの考古学事情」、『考古学ジャーナル』、684、34-36頁、2016.6

松田陽、「欧州における遺跡保護」、『月刊文化財』、634、20-23頁、2016.7

Akira Matsuda、「A Consideration of Public Archaeology Theories」、『Public Archaeology』、15(1)、40-49頁、2016.10

松田陽、「古墳と地域社会の近現代史」、『遺跡学研究』、14、24-33頁、2017

松田陽、「WAC-8における決議の採択」、『考古学研究』、63(4)、7-9頁、2017

松田陽、「文化資源学の観点から見た水中遺跡」、『水中遺跡の歴史学』、215-225頁、2018.3

3. 主な社会活動

(1) 行政

省庁、文化庁、文化審議会臨時委員、2016.3～2017.3、文化審議会委員、2017.4～2018.3

省庁、文部科学省、日本ユネスコ国内委員会文化活動小委員会調査委員、2016.4～2018.3

自治体、川崎市教育委員会、川崎市橘樹官衙遺跡群調査整備委員会委員、2016.4～2018.3

自治体、市川市教育委員会、市川市博物館協議会委員、2017.7～

その他、文化遺産国際協力コンソーシアム、文化遺産国際協力コンソーシアム欧州分科会委員、2016.4～2018.3

- 教授 **木下 直之** KINOSHITA, Naoyuki
27 文化資源学 《文化資源学専門分野》 参照
- 教授 **中村 雄祐** NAKAMURA, Yusuke
27 文化資源学 《文化資源学専門分野》 参照
- 教授 **古井戸 秀夫** FURUIDO, Hideo
29 次世代人文学開発センター 《萌芽部門》 参照
- 教授 **月村 辰雄** TSUKIMURA, Tatsuo
18 フランス語フランス文学 参照
- 教授 **大西 克也** ONISHI, Katsuya
11 中国語中国文学 参照
- 教授 **佐藤 健二** SATO, Kenji
25 社会学 参照
- 教授 **渡辺 裕** WATANABE, Hiroshi
07 美学芸術学 参照
- 准教授 **小林 正人** KOBAYASHI, Masato
01 言語学 参照
- 准教授 **高岸 輝** TAKAGISHI, Akira
03 美術史学 参照

28 韓国朝鮮文化

教授 早乙女 雅博 SAOTOME, Masahiro

1. 略歴

1976年3月	東京大学文学部考古学専修課程卒業
1978年3月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了(考古学)
1981年3月	東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学(考古学)
1981年4月	東京国立博物館学芸部東洋課東洋考古室研究員
1988年7月	東京国立博物館学芸部東洋課主任研究官
1990年4月	東京国立博物館学芸部北東アジア室長
1996年4月	東京大学文学部助教授(附属文化交流研究施設朝鮮文化部門)
1998年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授(附属文化交流研究施設朝鮮文化部門)
2002年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授(韓国朝鮮文化研究専攻)
2010年8月	東京大学大学院人文社会系研究科教授(韓国朝鮮文化研究専攻)
2018年3月	東京大学大学院人文社会系研究科教授 定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

韓国朝鮮を中心とする東アジアの考古学

b 研究課題

- (1) 朝鮮半島の古代国家の成立と発展過程を考古学資料から追求している。高句麗、新羅、百濟という三国史の枠を超えて、地域単位での発展過程を明らかにし、地域間の相互関係から国家の成立過程を追究する。
- (2) 高句麗壁画古墳を美術史や建築史とは異なる考古学の方法から分析して、壁画と石室の構成から編年を作り上げるとともに、当時の生活様相や社会を明らかにする。
- (3) 朝鮮考古学史では、戦前に朝鮮総督府を中心として行なわれた考古学発掘調査の成果を学術的な面から探っている。植民地政策としての古蹟調査事業のなかで、いかに学術的成果をあげてきたか、また日本における考古学の発展とどのようにかかわってきたかを明らかにする。

c 概要と自己評価

これまでに発表してきた新羅考古学の論文をまとめ、新たな資料を追加した土器編年を組み立て直し「新羅考古学研究」(2010年)として出版した。それを基に新羅の国家形成について、古墳から出土した装身具の組合せの時間的変遷を求め、そこからいくつかの画期を見出し、考古学から見た国家の成立過程を明らかにした。

2010年と2011年に朝鮮民主主義人民共和国の社会科学院考古学研究所と共同で高句麗壁画古墳の調査を行った。その成果をもとに2015年には韓国・釜山大学校に招聘され、1学期の講義を担当した。今後も継続して壁画古墳の調査研究を行う予定でいるが、保存に関しても日本の経験を生かしていきたい。

学史研究は、調査研究のみでなく、それを担った研究者の歴史認識まで深く掘り下げ、その成果を発表した。今後は、韓国の研究者との共同研究へと進みたい。

d 主要業績

(1) 学会発表

「日本の文化遺産国際協力—All Japan 協力体制の構築」『文化遺産国際開発協力の統合戦略模索』2016 ユネスコ遺産国際開発協力ワークショップ、国立古宮博物館、2016.3.29

「植民地朝鮮における考古学調査・古蹟保存と、それを通してみた朝鮮古代史像」『日本統治下の朝鮮における古代史研究・考古学・文化財』2016.4.23、早稲田大学

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本考古学会幹事(2014.4~2015.3、2015.4~)

朝鮮学会幹事(2014.4~2015.3、2015.4~)

高句麗渤海学会海外学会諮問委員 (2014.4～2105.3、2015.4～)

(2) 他機関での講義等

招聘教授、韓国・釜山大学校、「東洋考古学特講」、2015.3～2015.6

非常勤講師、立正大学文学部、「考古学特講 8」、2015.9～2016.3

講演、「古代朝鮮の古墳文化」、甘粕健先生追悼記念講演会、明治大学、2014.7.12

講演、「世界遺産高句麗壁画古墳」、せたがや文化創造塾、2014.9.27

講演、「西都原古墳群の発掘と朝鮮古蹟調査—1910年代を中心とする日本と朝鮮の考古学調査」、宮崎県立西都原考古博物館、2015.2.1

講演、「日帝強占期の古蹟調査」、韓国・国民大学校日本文化研究所、2015.4.23

講演、「新羅・加耶の考古学」、洗足区民センター、2015.10.10

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

文化遺産コンソーシアム東アジア・中央アジア分科会委員 (2014.4～2015.3、2015.4～)

財団法人東洋文庫、研究員(客員) (2014.4～2015.3、2015.4～)

世田谷区文化財保護審議会委員 (2014.1～2015.1、2015.1～)

教授 福井 玲

FUKUI, Rei

<http://www.lu-tokyo.ac.jp/~fkr/>

1. 略歴

1980年3月 東京大学文学部言語学科卒業(文学士)

1982年3月 東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻修士課程修了(文学修士)

1984年9月～1986年10月 韓国ソウル大学校人文大学国語国文学科に留学

1987年3月 東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻博士課程単位取得退学

1987年4月～1989年3月 東京大学文学部助手(言語学研究室)

1989年4月～1992年9月 明海大学外国語学部講師(日本語学科)

1992年10月～1997年3月 東京大学教養学部助教授

1994年10月 東京大学文学部附属文化交流研究施設助教授(併任)

1997年4月 東京大学文学部附属文化交流研究施設に配置換

1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科附属文化交流研究施設に配置換

2002年4月 東京大学大学院人文社会系研究科に配置換

2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2013年3月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題 c 概要と自己評価

主な専門分野は韓国語学であり、その中でも中世語の音韻体系に関する研究や古代語、近代語についての研究を行ってきた。また、それらを歴史的につなぐ通時的な研究も行なっている。現代語についても主として音声や方言に関する研究を行ってきた。さらに、中世語から近代語にかけての韓国語学の資料研究をも行っている。最近2年間は17世紀頃に筆写されたと考えられる『癸丑日記・西宮日記』を大学院のゼミで取り上げつつ、研究を行なっている。その他に、音声学・音韻論を中心とする言語学一般、方言研究を中心とする日本語学にも関心をもっている。2017年度には日本語と韓国語のアクセントの史的変化に関わる比較研究を行なった。また、2013年1月にはこれまでに行ってきた韓国語の音韻史にかかわる研究をまとめて単行本として出版している。

これ以外に、2013年から現在に至るまで継続して行っている研究課題として、韓国語の語彙史の研究があげられる。過去に行なわれた方言調査(小倉進平、崔鶴根、韓国精神文化研究院)の資料に基づいて、項目を選定して言語地図を作製し、そこに見られる語彙の歴史を再構成することを目指している。2015年度からはこのテーマで科研費を受け、

福嶋秩子・福嶋祐介氏原作の言語地図作製プログラム (Seal) の改良を行ない、朝鮮半島の言語地図を描くことができるシステムを構築した。そして、それを用いて、2016年度と2017年度に、『小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図とその解釈』の第1集と第2集を完成した。それぞれ30余りの項目を選び、筆者及び大学院生諸君で分担して執筆し、このプロジェクトを進展させることができた。今後も残りの項目について執筆と報告書の作成をつづけていく予定である。

d 主要業績

(1) 著書

編著、福井玲、『小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図とその解釈 第1集』、2017.3

編著、福井玲、『小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図とその解釈 第2集』、2018.3

(2) 論文

Fukui Rei, 「Milk in Korean」、『Studies in Asian Geolinguistics III』、42-45 頁、2016

Fukui Rei, 「Rice and related words in Korean」、『Studies in Asian Geolinguistics III』、36-41 頁、2016

福井玲、「小倉進平の朝鮮語方言調査について—『朝鮮語方言の研究』所載資料の活用のために—」、『東京大学言語学論集』、37、41-70 頁、2016.9

Fukui Rei, 「Phonetic observations on Korean dialects made by Ogura Shinpei」、『Papers from the Third International Conference on Asian Geolinguistics』、112-126 頁、2016.10

Fukui Rei, 「Accent shift in Japanese and Korean」、『Journal of Asian and African Studies』、94、243-257 頁、2017.9

(3) 学会発表

国内、福井玲、「Milk in Korean」、Studies in Asian Geolinguistics、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2016.2.29

国内、福井玲、「小倉進平による朝鮮語音声の観察について」、朝鮮語アクセント・イントネーション研究会、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2016.3.12

国際、福井玲、「Phonetic observations on Korean dialects made by Ogura Shinpei」、The third international conference on Asian Geolinguistics、Royal University of Phnom Penh、2016.5.24

国際、福井玲、「小倉進平의 조선어 방언조사에 대하여」、国立政治大学韓国語文学系創系60周年国際学術会議、台湾国立政治大学、2016.6.25

国際、Fukui Rei, 「Accent shift in Korean and Japanese」、International symposium on Japanese and Korean accent: diachrony, reconstruction, and typology、ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies、2016.7.2

国内、福井玲、「金沢庄三郎による日本語と韓国語の比較研究について」、国際日本文化研究センター共同研究会「日本語の起源はどのように論じられてきたか—日本言語学史の光と影」、国際日本文化研究センター、2016.9.17

国内、Fukui Rei, 「Wind in Korean」、Studies in Asian Geolinguistics、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2016.11.19

国内、Fukui Rei, 「Iron in Korean」、Studies in Asian Geolinguistics、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2016.11.19

国内、Fukui Rei, 「How to count nouns in Korean」、Studies in Asian Geolinguistics、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2017.2.17

国内、Fukui Rei, 「An overview of the accent/tone systems found in Korean dialects」、Studies in Asian Geolinguistics、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2017.8.6

国内、福井玲、「言語地図化した小倉進平方言資料から見えてくるもの」、第256回朝鮮語研究会、東京外国語大学本郷サテライト、2017.12.16

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本歴史言語学会、理事、2016.4～

国内、朝鮮語研究会、幹事、2004.4～

1. 略歴

- 1985年3月 九州大学文学部史学科朝鮮史学専攻卒業
- 1987年3月 九州大学大学院文学研究科（史学専攻）修士課程修了
- 1989年3月 九州大学大学院文学研究科（史学専攻）博士後期課程中途退学
- 1989年4月 九州大学文学部助手（～1992年3月）
- 1992年4月 久留米大学文学部専任講師（～1995年3月）
- 1995年4月 久留米大学文学部助教授（～1996年3月）
- 1996年4月 九州大学文学部助教授（～2000年3月）
- 2000年4月 九州大学大学院人文科学研究科助教授（～2002年3月）
- 2002年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（～2007年3月）
- 2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授（～2015年3月）
- 2015年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（現在に至る）

2. 主な研究活動

a 専門分野

朝鮮中世・近世史

b 研究課題

朝鮮王朝（1392-1910）時代の水運史や財政史・経済史などを中心に研究している。現在の主たる研究課題は、(1) 朝鮮前期漕運制研究、(2) 朝鮮中世・近世海事史研究、(3) 朝鮮中世・近世「水環境」研究、(4) 朝鮮時代財政史研究、(5) 朝鮮時代古文書研究などである。(1)の漕運制とは朝鮮時代における官営の税穀船運機構であり、朝鮮初期におけるその整備・変遷過程や運営実態等を明らかにする作業に取り組んでいる。(2)は(1)から派生したもので、朝鮮の前近代史を「海」とのかかわりで再構成するという問題意識から、済州島民の海難関係記録の分析を通じて彼らの海上活動の実態や異国への漂流・漂着をめぐる諸問題、朝鮮時代の海防体制や「水賊」などについて研究している。(3)は(2)をさらに発展させ、広く人と「水」とのかかわりを明らかにしようとするもので、当面は漢江をはじめとする河川の管理・利用という側面を主たる対象として、水運だけでなく、渡船や漁撈、さらには治水・水利といった点も含めて「水環境」史の構築をめざしている。(4)は、朝鮮後期に施行された新税制である大同法を、その運用実態を地方財政との関連に注目しながら研究しているほか、朝鮮初期の財政制度の性格や、朝鮮時代全般にわたる地方財政の運用方式なども研究の対象としている。(5)は日本各地の諸機関に所蔵される朝鮮古文書の調査である。2016年度から2017年度にかけては、これらのうちとくに(1)(3)(4)の課題を中心に研究を進めた。またこれらのほか、山川出版社の世界歴史大系シリーズとして企画された『朝鮮史1（先史時代—朝鮮王朝）』の執筆準備と執筆作業にも従事した。

c 概要と自己評価

まず上記研究課題の(1)については、朝鮮初期における漕運の歴史的な性格を考察した論文「朝鮮初期の漕運—制度の整備過程と運営実態からみたその歴史的な性格—」を須川英徳編『韓国・朝鮮史への新たな視座 歴史・社会・言語』に寄稿した。次に(3)については、2010年度から2013年度にかけて「朝鮮半島の「水環境」をめぐる社会・経済・文化の歴史的諸相—漢江を中心として—」というテーマで日本学術振興会から科学研究費補助金の支給を受けていたが、これをさらに発展させた研究課題が2016年4月に科学研究費補助金の交付対象に採択された。「朝鮮環境史の創成にむけた河川の管理・利用に関する総合的研究」（基板研究(B)：課題番号16H03486）がそれである。2016年4月から2020年3月まで4年間にわたる研究課題であり、その活動として2016年度は漢江中流域と錦江・万頃江流域、2017年度は洛東江流域で現地調査を実施するとともに関連資料の収集などをおこなった。(4)については、14世紀末の朝鮮建国の功労者で、新王朝の設計図を描いた鄭道伝が朝鮮初期の財政制度に及ぼした影響について検討し、その成果を2016年8月に韓国・ソウル市のプレスセンターで開催された第3回三峯学国際学術大会「鄭道伝と東アジア新秩序構築」において「朝鮮初期の財政制度と鄭道伝」と題して報告した。また朝鮮初期に朝鮮半島南東部沿海地域に設けられた三浦（富山浦・乃而浦・塩浦）に来航する倭人使節に対して朝鮮政府が支給した倭料（食糧や滞在費用）の調達方式と財源の問題を、三浦が所在する慶尚道内の官穀事情とも関連させながら考察し、その成果を2017年12月に開催された九州史学会大会で報告するとともに論文「朝鮮初期三浦倭料の調達方式と財源」として『年報朝鮮学』20に寄稿した。最後にその他として、山川出版社による世界歴史大系『朝鮮史1（先史時代—朝鮮王朝）』の第六章（朝鮮初期）と第七章（朝鮮中期）の執筆準備作業と実際の執筆にも相当の時間を割いた。

d 主要業績

(1) 著書

- (共著) 須川英徳 (編)、『韓国・朝鮮史への新たな視座 歴史・社会・言語』、勉誠出版、2017.5
(共著) 李成市・宮嶋博史・糟谷憲一 (編)、『朝鮮史1 (先史—朝鮮王朝)』、山川出版社、2017.10

(2) 論文

六反田豊、「朝鮮初期三浦倭料の調達方式と財源」『年報朝鮮学』、20、1～36頁、2017.12

(3) 学会発表

- (国際) 六反田豊、「조선초기의 재정제도와 정도전 (朝鮮初期の財政制度と鄭道伝)」、제3회 삼봉학 국제학술대회「정도전과 동아시아 신질서 구축」(第3回三峯学国際学術大会「鄭道伝と東アジア新秩序構築」)、プレスセンター (韓国ソウル市)、2016.8.25
(国内) 六反田豊、「朝鮮初期三浦倭料の財源と調達方式」、九州史学会平成29年度大会、九州大学、2017.12.10

(4) 講演

(国内) 六反田豊、「15世紀朝鮮の税穀水運」、2016年度第4回東京大学コリア・コロキウム、東京大学、2017.2.23

(5) 監修

- 六反田豊、『韓国ドラマ・ガイドオクニョ運命の女第1巻』、講談社、2017.3
六反田豊、『韓国ドラマ・ガイドオクニョ運命の女第2巻』、講談社、2017.6
六反田豊、『韓国ドラマ・ガイドオクニョ運命の女第3巻』、講談社、2017.9
六反田豊、『韓国ドラマ・ガイドオクニョ運命の女第4巻』、講談社、2017.12

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- (非常勤講師) 国際基督教大学、「韓国史」、2016.4～2016.6、2017.4～2017.6
(非常勤講師) 学習院大学、「東洋史特殊講義」、2017.4～2018.3
(非常勤講師) 朝日カルチャーセンター横浜教室、「朝鮮王朝の歴史」、2016.7～2017.3、2017.7～2018.3

(2) 学会

- (国際) 韓国中世史学会、地域理事、2016.3～
(国内) 朝鮮学会、常任幹事、編輯委員、2016.4～
(国内) 朝鮮史研究会、幹事、編集委員長、2016.4～
(国内) 韓国・朝鮮文化研究会、運営委員、2016.4～、会長、2016.4～2017.9、編集委員長、2017.10～

(3) 学外組織 (学協会、省庁を除く) 委員・役員

- (教育機関) 釜山大学校民族文化研究所、『韓国民族文化』編集委員、2016.3～2018.2
(その他) 公益財団法人東洋文庫、研究員 (兼任)、2016.4～2018.3
(その他) NHK 教育テレビ「高校講座世界史」、講師、2016.4～2018.3

教授 **ミュラー アルバート・チャールズ** MULLER, Albert Charles

29 次世代人文学開発センター《創成部門》参照

1. 略歴

- 1986年3月 東京大学教養学部教養学科第一文化人類学専攻卒業
1986年4月 東京大学大学院社会学研究科文化人類学専攻修士課程入学
1988年3月 同上 大学院社会学研究科修士課程修了
1988年4月 同上 大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程進学
1988年8月 文部省アジア諸国等派遣留学生として韓国ソウル大学校に留学（～1991年5月）
1993年3月 東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程単位取得満期退学
1993年4月 日本学術振興会特別研究員（PD）（～1994年3月）
1994年4月 東京大学教養学部助手（～1996年3月）
1996年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手（～2000年3月）
1999年8月 韓国ソウル大学校社会科学研究院比較文化研究所常勤研究員（～2000年8月）
2000年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（～2002年3月）
2000年9月 英国オックスフォード大学訪問研究者（～2001年3月）
2002年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2016年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（現在に至る）

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会・文化人類学

b 研究課題

韓国朝鮮社会を主たる対象として、社会・文化人類学的な観点から調査研究を進めている。博士課程在籍時より20数年間、韓国全羅北道南原地域でフィールドワークを続けており、他の地域でも短期の調査を重ねている。近年の研究課題は、(1) 産業化後の韓国社会における農村移住（都市居住者の農村地域への移住。韓国では「帰農」・「帰村」と呼ばれる）と地域社会の変化、(2) 産業化過程での韓国農村社会の変化と持続性についての歴史民族誌・対照民族誌的再分析、(3) 朝鮮半島中・南部農村社会を対象とした近現代民族誌資料の歴史人類学的再分析、(4) コミュニティ概念の再検討と近現代韓国社会への適用、(5) 日本の人類学における韓国社会研究の回顧・展望と方法論の再検討、等である。

c 概要と自己評価

研究課題(1)については、2007年3月に予備調査を開始し、2010年8月から韓国全羅北道南原市山内面と近隣地域で、移住者とコミュニティ運動の指導者・活動家を対象としたインタビュー調査と参与観察を断続的に行ってきた。その成果は、論文・学会発表等を通じて継続的に公開している。後述する研究課題(2)の成果を踏まえ、近年のコミュニティ研究の成果を取り入れつつ、移住者のネットワーク形成と在来の地域コミュニティへの接合についての分析枠組みを構築する作業を進めている。また2000年代後半以降の韓国の農村を、①国家の農業・農村政策、②都市住民が農村に向ける眼差し、③村落・地域社会の再生産、④多様な移住者の生活の営為とコミュニティ実践の交錯する場として捉え直し、そのなかで移住者の生活がどのように構築・再構築されているのかを検討する作業にも着手し、中間的な成果を論文「韓国山内地域の農村移住者と生活経験」（2016年）として刊行した。

研究課題(2)・(3)については、韓国全羅北道南原郡（当時）北部の農村で1989年7月～1990年8月に実施した滞在調査の成果を、植民地期から産業化以前までの民族誌資料と相互対照しつつ整理・分析しなおし、単著『韓国農村社会の歴史民族誌：産業化過程でのフィールドワーク再考』（風響社、2016年）として刊行した。出版に当たっては韓国国際交流財団と布施学術基金から助成を受けた。フィールドワークという人類学の方法で観察記録した民族誌的現在を長期的歴史のなかに位置付けるだけでなく、韓国農村社会に関する1960年代以来の人類学的研究の成果全体を長期持続のなかに位置付けた論考として、「画期的な著作」（嶋陸奥彦書評、『韓国朝鮮の文化と社会』16）との評価も得ている。

研究課題(4)については、日本学術振興会二国間交流事業共同研究「日韓コミュニティ研究の新動向と展望」（2016～17年度）を共同主宰し、日韓の若手・中堅人類学者11名とともに、計4回の共同研究会と共同調査を実施した。日韓コミュニティ研究の視角と方法を再検討し、今後の民族誌的研究への展望を提示するとともに、若手研究者の育成にも寄与した。

研究課題(5)については、1970年代以降の日本の人類学における韓国を対象とした社会人類学的研究の諸局面、歴史人類学的研究の展開、理論的視角、研究言語の問題等に焦点を合わせて、国内シンポジウムの企画・主宰（1回）と国際シンポジウム・学会での発表（3回）に当たった。また、「生き方の分化・再編と交渉に関する対照民族誌的研究」を主題とする共同研究を主宰し、民族誌的研究の方法としての比較・対照の可能性を検討した。

d 主要業績

(1) 著書

単著、本田洋、『韓国農村社会の歴史民族誌：産業化過程でのフィールドワーク再考』、486頁、風響社、2016.10

(2) 論文

Hiroshi Honda, Internationalization as Multi-lingual Academic Practice: A Case of Korean Ethnography, *Japanese Review of Cultural Anthropology*, 17(2), pp.57-64, 2016

本田洋、「韓国山内地域の農村移住者と生活経験——2010年代前半の動向を中心に」、『韓国朝鮮文化研究』、15、41-66頁、2016.3

本田洋、「일본 인류학의 한국 지역사회 연구와 역사인류학적 접근〔日本の人類学における韓国地域社会研究と歴史人類学的接近〕」、SNU Department of Anthropology (ed.), *Global Korean Studies and Writing Korean Culture*, pp.68-76, Department of Anthropology, Seoul National University, 2017.9

本田洋、「序——制度と個人（あるいは行為者）」、『韓国朝鮮の文化と社会』、16、7-19頁、2017.10

(3) 書評

三尾裕子・遠藤央・植野弘子編、『帝国日本の記憶——台湾・旧南洋群島における外来政権の重層化と脱植民地化』、『文化人類学』、82(2)、239-241頁、2017.9

(4) 学会発表

国際、本田洋、「1990年代後半以降の韓国における農村移住：智異山麓山内地域の事例から」、韓日（NRF-JSPS）協力研究事業2016年夏韓日共同シンポジウム、韓国全南大学校社会科学大学、2016.8.19

国際、Hiroshi Honda, Internationalization as Multi-lingual Academic Practice: A Case of Korean Ethnography, *The 3rd JASCA International Symposium: The Internationalization of Japanese Cultural Anthropology and the Attempt to Strengthen the Overseas Dissemination of Information*, Ochanomizu University, 2016.11.19

国際、本田洋、「韓国農村民族誌とコミュニティ論：共同性の再生産を中心に」、二国間交流事業共同研究「日韓コミュニティ研究の新動向と展望」2017年2月東京共同研究会、東京大学本郷キャンパス、2017.2.13

国際、本田洋、「일본 인류학의 한국 지역사회 연구와 역사인류학적 접근〔日本の人類学における韓国地域社会研究と歴史人類学的接近〕」、*Global Korean Studies and Writing Korean Culture*, ソウル大学校アジア研究所（韓国）、2017.9.22

国際、本田洋、「일본에서의 한국 인류학: 커뮤니티 연구와 역사민족지적 접근을 중심으로〔日本における韓国人類学：コミュニティ研究と歴史民族誌的接近を中心に〕」、韓国文化人類学会2017年秋国際学術大会、済州ハンファリゾート、2017.10.21

国際、本田洋、「日本側総括と展望」、二国間交流事業共同研究「日韓コミュニティ研究の新動向と展望」全州研究会、全北大学校人文大学（韓国）、2017.12.27

(5) 予稿・会議録

国際会議、本田洋、「1990年代後半以降の韓国における農村移住：智異山麓山内地域の事例から」、『韓日（NRF-JSPS）協力研究事業2016年夏韓日共同シンポジウム：New Trends and Prospects of Community Studies』、韓国全南大学校社会科学大学、2016.8.19

(6) 会議主催(チェア他)

国内、韓国・朝鮮文化研究会第17回研究大会シンポジウム「制度と個人（あるいは行為者）」、企画・主宰、明星大学、2016.10.22

国際、二国間交流事業共同研究「日韓コミュニティ研究の新動向と展望」2017年2月東京共同研究会、主催・司会、2017.2.13～2017.2.14

国際、二国間交流事業共同研究「日韓コミュニティ研究の新動向と展望」2018年8月浜松共同研究会、主催・司会、静岡大学浜松キャンパス、2017.8.7～2017.8.8

(7) 総説・総合報告

本田洋、「《特集》韓国社会の生き方——早期留学、改宗、農村移住」、『韓国朝鮮文化研究』、15、1-2頁、2016.3

(8) 教科書

『社会学概論 2016』, 祐成・出口・赤川・本田・小林・中村・白波瀬・佐藤・武川・松本, 執筆, 東京大学文学部社会学研究室, 2016

『社会学概論 2017』, 祐成・出口・赤川・本田・小林・中村・白波瀬・佐藤・武川・松本, 執筆, 東京大学文学部社会学研究室, 2017

(9) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金, 本田洋, 研究代表者, 「生き方の分化・再編と交渉に関する対照民族誌的研究: 韓国社会の事例を中心に」, 2015~17年度

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内, 朝鮮学会, 常任幹事・編輯委員, 2016.4~2018.3

国際, 韓国文化人類学会, 海外理事, 2016.4~2018.3

国際, 比較文化研究, 編集委員, 2016.4~2018.3

国内, 韓国・朝鮮文化研究会, 運営委員・庶務責任者, 2016.4~2018.3

国際, *Korean Anthropology Review*, Editorial Board, 2017.4~2018.3

(2) 学外組織(学協会, 省庁を除く)委員・役員

独立行政法人日本学術振興会, 科学研究費委員会専門委員, 2015.12~2017.11

29 次世代人文学開発センター

《 先端構想部門 》

教授 小佐野 重利 OSANO, Shigetoshi

1. 略歴

- 1978年3月 東京大学文学部美術史学専修課程卒業（文学士）
- 1978年4月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程入学
- 1980年9月 パドヴァ大学美術史学科専門課程(Scuola di Perfezionamento)
（イタリア政府給費留学生） ～1982年10月
- 1983年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（美術史学修士）
- 1983年4月 東京大学大学院博士課程 ～1985年4月15日
- 1985年4月 東京大学文学部助手（美術史学科）～1987年3月
- 1987年4月 多摩美術大学美術学部講師（西洋美術史）～1989年3月
- 1989年4月 東京工業大学工学部助教授（一般教育等芸術）～1993年3月
- 1993年4月 東京大学文学部助教授（美術史学科）～1994年6月
- 1994年6月 東京大学文学部教授（美術史学科）～1995年3月
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授に配置換え（文学部教授兼任）
（1995年9月～12月 ジョン・ポール・グッティ財団グッティ美術史人文学研究所招聘研究者）
- 2005年4月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部次世代人文学開発センター（先端構想部門）教授を兼任
- 2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科副研究科長（兼務）～2009年3月
- 2012年4月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部次世代人文学開発センター（先端構想部門）教授に配置換え
- 2013年4月 東京大学大学院人文社会系研究科研究科長・文学部長（兼務）～2015年3月
- 2015年4月 東京大学学生相談ネットワーク本部長（兼務）～2017年3月
- 2017年3月 定年退職
- 2017年4月 東京大学フューチャーセンター推進機構特任研究員（～現在）
- 2017年5月 東京大学大学院教育学研究科特任教授（～現在）
東京大学学生相談ネットワーク本部長（兼務）（～現在）
- 2017年6月 東京大学名誉教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋近世美術史 イタリア中世・ルネサンス美術 アルプス南北の美術交流 比較美術史

b 研究課題

- ①イタリア中世末、ルネサンス期の美術を特に絵画史の観点から、古代美術および同時代のアルプス以北の美術との影響関係をも検討しながら幅広くかつ詳細に研究すること。
- ②西洋美術作品における身振り言語の機能に関して、隣接研究分野（文化史、民俗学、文化人類学、考古学、社会学、記号学）の先行研究成果も踏まえ、再検討を加え、新しい様式学および図像学的研究のモデルを模索研究すること。
- ③美術の展開に果たした芸術家の旅行の意義に関する包括的研究。
- ④ヴェローナの画家一門バディエー家（14-16世紀）の包括的な作品現地調査・資料収集研究の継続。
- ⑤1880年代の民間レベルにおける日伊芸術交流史の再検討 ——写真家アドルフォ・フェルサーリとブルボン家エンリコ・バルディ伯爵の随臣アレッサンドロ・ツィレーリ伯爵の研究（研究代表者：平成17-19年度科学研究費補助金基盤研究（B）の研究題目）。
- ⑥国家もしくは都市の顕彰装置としての自画像コレクションの歴史文化史的研究（研究代表者：平成20-22年度科学研究費補助金基盤研究（B）の研究題目）。

⑦西欧17世紀以降の王侯の絵画コレクションの形成における複製絵画の影響（研究代表者：平成23-25年度科学研究費補助金基盤研究（B）の研究課題）。

c 概要と自己評価

平成25（2014）年3月に刊行した科研報告書「西欧17世紀以降の王侯の絵画コレクションの形成における複製絵画の影響」の内容を改訂したイタリア語版 *Originali e copie: Fortuna delle repliche fra Cinque e Seicento*, a cura di S. Osano をウフィツィ美術館研究叢書 *Gli Uffizi. Studi e Ricerche* 32号として、小佐野重利編により2017年7月にフィレンツェの出版社 *Centro Di* 社から刊行し、同年12月12日にウフィツィ美術館においてアイケ・シュミット館長の司会で同書の出版記念発表を行った。また、2017年4月20日には、在職中の最後の研究である、ドメニコ・ティントレットの新出《伊東マンショの肖像》の制作の謎を解き明かす小著『《伊東マンショの肖像》の謎に迫る——1585年のヴェネツィア』（三元社）を刊行した。

d 主要業績

(1) 著書

共著、小佐野重利・小池寿子・三浦篤責任編集『西洋美術の歴史4：ルネサンスI』、執筆：序(pp.18-46)、第1章1～4(pp.48-111)、コラム(pp.136-138)、第2章(pp.140-190)、第3章1～3(pp.192-256)、コラム(pp.283-285)、第4章1～4(pp.392-452)、コラム(pp.525-529)、中央公論新社、2016.10

単著、『《伊東マンショの肖像》の謎に迫る——1585年のヴェネツィア』（単著）、146+XII pp、三元社、2017.4

共著、小佐野重利・小池寿子・三浦篤責任編集『西洋美術の歴史5：ルネサンスII』、執筆：序(pp.20-37)、中央公論新社、2017.5

編著、*Originali e copie: Fortuna delle repliche fra Cinque e Seicento (Gli Uffizi. Studi e Ricerche 32)*, a cura di S. Osano, Firenze, 2017 (with the author's two articles: "Lineamenti generali per una storia delle copie" & "Le riproduzioni pittoriche all'interno della collezione del Granducato di Toscana nel XVII e XVIII secolo. Sulla passione collezionistica del Gran Principe Ferdinando de' Medici", pp. 9-55), 2017.7

(2) 論文

小佐野重利「素描家 ミケランジェロ」、『ミケランジェロ展 The Genius of Michelangelo-Majestic Renaissance Architecture』、アートプランニングレイ、2016、pp.19-26、2016.4

小佐野重利（展覧会評）“Una mostra sul teatro giapponese “kabuki””、『文化交流研究』30号（2017）、pp.91-101、2017.3

(3) 監修

ピーナ・ラジョニエーリ／小佐野重利監修、『ミケランジェロ展 The Genius of Michelangelo-Majestic Renaissance Architecture』（カタログ編集責任：飛ヶ谷潤一郎・伊藤拓真）、pp.19-26（論文）、アートプランニングレイ、2016.4

(4) 啓蒙

「フィレンツェ派—美術史に刻まれる盛期ルネサンスの息吹—」（談話の編集）、『partner [パートナー]』1・2月号（2016）、p.9、2016.1

「東大教師が新入生にすすめる本」（2012年『UP』4月号）、収録『東大教師が新入生にすすめる本2009-2015』、東京大学出版会、2016年、pp.84-85、2016

「ルネサンスのパトロン—蓄財と喜捨—」、『鹿島美術財団 第44回美術講演会講演録』、鹿島美術財団、pp.17-44、2016.8

(5) マスコミ

「この3冊 ルネサンス美術」（書評欄「今週の本棚」）、『毎日新聞』（日曜版）、2016年12月25日、11面、毎日新聞社、2016.12.25

〔寄稿〕「ルネサンス展「伊東マンショの肖像」—「ベネチア風」の九州男児」、『東奥日報』、2017年8月1日朝刊、9面、東奥日報社、2017.8.1

〔談話〕「東京富士美術館で公表開催中 遙かなるルネサンス展に寄せて」、『聖教新聞』、2017年10月3日日刊、2面、聖教新聞社、2017.10.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演 山梨県立美術館、「ミケランジェロ展」記念講演会「ミケランジェロー神話化された生涯」（山梨県立美術館講堂）、2016.4.23

司会モデレーター、在日イタリア大使館、イタリア文化会館、イタリア国立東方学研究所主催シンポジウム「イタリアと日本、初めての出会いードメニコ・ティントレット作『伊東マンシヨの肖像』発見についてー」の第二部 美術史的考察の司会（モデレーター）、（イタリア文化会館アネッリホール）、2016.5.18

特別講演、東京国立博物館月例講演会「ヴェネツィア 1585 年」（同館での特別公開「新発見！天正遣欧少年使節伊東マンシヨの肖像」との関連）、（東京国立博物館講堂）、2016.5.21

研究発表、日本考古学協会第 82 回総会研究発表セッション 7 の研究発表「国内外の博物館の制度および所轄の比較から見えてくるもの」（日本学術会議第一部史学委員会「博物館・美術館等の組織運営に関する分科会」と共催セッション、東京学芸大学）、発表要旨集あり、2016.5.29

特別講演、学習院大学史料館講演会、「辻邦生のボッティチェリ観をめぐってー小説と歴史のあいだで」（学習院大学創立百年記念会館）、2016.7.23

特別講演、ふくやま美術館「ミケランジェロ展ー万能の天才の秘密」記念講演会、「ミケランジェロ作品と神話化された生涯ー」（ふくやま美術館 1 階ホール）、2016.9.24

特別講演、名古屋大学人文学研究科附属人類文化遺産テキスト学研究センター主催、講演「ルネサンスにおける「古代」の記憶から「古典主義」創出へ」（同大人文学研究棟 1 階 127 教室）、2017.7.22

特別講演、東京富士美術館特別展 記念講演会「新出『伊東マンシヨの肖像』を読み解くーヤコポおよびドメニコ・ティントレットの工房との関係からー」（同館ミュージアムシアター）、2017.10.28

特別講演、群馬県立土屋文明記念文学館 連続講座「美術と文学：イメージとテキスト」での講演「『絵画は無声の詩、詩は有声の絵画』、西洋の芸術ジャンル間の諸問題ー姉妹芸術から優劣比較（レオナルド）・競合（エクブラシス）までー」（同館 2 階研修室）、2017.11.19

鼎談、イタリア文化会館特別上映会、ドキュメンタリー番組「時の旅人ー伊東マンシヨ 肖像画の謎」後の鼎談（兼司会）、2017.12.7

出版記念発表、Firenze, Gallerie degli Uffizi, Presentazione del libro a cura di Shigetoshi Osano: Originali e copie. Fortuna delle repliche fra Cinque e Seicento, Intervento con Eike Schmidt e Francesca De Luca (Aula di San Pier Scheraggio), 2017.12.12

(2) 学会

国際、国際美術史学会(CIHA)副会長、2016.3～2018.3
 日本学術会議会員（第一部）2016.3～2018.3
 Accademia Ambrosiana、Academicus (Academy member) in classe di studi sull'Estremo Oriente、2016.4～2018.3

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

（公益財団法人）花王芸術・科学財団、選考委員、2016.4～2018.3
 （公益財団法人）鹿島美術財団、選考委員、2016.4～2018.3
 （公益財団法人）損保ジャパン日本興亜美術財団、評議員、2016.4～2018.3
 （一般財団法人）大塚美術財団、理事、2016.4～2018.3
 名古屋大学新教育組織構想ワーキンググループ（学外）委員、2015.4.14～2016.3
 イタリア文化会館、第 3 回フォスコ・マライーニ賞選考委員、2017.8～10

1. 略歴

1985年3月	東京大学文学部中国哲学専修課程卒業（文学士）
1987年3月	同 大学院人文科学研究科修士課程修了（中国哲学）
1987年4月	東京大学東洋文化研究所助手（東アジア第一部門）
1992年4月	徳島大学総合科学部講師（総合科学科）
1994年4月	同 助教授（人間社会学科）
1996年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授（中国思想文化学）
2007年4月	同 准教授（中国思想文化学）
2013年4月	同 教授（中国思想文化学）

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国思想文化史、王権理論の展開および儒教の教化論

b 研究課題

- (1) 中国における朱子学・陽明学の思想的形成と社会的展開。
- (2) 中国皇帝制秩序を支える王権儀礼とその理論。
- (3) 日本における儒教思想の流入とその社会的効果。

c 概要と自己評価

概要：中国思想文化史研究として、宋代の儒教において生じた新たな思想潮流と、それが朱子学に集約していく様相を中心に研究してきた。また、その延長線上にいわゆる中世以降の日本における朱子学の受容と独自の展開についても扱い、特に王権論の観点から天皇制に関わる思想的・儀礼的事象を探究している。

自己評価：2016～2017年度は上記3つの研究課題の全体にわたり、出版の形で成果を公表することができた。まず、上記(1)(2)については、「宗教の世界史」というシリーズ企画の1冊として担当していた『儒教の歴史』を、依頼されてから10年がかりで擱筆・刊行した。また、(2)については「世界史叢書」に論文を寄稿していわゆる中華思想について通時的に概観した。(3)については、これも10年越しの企画だった東アジア王権論についての編著を完成させることができた。私生活上はいくつか問題が生じた2年間であったが、研究成果の発信という面では成果をあげることができたと考える。

d 主要業績

(1) 著書

- 単著、小島毅、『儒教の歴史』、山川出版社、2017.5
単著、小島毅、『儒教が支えた明治維新』、晶文社、2017.11
編著、小島毅他、『中世日本の王権と禅・宋学』、汲古書院、2018.3

(2) 論文

- 小島毅、「中華の歴史認識——春秋学を中心に」、秋田茂他編『「世界史」の世界史』、ミネルヴァ書房、36-53頁、2016.9
小島毅、「方法としての溝口雄三」、第八回日中学者中国古代史論壇論文集『中国史学の方法論』、285-290頁、2017.5
小島毅、「東アジア伝統思想の「尊厳」」、『思想』、no.1114、98-112頁、2017.2
小島毅、「中国の古地震記録について—サステナビリティ研究の視点から」、『文化交流研究』、30号、75-90頁、2017.3

(3) 解説

- 小島毅、「朱舜水先生終焉之地」碑の移転、『UP』、no.535、18-23頁、2017.5

(4) マスコミ

- 「偏ってる私が見た偏らない世界」、『朝日新聞 日曜版 8-9,11』、2016.4.3
「近代精神受け入れる土壌 特集：維新150年 第三部 幕末維新の思想・学問5」、『読売新聞』、2017.9.2
「歴史と共に移る解釈 専門家に聞く『論語』の歴史と読み方」、『東京大学新聞』、2017.12.5
「儒教」、J-WAVE：JAM THE WORLD のUP-CLOSE コーナー、2018.3.13

3. 主な社会活動

(1) 学会

- 国内、日本中国学会、副理事長、2015.4～
- 国内、日本儒教学会、理事（常務委員）、2016.5～
- 国内、中国社会文化学会、理事長、2017.7～

教授 向井 留実子 MUKAI, Rumiko

1. 略歴

- 1978年3月 青山学院大学文学部フランス文学科卒業
- 1994年4月 広島大学大学院教育学研究科（日本語教育）博士課程前期入学
- 1996年3月 広島大学大学院教育学研究科（日本語教育）博士課程前期修了（教育学修士）
- 1996年4月 愛媛大学教育学部、松山東雲女子大学人文学部非常勤講師
- 1998年4月 松山東雲女子大学人文学部専任講師
- 2000年4月 松山東雲女子大学人文学部助教授
- 2003年10月 愛媛大学留学生センター助教授
- 2011年9月 東京大学日本語教育センター教授
- 2014年7月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本語教育

b 研究課題

- 1) アカデミックな日本語の教育方法および教材の開発
- 2) 大学および地域における日本語教育・支援の体制づくりのための調査・研究
- 3) 日本語非母語話者の学習ニーズの多様化に対応する漢字教育のための調査・研究

c 概要と自己評価

教育面では、2016年度に日本語教室における科目の内容・配置を見直し、以前より強い要望のあった古典関係科目の常設を実現した。また、集中講座・特別講座の充実化を図る中で、他部局との連携、大学院生の起用などを進め、留学生の多様なニーズへの対応や、日本人との接触機会の増加に努めた。ハード面の改革としては、視聴覚教育センターの協力を得て教室のIT化に向けた環境整備を行い、効率的な授業展開ができるようにした。運営面では、2016年12月に、留学生の教育・支援を考えるために、教職員、留学生、日本人学生、総勢14名が一堂に会する座談会を開催し、その記録を日本語教室開室25周年記念のための『東京大学大学院人文社会系研究科・文学部国際交流室・日本語教室記念誌』にまとめた。さらに、座談会で提起された課題を解決すべく、留学生のための対人関係構築講座や、教員間・チューター間の情報交換促進に向けた懇談会を実施した。研究面では、アカデミック・ライティング教育のための調査・研究を積極的に進めているが、2017年度の研究会での受賞をきっかけとして、研究に拍車がかかっている。以前より継続中の「定住外国人のリテラシー」の調査・実践については、国外のJournalに成果が掲載され、新たな展開に移行しつつある。

d 主要業績

(1) 論文・研究ノート

- 向井留実子・新矢麻紀子・高橋志野、「国際結婚移住女性の書字言語習得支援に関する一考察—ソーシャル・サポートという視点から—」、『Journal Cajle』、Vol.17、44-62頁、2016.8
- 向井留実子・中村かおり・近藤裕子、「引用で求められる「解釈」をどのように指導するか—学習者の作文事例から見た引用・解釈文作成の困難点と指導のあり方—」、『専門日本語教育研究』、2017.12
- 向井留実子、「日本語で学位取得を目指す大学院留学生への指導・支援の課題—東京大学大学院人文社会系研究科・文学部における実践を通して—」、『文化交流研究』、31号、49-62頁、2018.3

(2) 学会発表

- 国際、中村かおり・近藤裕子・向井留実子、「アカデミックライティングにおける不適切な引用文の分析と課題」、日本語教育国際研究大会、2016.9.10
- 国内、近藤裕子・中村かおり・向井留実子、「アカデミック・ライティングにおける引用指導の課題—教材分析を通して—」、日本語教育方法研究会、2016.9.24
- 国内、中村かおり・近藤裕子・向井留実子、「大学初年次のレポート作成指導で引用をどう扱うか」、日本語教育方法研究会、2017.3.18
- 国内、近藤裕子・中村かおり・向井留実子、「大学初年次のアカデミック・ライティング指導に向けたレディネス調査」、日本語教育方法研究会、2017.9.16
- 国内、中村かおり・近藤裕子・向井留実子、「アカデミック・ライティングにおける論証技術的習得の課題」、日本語教育学会秋季大会、2017.11.26
- 国内、中村かおり・近藤裕子・向井留実子、「アカデミック・ライティングにおける論証技術習得を目指した指導の実践—文レベルでの論理的つながりの意識化と明文化を中心に—」、日本語教育方法研究会、2018.3.24

(3) 会議主催(チェア他)

- 国内、「第2回 東京大学文学部日本語教育研究会」、主催、2016.1.27
- 国内、「第3回 東京大学文学部日本語教育研究会」、主催、2016.3.14
- 国内、「第4回 東京大学文学部日本語教育研究会」、主催、2017.2.6
- 国内、「第5回 東京大学文学部日本語教育研究会」、主催、2017.3.23
- 国内、「第6回 東京大学文学部日本語教育研究会」、主催、2018.2.17
- 国内、「第7回 東京大学文学部日本語教育研究会」、主催、2018.3.10

(4) 受賞

- 国内、向井留実子、奨励賞、日本語教育方法研究会、2017.3.18

(5) 共同研究(産学連携除く)

- 国内、参画、大阪産業大学、「移住女性のリテラシー保障に向けた学習支援体制と地域コミュニティの構築に関する研究」、2016～

(6) 授業開発・教育プログラム

- 「何気ない日本人の習慣・考え方を学ぼう」、向井留実子、2016
- 「落語を体験しよう」、向井留実子、2016
- 「留学生のための日本史」、向井留実子、2017
- 「留学生のための豊かな留学生活の過ごし方」、向井留実子、2017
- 「江戸時代の芸能を学ぼう」、向井留実子、2017

3. 主な社会活動

(1) 学会

- 国内、日本語教育学会、一般会員
専門日本語教育学会、一般会員
日本語教育方法研究会、運営委員
大学教育学会、一般会員、2018.2～

《 萌芽部門 》

教授 **古井戸 秀夫** FURUIDO, Hideo

1. 略歴

1974年3月 早稲田大学第一文学部演劇専攻学士
1976年3月 早稲田大学大学院文学研究科芸術学演劇専攻修士課程修了
1982年3月 早稲田大学大学院文学研究科芸術学演劇専攻博士課程退学
1981年4月 早稲田大学文学部助手
1984年4月 早稲田大学文学部専任講師
1987年4月 早稲田大学文学部助教授
1992年4月 早稲田大学文学部教授
2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授
2017年3月 定年退職
2017年4月 東京大学大学院人文社会系研究科特任教授（集英社寄付講座）
2017年6月 東京大学名誉教授
2018年3月 特任教授退職

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

演劇学・舞踊学

c 概要と自己評価

研究の中心は、①鶴屋南北の研究、②歌舞伎の表現技法の研究、この二つである。①は、『評伝 鶴屋南北』（第一巻・第二巻2冊、本文A4版2段組1,600頁）で2018年6月に白水社より出版の予定。②については、日本舞踊協会公演（2016年2月国立劇場大劇場）「文芸作品特集」の企画に参画、当日、舞台上で企画の趣旨説明を行った。

d 主要業績

(1) 啓蒙

古井戸秀夫、「隅田川物の系譜2」、『NBF』、49、2ページ、2016.1
古井戸秀夫、「黙阿弥生誕二百年の『十六夜清心』と『三人吉三』」、『歌舞伎座筋書』、3ページ、2016.5
古井戸秀夫、「隅田川物の系譜3」、『NBF』、50、2016.7
古井戸秀夫、「芝翫ゆかりの舞踊」、『歌舞伎座筋書』、2016.11
古井戸秀夫、「隅田川物の舞踊4」、『NBF』、51、2017.1
古井戸秀夫、「為永春水と黙阿弥の幕末の江戸」、『歌舞伎座筋書』、4ページ、2017.2
古井戸秀夫、「河東節三百年と『助六』」、『歌舞伎座筋書』、2017.3
古井戸秀夫、「明治の「団菊」、江戸の團十郎と菊五郎」、『歌舞伎座筋書』、4ページ、2017.5
古井戸秀夫、「「日本」と呼ばれた男」、『歌舞伎座筋書』、4ページ、2017.7
古井戸秀夫、「隅田川物の系譜5」、『NBF』、52、2ページ、2017.7
古井戸秀夫、「『靈験亀山録』と鶴屋南北」、『国立劇場解説書』、4ページ、2017.10
古井戸秀夫、「家の芸二題一貞任と直侍」、『歌舞伎座筋書』、4ページ、2017.11
古井戸秀夫、「芝翫の名跡とその芸」、『吉例顔見世興行番付』、4ページ、2017.12
古井戸秀夫、「隅田川物の系譜6」、『NBF』、52、2ページ、2018.1

3. 主な社会活動

(1) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

公益財団法人新日鉄住金文化財団、理事、2016.4～2018.3
公益財団法人ポーラ伝統文化財団、理事、2016.3～2018.4
公益社団法人日本舞踊協会、理事副会長、2016.4～2018.3

教授 松村 一登 MATSUMURA, Kazuto

<http://www.kmatsum.info/introd/index.html>

1. 略歴

- 1995年4月 東京大学文学部附属文化交流研究施設助教授
1996年11月 東京大学文学部附属文化交流研究施設教授
1997年8月 同 大学院人文社会系研究科附属文化交流施設教授
2004年4月 同 大学院人文社会系研究科言語動態学講座教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

言語学、ウラル諸語、ロシアの少数言語のテキストの電子化、コーパスを用いた文法研究

b 研究課題 c 概要と自己評価

科研費（基盤研究）のプロジェクトを中心に、次のような研究活動を行った。

- (1) エストニア・タルト大学のコーパス言語学研究者と言語データやツールの交換を含む研究交流を行った。
- (2) フィンランド・トゥルク大学のマリ語研究者と言語データやツールの交換を含む研究交流を行った。
- (3) エストニア国会図書館の協力を得て、20世紀初めのエストニア語の言語資料（193万語）を電子テキスト化し、言語コーパスとして利用可能なようにXML文書化した。また、このコーパスを含むエストニア語のコーパスを複数用いて、エストニア語の研究を行った。
- (4) スウェーデン北部、トネ川流域のフィンランド語系少数言語・メアンキエリ語のコミュニティーを訪問し、メアンキエリ語の言語資料を収集するとともに、学校などを訪問し、現地の言語事情を調査した。

d 主要業績

(1) 研究報告書

「電子化された言語資料と個別言語研究」、2009.3

(2) 学会発表

「エストニア語の動詞 *joudma* の多義性について」、日本ウラル学会 35 回研究大会、2008.7.5

「エストニア語の動詞 *pruukima* 「必要だ；用いる」の多義性—コーパスと辞書の記述に基づく考察—」、日本言語学会 137 回大会、2008.11.29

「エストニア語の他動詞文における「接格+動詞 *mast* 形」構文」、日本ウラル学会 36 回研究大会、2009.7.11

「コーパスから見える統語的变化—エストニア語の不定詞構文—」、日本言語学会 139 回大会、2009.11.28

(3) 受賞

「Maarjamaa Risti IV klassi teenetemark」、The 4th class Order of the Cross of Terra Mariana、エストニア共和国政府、2009.2.23

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本言語学会、会計監査委員、2007～

Suomalais-Ugrilainen Seura [フィン・ウゴル学会]、一般会員、2007～

Suomalaisen Kirjallisuuden Seura [フィンランド文学協会]、一般会員、2007～

Societas Linguisticae Europae、一般会員、2007～

CONGRESSUS XI INTERNATIONALIS FENNO-UGRISTARUM」、国際委員、2008.1～

日本ウラル学会、理事、2008.1～2008.12

日本言語学会、評議員、2009.4～

教授 水島 司 MIZUSHIMA, Tsukasa

12 東洋史学 参照

《 創成部門 》

教授 下田 正弘 SHIMODA, Masahiro

1. 略歴

- 1981.03 東京大学文学部印度哲学印度文学専修課程卒業
- 1981.04 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（印度哲学）入学
- 1984.03 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（印度哲学）修了
- 1984.04 東京大学大学院人文科学研究科博士課程（印度哲学）進学（-1989.3）
- 1985.07 インド・デリー大学大学院留学（文部省国際交流計画）（-1986.05）
- 1988.04 日本学術振興会特別研究員（-1990.03）
- 1994.06 博士（文学）（東京大学）
- 1994.10 東京大学文学部助教授
- 1995.04 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 2006.01-03 School of Oriental and African Studies (University of London) 教授
- 2006.04 東京大学大学院人文社会系研究科教授
- 2007.04 東京大学大学院人文社会系研究科（次世代人文学開発センター兼任）教授
- 2011.03-04 Stanford University 客員教授
- 2012.02-05 University of Virginia 客員研究員
- 2013.06 東京大学大学院人文社会学研究科（次世代人文学開発センター配置換、インド哲学仏教学兼任）教授
- 2017.03-05 University of Vienna (Faculty of Philology and Cultures) 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

専門分野はインド仏教の教典形成史、および人文情報学（Digital Humanities）。前者については sutra, vinaya の形成過程の解明を通して初期仏教から大乘仏教にいたる思想史の構築を目標とする。この研究の過程で、大乘仏教の起源について伝承の媒体変化による発生という、新たな学説を提起するに至った。これまでの研究テーマは、(1)大乘仏教の形成過程と特徴の解明、(2)近代仏教学の仏教研究方法の問い直し、(3)仏教と現代の臨床的諸問題とのかかわりの考究、および(4)大乘仏教の起源研究という4点に集約される。西洋近代に生まれ、200年の歴史を有する仏教学の方法論全体を検証する作業のなかにこれらの4点を据え、仏教学があらたに進むべき道を開拓しつつある。後者の課題、人文情報学については、巨大仏教文献の電子化事業を進める過程で15年ほど前から本格的に着手した。現在、科学研究費基盤S「仏教学術新知識基盤の構築」を中心に据え、次世代に向けた仏教学の国際的知識基盤づくりをモデル的事業にしつつ、デジタル時代における人文学に必要な知識基盤の整備に努めている。

c 概要と自己評価

大乘経典形成過程の解明については、社会背景に成立要因を還元するという、これまで主流であった研究のもつ問題点をさまざまに洗い直し、テキスト研究としての大乘仏教研究の方法を整備してきた。この過程で、書写経典の創出による伝承形態の変容という新たな視点が獲得され、ここに3、4年は、エクリチュールとしての大乘経典の特性の解明をすすめる向きに進んできた。言語論的転回を経た人文学において重要な課題となったテキスト論は、ことに初期の大乘経典を扱うさいに不可欠な視点となる。仏教学方法論全般の問い直しについては、現在進められている仏教研究批判のほとんどが、オリエンタリズム論の影響を被ったままに留まっていることを反省し、仏教学の資料の特性と方法の適合性とを照合させる作業を進めている。いずれも作業は一段階を終えており、これから成果として発表できる地点にきている。

人文情報学にかんしては、ことにこの5年ほど蓄積した成果を国際学界において意欲的に検証しつづけたことによって、仏教研究が Digital Humanities という人文学新領域の構築と推進において果たすべき役割が大きく増した。ことに、文字の次元における Unicode への登録と ISO 漢字委員会への参加、テキストの次元における TEI (Text Encoding Initiative) コンソーシアムでの東アジア日本研究会の設置、画像の次元における IIIF (International Image Interoperability Framework) への参画は、日本の人文学全体にとって意義の大きな企図と評価している。仏教学という個別の分野からの貢献として、今後、さらに精力的に進めてゆきたい。

d 主要業績

(1) 著書

共著、Charles Muller, Masahiro Shimoda, Kiyonori Nagasaki, “The SAT Taishō Text Database: A Brief History,” 査読有、
Jiang Wu and Greg Wilkinson ed. *Reinventing the Tripitaka: Transformation of the Buddhist Canon in Modern East Asia*, 2017,
Lanham: Lexington Books.

(2) 論文

単著、下田正弘「仏教の社会的実践を考えるためのいくつかの課題」(『日本仏教学会年報』#81、査読有、2016、pp.
155-168)

単著、Masahiro Shimoda, “Towards the Construction of a Common Infrastructure for CJK Ideographs in the Sinographic Cultural
Sphere,” *Transactions of the International Conference of Eastern Studies*, 61, pp. 125-129, The Tōhō Gakkai, 2016.12

単著、下田正弘「書評論文 島菌進『日本仏教の社会倫理——「正法」理念から考える』——」(『宗教研究』90-3、
査読有、2016.12: 106-113)

単著、下田正弘「仏教学の方法と未来——領域独存から超域共存へ——」(『印度学仏教学研究』65-2、査読有、2017、
pp. 1-11)

単著、下田正弘「比較思想と人文情報学——デジタル・ヒューマニティーズの現在から——」(『比較思想研究』44
号、pp. 52-57、2017)

(3) 講演録

下田正弘「称名念仏の意味について」(『在家仏教』66巻、通巻778号、pp. 12-30、2017.3)

下田正弘「称名念仏と浄土——現代の思想的課題からの照射——」(『現代と親鸞』35号、pp.261-285、2017.6)

(4) 学会・シンポジウム

国際(基調講演)、(Invited, Keynote) Masahiro Shimoda “Reconsidering the origin(s) of Mahāyāna Buddhism in the post-
Linguistic Turn era” *Eko Center Internationales buddhistisches Symposium im Eko-Haus (Dusseldorf: Germany)*, 2016.4.2

国際(招待)(Invited) Masahiro Shimoda, “The Significance of Constructing a Buddhist Studies Knowledge Base in the Diversity
of Digital Humanities,” Masahiro Shimoda (University of Beijing), 2016.4.22

国際(主催) 下田正弘、国際東方学会会議「漢字文化圏に共通する漢字基盤の構築に向けて」東京、2016.5.20

国際(基調講演)(Invited, Keynote) Masahiro Shimoda, “Reconsidering the Methodologies for the Study of Mahāyāna Sūtras
after the “Linguistic Turn” in History” Symposium: “The Buddha’s Words and Their Interpretations” (Otani University, Kyoto)
2016.5.27

国際(招待)(Invited) Masahiro Shimoda, “Some Reflections on Hermeneutical Issues Concerning the Tathāgatagarbha Theory
in Relation to the Mahāparinirvāṇa-mahāsūtra: Wōnhyo, Bu ston and Critical Buddhism,” “International Conference on the
*Tathāgatagarbha *or Buddha-nature Thought: Its Formation, Reception, and Transformation in India, East Asia, and Tibet,” the
Geumgang Center for Buddhist Studies (GCBS) at Geumgang University, South Korea, 2016.8.7

国際(招待)(Invited) Masahiro Shimoda, “Missions of Buddhist Studies in Digital Humanities for Developing the Full Potentials
of Arts and Humanities Studies in the Digital Age”, at International Workshop entitled “Presenting Cultural Specificity in Digital
Collections” University of Singapore (Singapore), 2016.8.12

国内(主催)、下田正弘「仏教学の方法と未来」(日本印度学仏教学会第67回学術大会、東京大学)、2016.9.3

国際(招待)(Invited) Masahiro Shimoda “Future of East Asian Digital Humanities” Annual Conference of Japanese Association
of Digital Humanities “Digital Scholarship in History and the Humanities” University of Tokyo, 2016.9.14

国際(招待)(Invited) Masahiro Shimoda, “Possibilities of Re-creation of Buddhist Studies in the Digital Age” Buddhist Literacy
in Early Modern Northern Vietnam Rutgers University, Rutgers University (USA), 2016.9.24

国際(招待、基調) “Significant Potentials of the Humanities in East Asia for the Development of Globally Shared Digital
Humanities: Illustrative Details Provided by Buddhist Studies,” 6th Conference of Digital Archive and Digital Humanities,
National Taiwan University, 2015. 12.2

国内(招待、基調) 下田正弘「テキストが消えるとき——人文学の所在——」筑波大学哲学思想学会、2016.10.15

国際(招待)(Invited) Masahiro Shimoda “Missions of Buddhist Studies in Digital Humanities for Developing the Full Potentials
of Arts and Humanities Studies in the Digital Age” (Revised version of the presentation with the same title given at the University
of Singapore) 2016.10 “International Conference on Recent Trends in Buddhist Research” Zhejiang University (China),
2016.10.22

国内(招待) 下田正弘「法然浄土教の意義」(浄土宗研究公開講座) 大正大学、2017.2.6

- 国際（招待）International Symposium “Vom Palmblatt ins Digital Archiv”, „The Future of Digital Texts in South Asian Studies,” Austrian Academy of Science, May 22, 2017
- 国内（招待）下田正弘「比較思想と人文情報学」、比較思想学会 44 回学術大会（特別パネル「情報化と比較思想」）中央大学、2017.6.18
- 国際 Masahiro Shimoda, “Self-benefit and the benefit to others in Pure land Buddhism in India,” The 18th Biannual Conference of International Association for Shin Buddhist Studies, 1st July 2017, (Tokyo, Japan)
- 国内（招待）浄土宗テキスト公開講座招待講演「浄土宗全書データベースと SAT 大蔵経データベース連携の意義について」（浄土宗宗務庁）、2017.7.24
- 国際（共同発表）Kiyonori Nagasaki, Tetsuei Tsuda, X. Jie Yang, Yuho Kitazaki, A. Charles Muller, Masahiro Shimoda, “A Collaborative Approach between Art History and Literature via IIF”, Digital Humanities 2017, Montreal, Canada, (2017.8.7-11)
- 国際 Masahiro Shimoda, “Chinese Translations and a Pāli Commentary to Bridge a Gap between the “Northern” and the “Southern” Traditions,” 18th Conference of the International Association of Buddhist Studies, 22nd August 2017, University of Toronto, (Toronto, Canada)
- 国内（招待講演）『新纂浄土宗大辞典』がもたらすもの 浄土宗総合学術大会（浄土宗総合学術大会特別部会企画）、大正大学、2017.9.7
- 国際（共同発表）Naoki Kokaze, Kiyonori Nagasaki, Makoto Goto, Yuta Hashimoto, Masahiro Shimoda, and A. Charles Muller, “TEI/XML Methodological Examination on Unit Conversion not Based on the Metric System,” TEI Conference 2017, Victoria, Canada, (2017.11.14)
- 国際（主催）国際シンポジウム「デジタルアーカイブ時代の人文学の構築に向けて——仏教学のための次世代知識基盤の構築——」（東京大学）、2018.1.6-7
- 国際（招待、基調講演）「デジタルアーカイブ時代における日本の人文学の課題」（関西大学シンポジウム「デジタルアーカイブが開く東アジア文化研究の新しい地平」）、2018.2.17
- 国際（招待）(Invited) Masahiro Shimoda, “Retrospect and Prospects of Humanities Studies in the Digital Age” (The Second International Interdisciplinary Faculty Forum of the University of Chicago and the University of Tokyo), Perspectives on Big Data, (University of Chicago) USA, 2018.3.12
- 国際（招待）(Invited) Masahiro Shimoda, “Overview of the Activities of Digital Humanities Initiative at the University of Tokyo” International Conference on Cyberinfrastructure for Historical China Studies, Harvard Yenching Institute, Organized by Peter Bol, Donald Sturgeon and Wang Hongsu, Shanghai, 2018.3.15

(5) プレリリース（東大広報）

- 研究成果「2800 字超の外字が Unicode に収録される」2017.7.14
- 研究成果「万暦版大蔵経（嘉興蔵）デジタル版が公開された」2017.9.7
- 研究成果「人文情報学拠点が中国デジタル図書館国際協力計画（CADAL）に日本初の加盟」2018.1.24

(6) 科研費等

- 研究代表者、科学研究費基盤研究 S 「仏教学新知識基盤の構築——次世代人文学の先進的モデルの構築」（2015.6-）
- 研究分担者、科学研究費基盤研究 A 「バウッダコーシャ」

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- ウィーン大学教授
- 武蔵野大学大学院非常勤講師
- 朝日カルチャーセンター講師

(2) 学会

- 国際、Alliance for Digital Humanities Organizations、理事
- 国際、International Association for Buddhist Studies、理事
- 国際、The Eastern Buddhist Society, Board Member（編集顧問）
- 国際、Japanese Association for Digital Humanities（日本デジタル・ヒューマニティーズ学会）会長、理事
- 国内、日本印度学仏教学会、理事長
- 国内、日本宗教学会、常務理事、評議員
- 国内、財団法人東方学会、理事

国内、仏教思想学会、理事
国内、パーリ学仏教文化学会、理事
国内、比較思想学会、理事
国内、日本学術会議連携会員

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

大蔵経テキストデータベース研究会(SAT)、代表委員
一般財団法人人文情報学研究所、評議員
大蔵経研究推進会議、常任議員、議長
公益財団法人仏教伝道協会、英訳大蔵経編集委員会委員
一般財団法人石原奨学育英会、評議員
一般財団法人仏教学術振興会、理事、選考委員
公益財団法人国際宗教研究所、監事
宗教法人曹洞宗将来構想委員会第一部会、委員
一般財団法人東京大学仏教青年会、理事

教授 ミュラー アルバート・チャールズ MULLER, Albert Charles

1. 略歴

1981年9月 ニューヨーク州立大学（ストーニブルック校）宗教学部専攻課程入学
1985年5月 同 上 卒業
1984年9月 関西外国語大学入学
1985年5月 同 上 修了
1986年9月 バージニア大学大学院博士課程入学（アジア宗教学専攻）
1987年5月 同 上 ニューヨーク州立大学大学院転学のため退学
1987年9月 ニューヨーク州立大学大学院（ストーニブルック校）比較文学科博士課程入学
1993年8月 同 上 修了（文学博士）
1994年4月 東洋学園大学助教授（～1997年3月）
1997年4月 同 上 教授（～2008年8月）
2005年4月 東京大学教養学部・英語科・非常勤講師（～2007年3月）
2008年10月 東京大学人文社会系研究科・特任教授（～2013年9月）
2013年11月 東京大学人文社会系研究科・教授（～現在）

2. 主な研究活動

a 専門分野

東アジア仏教 韓国朝鮮仏教・儒教 唯識仏教 禅仏教 デジタル・ヒューマニティーズ

b 研究課題

- ①韓国新羅時代の仏教、特に影響力を持った学僧：元曉(617-686)、太賢(8c)などの思想と経典注釈。
- ②韓国朝鮮前期の禅仏教、特に禅僧：己和(1376-1433)の思想、活動、著作。
- ③中国唐・宋・明時代と韓国高麗・朝鮮時代における仏教・儒教・道教（いわゆる「三教」）の関係。
- ④東アジアの仏教・儒教・道教における「体用」(essence-function)の哲学的パラダイムの意味と役割。
- ⑤西洋的認識論、行動心理学、および仏教の見解に関する faith(信仰)、belief(信念)、viewpoint(見方)、opinion(意見)概念の多文化的比較。
- ⑥仏教専門語の漢・英インターネット辞典の編集。(www.buddhism-dict.net/ddb)
- ⑦儒教・道教・東アジア史の専門語の漢・英インターネット辞典の編集。(www.buddhism-dict.net/dealt)

⑧東アジア思想・歴史・言語に関する研究、電子化テキスト、論文、著書、翻訳、索引などのリソースウェブ・サイトの編集、管理。(www.acmuller.net)

c 概要と自己評価

My basic training in graduate school was in the study of Korean Buddhism, classical, medieval and premodern, which means that I have been throughout, reading texts written in kanbun. Since Korean Buddhism is a vastly understudied area (there are only a handful of specialists of Korean Buddhism Japan and the West), I have sought to make available for other scholars the works of Korean scholar monks who were influential in Korea, as well as East Asia. I began my career by studying the works of the Goryeo-Joseon monk Gihwa 己和 (1376-1433), but for the past 15 years, have focused mainly on the writings of the hugely influential scholar-monk Wonhyo 元曉 (617-686), along with the works of some of his influential contemporaries.

From the beginning of my career, I have also been deeply interested in the work of translating classical Buddhist works (as well as Confucian and Daoist works) into modern English, and so translation has become one of the major components of my career. Also, since I discovered early in my career that there were no good dictionaries available for this kind of translation work, I began to compile my own dictionaries, which I developed using the Internet. Nowadays, with the help of scores of collaborators, I maintain two large dictionaries on the web (www.buddhism-dict.net) which are used by scholars and students throughout universities in the West. In turn, this work in development of web resources has led me into the field of Digital Humanities.

d 主要業績

(1) 論文

- Muller, A. Charles. 2018. "An Inquiry into Views, Beliefs and Faith: Lessons from Buddhism, Behavioural Psychology and Constructivist Epistemology." *Contemporary Buddhism*. : 1–20. [DOI: <https://doi.org/10.1080/14639947.2018.1442134>]
- Muller, A. Charles. 2018. "インド仏教の中国化における体用論の出現—その概要を論ず—." 東アジア仏教学術論集 5 : 125-199.
- Muller, A. Charles. Masahiro Shimoda, and Kiyonori Nagasaki. 2017. "The SAT Taishō Text Database: A Brief History." In Wu, Jiang, Greg Wilkinson, eds. *Reinventing the Tripitaka: Transformation of the Buddhist Canon in Modern East Asia*. Lanham, MD: Lexington Books. 175–185.
- Muller, A. Charles. 2017. "Xiong Shili and the New Treatise: A review discussion of *Xiong Shili, New Treatise on the Uniqueness of Consciousness*, an annotated translation by John Makeham." *Sophia* 56 (3) : 523-526. [DOI: 10.1007/s11841-017-0595-8]
- Muller, A. Charles. 2017. "The Meaning of the Explicit and Inexplicit Approaches in Wŏnhyo's System of the Two Hindrances (*Ijang ūi* 二障義)." *Journal of Korean Religions* 8 (1) : 63–91.
- Muller, A. Charles. 2017. "Japanese Studies of Korean Buddhism: The Present State of the Field." *Acta Asiatica* 112 : 91–104.

(2) 学会発表

- "Buddhist Translation in the 21st Century: Experiences, Obstacles, and Solutions." Symposium: Translating Buddhist Texts: The Making of an English Buddhist Canon; May 3, 2018, Berkeley CA.
- "The DDB/CJKV-E Dictionaries after 32 Years: History, Structure, Sustainability." International Conference on a Cyberinfrastructure for Historical China Studies. Harvard Center, Shanghai. March 16, 2018.
- "The DDB/CJKV-E Dictionaries after 32 Years: History, Structure, Sustainability." International Workshop on Buddhist Lexicography in the 21st Century: Savitribai Phule Pune University. March 3, 2018.
- "The DDB/CJKV-E Dictionaries after 32 Years: Progress, Challenges, Long-term Sustainability." International Symposium: The Construction of the Humanities in the Age of the Digital Archive: The Construction of A Next-generation Knowledge Base for Buddhist Studies. January 6, 2018.
- "Classics/Buddhist Translation in the 21st Century: Obstacles and Solutions." International Conference on the English Translation of Korean Classics, Academy of Korean Studies, Bundang, December 8, 2017.

3. 主な社会活動

(1) Web Resource Development

- Charles Muller 編集 Digital Dictionary of Buddhism (電子佛教辞典 www.buddhism-dict.net/ddb) 範囲の拡大 : 2014/5 に 62,553 語彙→2016/5: 65,659 語彙
- Charles Muller 編集 CJKV-E Dictionary (漢日韓越-英辞典 www.buddhism-dict.net/dealt) 範囲の拡大 : 2014/5 に 37,814 語彙→2016/5: 47,680 語彙

教授 **長島 弘明** NAGASHIMA, Hiroaki
09b 日本語日本文学（国文学） 参照

教授 **武川 正吾** TAKEGAWA, Shogo
25 社会学 参照

教授 **中村 雄祐** NAKAMURA, Yusuke
27 文化資源学《文化資源学専門分野》 参照

准教授 **小林 正人** KOBAYASHI, Masato
01 言語学 参照

准教授 **高橋 典幸** TAKAHASHI, Noriyuki
10 日本史学 参照

准教授 **高岸 輝** TAKAGISHI, Akira
03 美術史学 参照

30 死生学・応用倫理センター

教授 池澤 優 IKEZAWA, Masaru (センター長)

06 宗教学宗教史学 参照

教授 神原 哲也 SAKAKIBARA, Tetsuya

04 哲学 参照

准教授 堀江 宗正 HORIE, Norichika

1. 略歴

- 1992年3月 東京大学文学部心理学専修課程卒業
- 1992年4月 東京大学文学部研究生（～1993年3月）
- 1993年4月 東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻修士課程入学
- 1995年3月 同修了（修士（文学）取得）
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野博士課程進学
- 2000年3月 同単位取得退学
- 2001年4月 聖心女子大学文学部専任講師
- 2003年4月 聖心女子大学大学院文学研究科専任講師兼任
- 2007年4月 聖心女子大学文学部准教授、聖心女子大学大学院文学研究科准教授兼任
- 2008年9月 博士（文学）取得（東京大学大学院人文社会系研究科）
- 2013年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

死生学、宗教学、スピリチュアリティ研究、環境思想

b 研究課題

日本人の死生観、宗教研究、現代日本人の個人主義的スピリチュアリティ、未来倫理

c 概要と自己評価

研究と教育の方向性は大きく二つに分けられる。一つは死生学方面で、もう一つは環境思想方面である。この二つは、死生学・応用倫理センターの、「死生学」と「応用倫理」に対応する。

死生学方面では、かねてよりおこなっていた被災地での霊的体験に関する調査研究を英語論文にまとめ、韓国でも発表するなど、日本の被災者の状況と死生観について国際的に発信することができた。韓国の研究者との交流は定期的に続いている。また、死にゆくものの心理、悲嘆の心理、自殺、孤立死など、現代社会で人々が知りたいと思う、死生学のトピックを広く研究してきた。

この死生学方面の研究と関連するのが、スピリチュアリティ研究・宗教研究である。現代人の個人主義的なスピリチュアリティへの関心の具体例として「パワースポット」現象なども取り上げ、これを個人主義的な伝統回帰として位置づけた。それと関連して、現代社会におけるスピリチュアリティの位置づけについても研究を進めた。その結果、スピリチュアリティが個人的なものにとどまらず、公的領域に進出している状況、また社会的病理としての「うつ」とどのように関わっているかなどを明らかにした。

一方、環境思想方面は、理論的なものと現実的なものの両面で研究を展開してきた。理論的なものとして、P・リクルの哲学と「希望」という概念の生成過程をまとめた。現実的なものとしては、原発事故と同様の問題が東アジア各国で起こっているという現状を指摘し、市民の連帯の可能性を示唆した。

今後、日本人の死生観の量的調査を続行し、死生観に関する基礎的なデータを提供することを当センターの社会的責務と位置づけ、着実に実行していきたい。また、現在は、島藺進名誉教授（現在は上智大学）と川崎市におけるケア提供者の死生観、スピリチュアリティについて質的に調査している。いずれ、都市型社会における人々の苦しみの重層性、その中から立ち上がるケア提供者の来歴について、調査をまとめてゆきたい。また、環境思想方面では、未来倫理に関する探究をすすめ、理論的な方面での研究を進めてゆきたい。

d 主要業績

(1) 論文

堀江宗正、「島田裕巳——「心の時代」からオウム真理教へ」、『ひとびとの精神史 第8巻 バブル崩壊——1990年代』（岩波書店、2016年5月）、75-103頁

堀江宗正、「リクルと現代社会——われわれは何を希望することが許されるか」、鹿島徹・越門勝彦・川口茂雄編『リクル読本』（法政大学出版局、2016年7月）、27-36頁

Norichika Horie, "Continuing Bonds in the Tōhoku Disaster Area: Locating the Destination of Spirits," *Journal of Religion in Japan* 5, pp. 199-226.

堀江宗正「経済優先から〈いのち〉の連帯へ——原発事故を契機として」、『死生学・応用倫理研究』22号（2017年7月）、45-70頁

Norichika Horie, "The Making of Power Spots: From New Age Spirituality to Shinto Spirituality," Jørn Borup and Marianne Qvortrup Fibiger (eds.), *Eastspirit: Transnational Spirituality and Religious Circulation in East and West* (Brill, August 2017), pp. 192-217.

堀江宗正、「死と看取りの宗教心理——自己の死と他者の死のつながり」、清水哲郎・会田薫子『医療・介護のための死生学入門』（東京大学出版会、2017年8月）、141-171頁

堀江宗正、「職場スピリチュアリティとは何か——その理論的展開と歴史的意義」、『宗教研究』第91巻2輯（2017年9月）、413-438頁

堀江宗正「スピリチュアリティと「うつ」とポジティブ思考」、『臨床精神病理』第38巻第2号（2017年9月）、191-200頁

堀江宗正、「파워스팟 체험의 현상학 : 현세이익에서 심리이익으로 (パワースポット体験の現象学——現世利益から心理利益へ)」、『日本批評 Korean Journal of Japanese Studies』18、2018年2月15日、
<<https://doi.org/10.291514/ILBI.2018.18.126>>

(2) 書評

堀江宗正、井藤美由紀『いかに死を受けとめたか——終末期がん患者を支えた家族たち』（ナカニシヤ出版、2015）、『宗教研究』第90巻3輯（2016年12月）、639-645頁

(3) 学会発表

島藺進・堀江宗正、「Suicide Prevention in Japan: Does religion help to prevent suicide?」、第7回国際自殺予防学会アジア・太平洋地域大会（東京コンベンションホール、2016年5月19日）

堀江宗正、「トニー・ウォルターの悲嘆文化論」、上廣死生学・応用倫理講座『医療・介護従事者のための死生学——2016年度夏季セミナー』（東京大学、2016年7月30日）

堀江宗正、「スピリチュアリティと抑うつとポジティブ思考」、日本精神病理学会発表（アクトシティ浜松、2016年10月7日）

堀江宗正、「The Making of Power Spots: From New Age Spirituality to Shinto Spirituality」、Association of Asian Studies (Sheraton Centre Toronto Hotel、2017年3月19日）

堀江宗正、「Continuing Bonds in the Tōhoku Disaster Area: Locating the Destinations of Spirits」、翰林大学生死学研究所国際シンポジウム、2017年5月19日

堀江宗正、「市場スピリチュアリティから職場スピリチュアリティへ——消費からの脱却?」、「宗教と社会」学会（大阪国際大学、2017年6月4日）

堀江宗正、「孤立と排除の死生学——孤独の背景」、上廣死生学・応用倫理講座『医療・介護従事者のための死生学——2017年度夏季セミナー』（東京大学、2017年9月3日）

堀江宗正、「教義と臨床のはざままで——宗教は自殺罪悪観を乗り越えられるか」、日本自殺予防学会（つくば国際会議場、2017年9月23日）

堀江宗正、「死と生に学ぶ——私の研究と経験から」、築地本願寺仏教文化講座（築地本願寺、2017年10月14日）

堀江宗正、「ケアに向かう人——その動機づけについて」、日本臨床知識学会発表（東京大学、2018年1月27日）

堀江宗正、「物語的現実としての霊——他者の死と自己の死をつなぐもの」、宗教哲学会シンポジウム発表（京都大学、2018年3月24日）

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本宗教学会、「宗教と社会」学会、日本社会学会、日本生命倫理学会、日仏哲学会

3 1 北海文化研究常呂実習施設

准教授 熊木 俊朗 KUMAKI, Toshiaki

1. 略歴

1990年3月	北海道大学文学部文学科言語学専攻課程卒業
1990年4月	旭化成工業株式会社入社
1994年3月	明治大学文学部史学地理学科考古学専攻卒業
1996年3月	東京大学大学院人文社会系研究科考古学専門分野修士課程修了
1996年4月	東京大学文学部助手（附属常呂実習施設勤務）
2004年4月	北海道常呂町教育委員会社会教育課ところ遺跡の森主幹
2005年2月	博士（文学）学位取得 東京大学大学院人文社会系研究科
2006年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

北東アジア考古学

b 研究課題

北海道を中心とした北東アジア地域の考古学的研究を専門とするが、特に近年は以下の2点を主要な課題として、北海道やロシア極東地域でフィールドワークを中心とした調査研究を行っている。

- (1)アイヌ文化成立過程の考古学的研究
- (2)日本列島とアジア大陸の「北回りの交流」に関する研究

c 概要と自己評価

上記研究課題について、2016年度～2017年度には以下の研究をおこなった。

1) 北見市大島遺跡群の発掘調査

北見市大島遺跡群は、擦文文化の竪穴住居等からなる集落遺跡である。アイヌ文化の直接の母体になったと考えられる擦文文化の終末過程や、擦文文化とオホーツク文化の関係について解明するため、北見市大島遺跡群（大島2遺跡・大島1遺跡）の発掘調査を実施した。この調査は2010年度から継続して実施しており、2013年度までに大島2遺跡で2軒の竪穴住居跡を完掘し、その年度分までの調査報告書を2015年度末に刊行している。2016年度から2017年度にかけては大島2遺跡で2軒、大島1遺跡で1軒の竪穴住居跡の発掘調査を行い、竪穴住居跡の構造や出土遺物、住居の廃絶儀礼、オホーツク文化との関連等について新知見を得た。また、大島1遺跡では2017年度から地形測量調査に着手し、竪穴住居跡の分布や集落構造に関する再検討を開始した。本遺跡群については、2018年度以降も調査を継続する予定である。

2) ロシア極東地域における共同調査

国立歴史民族博物館の共同研究「柳田國男収集考古資料の研究」に共同研究者として参加し、柳田國男が関係したロシア連邦サハリン州の先史時代遺跡を中心に、サハリンと北海道の先史文化交流に関する調査研究を行った。また、ロシア連邦ハバロフスク地方の遺跡探査に関する共同研究に参加し、同研究で行われた発掘調査に対して、資料の整理と分析に協力した。

3) オホーツク土器の型式編年に関する研究

斜里町チャシコツ岬上遺跡から出土したオホーツク土器・トビニタイ土器の分析をおこない、型式編年を検討した。また、市立函館博物館・北海道立北方民族博物館が所蔵するオホーツク文化の土器について分析をおこない、型式編年を検討した。後者の成果は2018年度に発表する予定である。

d 主要業績

(1) 著書

- 共著、設楽博己ほか編、『柳田國男と考古学 ―なぜ柳田は考古資料を収集したのか―』、新泉社、2016.5
共著、北海道立北方民族博物館編、『北海道立北方民族博物館第31回特別展図録 北からの文化の波』、一般財団法人北方文化振興協会、2016.7

共著、Kumaki, Toshiaki、『Circum-Pacific Archaeology: In the Memory of Igor Yakovlevich Shevkomud』、The Pacific Publishing House “Rubezh”, Vladivostok、2017.12

(2) 論文

熊木俊朗、「擦文文化堅穴住居跡の廃絶儀礼について」、『考古学ジャーナル』、No. 688、2016.9

熊木俊朗・福田正宏・國木田大、「鈴谷式土器とその年代—柳田國男の「樺太紀行」に寄せて—」、『国立歴史民俗博物館研究報告』、第202集、2017.3

熊木俊朗、「チャシコツ岬上遺跡出土オホーツク土器・トビニタイ土器の編年試案」、『チャシコツ岬上遺跡総括報告書』、斜里町教育委員会、2018.3

(3) 学会発表

国内、熊木俊朗、「教育講演Ⅱ 古代の海洋民 オホーツク人とその文化」、第17回日本赤十字看護学会学術集会、日本赤十字北海道看護大学、2016.7.3

国内、夏木大吾・山田哲・中村雄紀・廣松滉一・吉留頌平・太田圭・佐藤宏之・増子義彬・佐藤宏之・熊木俊朗、「北海道北見市吉井沢遺跡の調査成果（第10次）」、第18回北アジア調査研究報告会、札幌学院大学、2017.2.19

国内、福田正宏・Gablirchuk, M.・國木田大・田尻義了・Shipovalov, A.・Gorshkov, M.・福永将大・夏木大吾・熊木俊朗、「アムール流域における考古学的調査報告（2016年度）」、第18回北アジア調査研究報告会、札幌学院大学、2017.2.19

国内、熊木俊朗・夏木大吾・中村雄紀、「2016年度北海道北見市大島2遺跡発掘調査報告」、第18回北アジア調査研究報告会、札幌学院大学、2017.2.19

国際、熊木俊朗、「紀元一千年紀前後におけるサハリンと北海道の先史文化交流」、第31回北方民族文化シンポジウム網走「環北太平洋地域の伝統と文化 1 サハリン」、網走市エコーセンター2000、2017.3.24

国内、熊木俊朗・夏木大吾・市川岳朗、「2017年度北海道北見市大島遺跡群発掘調査報告」、第19回北アジア調査研究報告会、東京大学、2018.3.11

国内、夏木大吾・太田圭・池山史華・舟木太郎・佐藤宏之・國木田大・熊木俊朗・廣松滉一・山田哲・中村雄紀、「北海道北見市吉井沢遺跡の調査成果（第11次）」、第19回北アジア調査研究報告会、東京大学、2018.3.11

(4) 展示

「常呂資料陳列館第5回企画展 続縄文文化と交流」、夏木大吾、2016.3.14～2016.5.13

「常呂資料陳列館第6回企画展 旧石器時代の狩猟採集民と細石刃技術」、夏木大吾、2016.11.7～2016.12.25

「常呂資料陳列館第7回企画展 動物を祀る —オホーツク文化の動物観—」、夏木大吾、2017.11.6～2017.12.25

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

北海道教育庁、「北海道東部の大規模堅穴住居跡群をめぐる研究の現状と課題」、2016.6

非常勤講師、北見工業大学、「オホーツクと環境」、2017.6

特別講演、湧別町教育委員会、「回みで残る堅穴住居跡群遺跡 —北海道・サハリン・アムール下流域—」、2017.11

(2) 学会

国内、日本考古学協会、埋蔵文化財保護対策委員、2016.4～2018.3

国内、北海道考古学会、遺跡保護特別委員会委員、2016.4～2018.3

(3) 行政

自治体、北海道教育庁生涯学習推進局、教育政策、北海道東部の堅穴住居跡群調査懇談会構成員、2016.4～2018.3

自治体、北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル北見、教育政策、施設運営協力委員会委員、2016.4～2018.3

自治体、北海道北見市教育委員会、教育政策、北見市常呂自治区社会教育推進会議 副委員長、2016.4～2018.3

自治体、北海道北見市教育委員会、教育政策、北見市文化財審議委員会委員、2016.4～2018.3

自治体、北海道北見市、教育政策、北見市史編集委員会委員、2016.4～2018.3

自治体、北海道斜里町教育委員会、教育政策、斜里町チャシコツ岬上遺跡調査検討委員、2016.4～2018.3

自治体、北海道北見市教育委員会、教育政策、北見市史跡整備委員会 副委員長、2016.12～2018.12

3 2 上廣倫理財団死生学・応用倫理寄付講座

特任教授 清水 哲郎 SHIMIZU, Tetsuro

1. 略歴

- 1969年4月 東京大学理学部天文学科卒業
1972年3月 東京都立大学人文学部人文学科（哲学専攻）卒業
1974年3月 同大学大学院人文科学研究科修士課程修了
1977年3月 同大学大学院人文科学研究科博士課程単位修得退学
1977年6月～80年8月 東京都立大学人文学部倫理学講座助手
1980年8月～82年8月 北海道大学文学部西洋哲学第二講座講師
1982年8月～93年3月 同 助教授
1990年2月 文学博士（東京都立大学）
（1990年10月～91年6月文部省在外研究員（英国ケンブリッジ大学））
1993年4月～96年3月 東北大学文学部助教授（西洋哲学史第一講座）
1996年4月～2000年3月 同 教授
2000年4月～2007年3月 東北大学大学院文学研究科教授（哲学講座）
（2004年4月～2006年3月 東北大学教育研究評議会評議員、文学研究科副研究科長）
2007年4月～2012年3月 東京大学大学院人文社会系研究科 次世代人文学開発センター 上廣死生学講座
特任教授
2012年4月～2017年3月 同大学院同研究科 死生学・応用倫理センター 上廣死生学・応用倫理講座
特任教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

哲学、臨床倫理学、臨床死生学、西欧中世思想

b 研究課題

- ①医療現場に臨む哲学・臨床倫理学から臨床死生学へ
- ②西欧中世の言語哲学・キリスト教思想

c 概要と自己評価

①医療現場に臨む哲学・臨床倫理学から臨床死生学へ 医療の現場への哲学的アプローチから出発し、その思索を医療の質の向上につなげるべく、研究と実践が一体となった活動を行っている。従来の人文系の研究者による生命倫理学研究は現場と結びつかずに終わっていたのに対し、80年代後半から医療現場の医師、看護師等と対話しつつ哲学するという新しい試みをして来ており、その線上で、医療者が患者・家族とコミュニケーションを通して治療方針の決定等に至るプロセスを、現実に有効であり、理論的にも適切に基礎付けられたものとして整えようとする臨床倫理学研究に取り組んでいる。最近では、介護の現場にも活動領域を広げている。この面の活動を臨床倫理プロジェクトとして主宰し、臨床現場の医療・介護従事者と協働しながら、ケアの質の向上を目指している。

この線上で、臨床現場において死生をどう理解し、その理解を医療・介護のケア実践にどう活かして行くかという臨床死生学の課題にも向かっている。最近では、高齢者が経口摂取できなくなった時の人工的水分・栄養補給の導入について、日本老年医学会の要請により意思決定プロセスについてのガイドライン作成に取り組んだが、ここから本人・家族の本人らしい選択を支援する意思決定プロセスノートの開発（2013年6月書籍刊行）、さらに現在から人生の最期に到るプロセスを見通して心積もりをすることを支援する「心積りノート」の開発に取り組み、第一版を冊子体およびeブックとして公開し、2016年には改訂増刷をした。本研究開発に基づき、成果の社会還元として、死の直前のことだけ予め考え、準備する「終活」に対して、高齢者が元気なうちから、「今から終わりまで」を見渡して、老いの進行を見込んで、どのように暮らし、活動し、どのようなケアを受けたいかを心積りしておく「老活」を提唱しつつある。

②西欧中世の言語哲学・キリスト教思想 西欧中世における言語と論理の哲学をテーマとし、当時の哲学者たちが古代ギリシア哲学とキリスト教思想の伝統を受け継ぎ、この二つの絡み合いにおいて西欧中世特有の哲学的思索を展開していく状況を明らかにしつつ、現代の私たちの哲学がそこから学び得るものを見出そうとした。アンセルムス、アベラ

ルドゥス、オッカムを主要な研究対象としているが、さらにキリスト教思想伝統の源流であるパウロ思想等にも取り組む。ただし、①の活動で手一杯であり、本領域の研究は現在休業状態である。

d 主要業績

(1) 著書

- 小野沢滋（編著），『在宅栄養管理：経口から胃瘻・経静脈栄養まで』改訂第二版，南山堂，2016.9，全273頁
清水哲郎 執筆部分：意思決定プロセスの臨床倫理：厚生労働省と老年医学会のプロセス・ガイドライン，単著，154-162頁
- 船戸・鍋谷編著，『新生児・小児医療にかかわる人のための看取りの医療 改訂第2版』診断と治療社，2016.5，全236頁
清水哲郎 執筆部分：小児におけるエンドオブライフ・ケアの臨床倫理，単著，59-72頁
- 清水哲郎＋臨床倫理プロジェクト，『上手に老い、最期まで自分らしく生きるための心積りノート』，臨床倫理プロジェクト，改訂増刷 2016.8，全58+11頁
- 石橋由孝（監修・編著），『絶対成功する腎不全・PD診療 TRC』，中外医学社，2016.6，全209頁
清水哲郎 執筆部分：高齢者ケアに必要な視点—人間における倫理の成り立ち：《皆一緒》と《人それぞれ》のブレンド，単著，127-132頁
- 東京大学高齢社会総合研究機構（編著），『東大がつくった高齢社会の教科書』，東大出版，2017.3，全311頁
清水哲郎 執筆部分：（12章） 最期の日々を自分らしく，単著，189-204頁

(2) 論文その他

清水哲郎，《分かり合える》と《分かり合えない》のはざままで—または《皆一緒》にして《人それぞれ》である私たち（シンポジウム報告），単著，医学哲学医学倫理，34：75-78，2016

(3) 研究費の獲得状況

日本学術振興会科学研究費 基盤研究（A）「臨床倫理検討システムの哲学的見直しと臨床現場・教育現場における展開」（2015～28年度），研究代表者．平成28年度 直接経費 530万円

(4) 学会講演・国際会議発表など

- シンポジスト提題「看護実践を支える臨床倫理」，第61回日本透析医学会学術集会シンポジウム「透析医療と看護倫理」，グランキューブ大阪（大阪市北区），2016.6.10-12
- 基調講演「〈人それぞれ〉と〈皆一緒〉、そして〈人生〉と〈生命〉」，第16回日本音楽療法学会学術大会，仙台国際会議場，2016.9.17
- 特別講演「エンドオブライフ・ケアの倫理—良い人生と尊厳をめぐる—」，第40回死の臨床研究会年次大会，札幌コンベンションセンター（札幌市白石区），2016.10.8-9
- シンポジスト提題「「スピリチュアル」面のケア 原点に立ち返って」第40回死の臨床研究会年次大会 シンポジウム「もう一度考えよう！スピリチュアルケアとは？」，札幌コンベンションセンター（札幌市白石区），2016.10.8-9
- パネリスト提題（招待）「在宅高齢者本人と家族の意思決定支援—救急に関するACPをめぐる—」，第44回日本救急医学会パネル「終の棲家と高齢者救急—在宅医と救急施設の円滑な連携を目指して—」，グランドプリンスホテル新高輪（東京都港区），2016.11.17-19
- 講演，治療方針決定プロセスの臨床倫理—〈人間関係〉と〈人生〉について—，秋田県医師会設立69周年記念医学大会，秋田県総合保健センター（秋田県秋田市），2016.11.23
- 講演，エンドオブライフ・ケア—快適で尊厳ある人生を最期まで生きるために—，第13回長野県褥瘡懇話会，伊那県民文化会館（伊那市），2016.11
- シンポジスト提題，死生学の誕生とメンタルヘルスの課題，メンタルヘルス関連三学会合同大会日本精神衛生学会企画シンポジウム「21世紀のメンタルヘルス」，一橋講堂（東京都千代田区），2016.12.10
- 講演，意思決定支援の臨床倫理—エンドオブライフ・ケアをめぐる—，第71回富山県医学会，富山県医師会（富山市），2017.1.29
- 特別講演「本人・家族の意思決定支援—臨床倫理の視点から—」，第44回集中治療医学会，ニトリ文化ホール（札幌市中央区），2017.3.8-11
- シンポジスト提題「《臨床倫理プロジェクト》に関連付けて」，日本生命倫理学会臨床倫理セミナー・シンポジウム 2017 公開シンポジウム「今後の臨床倫理サポートについて」，立教大学（東京都豊島区），2017.3.25-26

3. 主な社会活動

(1) 学術団体役員・各種委員等

日本学術会議連携会員

日本生命倫理学会理事

日本臨床死生学会常任理事

東北大学利益相反アドバイザーボード 委員長

日本緩和医療学会 鎮静ガイドライン作成専門委員, 終末期輸液ガイドライン作成専門委員

日本老年医学会 代議員

日本スピリチュアル・ケア学会 理事, 倫理要綱担当

日本医師会生命倫理懇談会 委員 (2016 年秋～)

(2) 他大学への出講

東京大学大学院医学系研究科 看護学特論 (1 コマ×1 回) 看護倫理 2016.4.21

東北大学歯学部 非常勤講師 (2 コマ×1 回), 医の倫理・社会の倫理 2016.6.2

宮城大学大学院看護学研究科非常勤講師 (2 コマ×4 回) 看護倫理 2016.5.10; 5.17; 5.31; 6.7

東京大学ジェロントロジー部局間・・・教育プログラム (1 コマ) 2016.7.6

慶応大学 看護 授業 (2 コマ×1 回) 2016.6.3

島根大学大学院医学研究科 (看護学) 非常勤講師 (集中), 看護倫理 2015.7.21

東京大学 GLAFS 高齢社会総合研究学特論 VIII (高齢社会の人文・社会科学) 2016.10.27

岡山大学歯学部授業 (死生学/エンドオブライフ・ケア) 2016.7.8

(3) 講演、研修会講師等

講師, 看護倫理, 日本看護協会認定看護師養成研修, 看護協会研修センター (清瀬), 2016.4.14

講演, エンドオブライフ・ケアと高齢者・家族の意思決定支援—死生学の視点から—, 東京大学 IOG 産学連携プロジェクト講演会, 2016.4.15

講師/研修会開催協力, 臨床倫理ファシリテーター養成, 北海道臨床倫理研究会, 札幌, 2016.5.28

講師/セミナー開催協力, 臨床倫理セミナー in さっぽろ, 北海道臨床倫理研究会, 札幌, 2015.5.29

講師, 看護専門職論 (看護実践の倫理、臨床倫理), 大阪府看護協会 認定看護管理者教育課程ファーストレベル, 大阪市, 2016.6.17; 9.21; 12.21

講義, 臨床倫理入門, 関西臨床倫理研究会新人ナース研修, 大阪府看護協会ナースングアート (大阪市), 2016.6.24

講師/セミナー開催協力, 臨床倫理セミナー, 諏訪中央病院, 茅野, 2016.7.2

講師/セミナー開催協力, 臨床倫理セミナー, 東北大学大学院医学系研究科緩和ケア看護学, 仙台, 2015.7.9

講演, 臨床倫理/エンドオブライフ・ケア, 2015 年度ソーシャルワーク スキルアップ研修「ソーシャルワークにおける臨床倫理」, 日本医療社会福祉協会, 新大阪丸ビル別館 (大阪市), 2015.7.23

講義, 臨床に生きる死生学 (臨床死生学コア), 東京大学 死生学・応用倫理センター 医療・介護従事者のための死生学夏季セミナー, 東京, 2016.7.30

講義/セミナー開催協力, 臨床における倫理の基礎, 平成 28 年度人生の最終段階における医療体制整備事業相談員研修指導者講習会 (厚生労働省 実施: 神戸大学緩和ケア科), AP 品川アネックス, 2016.7.31

講演, 最期まで自分らしく生きるために—暮らしと医療・ケアについての心積り—, 名古屋記念病院ホスピタル G 研究会「考えてみよう 人生の最終段階への道のり」, 名古屋国際会議場, 2016.9.4

講師, 倫理, スピリチュアルケア学会人材養成教育領域臨床専門職倫理, 武蔵野大学, 2016.9.16

講師/セミナー開催協力, 臨床倫理セミナー in かなざわ, 北陸地区臨床倫理事例研究会, 金沢大学病院 (金沢市), 2016.9.24

講師, 臨床倫理の考え方; 本人・家族の意思決定支援; グループワーク指導, 長野県看護協会看護師職能委員会研修, 長野県看護協会 (松本市), 2016.10.13

講師/セミナー開催協力, 臨床倫理セミナー in おおすみ, 健康県民プラザ鹿屋医療センター (鹿屋市), 2016.10.1

講義, 人生の最終段階における臨床倫理と相談あり方, MSW 相談員研修会 (日本医療社会福祉協会主催), スペースアルファ三宮 (神戸), 2016.10.16

講演, 最期まで自分らしく生きるために—〈老活〉のすすめ—, 日本退職公務員連盟 平成 28 年度全国大会記念講演, 東京大学安田講堂, 2016.10.20

講師, エキスパートコース 臨床倫理, 東京都福祉保健財団職員研修, 福祉保健局・病院経営本部研修センター (東京都), 2015.10.21

講師/セミナー開催協力, 臨床倫理セミナーin さく, 佐久総合病院 (佐久市), 2016.10.22

講演, 歯科教育における死生学の役割, 健康長寿社会を担う歯科医学教育改革—死生学や地域包括ケアモデルを導入した医科歯科連携教育体制の構築—平成 28 年度連携シンポジウム, 九州大学歯学研究院 (福岡市), 2016.10.23

講師/研修会開催協力, 臨床倫理ファシリテーター養成研修, 関西臨床倫理研究会, 大阪府看護協会ナースングアート大阪 (大阪市), 2016.10.29-30

講師/研修会開催協力, 臨床倫理ファシリテーター養成, 北海道臨床倫理研究会, 札幌, 2016.11.12

講師/セミナー開催協力, 臨床倫理セミナー in さっぽろ, 北海道臨床倫理研究会, 札幌, 2016.11.13

講演, 治療方針決定のプロセスと意思決定支援—本人・家族との対応の臨床倫理—, 藤沢市民病院 (藤沢市), 2016.11.30

講師/セミナー開催協力, 臨床倫理セミナーin えひめ, 愛媛地区臨床倫理事例研究会, 愛媛大学病院 (東温市), 2016.12.11

講師/セミナー開催協力, 第一回関西臨床倫理セミナー, 関西臨床倫理セミナー実行委員会, 大阪市立総合医療センターさくらホール), 2016.12.18

講師/セミナー開催協力, 第 10 回臨床倫理事例研究会, 関西臨床倫理研究会, ナースングアート大阪 (大阪市), 2017.1.7

講演, 老活のスズメ—上手に古い、最期まで自分らしく生きるために—, 北上市在宅医療介護連携推進事業 みんなで考える地域包括ケア推進フォーラム, さくらホール (北上市), 2017.1.21

講演, 臨床における倫理, 福岡大学医学部看護学科 CSD 研修&FD 研修会, 福岡大学メディカルホール, 2017.2.18

講師/セミナー開催協力, 平成 28 年度兵庫県薬剤師会・兵庫県病院薬剤師会共催参加型研修会, 三宮研修センター (神戸市), 2017.2.19

講演, 人生にとっての最善を目指す意思決定支援—臨床倫理の視点から—, JASWHS 四国ブロック大会・愛媛県医療ソーシャルワーカー協会 30 周年記念大会, 2017.2.25

最終講義, 私たちはどのような社会を創ろうとしているのか—臨床倫理の明日に向けて—, シンポジウム「臨床倫理の明日を拓く」, 上野死生学・応用倫理講座, 東京大学安田講堂 (東京都文京区), 2017.3.4

特別講義, 本人・家族と一緒に進めて行く医療・看護, 宮城県高等看護学校, 宮城県名取市 2017.3.6

講演, 意思決定プロセスの臨床倫理—治療方針決定をめぐる—, KKR 札幌医療センター (札幌市), 2017.3.10

講義, 人生の最終段階における臨床倫理と相談あり方, MSW 相談員研修会 (日本医療社会福祉協会主催), 国際ホール (札幌市), 2017.3.11

講師/セミナー開催協力, 臨床倫理セミナーin ちくご, 久留米大学病院 (久留米市), 2017.3.18

1. 略歴

- 1984年3月 成蹊大学文学部英米文学科 卒業
1987年6月 Contemporary British Society Course, School of Oriental and African Studies, University of London 修了
1988年4月 株式会社メディカル・トリビューン 記者
1992年9月 株式会社ジャパン・タイムズ社 記者
2000年6月 Medical Ethics Fellowship Program, Harvard Medical School, Harvard University 修了
2005年3月 東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻修士課程修了
2008年3月 東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻博士課程修了
博士（保健学）取得（東京大学大学院医学系研究科）
2008年4月 東京大学大学院人文社会系研究科グローバルCOE「死生学の展開と組織化」特任研究員
2012年4月 東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター上廣死生学・応用倫理講座
特任准教授
2017年4月 同 特任教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

臨床倫理学、臨床死生学、医療社会学

b 研究課題

エンドオブライフ・ケアの改善

医療技術が進展し超高齢化が進んだ現代社会におけるエンドオブライフ・ケア（人生の最終段階における医療とケア）のあるべき姿を模索し、現状の改善・充実を目指し、そのために必要な社会の意識改革を促す。

臨床倫理の普及と啓発

日本人のコミュニケーションのあり方などの文化的な特徴を踏まえ、一人ひとりの患者と家族に関する倫理的問題へよりよく応答することが可能な方法論を探り、臨床現場の医療・介護従事者との協働・対話によって、現実の症例の倫理的問題について幅広く検討を深め、現場における実践の知へつなぐ。

臨床死生学の試み

死生学の一側面を「生き終わりを見据えつつより良く生きることを社会のなかで考える学問」と捉え、現実社会の問題として死生学の理解・考察を深め、一般への浸透を図る。

c 概要と自己評価

エンドオブライフ・ケアの改善について

超高齢社会におけるエンドオブライフ・ケアに関して最も一般的かつ深刻な問題に、摂食嚥下困難な高齢者に対する人工的水分・栄養補給法（AHN: artificial hydration and nutrition）の導入・差し控え・中止終了に関する諸問題がある。これは日本の高齢者医療およびケアにおける長年の懸案であった。先行研究が稀有であったこの分野において、会田は数々の実証研究を推進し、その成果を日本老年医学会の「高齢者ケアの意思決定プロセスに関するガイドライン—人工的水分・栄養補給の導入を中心として」の策定につないだ。これが同学会ガイドラインとして公表された後は、学会内外において、その趣旨の普及とそれを踏まえた現場での臨床実践の拡大に努めた。数多くの学術集会および講演等において、医療・介護従事者だけでなく一般市民への浸透を目指して継続的に活動した。

また、この課題を本人と家族の側から捉え、本人と家族が医療・介護従事者の助言を得ながら最善の選択に至ることを支援するため作成した『高齢者ケアと人工栄養を考える—本人・家族のための意思決定プロセスノート』の普及に努めた。この冊子は、臨床倫理学における意思決定プロセスと人のいのちの理解についての清水哲郎特任教授の理論および高齢者ケアにおける AHN に関する臨床現場の実態についての会田の調査研究をもとにして作られた。総じて、AHN に関する研究・実践活動では計画以上の成果を上げることができた。

さらに、これらの成果を踏まえて、慢性腎臓病の専門医療者との協働によって、『高齢者ケアと透析療法を考える—本人・家族の意思決定プロセスノート』を開発し、刊行後は現場の医療者とともに、腎不全看護学会学術集会などで普及啓発のための活動を行った。

いずれのノートも、本人と家族と医療・介護従事者が本人のために一緒に考え共同の意思決定に至ることを支援するためのツールであり、目下、日本の医療界で最も注目されている課題である、ACP (advance care planning) に直接関係する研究開発である。また、これらのノート開発は、本講座関係の若手研究者による当事者研究としての成

果物である『子宮内胎症で悩んでいるあなたへ — 意思決定プロセスノート』（医学と看護社、2017年度末刊行）につながった。

また、2016～2017年度は人生の最終段階の医療とケアの意思決定支援に関して世界的に注目されているACP（advance care planning）の文献研究と学術集会での報告を重ね、本学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター上廣講座が主催する《医療・介護従事者のための死生学》セミナーや日本各地での講演活動を通して、研究知見を社会還元した。また、ACPの普及啓発に関して、日本老年医学会の学会としての取り組みに関与した。同学会では2018年度中に学会としてのACPの定義化と提言の発表を目指しているが、会田はその取りまとめを行っている。

さらに、10年余の研究課題の1つであるfrailty（フレイル）に関する研究知見の整理と発信にも務め、高齢者の人生の最終段階における過剰医療および過剰医療への対策としての考え方を示した。frailtyに関しては、国内の老年学関係者は介護予防のみに注目しているが、会田はfrailtyが進行した高齢者における適切な医療のあり方について、医療関係者を対象とするセミナーや学術集会等で問題提起し、関心を集めた。会田の講演を契機に、救急・集中治療の現場で実証研究を開始した研究グループもみられた。また、上述のACPのプロセスにfrailtyの評価を組み込むことの重要性に関して医療・介護従事者の理解を求める論文や講演活動も行い、これも臨床現場での実証研究につながっている。しかし、これらは国内では依然として稀少な研究活動であるため、今後、継続的に取り組むことが必要と考えている。

また、高齢者に限らない研究課題として、実証研究をもとに脳死に関する理解を日本の文化的側面も踏まえて深めた。脳死に関する諸問題への対応について専門医療者とともに検討し、社会的に構成される死の概念について日本の臨床現場の実態に基づいて考察し、救急・集中治療現場での患者・家族対応に関する実践知につなぐ。特に、日本小児救急医学会が実践家としての医療者を対象に行う脳死セミナーで、継続してこの課題に関する教育講演の機会を得ることによって、研究知見の臨床現場での活用を実現化した。

これらの研究・実践活動によって、進展した医療技術が汎用される現代の日本において、本人らしい人生の集大成を支援するためのエンドオブライフ・ケアの研究と、その知見にもとづく教育啓発活動を実施することができたと考える。

日本社会では未だに人工呼吸器をはじめとする生命維持治療の終了に対しては医師らの心理的および情緒的障壁が高いが、治療行為は行うことも、差し控えることも、治療開始後でも本人の状態や本人自身の価値によっては治療を終了して看取することも、いずれも治療の選択肢である。この2年間もこの課題に関して現場の医療ケア従事者とともに考える機会を得たことは貴重であり、こうした研究・実践活動は時代の変化に合わせた社会の変革につながっていくと考える。今後はさらに、医療ケア従事者を含めた見送る側の心のケアも含め、本人の人生の集大成を支援するという観点で、医療とケアのあり方に関する考察と理解の深化を図っていくことを目指している。

臨床倫理の普及と啓発について

臨床倫理プロジェクトの活動の一環として、全国各地で医療・ケア従事者のための臨床倫理セミナーを開催し、講義と事例検討の支援をした。2016年度は全国各地で計10回のセミナーを実施し、延べ約1,860名が参加した。2017年度は全国各地で計12回のセミナーを開催し、延べ約2,000名が参加した。会田はすべてのセミナーにおいて、中核となる講義（「臨床倫理入門編」、「事例検討法」など）や事例検討のファシリテーションに関わる支援を行い、また、回を重ねている地域セミナーにおいては、アドバンスト・コースにおいて、「フレイル」や「ACP」のトピック講義を行った。さらに、時間的制約が大きい臨床現場で仕事をする医療・ケア従事者のために、簡易版臨床倫理検討シートを開発し、事例検討に際する時間コストの軽減を図ることで、より一層の普及を目指した。

また、2016年度および2017年度にもファシリテーター養成講座を大阪と札幌で開催した。今後も、臨床倫理を一般の医療・介護従事者や市民が理解可能な言葉で表現し、個別症例の倫理問題に多職種協働で具体的に取り組み、現場の実践知とともに高めることを目指している。

さらに、2016年度末には前任の清水特任教授の最終講義を兼ね、シンポジウム「臨床倫理の明日を拓く——本人・家族とともに考える臨床倫理」（参加者約930名）を企画・運営した。これは本講座第二期の総まとめおよび清水特任教授の本講座での集大成として企画した。また、同時に開催したシンポジウムでは、日本の医療界で最重要課題の1つとされているアドバンス・ケア・プランニングについて、国内の各領域のトップリーダーにディスカッションして頂き、ACPを含め臨床倫理の将来を展望した。

臨床死生学の試みについて

当講座の《医療・介護従事者のための死生学》基礎コースにおいて、セミナーの企画・運営と臨床死生学関連の講義を担当し、臨床現場で働く人たちが死生についてどのように理解し、どのようにケアに活かしていくかの研鑽を支援する活動を展開した。

また、年間に10回開催している「臨床死生学・倫理学研究会」を企画・運営し、この分野において研究・実践活動に取り組む研究者や実践家との意見交換の機会を医療・介護従事者および一般市民に提供した。毎回、100名程度が参加し、臨床現場の実態を踏まえて死生の問題に関して議論した。

今後も、現場で生きる臨床死生学の取り組みを継続し、社会のなかで活かす知の集積・活用を目指したい。

d 主要業績

(1) 著書

共著、会田薫子、『絶対成功する腎不全・PD診療 TRC』（石橋由孝編）、中外医学社、2016.6

共著、会田薫子、『神経内科外来シリーズ3 もの忘れ外来』（丸木雄一編）、メジカルビュー社、2016.9

共著、会田薫子、『スーパー総合医 緩和医療・終末期ケア』（長尾和宏、他、編）、中山書店、2017.2

共著、会田薫子、『生命倫理・臨床倫理と意思決定支援』、『保健医療ソーシャルワーカーアドバンス実践のために』、中央法規出版、2017.6

編著、会田薫子、『医療・介護のための死生学入門』（清水哲郎と共編著）、東京大学出版会、2017.8

共著、会田薫子、『iPS細胞研究—超高齢社会における臨床的意義と倫理的課題』、『科学知と人文知の接点—iPS細胞研究の倫理的課題を考える』、弘文堂、2017.10

共著、会田薫子、『死生学のフィールド』、放送大学教育振興会、2018.3

(2) 論文

会田薫子、「臨床倫理の事例検討法—倫理的姿勢と原則、問題の整理・分析・対応」、『共創福祉』、Vol.11,no.1、pp.681-687、2016.4

会田薫子、「“胃ろう問題”とは何か」、『臨床精神医学』、Vol.45,no.5、pp.681-687、2016.5

会田薫子、「フレイルの知見を臨床に活かし、幸せな“生き終わり”を」、『医療と介護Next』、pp.6-9、2016.10

会田薫子、「人生の最終段階における患者さんの“物語り”を考える」、『デンタルハイジーン』、vol.36,no.12、pp.1296-1297、2016.12

会田薫子、「高齢者ケアの意思決定プロセスに関するガイドライン—人工的水分・栄養補給法の導入を中心として」の活かし方、『内分泌・糖尿病・代謝内科』、Vol.43,no.6、pp.531-535、2016.12

会田薫子、「フレイルの知見を死生観教育に活かす」、『精神科』、Vol.32,no.2、pp.116-122、2017.2

会田薫子、「長寿時代の臨床死生学」、『歯界展望』、2017 特別号、pp.38-40、2017.5

会田薫子、「小児救急における意思決定に関する課題」、『救急医学』、Vol.41,no.6、pp.724-729、2017.6

会田薫子、「人生の最終段階と救急医療：脳死と臓器移植」、『救急医学』、Vol.41,no.9、pp.1075-1081、2017.9

会田薫子、「老年医学Q&A 高齢者肺炎における個人の意思やQOLを重視した治療・ケアについて」、『日本老年医学学会雑誌』、Vol.54,no.4、pp.597-600、2017.10

会田薫子、「ACPの背景にある臨床倫理の問題・課題」、『がん看護』、Vol.22,no.7、pp.698-701、2017.12

会田薫子、「高齢患者のための意思決定支援」、『一宮医報』、No.200、p.64、2018.3

(3) 学会発表

国内、招聘講演、会田薫子、「長寿時代のエンドオブライフ・ケア」、第1回鹿児島国際歯学シンポジウム、鹿児島大学鶴岡会館ウィリアムウィリスホール、2016.1.30

国内、招聘講演、会田薫子、「ACPの考え方と実践への示唆—本人を人として尊重する意思決定のために」、日本在宅医学会第一回地域フォーラム in Fukui、福井 AOSSA 県民ホール、2016.4.17

国内、指定講演、会田薫子、「日本老年医学会からの提言・見解に関する講習会 ～背景と波及効果を中心に～」、「高齢者ケアの意思決定プロセスに関するガイドライン—人工的水分・栄養補給の導入を中心として」、第58回日本老年医学会学術集会、石川県立音楽堂、2016.6.8

国内、招聘講演、会田薫子、教育講演6「腎臓専門医と臨床倫理」、第59回日本腎臓学会学術総会、パシフィコ横浜、2016.6.19

国内、招聘講演、会田薫子、主題講演3「救急医療の死生学—脳死の二重基準の意味と意義」、第29回日本脳死・脳蘇生学会学術集会、帝京大学、2016.6.26

国内、招聘講演、会田薫子、「臨床倫理と意思決定支援」、第21回日本難病看護学会学術集会、北海道医療大学、2016.8.26

国内、指定講演、会田薫子、シンポジウム「胃ろうの果たす役割—胃ろう患者の声をきこう」、「患者さんの幸せの実現をゴールにするPEGの適応—臨床倫理の視点から」、第21回PEG・在宅医療研究会学術集会、かがわ国際会議場、2016.9.3

国内、招聘講演、会田薫子、教育講演1「長寿時代のエンドオブライフ・ケア」、第54回全国大学保健管理研究集会、大阪国際会議場、2016.10.5

国内、招聘講演、会田薫子、教育講演4「高齢者の平穏な最期を支援する医療のあり方—意思決定プロセス・ガイドラインが示すこと」、第40回日本死の臨床研究会年次大会、札幌コンベンションセンター、2016.10.8

国内、招聘講演、会田薫子、「長寿時代の臨床死生物学」、第23回日本歯科医学会総会、福岡国際会議場、2016.10.21

国内、指定講演、会田薫子、パネルディスカッション9「いま「脳死」はどこにあるのか：わが国の終末期医療と脳死」、「人生の最終段階における脳死の二重基準の意味と意義」、第44回日本救急医学会学術集会、高輪プリンスホテル、2016.11.18

国内、招聘講演、会田薫子、「長寿時代のエンドオブライフ・ケア—フレイルの知見を臨床に活かす」、第30回日本口腔リハビリテーション学会学術大会、京都市国際交流会館、2016.11.20

国内、会田薫子、交流集会「高齢者ケアと人工透析のベストプラクティスを考えよう!」、「高齢者ケアにおける意思決定支援—ACPにフレイルの知見を活かす」、第19回日本腎不全看護学会学術集会、アジア太平洋トレードセンター(大阪)、2016.11.26

国内、招聘講演、会田薫子、「長寿時代のエンドオブライフ・ケア」、第40回徳島県国保診療施設地域医療学会学術集会、徳島県国保会館、2016.11.27

国内、招聘講演、会田薫子、「終末期の意思決定支援ワークショップ」、第24回日本ホスピス・在宅ケア研究会全国大会、久留米シティプラザ、2017.2.5

国内、招聘講演、会田薫子、企画セミナー21「高齢社会の急性期医療」、「高齢者救急医療—フレイルの視点から」、第44回日本集中治療医学会学術集会、さっぽろ芸文館、2017.3.10

国内、招聘講演、会田薫子、シンポジウム2「臓器移植に関連する諸問題」、「脳死下臓器提供と臨床倫理」、日本臨床倫理学会第5回年次大会、昭和大学医学部附属看護専門学校、2017.3.19

国内、指定講演、会田薫子、「高齢者医療における意思決定支援—ACPにフレイルの知見を活かす」、第13回岡山透析看護研究会、倉敷中央病院看護研修センター、2017.5.14

国際、招聘講演、Kaoruko Aita、「End-of-life care for the aged in Japan: artificial hydration and nutrition.」、Aging Science: from Molecules to Society, International symposium "Smart Aging: A shift from the traditional concept of gerontology to modern aging science", Tohoku University、2017.5.24

国内、指定講演、会田薫子、パネルディスカッション2『「最期まで自分らしく」を支えるためのアドバンス・ケア・プランニング—医療倫理の立場から』、第59回日本老年医学会学術集会、名古屋国際会議場、2017.6.14

国内、招聘講演、会田薫子、シンポジウム7「エンドオブライフ・ケアからみた老年精神医学」、「看取り文化の再構築—フレイルの知見を死生観教育を活かす」、ウインクあいち、2017.6.16

国内、招聘講演、会田薫子、「救急医療の死生物学—脳死の二重基準の意味と意義」、日本小児救急医学会「小児における脳死患者への対応セミナー」、聖路加国際大学 臨床学術センター、2017.6.23

国内、招聘講演、会田薫子、シンポジウム「口腔のケア・がん口腔支持療法を推し進めるために—人材を養成する体制から在り方を問う」、「がん患者の人生の尊厳を守ること—がん口腔支持療法を切り口として」、第15回日本臨床腫瘍学会学術集会、神戸国際展示場、2017.7.28

国内、招聘講演、会田薫子、「急性期看護における倫理的ジレンマと課題」、第48回日本看護学会—急性期看護—学術集会、長良川国際会議場、2017.9.8

国内、招聘講演、会田薫子、「高齢者のエンドオブライフ・ケア総論—治療の選択と課題」、日本エンドオブライフ・ケア学会第1回学術集会、一橋大学一橋講堂、2017.9.16

国内、招聘講演、会田薫子、「人生の終末を悔いなく迎えるために」、第17回日本医療マネジメント学会栃木支部学術集会、とちぎ健康の森講堂、2017.10.7

国内、招聘講演、会田薫子、「高齢者医療の意思決定にフレイルの知見を活かす」、第20回日本腎不全看護学会学術集会交流集会6、アイーナ(いわて県民情報交流センター)、2017.10.22

国内、指定講演、会田薫子、「高齢者医療における意思決定プロセスのあり方」、第45回日本救急医学会学術集会、大阪国際会議場、2017.10.26

国内、指定講演、会田薫子、「エンドオブライフ・ケアにおけるフレイル評価の必要性」、第45回日本救急医学会学術集会、リーガロイヤルホテル大阪、2017.10.26

国内、招聘講演、会田薫子、「その人らしい人生の最期を支えるために—医療・介護現場に必要な臨床倫理」、第36回日本認知症学会学術集会、石川県立音楽堂、2017.11.26

国内、会田薫子、「ACP にフレイルの知見を活かす—よりよい高齢者医療のために」、第 29 回日本生命倫理学会大会、宮崎シーガイア・コンベンションセンター、2017.12.16

国内、招聘講演、会田薫子、「高齢者医療—フレイルの知見を臨床に活かす」、日本腎不全看護学会 第 12 回トピック研修 『治療選択に関する特別研修』、昭和大学病院、2018.3.4

(4) 会議主催 (チェア他)

国内、「第 1 回関西臨床倫理セミナー/「医療・介護従事者のための死生学」基礎コース冬季セミナー」、その他、大阪市立総合医療センターさくらホール、2016.12.18

国内、「冬季特別臨床倫理事例検討会」、その他、東京大学文学部一番大教室および二番大教室、2017.1.11

国内、シンポジウム「臨床倫理の明日を拓く」、実行委員長、東京大学 安田講堂、2017.3.4

国内、「第 29 回日本生命倫理学会年次大会」、実行委員、宮崎シーガイア、2017.12.16~2017.12.17

国内、「“引き算”の医療：本当の手厚さへの模索—“足し算”と長寿時代のエンドオブライフ・ケアを考える」、実行委員長、2018.3.18

(5) マスコミ

「最期の医療」、『朝日新聞、朝刊』、2016.5.1

「愛する人たちと作っていく人生 — それこそが“グッドライフ”」、映画「君がくれたグッドライフ」のパンフレット、2016.5.21

「終末期の医療 延命を望みますか」、『週刊ダイヤモンド』、p62-63、2016.8.6

「終わりを認められない患者と家族、医師」、『週刊東洋経済』、p49、2016.9.24

「肺炎 終末期は緩和ケアも」、『読売新聞、朝刊 14 面』、2017.4.16

「私たちの最期は」、『共同通信』、2017.4.27

「人工呼吸器を外すとき ~医療現場 新たな選択~」、NHK「クローズアップ現代」、2017.6.5

「透析見送りや中止 47%」、『読売新聞、朝刊 27 面』、2017.6.18

「ニッポンの宿題「最期の時 どんな形で ~看取る側の意識改革も必要」」、『朝日新聞、朝刊 13 面』、2017.7.8

「望ましい最期 模索」、『毎日新聞、朝刊 3 面「クローズアップ」』、2018.1.9

「蘇生判断 現場任せ」、『読売新聞、朝刊 3 面「スクヤナー」』、2018.2.14

「インタビュー「胃ろうバッシングで生じた歪みを考える」」、『日経メディカル』、2018.3.2

「延命方針の参考に」、『上毛新聞』、2018.3.4

「栄養管理 認知症の終末期」、『日経メディカル』2018 年 3 月号 特集「終末期医療」、2018.3.10

「終末期医療を考えるフォーラムに 130 人」、『愛媛新聞』、2018.3.31

(6) 教科書

「高齢者のエンドオブライフ・ケアと延命医療の選択」、『内科 高齢者医療ハンドブック』、会田薫子、執筆、南江堂、2018

(7) 共同研究(産学連携除く)賞

国内、参画、日本緩和医療学会、「学会「鎮静ガイドライン」改訂」、2017~2018

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義

非常勤講師、上智大学、「社会老年学」、2016.4

特別講演、福岡神経難病ケア研究会、「人生の最終段階の医療とケア—意思決定支援を考える」、2016.4

特別講演、千葉県救急医療研究会、「救急医療の死生学—脳の死、心臓の死」、2016.4

特別講演、岐阜県立多治見病院、「臨床倫理エッセンシャルズ 入門編」、「ジョンセンの 4 分割法による事例検討とは」、2016.4

特別講演、葛飾区医師会、「認知症とリビングウィル」、2016.4

セミナー、北海道臨床倫理研究会、「事例検討法ステップ 1&2」、「臨床倫理エッセンシャルズ」、「フレイルの知見を臨床に活かす」、2016.5

特別講演、宮崎県医療ソーシャルワーカー協会、「アドバンス・ケア・プランニング—意思決定の支援」、2016.6

非常勤講師、岡山大学歯学部、「これからの高齢者医療とケア」、「高齢者医療と人工的水分・栄養補給法」、2016.7

セミナー、諏訪中央病院、「臨床倫理エッセンシャルズ 入門編」、2016.7

セミナー、仙台臨床倫理研究会、「臨床倫理エッセンシャルズ 入門編」、「事前指示からアドバンス・ケア・プランニングへ」、2016.7

特別講演、かわさき市民アカデミー、「人生の最終段階の医療とケア」、2016.7

特別講演、東京都立多摩総合医療センター、「臨床倫理—長寿時代のエンドオブライフ・ケア」、2016.7

特別講演、日本老年医学会、「高齢者のエンドオブライフ・ケア」、2016.7

特別講演、東京慈恵会医科大学医学部、「臨床倫理 理論と事例検討法」、2016.8

特別講演、独立行政法人国立病院機構中国四国グループ、「臨床倫理の基礎—看護倫理を現場で活かす」、「事例検討法」、2016.8

非常勤講師、早稲田大学、「医療とメディア」、2016.9

特別講演、琉球大学医学部・医学系研究科、「研究倫理・生命倫理の Faculty Development」、2016.9

特別講演、岐阜県立多治見病院、「事例検討の進め方」、「終末期における人工的水分・栄養補給法」、2016.9

特別講演、相模原市高齢者福祉施設協議会、「高齢者の終末期の臨床倫理—人工的水分・栄養補給法の問題を中心に」、2016.9

特別講演、公益社団法人 岩手県看護協会、「看護専門職論—看護倫理・臨床倫理、意思決定支援」、2016.9

セミナー、北陸地区臨床倫理事例研究会・金沢大学医学部附属病院、「臨床倫理エッセンシャルズ 入門編」、「ACP—意思決定の支援」、2016.9

特別講演、政策課題研究会、「高齢者の終末期医療の諸課題」、2016.9

セミナー、県民健康プラザ鹿屋医療センター、「臨床倫理エッセンシャルズ 入門編」、2016.10

特別講演、栃木県鹿沼市・日光市・栃木県看護協会県西地区支部、「長寿時代のエンドオブライフ・ケア—自分らしい生き残り方を求めて」、2016.10

特別講演、岐阜大学医学部附属病院がんセンター・緩和ケアセンター、「みんなで倫理を学ぼう！現場で活かす臨床倫理」、2016.10

特別講演、千葉県美浜区連携の会、「ACP にフレイルの知見を活かす—高齢者ケアの意思決定支援」、2016.10

特別講演、公益社団法人 日本医療社会福祉協会、「アドバンス・ケア・プランニング—意思決定の支援」、2016.10

セミナー、関西臨床倫理研究会、「事例検討法」、2016.10

特別講演、独立行政法人地域医療推進機構 (JCHO) 東京高輪病院、「臨床倫理—臨床現場での治療選択・意思決定プロセスを考える」、2016.10

非常勤講師、東京大学高齢社会総合研究機構、科目名「「高齢社会総合研究学特論Ⅷ (高齢社会の人文学・社会科学)」における「長寿時代のエンドオブライフ・ケア」、2016.11

特別講演、金沢大学医学部・北陸認知症プロフェッショナル養成プロジェクト、「終末期の医療とケアの倫理」、2016.11

セミナー、北海道臨床倫理研究会、「事例検討法ステップ 1&2」、2016.11

セミナー、北海道臨床倫理研究会、「臨床倫理エッセンシャルズ 入門編」、「高齢者ケアにおける意思決定支援—ACP にフレイルの知見を活かす」、2016.11

特別講演、岩手医科大学、3 学部第一学年合同「全人的医療基礎講義」特別講義「長寿時代のエンドオブライフ・ケア」、2016.12

セミナー、愛媛地区臨床倫理研究会、「臨床倫理エッセンシャルズ 入門編」、「事例検討法ステップ 1&2」、「長寿時代のエンドオブライフ・ケア」、2016.12

特別講演、日本大学松戸歯学研究科、「長寿時代の臨床死生学」、2017.1

セミナー、関西臨床倫理研究会、「臨床倫理エッセンシャルズ 入門編」、2017.1

特別講演、埼玉県社会福祉協議会、「認知症の方のエンドオブライフ・ケア—フレイルの知見を臨床に活かす」、2017.1

セミナー、諏訪中央病院看護部、「臨床倫理の事例検討—問題の整理と分析」、2017.1

特別講演、諏訪中央病院、「高齢者の意思決定支援」、2017.1

特別講演、回生病院、「長寿時代における認知症のエンドオブライフ・ケア」、2017.2

特別講演、六病院研究会、「高齢者ケアにおける意思決定プロセスについて」、2017.2

セミナー、諏訪中央病院看護部、「臨床倫理の事例検討—問題の整理と分析」、2017.2

特別講演、株式会社 学研、「臨床倫理入門—臨床現場における医療・ケアスタッフに必要な姿勢を考える」、2017.2

特別講演、日本医療社会福祉協会、「アドバンス・ケア・プランニング—意思決定の支援」、2017.3

セミナー、ちくごかんわ研究会・久留米大学病院緩和ケアチーム、「臨床倫理エッセンシャルズ 入門編」、2017.3

特別講演、済生会兵庫県病院、「臨床倫理の基礎」、2017.3

特別講演、東京慈恵会医科大学医学部、「臨床倫理 入門編」、2017.5

特別講演、関越病院、「高齢者の平穏な最期を支援する医療のあり方—意思決定プロセス・ガイドラインが示すこと」、2017.5

セミナー、北海道臨床倫理研究会、「事例検討法ステップ1&2」、2017.5

セミナー、北海道臨床倫理研究会、「臨床倫理エッセンシャルズ 入門編」、2017.5

特別講演、公益社団法人 大阪府看護協会、「看護倫理」、2017.6

特別講演、国立がん研究センター、「人生の最終段階の医療とケア—高齢者が自分らしく生き抜くことを支える」、2017.6

非常勤講師、東京大学高齢社会総合研究機構、科目名「「高齢社会総合研究学概論Ⅰ」における「人生の最終段階の医療」」、2017.7

非常勤講師、慶應義塾大学、「"Death and Dying: End-of-life care for elderly adults in Japan"」、2017.7

非常勤講師、長崎大学大学院医歯薬学総合研究科、科目名「「高齢者歯科学」における「長寿時代の臨床死生学」」、2017.7

非常勤講師、岡山大学歯学部、「これからの高齢者医療—フレイルの知見を臨床に活かす」、「高齢者医療と人工的水分・栄養補給法—食べられなくなったらどうしますか」、2017.7

セミナー、岩手県臨床倫理研究会、「臨床倫理：事例検討の進め方」、2017.7

セミナー、東北大学医学部、「臨床倫理エッセンシャルズ 事例検討の進め方」、「簡易版臨床倫理検討シートの使い方」、2017.7

特別講演、関西医科大学附属病院看護部、「高齢患者のためのよりよい意思決定支援—ACPにフレイルの知見を活かす」、2017.7

セミナー、関西臨床倫理研究会、「臨床倫理入門」、2017.7

特別講演、伊勢崎佐波医師会・群馬県医師会、「リビングウィルからACPへ—意思決定を支援する」、2017.7

セミナー、公益社団法人 日本医療社会福祉協会、「臨床倫理にもとづく意思決定支援」、「臨床倫理検討シートによる要点の整理と考え方」、2017.7

セミナー、諏訪赤十字病院、「臨床倫理エッセンシャルズ 事例検討の進め方」、2017.8

特別講演、独立行政法人国立病院機構中国四国グループ、「看護倫理」、2017.8

非常勤講師、早稲田大学、「医療とメディア」、2017.9

特別講演、日本精神科病院協会、「認知症のエンドオブライフ・ケア」、2017.9

セミナー、金沢大学医学部附属病院、「臨床倫理エッセンシャルズ 事例検討の進め方」、「簡易版臨床倫理検討シートの使い方」、2017.9

特別講演、九州山口臨床倫理 AtoZ、「高齢者のがん治療における適切な治療選択に向けて—老年学の立場から」、2017.9

特別講演、栃木県西健康福祉センター、「長寿時代のエンドオブライフ・ケア—自分らしい生き残り方を求めて」、2017.9

特別講演、公益社団法人 大阪府看護協会、「看護倫理」、2017.9

特別講演、公益社団法人 日本医療社会福祉協会、「アドバンス・ケア・プランニング—意思決定を支援する」、2017.9

非常勤講師、岩手医科大学、「長寿時代のエンドオブライフ・ケア」、2017.10

特別講演、富山県立中央病院、「救急医療の死生学—脳死の二重基準の意味と意義」、2017.10

セミナー、愛媛地区臨床倫理研究会、「臨床倫理の事例検討 問題の整理・分析・対応」、「事例検討 上級編① ステップ1&2とワーク」、2017.10

特別講演、公益社団法人 岩手県看護協会、「看護倫理」、2017.10

セミナー、佐久総合病院、「臨床倫理の事例検討—問題の整理・分析・対応」、2017.10

特別講演、公益社団法人 石川県看護協会、「長寿時代の意思決定支援—ACPにフレイルの知見を活かす」、2017.10

非常勤講師、東京大学高齢社会総合研究機構、科目名「「高齢社会総合研究学特論Ⅷ」における「長寿時代のエンドオブライフ・ケア—意思決定支援とACP」」、2017.11

セミナー、関西臨床倫理研究会、「事例検討の進め方 ステップ1&2と新ワークシートの使い方」、2017.11

特別講演、公益社団法人 神奈川県看護協会、「食べられなくなったらどうしますか？ 高齢者のエンドオブライフ・ケアを考える」、2017.11

セミナー、一般社団法人 栃木県訪問看護ステーション協議会、「高齢者の人生の最終段階を支援する医療のあり方」、「事例検討法」、2017.11

特別講演、鳥取大学医学部附属病院、「救急医療の死生学—脳死の二重基準の意味と意義」、2017.11

セミナー、関西臨床倫理セミナー実行委員会、「フレイルと臨床倫理—高齢者医療を考える」、2017.12

特別講演、八王子市高齢者救急医療体制広域連絡会、「長寿時代の高齢者医療—自分らしい生き方と生き終わり方のために」、2017.12

セミナー、北海道臨床倫理研究会、「臨床倫理エッセンシャルズ 入門編」、2017.12

特別講演、公益財団法人 千里ライフサイエンス振興財団、「延命医療を終了するという—よりよい人生の集大成のために」、2017.12

特別講演、栃木県安足健康福祉センター、「人生のエンディングを自分らしく迎えるために—あなたと大切な人の生き残り方を考えてみませんか」、2017.12

特別講演、済生会川口総合病院、「人生の最終段階の医療とケア—高齢者が自分らしく生き抜くことを支える」、2018.1

特別講演、NPO 法人 あがつま医療アカデミー、「人生のエンディングを自分らしく迎えるために」、2018.1

セミナー、関西臨床倫理事例研究会、「臨床倫理検討シート ステップ 1&2 の書き方のファシリテーション」、「カンファレンス用ワークシートを使用した事例検討のファシリテーション」、2018.1

セミナー、関西臨床倫理事例研究会、「臨床倫理 事例検討の進め方」、2018.1

特別講演、公益社団法人 大阪府看護協会、「看護倫理」、2018.1

特別講演、山口・吉南地区地域ケア連絡会議・山口市介護サービス提供事業者連絡協議会、「長寿時代の意思決定支援—フレイルの知見を ACP に組み込む」、2018.1

特別講演、諏訪中央病院、「臨床倫理と高齢者のエンドオブライフ・ケア」、2018.1

特別講演、独立行政法人国立病院機構岡山医療センター、「臨床倫理エッセンシャルズ」、2018.1

セミナー、諏訪中央病院看護部、「臨床倫理 事例検討の意義と進め方」、2018.1

特別講演、沖縄県立中部病院、「長寿時代のエンドオブライフ・ケア—フレイルの知見を臨床に活かす」、2018.1

特別講演、一般社団法人 一宮市医師会、「高齢者のための意思決定支援—ACP にフレイルの知見を組み込む」、2018.2

特別講演、栃木県県南健康福祉センター、「エンドオブライフ・ケア—その人らしい人生を支えるために」、2018.2

特別講演、公益財団法人東京都保健医療公社 荏原病院、「人生の最終段階における臨床倫理」、2018.2

特別講演、一般社団法人 丸亀市医師会、「高齢者ケアにおける意思決定—“最後まで自分らしく”を支えるために」、2018.2

特別講演、鹿児島県がん看護研究会、「高齢者のエンドオブライフにおける倫理的課題と対応」、2018.2

特別講演、東京女子医科大学看護学部、「透析療法を受ける高齢者の治療選択と意思決定」、2018.3

特別講演、高知県・高知市病院企業団立高知医療センター救命救急センター、「エンドオブライフ・ケアの意思決定支援」、2018.3

特別講演、公益社団法人 日本医療社会福祉協会、「アドバンス・ケア・プランニング—意思決定の支援」、2018.3

特別講演、済生会川口総合病院、「人生の最終段階の医療とケア—高齢者が自分らしく生き抜くことを支える」、2018.3

セミナー、ちくごかんわ研究会・久留米大学病院緩和ケアチーム、「Advance Care Planning にフレイルの知見を活かす」、「事例検討の進め方：カンファレンス用ワークシートの使い方」、2018.3

特別講演、地方独立行政法人 市立東大阪医療センター、「人生の最終段階における臨床倫理」、2018.3

特別講演、社会医療法人 石川記念会 HITO 病院、「終末期医療とケア—高齢者が最期まで本人らしく生きることを支援するために」、2018.3

(2) 学会

国内、日本老年医学会、監事

国内、日本生命倫理学会、理事

国内、日本医学哲学・倫理学会、理事

国内、日本透析医学会、倫理委員会委員

国内、日本脳死・脳蘇生学会、理事

国内、PEG・在宅医療学会、学術評議員

国内、日本救急医学会、高齢者救急委員会委員、研究倫理委員会委員

国内、日本緩和医療学会、鎮静ガイドライン WG 委員

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

日本専門医機構外部評価委員会、委員

生活介護ネットワーク、理事

1. 略歴

1997年4月	上智大学文学部英文学科 入学
2001年3月	同 卒業
2001年4月	上智大学文学部哲学科 入学 (3年次学士入学)
2003年3月	同 卒業
2003年4月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻哲学専門分野修士課程 入学
2005年3月	同 修了 (修士 (文学) 取得)
2005年4月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻哲学専門分野博士課程 進学
2006年6月	東京大学大学院人文社会系研究科 21世紀COE「死生学の構築」リサーチアシスタント (~2007年3月)
2007年10月	東京大学大学院人文社会系研究科グローバルCOE「死生学の展開と組織化」リサーチ アシスタント (~2008年3月)
2010年3月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻哲学専門分野博士課程 単位取得退学
2010年4月	上智大学大学院哲学研究科 特別研究員 (~2013年3月)
2013年5月	東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター (上廣死生学・応用倫理講座) 特任研究員
2013年9月	博士 (文学) 取得 (東京大学大学院人文社会系研究科)
2014年4月	三重県立看護大学看護学部看護学科 准教授
2017年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 特任准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

行為論、ケアの倫理、臨床死生学

b 研究課題

1) ケアの倫理における「共感」と「認識上の責任」についての哲学的分析とその臨床的展開

ケアの倫理における中心概念である「共感」に関して、その身体的・情動的側面を踏まえつつも、(これまで見落とされがちであった) その認知的・知性的側面を主題的に分析する。そのことを通して「共感」とそれに伴う「認識上の責任」を、臨床の場に即した複雑さと深みを備えたものとして理論化する。

ケアの倫理によれば、従来の功利主義的な生命倫理は、患者 (患者家族) の置かれている具体的な状況に関する「認識上の責任」(責任をもって認識すること) を果たしていない点で不十分だとされる。このような具体的な状況の認知において、共感が重要な働きをすることは疑いえない。しかし他方、共感には認知的なバイアスが働くことが指摘されている。そこで、共感 (共苦) の危うさや困難さを踏まえつつ、医療従事者—患者 (患者家族) 関係における望ましい共感のあり方と、それに伴う認識上の責任を明らかにする。

2) 関係的な自律論の構築とその臨床的展開

ケアの倫理の立場から関係的な自律論を構築すると同時にその臨床的応用を試みる。生命倫理における個人主義的な自律論は、個人の独立性と他者からの不干渉を基調とする自己決定を核としてきた。それに対してケアの倫理は、人間の相互依存性と傷つきやすさに着目する。そして一定の依存関係や社会的環境の中で育まれるものとして自律を捉える。しかしながら、依存性と自律性は緊張関係にもあるため、個人主義的な自律論はなお根強い。そこで、自律性と依存性の諸相および自律性と依存性の結びつきについて徹底的に検討することを通して、関係的自律論をより十全なものにする。そのうえで、医療従事者・患者・患者家族、それを取り巻く社会的/文化的環境という要素を考慮しつつ、関係的な自律の概念を、臨床における共同的意思決定プロセスに適用するものと鍛え上げたい。

c 概要と自己評価

(1) ケアの倫理の研究——ケアの倫理の認識論的展開

「ケアの倫理」の一つの主要な特徴は、(知覚を含む広義での)「認識」というものを、他のアプローチよりいっそう重視する点にある。そこでは、他者への「倫理」的な応答は、その他者に関する具体的な「認識」と分かち難く結びついている。すなわち、その相手が実際どういった状況に置かれ、また当の状況において、どのような

複雑な思いや切実なニーズを抱えているのか等に関する、繊細で文脈化された認識が伴っていなければ、適切な倫理的応答は為されない。

こういったケアの倫理に内在する「認識論的傾向」を踏まえるならば、ケアの倫理をさらに充実したものへと発展させることができるかどうかは、ケアの倫理が胚胎する認識論を、どれほど豊かなものにできるかに、部分的に依存することになる。そこで今年度の研究では、(1) ケアの倫理に見られる認識的な次元の重視という点をギリガン、ノディングズ、キテイにおいて確認し、(2) そのうえで認識活動において核となる「聞く」という営みと、それに伴う共感的な受容性の働きについて、批判的に考察した。

(2) 行為論の研究——関係的な自律論の研究

1990年代から2000年代にかけて英語圏で新たに登場してきたフェミニストによる「関係的な自律論」(relational autonomy) に関して、その代表的な論者の議論を概観し、その重大な意義を明らかにした。

関係的な自律論は、人間の相互依存性と傷つきやすさに着目し、一定の依存関係や社会的環境の中で育まれるものとして自律を捉える。むろん関係性といっても、自律を可能にする関係性のみならず、自律を妨げる関係性——虐待的關係・従属的關係——もあるがゆえに、関係的な自律論を採用する論者は、あらゆる関係性が自律の実現に貢献するという楽観主義を支持しているわけではない。むしろ、関係性が、自律の成立を深刻な仕方で妨げたり、損なったりするからこそ、どのような関係性が自律にとって重要なのかを批判的に考察するのである。

とりわけ今年度の研究では、このような特徴をもつ関係的自律論が、従来の個人主義的な自律論よりも、抑圧的な人間関係やその背後にある抑圧的な社会的環境を批判的に捉えることができる点で優れているということを示した。簡単に説明すると以下のようなになる。関係的自律論も従来の自律論も、「私はいかに生きるべきか」という実存的関心を中心に据えている点では共通している。しかしながら、「自律の中心要件を、本人が納得できる自己決定」と考える従来の自律論と異なり、関係的自律論は、「自律的な人格であるためには、不当な社会規範について批判的な問題意識をもっていなければならない」と主張する。すなわち、抑圧的な社会規範(家父長制、性差別等)に抵抗するような批判的なスタンスをもっていなければならない。なぜなら、そのような社会的な抑圧こそが、女性や社会的に不利な立場にある人が、その人らしい生き方をするのを妨げている当のものだからである。このように自律が、本人が納得できる自己決定以上のもの、すなわち、不当な社会規範に対する批判的スタンスを伴うものとして捉えられることで、自律の理念は社会正義により適い、自己志向性のみならず他者志向性も併せもつようになる、という点を明らかにした。

d 主要業績 (2017年4月～2018年3月)

(1) 論文

「脆弱性・依存性・応答性をはらむ行為者性概念へ——現代行為論からケアの倫理へ」、『文化交流研究』(東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要) 第31号、11-26頁、2018.3

(2) 学会講演・研究会発表等

「臨床における共感——その複雑さと困難さ」第2回ケアの哲学学会大会、教育講演、東京(白百合女子大学)、2017.9.16(指名あり)

「ケアの倫理に内在する「認識論」の展開に向けて」第77回日本倫理学会大会主題別討議「ケアの倫理——その変遷と展開」、弘前(弘前大学)、2017.10.7(指名あり)

”Relational Approaches to Autonomy” 2017年度第3回行為論研究会、東京(東京大学) 2017.1.27

”Empathy as a Diachronic Process” 瀬戸内哲学研究会ワークショップ「共感と道徳」、広島(広島工業大学)、2018.2.25(招待あり)

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師 三重県立看護大学「キャリアデザインⅡ」(2017年6～7月)

「臨床における共感——その複雑さと困難さ」第5回北陸地区臨床倫理事例研究会・平成28年度石川県高度専門医療人材養成事業、第6回北陸地区臨床倫理事例研究会・石川県高度専門医療人材養成事業主催、金沢(金沢大学附属病院 CPD センター)、2017.9.11

「臨床倫理エッセンシャルズ 入門編」「事例検討 上級編 ステップ3とワーク」第6回愛媛地区臨床倫理事例研究会、東温(愛媛大学医学部付属病院)、2017.10.14

「臨床倫理エッセンシャルズ 入門編」第2回関西臨床倫理セミナー、大阪(大阪市立総合医療センターさくらホール)、2017.12.3

「「わかりあえなさ」も大切にする共感：臨床ケアの一要素」第68回日本救急医学会関東地方会学術集会ランチ
ンセミナー5、東京（東京大学）、2018.1.27

「臨床倫理エッセンシャルズ 入門編」第3回臨床倫理セミナーin ちくご、ちくごかんわ研究会主催・久留米大学病
院緩和ケアチーム・久留米ネットワークの会共催、久留米（久留米大学病院会議室）、2018.3.11

(2) 学会

哲学会（2003年4月～現在）

上智大学哲学会（2003年4月～現在）、同委員および編集委員（2010年4月～2013年3月）

日本倫理学会（2005年8月～現在）

日本科学哲学会（2006年12月～現在）

日本哲学会（2006年12月～現在）

第25回日本生命倫理学会大会実行委員（2013年5月～12月）

ケアの哲学学会（2016年9月～現在）

日本医学哲学倫理学会（2017年8月）

3 3 集英社 高度教養寄付講座

特任教授 柴田 元幸 SHIBATA, Motoyuki

1. 略歴

1979年	東京大学文学部（英語英米文学）学士・文学士
1984年	東京大学大学院人文社会研究科（英語英文学）修士・文学修士
1986年	イエール大学 Yale University（Department of English）修士・文学修士
1984年4月～1987年11月	東京学芸大学教育学部 講師
1987年12月～1988年9月	東京学芸大学教育学部 助教授
1988年10月～1997年3月	東京大学教養学部 助教授
1997年4月～1999年3月	東京大学大学院総合文化研究科 助教授
1999年4月～2005年3月	東京大学大学院人文社会系研究科 助教授
2005年4月～	東京大学大学院人文社会系研究科 教授
2014年3月	東京大学大学院人文社会系研究科 退職
2015年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 特任教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

アメリカ文学

b 研究課題

アメリカ現代小説の網羅的研究

c 概要と自己評価

これまで同様、現代アメリカ小説の紹介・翻訳に努めるとともに、翻訳の文化的意義などについても発言してきた。また、毎年国際作家会議を組織し、日米作家の交流にも貢献している。

d 主要業績

(1) 学会発表

シンポジウム「日本という壁」、パネル「翻訳の壁」、東京大学本郷キャンパス、2016/9/17

国際、“Familiarizing the Unfamiliar: Translation as a Tool or an Obstacle in Globalizing Japan” at Ca' Foscari University of Venice
Keynote speech、2016/11/24

翻訳という創造空間（シンポジウム）、東京外国語大学、2017/11/29

国際、“Eyes on Murakami”（シンポジウム）、Keynote speech, etc. Newcastle University、2017/3/6～9

(2) 訳書

ステイーヴン・ミルハウザー『魔法の夜』白水社、2016/5

ブライアン・エヴンソン『ウインドアイ』新潮社、2016/11

ポール・オースター『冬の日誌』新潮社、2017/2

ポール・オースター『内面からの報告書』新潮社、2017/3

ナサニエル・ウエスト『いなごの日／クール・ミリオン』新潮文庫、2017/4

ステイーヴン・ミルハウザー『木に登る王』白水社、2017/6

レアード・ハント『英文創作教室 Writing Your Own Stories』（編訳）、2017/11

レアード・ハント『ネバーホーム』朝日新聞出版、2017/12

マーク・トウェイン『ハックルベリー・フィンの冒けん』研究社、2017/12

3. 主な社会活動

(1) 集英社高度教養寄付講座 講演の組織・司会

ステイーヴン・ミルハウザー講演・朗読会（2016/4/22）

齋藤希史 詩の翻訳——欧・漢・和（2016/7/2）

塩川徹也・野崎敏 パスカル『パンセ』を読む（2016/10/19）

木村英樹 中国語に敬語があるか? ―呼び掛けと微笑みのポライトネス― (2016/12/10)

鈴木泉 ロックミュージックと現代思想 (2017/11/19)

逸身喜一郎・大宮勘一郎・阿部賢一 ヨーロッパの文学 (2017/12/9)

(2) 他機関での講義等

文学翻訳と映画字幕～言葉をめぐる冒険について～、富山市立図書館、2016/4/9

エドワード・ゴーリーを見る/読む/訳す楽しみ、伊丹市立美術館 2016/4/17/福島県立美術館 2016/7/18/下関市立美術館 2016/10/1/宇都宮美術館 2017/10/8/島根県立岩見美術館 2017/12/3/福井市美術館 2018/2/25

国際、日米作家交流講演 (企画・司会・通訳) NYC アジア・ソサエティ、シカゴ大学等、2016/4/27～5/5

パティ・スミス、フィリップ・グラス、そして”うたう” ビート詩人ギンズバーグへ (松浦弥太郎氏と対談)、la kagu 2016/5/25

柴田元幸朗読会 with 3日満月、聖学院中学校・高等学校、2016/7/9

小川洋子朗読会 (企画・司会)、神戸市外国語大学、2016/10/8

シンガポール国際文学祭 (企画・司会・通訳・講演)、2016/11/5～6

声のライブラリー (古川日出男・伊藤比呂美との朗読会)、日本近代文学館、2016/11/12

世界文学を楽しもう6 エドワード・ゴーリー、江戸川区立葛西図書館、2016/12/7

人間の本質を学ぶ 世界古典文学読書術 (集英社主催シンポジウム)、2016/12/17

外国文学を読む。訳す。北九州文学サロン開館イベント、2017/3/20

2017年のポール・オースター (藤井光氏と対談)、la kagu、2017/4/19

本当の翻訳の話をしよう (村上春樹氏と対談)、紀伊國屋サザンセミナー、2017/4/27

国際 日米作家交流講演 (企画・司会・通訳)、ボストン大学・バルーク大学、2017/5/1～4

国際 日米作家交流講演 (企画・司会・通訳)、ピッツバーグ大学・トロント大学、2017/9/20～25

外国文学の楽しみ―翻訳と日本語、声と文字の宇宙―、関東学院大学、2017/10/22

カズオ・イシグロの英語、津田塾大学、2017/11/26

世界文学を楽しもう7 文学の<声>、江戸川区立葛西図書館、2017/12/13

あまりアメリカ的でないアメリカ人芸術家たちについて―小説、詩、写真、漫画、神戸市外国語大学、2017/12/23

アメリカ短篇小説いまむかし―何が得られ、何が失われたか、朝日カルチャーセンター芦屋、2018/2/17

(3) その他

第2回須賀敦子翻訳賞 (イタリア文化会館) 選考委員 2016

日本翻訳大賞 選考委 2016～

特任教授 **古井戸 秀夫** FURUIDO, Hideo

29 次世代人文学開発センター 《萌芽部門》 参照

1. 略歴

1995年3月	東京工業大学工学部建築学科卒業
1995年4月	菊池建設(株)入社
1997年6月	小沢書店(株)入社
1998年9月	ナポリ・フェデリコ2世大学建築学部「単科コース」入学
2000年6月	同 修了
2000年7月	同 建築史科博士課程「建築史・建築批評コース」入学
2005年1月	同 Ph.D.博士学位取得
2005年10月	ナポリ・フェデリコ2世大学建築学部建築史科助手 (Cultore della Materia)
2006年10月	ローマ第3大学建築学部建築史欧州マスターコース (II livello) 入学
2007年4月	同 修了
2007年10月	ナポリ・フェデリコ2世大学経済学部観光学科契約教授 (2009年2月まで)
2008年10月	大阪大学外国語学部非常勤講師 (2010年3月まで)
2011年10月	東京工業大学外国語研究教育センター特別研究員、非常勤講師
2015年4月	東京大学大学院人文社会系研究科特任准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

建築史、都市史、風景史、芸術史、観光史、イタリア史、ヨーロッパ文化史、地域研究

b 研究課題

18世紀から20世紀までのイタリアとスイスをはじめ、英仏独伊語圏を中心とするヨーロッパの自然風景やアイデンティティの発見、観光資源の変遷、地域特有の建築(郷土建築)、観光・リゾートの発展に伴って派生する建築やホテル、偉人像、記念碑などを、郷土愛やナショナリズム思想の影響を考慮しながら、イコノロジー(多種図像)と一次文献史料から、タイポロジー分析を踏まえて、地域別に発展・衰退史を読み解く。

c 概要と自己評価

2016-17年度に出版されたものは、以下の内容の論文7点と著書1点である。

- 1) 16世紀から20世紀前半までにおけるナポリのホテル・宿屋・宿泊形態史(伊語の著書)。
- 2) 嵐の海と奇妙な岩場を題材にした20世紀初頭の絵葉書にみるヨーロッパ自然景観の崇高回帰現象(伊語の論文)。
- 3) 19世紀後半、イタリア国家統一後に起こった偉人像設置ブーム(イタリア近現代史の教科書の1章を担当執筆)。
- 4) 日本における近代建築の文化遺産観とその保存史(英文共著の一節を担当執筆)。
- 5) イタリア初の高級ホテルチェーンCIGA社の1906-38年における芸術的な広告戦略とその協力者たち(伊語の論文)。
- 6) 19-20世紀にイタリア国外で派生した、ヴェネツィア建築と都市をモデルにした(あるいは模倣した)建築と都市(伊語の論文)。
- 7) ローマ近郊(おもにチョチャーリア地方)とナポリ近郊の民族衣装をまとった人々をテーマにした19-20世紀の外国人(イタリア人以外)芸術家たちによる風景風俗絵画について(伊語の論文)。
- 8) ナポリ沿岸景観の表象としてマサニエッロまたはナポリの漁師たちを描いた、19-20世紀の外国人芸術家による作品群(音楽・絵画・彫刻)について(伊語の論文)。

南イタリア最大の都市ナポリの全ホテル史をまとめた著書(イタリア語)は、平成29年度科研費・研究成果公開促進費によって刊行され、現地の大手新聞社3紙(II Mattino, La Repubblica, Il Corriere del Mezzogiorno)に紹介記事が掲載され、地中海学会ヘレンド賞を受賞した。当該年度に行った6件の学会発表は、それぞれナポリ・フェデリコ2世大学ヨーロッパ都市図像研究センター(CIRICE)、イタリア都市史学会(AISU)、ポルトガル海洋史センター(CHAM)などが主催したもので、1件は英語、5件はイタリア語で行い、論文・著書とともに、現地の最新研究動向に沿ったものとなっている。

d 主要業績

(1) 著書

単著、Ewa Kawamura, *Storia degli alberghi napoletani. Dal Grand Tour alla belle époque, la ospitalità della Napoli "gentile"*, CLEAN Edizioni, Napoli, 2017, 318 pp.

(2) 論文

Ewa Kawamura, *Incanto del mare in tempesta e di rocce curiose: reminiscenze del sublime nel paesaggio naturalistico europeo nelle cartoline di inizio Novecento*, Delli Aspetti de Paesi. Vecchi e nuovi Media per l'Immagine del Paesaggio, vol. 1, CIRICE, Napoli, 2016, pp. 461-470

河村英和、「第2章 偉人像と記念碑」、『教養のイタリア近現代史 (ミネルヴァ書房)』、2017年4月、pp. 27-41

Ewa Kawamura, *Japan, Time Frames: Conservation Policies for Twentieth-Century Architectural Heritage*, Routledge, London, 2017, pp. 144-146

Ewa Kawamura, *Artisti e collaboratori della Compagnia Italiana Grandi Alberghi (CIGA) negli anni 1906-38*, La città, il viaggio, il turismo Percezione, produzione e trasformazione, CIRICE, Napoli, 2017, pp. 1305-1311

Ewa Kawamura, *Il ricordo di Venezia fra '800 e '900 dalle imitazioni architettoniche alle simulazioni urbanistiche all'estero, La città, il viaggio, il turismo Percezione, produzione e trasformazione*, CIRICE, Napoli, 2017, pp. 2675-2682

Ewa Kawamura, *I costumi locali nei dintorni di Roma e Napoli ispiratori degli artisti stranieri fra Otto e Novecento*, Atti della Settimana della lingua italiana nel mondo 2016, Istituto Italiano di Cultura, Tokyo, 2017, pp. 20-34

Ewa Kawamura, *Masaniello, pescatore napoletano: icona simbolica del paesaggio della Baia di Napoli fra l'Ottocento e il Novecento*, Baia di Napoli. Strategie integrate per la conservazione e la fruizione del paesaggio culturale, vol. 1, Artstudiopaparo, Napoli, 2017, pp. 420-424

(3) 学会発表

国際、Ewa Kawamura、「Incanto del mare in tempesta e di rocce curiose: reminiscenze del sublime nel paesaggio naturalistico europeo nelle cartoline di inizio Novecento」、VII Convegno Internazionale di Studi CIRICE、ナポリ・フェデリコ2世大学建築学部キャンパス (イタリア)、2016.10.27

国際、Ewa Kawamura、「I costumi locali tra Roma e Napoli amati dagli artisti-viaggiatori stranieri tra '800 e '900」、Giornata degli italianisti XVI Settimana della lingua italiana nel mondo "L'italiano e la creatività: marchi e costumi, moda e design"、東京イタリア文化会館、2016.11.13

国際、Ewa Kawamura、「Masaniello e il pescatore napoletano: icona del paesaggio della Baia di Napoli tra '800 e '900」、Convegno internazionale "La Baia di Napoli.Strategie integrate la conservazione e la fruizione del paesaggio cultural"、ナポリ・フェデリコ2世大学建築学部キャンパス (イタリア)、2016.12.5

国際、Ewa Kawamura、「How to see the «Waves in Undulation Vast» between the 18th and the early 20th Century」、III International Conference CHAM "Oceans and Shores: Heritage, People and Environment"、リスボン・ノーヴァ大学人文社会科学 (ポルトガル)、2017.7.12

国際、Ewa Kawamura、「Artisti, architetti e collaboratori della Compagnia Italiana Grandi Alberghi (CIGA,1906-1995)」、VIII Congresso dell'Associazione italiana di storia urbana (AISU)、ナポリ・フェデリコ2世大学法学部キャンパス (イタリア)、2017.9.7

国際、Ewa Kawamura、「Imitazione della città e degli edifici di Venezia all'estero: ricordo di viaggio per nuove attrazioni turistiche tra Ottocento e Novecento」、VIII Congresso dell'Associazione italiana di storia urbana (AISU)、ナポリ・フェデリコ2世大学建築学部キャンパス (イタリア)、2017.9.9

(4) 啓蒙

河村英和、「ナポリ・バロック—最もナポリが輝いていた時代の建築」、『CRONACA』、vol. 153、日伊協会、2017年4月、pp. 4-9

河村英和、「カプリ島にみる伝統民家と外国人の別荘群」、『CRONACA』、vol. 154、日伊協会、2017年7月、pp. 8-9

(5) マスコミ

ラジオ出演「タワー」、東京FM「ピートの不思議なガレージ」、2017年11月4日

(6) 受賞

国際、河村英和、Ewa Kawamura、Torquato Tasso Award (トルクアート・タッソ賞)、イタリア・ソレント市、2016年11月

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

兼任講師、立教大学、全学共通カリキュラム「都市と芸術」、2016.4～2016.9

非常勤講師、東京工業大学、「国際文化論（イタリア編）」、2016.6～

セミナー、朝日カルチャーセンター横浜校、「ナポリ建築への招待—「悪魔のすむ天国」の歩き方」、2016.6

セミナー、日伊協会、文化セミナー「著者に聞く」シリーズ 第3回 『ナポリ・バロック建築の世界』、2016.11

セミナー、朝日カルチャーセンター横浜校、「風景絵画でたどるローマと近郊の村々」、2017.2

非常勤講師、東京工業大学、「世界を知る：ヨーロッパ」、2017.4～2017.6

セミナー、イタリア研究会、「外国人画家たちが育んだローマとナポリ近郊の風景・風俗絵画の世界」、2017.5

セミナー、かわさき市民アカデミー、「ナポリの都市文化と社会（16-19世紀）」、2017.6

セミナー、かわさき市民アカデミー、「グラントツアーとイタリア美術・風景・文化」、2017.6

セミナー、かわさき市民アカデミー、「イタリアの都市と建築—ナポリ」、2017.6

セミナー、かわさき市民アカデミー、「イタリアの都市と建築—カプリ島」、2017.6

セミナー、朝日カルチャーセンター湘南校、「イタリアのホテルの魅力を探る 南イタリア編」、2017.7

セミナー、朝日カルチャーセンター横浜校、「イタリアのホテルの魅力を探る—中部・北イタリア編」、2017.9

セミナー、朝日カルチャーセンター横浜校、「風景絵画でたどるナポリとその周辺」、2017.12

(2) 学会

国際、テーマ学術会議「Viaggi e soggiorni in Europa nel primo Ottocento Oltre Napoli, verso Amalfi e Sorrento」（ナポリ・フェデリコ2世大学主催）、査読・審査委員（comitato scientifico）、2016.1～2016.12

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

独立行政法人、日本学術振興会、科学研究費委員会専門委員（観光学）、2016.1～2016.11

国際コジモ・ファンザーゴ賞 Premio Internazionale Cosimo Fanzago（Associazione Palazzi Napoletani 主催）学術委員（comitato scientifico）、2016.1～2017.12

学術誌「Storia del Turismo Annale（観光史年鑑）」（Istituto Italiano per la Risorgimento italiano Comitato di Napoli 主催）学術委員（comitato scientifico）、2016.1～2017.12